

北 牧 大 境 遺 跡

国道353号(鯉沢バイパス)補助公共道路改築
(改良)事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第3集

2004

群 馬 県 渋 川 土 木 事 務 所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

北 牧 大 境 遺 跡

国道353号(鯉沢バイパス)補助公共道路改築
(改良)事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第3集

2004

群 馬 県 渋 川 土 木 事 務 所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

榛名山ニツ岳



【上 段】遺跡遠景（北から）

遺跡は吾妻川左岸の第2位段丘である白井面に占地する。
南に Hr - FA と Hr - FP を噴出した榛名山ニツ岳を臨む。

◀ 吾妻川

▲ 北牧大境遺跡

【下 段】II 区 Hr - FP 下水田跡
「極小区画水田」と呼ばれる、古墳時代後半期の水田跡。大畦を挟んで、水田耕作工程差が観察された例。



▲ 代掻き後水田跡

▲ 大畦

▲ 耕起中水田跡

序

北牧大境遺跡は、群馬県北群馬郡子持村大字北牧に所在し、平成12年9月から平成13年3月にわたり、(国)353号(鯉沢バイパス)道路改築(改良)事業に伴い、群馬県土木部からの委託を受け、群馬県教育委員会の調整により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査した遺跡です。また、整理業務は、国道353号(鯉沢バイパス)補助公共道路改築(改良)事業を受託し、平成15年4月から9月にかけて、当事業団が実施いたしました。

国道353号線(鯉沢バイパス)は、渋川市と子持村内の国道17号線及び国道353号線の交通渋滞解消を図るため、子持村白井から北牧に計画された道路です。一部が現在供用開始され、残りの1.4km間の発掘調査と整理業務を当事業団で漸次進めております。既に供用開始された地区の、白井北中道(監)遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡が2集の報告書として刊行され、発掘調査も中郷田尻遺跡と吹屋三角遺跡の一部を残すのみとなりました。

本遺跡が所在する子持村は、古墳時代に2度にわたり噴火した榛名山二ッ岳の降下火山灰と降下軽石に覆われた地域です。特に、降下軽石に覆われた「黒井峰遺跡」は当時の集落像を具体化する遺跡として、国指定史跡となり保存されております。

北牧大境遺跡は本事業第3集の報告書として、この度刊行されることになりました。黒井峰遺跡と同様に、降下軽石直下の面からは農耕作業工程を示す良好な水田跡と、さらに降下火山灰直下からの水田跡を併せた遺跡の内容は、当地域の古墳時代水田耕作様相を知る重要な手がかりとなるでしょう。

本報告書刊行にいたるまでには、群馬県県土整備局(旧土木部)、渋川土木事務所、群馬県教育委員会、子持村教育委員会の諸機関並びに地元関係者の皆様に大変な尽力を賜りました。心から感謝の意を表わすとともに、本書が広く活用され、郷土の歴史の解明に大いに役立つことを願い序とします。

平成16年10月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は国道 353 号(鯉沢バイパス)補助公共道路改築(改良)事業に伴って行われた北牧大境遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡所在地 群馬県北群馬郡子持村大字北牧字大境
3. 事業主体 群馬県(土木部道路建設課-県土整備局渋川土木事務所)
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 平成 12 年 9 月 4 日～平成 13 年 3 月 31 日
6. 整理期間 平成 15 年 4 月 1 日～平成 15 年 9 月 30 日
7. 発掘調査・整理体制
事務担当 小野宇三郎、赤山容造、住谷永市、神保侑史、水田 稔、能登 健、住谷 進、萩原利通、坂本敏夫、植原恒夫、国定 均、笠原秀樹、小山建夫、竹内 宏、須田朋子、吉田有光、森下弘美、柳岡良宏、田中賢一、片岡徳雄、高橋房雄、阿久澤玄洋、大澤友治、吉田恵子、並木綾子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、田村恭子、吉田笑子、廣津真希子、今井もと子
調査担当
(発掘) 調査研究部第 2 課長 中東耕志
調査担当 山口逸弘、伊平 敬、本間 昇
(整理) 管理部資料整理課長 相京建史
整理担当 山口逸弘
整理補助員 新谷さか江、大塚とし子、萩原鈴代、阿部幸恵、立川千栄子、松岡陽子
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一、土橋まり子、横倉知子、小材浩一
土器実測 田中精子、酒井史恵(器械実測班)
8. 発掘調査資料・出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成には以下の方々にご協力・ご指導を賜った。記して感謝の意を表します。
石井克巳、太田国男、大塚昌彦、小川卓也、小林 修、斉藤英俊、桜井和哉、須永薫子、外山政子、長谷川福次、日沖剛史、福田貫之、三浦京子、横田美由紀
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団職員諸氏
10. 分析・委託 石材鑑定 群馬地質研究会 飯島静男
自然科学分析(テフラ分析・植物桂酸体分析)(株)古環境研究所 第 IV 章 1・2 に掲載
遺構測量・トレース・デジタルトレース 株式会社測研
電磁波探査 応用地質株式会社
11. 本文執筆 I 章 1 は関 晴彦、IV 章 3 は榑崎修一郎、他は山口が分担した。
12. 本書編集は山口が担当した。

凡 例

1. 本書挿図中に使用した方位は、座標北を表している。
2. テフラの呼称として、榛名山ニッ岳渋川テフラ (Hr - S) → Hr - FA あるいは FA、榛名山ニッ岳 伊香保テフラ (Hr - I) → Hr - FP あるいは FP、浅間 B 軽石 → As - B、浅間 C 軽石 → As - C を用いた。
3. 遺構図の縮尺については、下記を基本としたが厳密に統一していない。各挿図中のスケールを参照していただきたい。
水田跡 1/500・1/200・1/100・1/40・1/30
住居跡 1/60・竈 1/30 掘立柱建物跡 1/60 土坑・井戸・集石遺構 1/40
土坑(土墳墓) 1/30 溝 1/80
4. 遺物図は下記縮尺で掲載した。それぞれ図中のスケールも参照していただきたい。
土器 坏・椀類 1/3・甕類 1/4
石製品 大型品 1/6・小型品 1/3・1/4
古銭 1/1
5. 遺構図・遺物図中の網がけ表記は、焼土・流砂範囲、灰釉陶器施釉範囲・土師質土器油煙範囲である。図中に注記を加えた。
6. 水田跡などの面積は、デジタルプランメーターで3回計測した平均値を採用した。
7. 遺物計測値は、口径・底径・高さ・長さ・幅・厚さは小数点第2位を四捨五入し cm 単位で、重量は電磁式はかり等を使用し、g・kg 単位で表示した。
8. 遺構計測値は住居跡等の竪穴遺構は上端の長軸・短軸を計測したが、水田跡は下端を基準とした計測値である。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
図版目次
表 目 次
抄 録

I 調査経過	1
1. 調査に至る経過(関 晴彦)	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の方法	4
II 周辺の環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	8
III 検出された遺構と遺物	15
概要	
1. 基本土層と調査面	15
2. ローム上で検出された遺構と遺物	18
3. Hr・FA 下で検出された水田跡	20
4. Hr・FP 下で検出された水田跡	54
5. Hr・FP 上で確認された遺構と遺物	104
6. 遺構計測表及び遺物観察表	176
IV 分析	195
1. 土層とテフラ(古環境研究所)	195
2. 植物珪酸体分析(古環境研究所)	200
3. 出土人骨について(榑崎修一郎)	208
V まとめ	223

写真図版 奥付

挿図目次

1図	国道353号線路線図	2	62図	II区FP下水田跡下溝状遺構等(2)	97・98
2図	グリッド配置図	4	63図	FP上全体図	99・100
3図	Hr-FAとHr-FPの降下範囲	6	64図	I区FP上遺構配置図	101・102
4図	遺跡位置と子持村段丘分布図	7	65図	II区FP上遺構配置図	103・104
5図	周辺遺跡分布図	9	66図	1号住居跡(1)	106
6図	遺跡位置と周辺地形図	14	67図	1号住居跡(2)竈	107
7図	文化層概念図	16	68図	1号住居跡出土遺物	108
8図	基本土層図	17	69図	2号住居跡(1)	110
9図	II区東 ローム上面図	18	70図	2号住居跡(2)床下	111
10図	II区東 土手状遺構周辺出土遺物	19	71図	2号住居跡出土遺物	112
11図	II区東 ローム上面図	21・22	72図	3号住居跡	113
12図	FA下水田跡全体図	23・24	73図	4号住居跡及び出土遺物	114
13図	I区FA下水田跡(1)	25・26	74図	5号住居跡	116
14図	I区FA下水田跡(2)	34	75図	5号住居跡出土遺物	117
15図	I区FA下水田跡(3)	35	76図	6号住居跡及び出土遺物	119
16図	I区FA下水田跡(4)	36	77図	7号住居跡	120
17図	I区FA下水田跡断面図(1)	37	78図	7号住居跡出土遺物	121
18図	I区FA下水田跡断面図(2)	38	79図	8号住居跡及び出土遺物	123
19図	I区FA下水田跡(5)	39	80図	土坑(1)	125
20図	I区FA下水田跡(6)	40	81図	土坑(2)	126
21図	I区FA下水田跡(7)	41	82図	土坑(3)	127
22図	I区FA下水田跡(8)	42	83図	土坑(4)	128
23図	I区FA下水田跡(9)	43	84図	土坑(5)	129
24図	I区FA下水田跡(10)馬蹄痕跡集中箇所	44	85図	土坑(6)	131
25図	II区FA下水田跡(1)	45・46	86図	土坑(7)	132
26図	II区FA下水田跡(2)	47	87図	土坑(8)	133
27図	II区FA下水田跡(3)	48	88図	土坑(9)	134
28図	II区FA下水田跡(4)	49	89図	土坑(10)	135
29図	II区FA下水田跡(5)谷部分	50	90図	土坑(11)	136
30図	II区FA下水田跡(6)	51	91図	土坑(12)	137
31図	II区FA下水田跡(7)水口	52	92図	土坑(13)	138
32図	II区FA下水田跡断面図	53	93図	土坑(14)	140
33図	FP下水田跡全体図	65・66	94図	土坑(15)	141
34図	I区FP下水田跡(1)耕起中水田	67・68	95図	土坑(16)	142
35図	I区FP下水田跡(2)	69	96図	土坑(17)	143
36図	I区FP下水田跡(3)	70	97図	土坑(18)	145
37図	I区FP下水田跡(4)	71	98図	土坑(19)	146
38図	I区FP下水田跡(5)不整形区画水田	72	99図	土坑(20)	147
39図	I区FP下水田跡(6)極小区画水田	73	100図	土坑(21)	148
40図	I区FP下水田跡断面図	74	101図	土坑(22)	149
41図	II区FP下水田跡(1)	75・76	102図	土坑(23)	150
42図	II区FP下水田跡(2)	77	103図	土坑(墓塚)(1)	152
43図	II区FP下水田跡(3)	78	104図	土坑(墓塚)(2)	153
44図	II区FP下水田跡(4)代掻き後水田	79	105図	1号集石遺構	155
45図	II区FP下水田跡(5)耕起中水田	80	106図	1号井戸跡	156
46図	II区FP下水田跡(6)	81	107図	2号井戸跡	157
47図	II区FP下水田跡 谷部分	82	108図	1～3号溝跡	158
48図	II区FP下水田跡断面図(1)	83	109図	4・5号溝跡	159
49図	II区FP下水田跡断面図(2)	84	110図	6号溝跡	160
50図	II区FP下水田跡断面図(3)	85	111図	1号掘立柱建物跡	161
51図	II区FP下水田跡断面図(4)	86	112図	2号掘立柱建物跡	162
52図	II区FP下水田跡(7)代掻き後水田	87	113図	3号掘立柱建物跡	163
53図	II区FP下水田跡(8)耕起中水田	88	114図	FP上土坑・溝等出土遺物(1)	164
54図	II区FP下水田跡(9)耕起中水田	89	115図	FP上土坑・溝等出土遺物(2)	165
55図	II区FP下水田跡(10)耕起中水田	90	116図	FP上土坑・溝等出土遺物(3)	166
56図	II区FP下水田跡(11)耕起中水田	91	117図	FP上土坑・溝等出土遺物(4)	167
57図	II区FP下水田跡(12)水口	92	118図	FP上土坑・溝等出土遺物(5)	168
58図	II区FP下水田跡(13)水口	93	119図	FP上土坑・溝等出土遺物(6)	169
59図	II区FP下水田跡(15)東端部分	94	120図	FP上土坑等出土遺物(7)	170
60図	II区FP下水田跡(16)代掻き後水田	95	121図	FP上土坑等出土遺物(8)	171
61図	II区FP下水田跡下溝状遺構等(1)	96	122図	FP上土坑等出土古銭(1)	172
			123図	FP上土坑等出土古銭(2)	173
			124図	FP上土坑等出土古銭(3)	174
			125図	FP上土坑等出土古銭(4)	175

写真図版目次

- PL - 1 ローム上面
基本土層
II区東 土手状遺構遺物出土
II区東 土手状遺構
II区東 土手状遺構
II区東 溝状遺構
II区東 土手状遺構
II区東 道状遺構
- PL - 2 Hr - FA 下
I区 水田跡全景(西から)
I区 水田跡 大畦と馬蹄痕集中箇所
- PL - 3 Hr - FA 下
I区 水田跡全景(東から)
I区 水田跡全景(西から)
- PL - 4 Hr - FA 下
II区 水田跡全景(東から)
II区 水田跡全景(西から)
- PL - 5 Hr - FA 下
I区 水田跡区画
I区 水田跡区画
I区 水田跡区画
I区 水田跡区画
II区 水田跡区画
II区 水田跡区画
II区 水田跡区画
II区 水田跡区画
II区 水田跡水口
- PL - 6 Hr - FA 下
II区 水田跡馬蹄痕
II区 水田跡馬蹄痕
I区 馬蹄痕集中箇所
I区 水田跡耕作痕
I区 水田跡耕作痕
I区 水田跡田面上のクラック
II区 田面上のFP下水田の圧痕
- PL - 7 Hr - FP 下
II区 水田跡(中央は大畦 左:代掻き後 右:耕起中)
II区 耕起中水田跡
- PL - 8 Hr - FP 下
I区 水田跡全景(西から)
II区 水田跡全景(西から)
- PL - 9 Hr - FP 下
II区 水田跡(右:代掻き後 左:耕起中)
II区 代掻き後水田跡
- PL - 10 Hr - FP 下
I区 耕起中水田跡
I区 耕起中水田跡
I区 耕起中水田跡
II区 耕起中水田跡
II区 耕起中水田跡
I区 耕起中水田跡
I区 耕起中水田跡
I区 耕起中水田跡
- PL - 11 Hr - FP 下
II区 耕起中水田跡
II区 耕起中水田跡(作業風景)
- PL - 12 Hr - FP 下
II区 代掻き後水田跡
II区 代掻き後水田跡
II区 代掻き後水田跡
II区 代掻き後水田跡
II区 代掻き後水田跡(流砂)
II区 代掻き後水田跡(人足痕)
II区 代掻き後水田跡(人足痕)
II区 代掻き後水田跡アマリ土と集石
- PL - 13 Hr - FP 下
II区 水口
II区 水口
II区 水口
II区 水口
II区 水口
II区 大畦土層
II区 水田跡下部大畦と平行する溝
- PL - 14 Hr - FP 下
I区 畦畔土層
I区 畦畔土層
II区 東道・溝状遺構
II区 水田跡下位(溝状遺構)
II区 水田跡下位(道状遺構)
I区 水田跡下位耕作痕調査
II区 水田跡下位(耕作痕調査)
II区 FP下水田跡作業風景
- PL - 15 Hr - FP 上
I区 全景(西から)
II区 東側 全景(西から)
- PL - 16 Hr - FP 上
II区 1号住居跡
II区 1号住居跡竈
II区 2号住居跡
II区 2号住居跡竈
II区 3号住居跡
II区 4号住居跡
II区 4号住居跡遺物出土
I区 5号住居跡
- PL - 17 Hr - FP 上
I区 6号住居跡
I区 7号住居跡
I区 8号住居跡
II区 1号掘立柱建物跡
I区 2号掘立柱建物跡
I区 3号掘立柱建物跡
II区 1号井戸跡
I区 2号井戸跡
- PL - 18 Hr - FP 上
II区 2・11・12・34号土坑
II区 2号土坑
II区 11号土坑
II区 12号土坑
II区 14号土坑
II区 20号土坑
II区 23号土坑
II区 24号土坑
- PL - 19 Hr - FP 上
II区 54号土坑
II区 58号土坑
II区 62号土坑
II区 63号土坑
II区 64号土坑
II区 66号土坑

II区71号土坑
 II区72号土坑
 PL - 20 Hr - FP 上
 II区79号土坑
 II区82号土坑
 II区87号土坑
 II区92号土坑
 I区144・145号土坑北
 I区147号土坑
 I区148号土坑
 I区149号土坑
 PL - 21 Hr - FP 上
 I区151号土坑
 I区159号土坑
 I区163号土坑
 I区164号土坑
 I区165号土坑
 I区168号土坑
 I区168・191・194号土坑
 I区169号土坑
 PL - 22 Hr - FP 上
 I区173号土坑
 I区174号土坑
 I区177号土坑
 I区177号土坑
 I区178号土坑
 I区179号土坑
 I区183号土坑
 I区184号土坑
 PL - 23 Hr - FP 上
 I区193号土坑
 I区195号土坑
 I区200号土坑
 I区201号土坑
 I区205号土坑
 I区206号土坑
 I区210号土坑
 I区210号土坑
 PL - 24 Hr - FP 上
 I区212号土坑
 I区211号土坑
 I区231号土坑
 II区6号土坑(墓塚)
 I区182号土坑(墓塚)
 I区227号土坑(墓塚)
 I区235号土坑(墓塚)
 I区233号土坑(墓塚)
 PL - 25 Hr - FP 上
 II区西1号集石遺溝
 II区西1号集石遺溝
 II区1号溝跡
 II区3号溝跡
 I区4号溝跡
 I区5号溝跡
 I区6号溝跡
 PL - 26 Hr - FP 上
 1号住居跡出土遺物
 2号住居跡出土遺物
 PL - 27 Hr - FP 上
 4号住居跡出土遺物
 5号住居跡出土遺物
 PL - 28 Hr - FP 上
 6号住居跡出土遺物
 7号住居跡出土遺物

PL - 29 Hr - FP 上
 8号住居跡出土遺物
 土坑出土遺物
 PL - 30 Hr - FP 上
 土坑出土遺物
 PL - 31 Hr - FP 上
 土坑出土遺物・1号集石遺構出土遺物
 PL - 32 Hr - FP 上
 1号集石出土遺物
 PL - 33
 2号井戸・3号溝・表土出土遺物
 PL - 34
 出土古錢(1)
 PL - 35
 出土古錢(2)
 PL - 36
 出土古錢(3)
 PL - 37
 土手狀遺構出土遺物

表目次

第1表	主な周辺遺跡一覧表	11
第2表	Hr - FA 下水田跡計測表 I区FA 下水田 II区FA 下水田	176 177
第3表	Hr - FP 下水田跡計測表 I区FP 下水田 II区FP 下水田	178 180
第4表	FP 上面住居跡計測表 土坑計測表 墓坑 集石遺構・井戸・掘立柱建物跡	183 183 186 186
第6表	古墳時代前期 土手狀遺構出土遺物観察表	186
第7表	FP 上(平安～近世)出土遺物観察表 1号住居跡出土遺物観察表 2号住居跡出土遺物観察表 4号住居跡出土遺物観察表 5号住居跡出土遺物観察表 6号住居跡出土遺物観察表 7号住居跡出土遺物観察表 8号住居跡出土遺物観察表 土坑等出土遺物観察表	186 187 187 188 188 189 190 190
第8表	土坑等出土古錢計測表	194

I 調査経過

1 調査に至る経過

国道353号線鯉沢バイパスは、渋川市内と子持村内の一般国道17号及び国道353号線の交通渋滞の緩和を図るため、国道17号の鯉沢バイパスと合わせて計画された延長2.2km・2車線の道路で、建設区間は北群馬郡子持村白井から子持村北牧に所在する。平成8年度にはその一部0.8kmが供用開始された。この部分に関しては、白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡として、平成3年～平成6年度に(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を行い、報告書を刊行している。

国道353号線鯉沢バイパスの残りの区間1.4kmの建設について、平成10年度に群馬県土木部道路建設課から県教育委員会文化財保護課に対し、建設予定区域内の遺跡の存否についての事業照会があった。これを受けて文化財保護課では、工事対象地域が榛名山二ツ岳の火山性噴出物による、古墳時代文化層の良好な遺存で知られる場所であることから、用地上問題の少ない北牧地区(本遺跡)で試掘を実施したところ、二ツ岳降下軽石上から平安時代の住居跡、軽石下から古墳時代の水田を発見したため、本調査に向けて協議を開始した。

平成11年度前半、地元子持村教育委員会の協力を得て、当該地域における周知の遺跡の存否および範囲を詳細に検討し、道路予定区域全体に遺跡が存在することが判明したため、11年度後半に全面本調査を実施する方向で協議を進めた。路線内の調査対象遺跡に対して、子持村教育委員会との協議により小字毎に各遺跡を分別し、大字と小字を併記して、遺跡名を呼称する方法をとった。すなわち、東から中郷恵久保遺跡・吹屋三角遺跡・中郷田尻遺跡・吹屋糶屋遺跡・北牧大境遺跡・北牧壺町ヶ坪遺跡・北牧沖田遺跡を対象遺跡とし、平成11年11月から本格的な発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団によって開始されることになった(1図)。調査班は当時、子持村白井で白井大宮Ⅱ遺跡の発掘を行っていた班を、白井大宮Ⅱ遺跡の調査が終了次第あてることとした。

尚、当初調査予定であった、北牧壺町ヶ坪遺跡及び北牧沖田遺跡に関しては、平成13年1月に、事業団の協力の下、文化財保護課による試掘が行われたが、遺構・遺物を検出し得ず、二ツ岳降下軽石(Hr - FP)も二次堆積層を見ることから、本調査の対象から除外することになった。

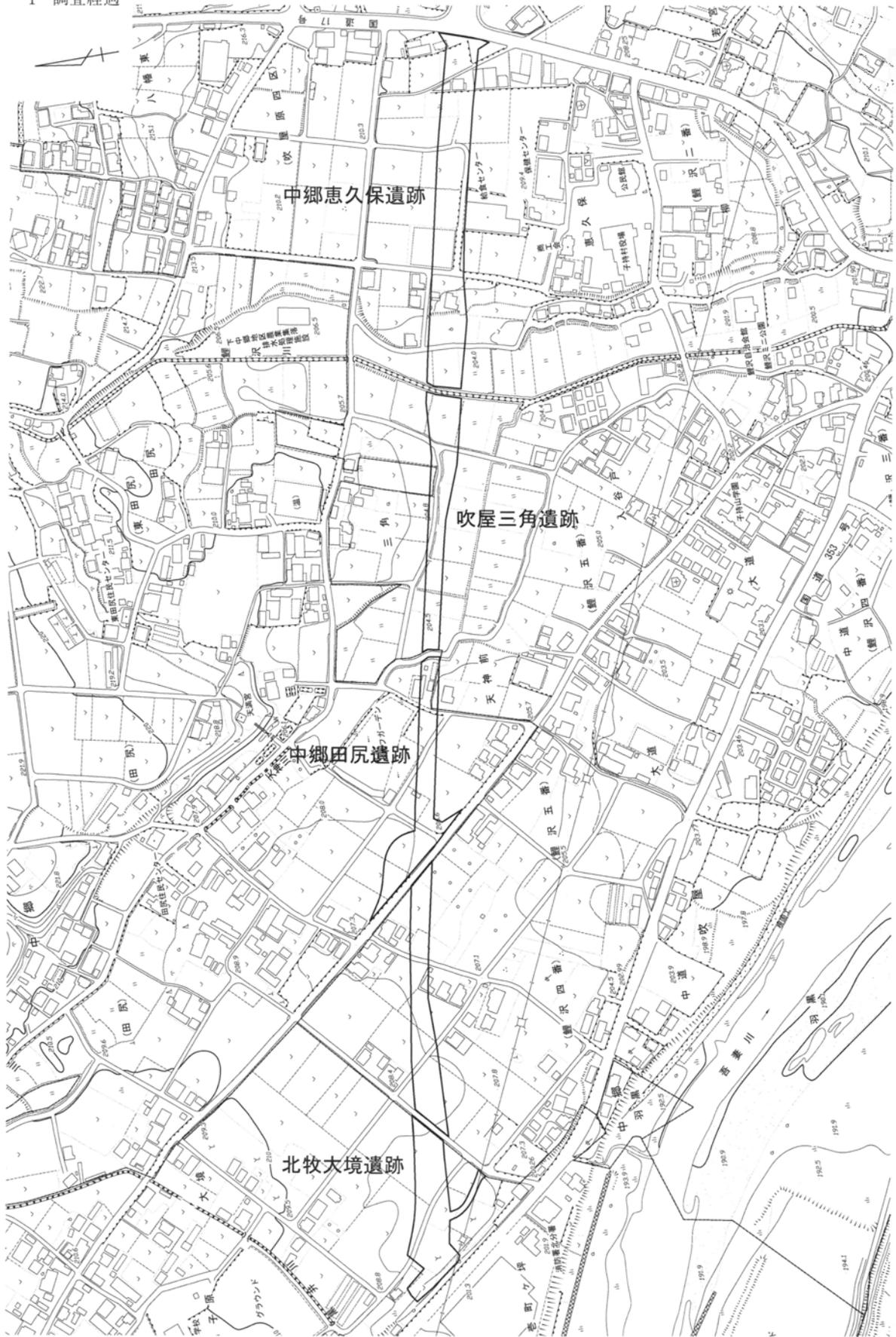
2 調査の経過

平成11年度の国道353号(鯉沢バイパス)の発掘調査は、中郷恵久保遺跡Ⅱ区と吹屋三角遺跡Ⅰ区～Ⅲ区の一部から着手した。これは路線内に存在する未収地と工事工程の関連であり、平成12年度は中郷恵久保遺跡Ⅱ区・Ⅲ区、北牧大境遺跡の発掘調査を行い、平成13年度は吹屋糶屋遺跡、中郷恵久保遺跡Ⅰ区・Ⅲ区の調査を完了させた。また、平成12年2月に、各遺跡に試掘調査の代用として、電磁波探査を行っている。これは主に軽石下の遺構の有無を探るためであり、調査工程を組む上で極めて有効であった。

尚、吹屋三角遺跡Ⅲ区西と中郷田尻遺跡は未収地と工事工程の関係上、調査未着手となり後日調査となっている。

前述のように、北牧大境遺跡は平成12年9月4日～平成13年3月31日に調査を行った遺跡である。子持村内の殆どの遺跡が二ツ岳降下軽石(Hr - FP)に厚く覆われており、本遺跡も試掘調査の結果から、1.5m以上のHr - FPの堆積が確認されていた。そのため、調査で生じる排土の仮置き場の確保が必要であり、本調査に際

I 調査経過



1図 国道353号線路線図 (S=1:5,000)



しては、北牧大境遺跡を分断する町道を境に東からⅠ区・Ⅱ区と分け、相互を排土置き場と供して調査を進めることになった。調査は先ず、Hr - FP 上面において、平安時代・中世・近世・近代の竪穴遺構の検出に努めた。当初の予想より、中・近世土坑群の分布が濃密で、墓壙などの検出も見ている。次に層厚1.5m以上のHr - FPを重機と人力により剥ぎ、直下面より小区画水田跡を検出した。当時の農作業工程を具体化する極めて良好な状態の水田跡であり、村教育委員会や多くの県内識者の指導の元、調査を進めた。このHr - FP下水田跡に伴う耕作痕・溝の確認調査をHr - FA 上面で行い、その後人力で厚さ20cm以上堆積するHr - FAを除去した。その結果、Hr - FA下からも残存状態の良い水田跡を検出できた。最後に、Hr - FA下水田跡の耕作土である黒色粘質土を除去し、二次堆積ローム層上面で縄文時代～古墳時代前半期の遺構遺物の検出作業を行ったが、極僅かな土器片・石器片を得たのみである。このように北牧大境遺跡の発掘調査では、古墳時代の2枚の水田跡が極めて良好な状態で調査されたことが特筆されよう。

尚、整理作業については、平成15年4月より6ヶ月の計画で実施された。以下は調査日誌抄である。

【調査日誌抄】

平成12年

- 9月 バックホウによる表土剥ぎ着手。Ⅱ区より調査を開始し、FP 上面で遺構確認
1～4号住(平安)、土坑(中～近世・近代)多数を調査。東端低標高部で3号溝など調査
- 10月 バックホウによるFP除去後人力でFP下水田跡検出作業。水田跡は畦畔も高く良好な遺存度
ある。大畦を境にした農作業工程の差が見られた
ヘリコプターによる遺跡遠景写真撮影
- 11月 FA 上面における耕作痕・溝などの調査
人力によるFA除去作業。FA下水田跡検出。調査区東側の水田遺存状況が良好
科学分析。土壌サンプル採取
- 12月 FA下水田調査終了後黒色粘質土除去作業。東端土手状遺構より5世紀代の土器が出土する
Ⅱ区埋め戻し

平成13年

- 1月 Ⅰ区表土除去作業。FP 上面で遺構確認作業
5～8号住(平安)土坑・墓壙・掘立柱建物跡等遺構密度高い
- 2月 FP除去作業。FP下水田跡検出。水田跡は、全て耕起中水田。東側には短冊状の形態も見ら
れた
FA 上面における耕作痕・溝などの調査
- 3月 人力によるFA除去作業。FA下水田跡検出。Ⅱ区FA下水田跡に比して良好な
黒色粘質土下の遺構確認作業。遺構は見られなかった
Ⅰ区埋め戻し。調査終了

整理作業

平成15年

- 4月 図面整理、遺物接合・復元
- 5月 遺物写真撮影、遺物実測
- 6月 遺構図面修正、遺物トレース
- 7月 遺構図トレース、写真版下作成
- 8月 遺構図・遺物図版下作成
- 9月 遺構図(水田跡)デジタルトレース委託

平成16年

- 4月 レイアウト・入稿準備

I 調査経過

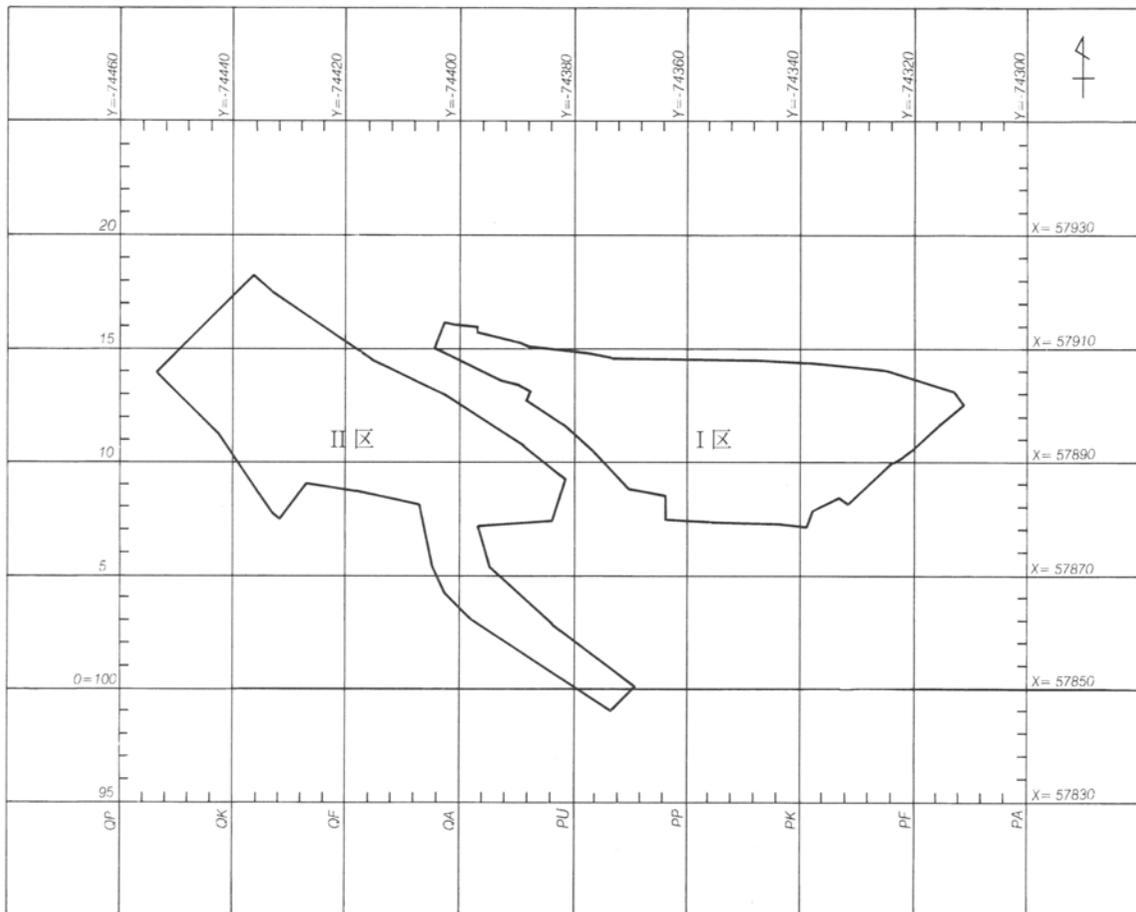
3 調査の方法

本遺跡の調査区については、先述のように便宜的に現道を境にした分別を行ったが(6図)、グリッドは国家座標に一致させた1辺4mの方眼を設定し、南北方向に算用数字二桁を、東西方向にはアルファベット25文字を2つ組み合わせさせたものをあてはめた(2図)。国家座標は、国道353号線調査区を全て網羅するようにし、グリッド呼称も東端の遺跡である中郷恵久保遺跡から順次増えるようにした。

遺構の平面測量は上記グリッド杭を基準として、Hr - FP 上面の平安時代～中・近世遺構群は平板測量と簡易遣り方測量を併用し、1/20・1/10縮尺を基本とした。また、Hr - FP 下及びHr - FA 下水田は、全て電子平板測量で1/40図を基準として業務委託した。写真記録は、基本的に6×7・35mmの白黒フィルムと35mmリバーサルフィルムを使用した。また、全景写真などに際しては、高所作業車及びヘリコプターによる撮影を行っている。

次に人力による掘削方法であるが、Hr - FP 下面の調査では通常移植ゴテなどのHr - FP 除去作業後より詳細な除去方法のため、刷毛による除去作業が行われるが、本遺跡の場合、刷毛は使用せず、移植ゴテと竹箆などによる除去作業に止めた。これは、Hr - FP 直下面の新鮮な生活面をより当時のまま記録化するという、子持村教育委員会の調査指針を参考にしており、実際に刷毛によるHr - FP 除去作業よりも多くの情報を得ることができた。

また、調査で得られた2面の良好な水田跡に関しては、栽培植物の同定及び示標テフラ層位把握のため、科学分析を行っている。



2図 グリッド配置図(S=1:1,000)

II 周辺の環境

1 地理的環境

北牧大境遺跡の所在する北群馬郡子持村は、南を吾妻川、東を利根川で画され、さらに北には子持山山麓斜面が控える、河岸段丘と山麓台地によって構成されている。利根川と吾妻川が形成する河岸段丘が、その上流部へと延びる。視野を広げれば、当地域は榛名山・赤城山に挟まれ、利根川が流れ出す谷を眺め、関東平野を南に望む地点である。いわば関東平野の北西端に位置するといえよう。

広く知られるように、子持村とその周辺地域は、古墳時代に2度にわたる榛名山による火山災害を受けた地域である。最初の噴火が6世紀初頭といわれる火砕流を伴う火山灰の降下で、2度目が6世紀中葉に起こった大規模な軽石降下による災害である。特に本遺跡や黒井峯遺跡は、この軽石降下の軸線上にあり、軽石災害により壊滅的な打撃を受けた地域内に位置すると言えよう(3図)。この2回の榛名山の噴火火山灰と軽石は、子持村一帯を覆っており、そのため古墳時代以前の地形を少なからず変化させている。ただし、この変化は巨視的な地形に即しており、利根川河岸段丘面である、浅田面・白井面等の段丘面は当時も同様な比高差と考えて良い。当時との地形差が見受けられる例としては、調査遺跡内の埋没谷や微高地であり、現地表では平坦面と見受けられる地形も、発掘調査により小規模な谷と台地の連続が展開する例も多々ある。

さて、前述の利根川と吾妻川による河岸段丘は、当時からの段丘面として捉え得るものと考えられており、各段丘面における古墳時代当時の土地利用傾向も重要な研究視点として注意されている。ここで各段丘面の地形的な様相を確認しておく(4図)。

浅田面: 利根川・吾妻川の最下位段丘面である。標高180m前後であり、利根川・吾妻川との比高差は数mに過ぎない。ローム層は形成されておらず沖積地が主体を占め、平坦面を築きあげている。古墳時代の遺跡分布は、判然としないが、利根川右岸面に、浅田古墳や伊熊・有瀬古墳群などが知られており、墓域あるいは水田等の生産域と考えられる。

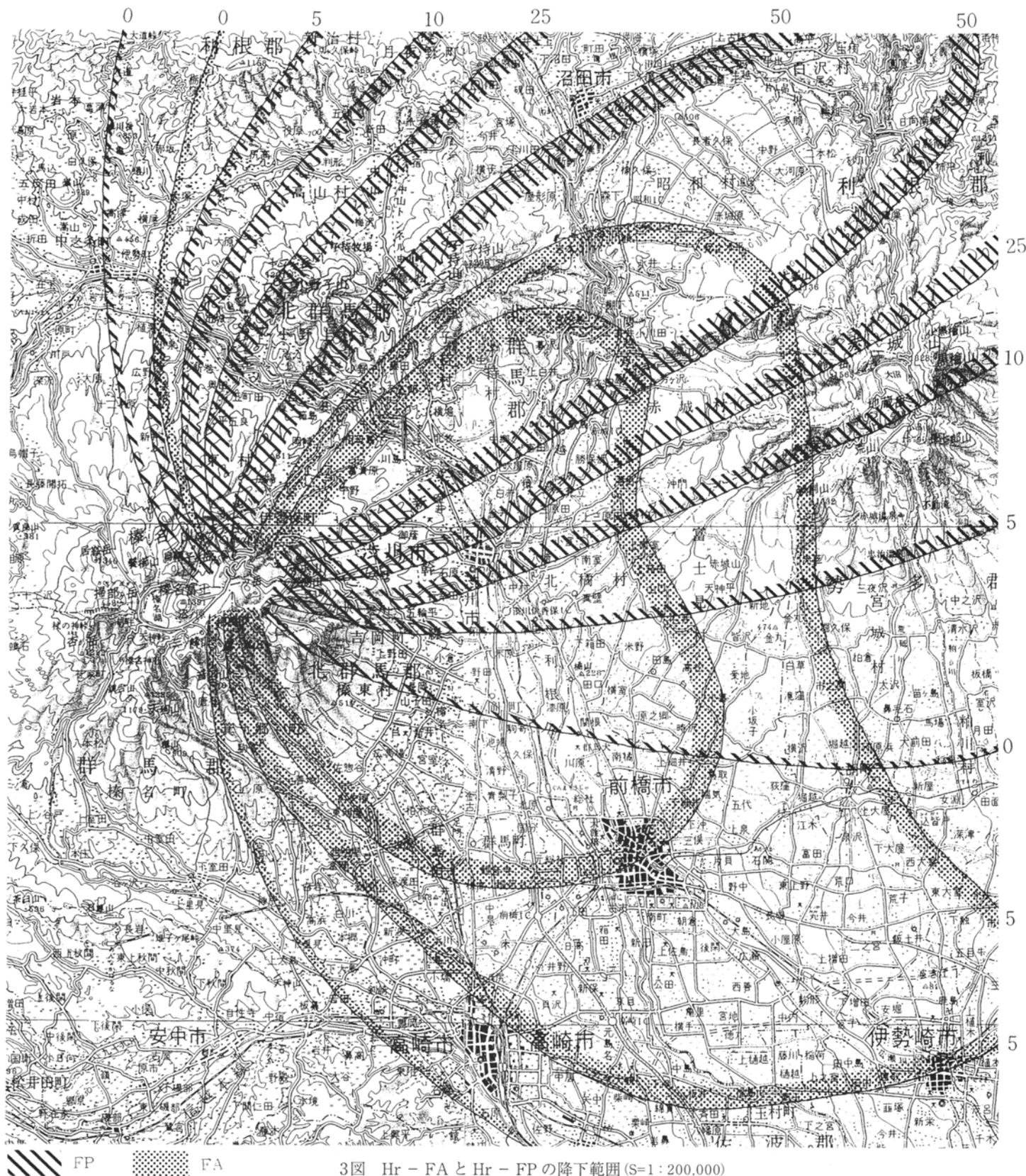
白井面: 利根川・吾妻川に沿うように形成された、第2位の段丘面である。標高は約200m前後で、吾妻川沿いには段丘崖が見られ、洪積台地状の景観を見せる。事実これまでの発掘調査では、利根川右岸の白井地区で礫層上位に未発達なローム層が確認されており、台地的な様相をしめしている。一方吾妻川左岸側の発掘調査では、本遺跡や吹屋靴屋遺跡のように、埋没谷に営まれた水田跡が検出されるなど、一部沖積地の様相を示す。これは、雙林寺面の境にある湧水点を中核とした小河川による低地形成によるものと考えられ、利根川右岸の白井地区とは対照的な様相を見せている。段丘面形状も北から南へ僅かな傾斜を見せるものの、ほぼ平坦面に近く、居住地として最適な様相であるが、古墳時代中葉に関しては、水田・畠・放牧地など生産域に供された例が主体を占める。後葉に至ってはHr - FP上に群集墳などが見られることから、墓域としての土地利用が主体のようだ。

西伊熊面: 利根川右岸の西伊熊周辺のみで見られる。白井面の上位に形成された小規模な段丘面で、段丘幅も150m程度でしかない。標高は230m前後で、ボーリング調査では上部ローム層が確認されており、段丘形成は2万2千年前と見られている。

立和田面: 子持村北部の立和田周辺の規模の小さい段丘である。長坂面と西伊熊面の中位にあたり、両者の延長の可能性もある。詳細は不明である。

長坂面: 南北に長く、また広く子持村の主要な部分を占める段丘面である。中部ローム層が確認されており、

II 周辺の環境

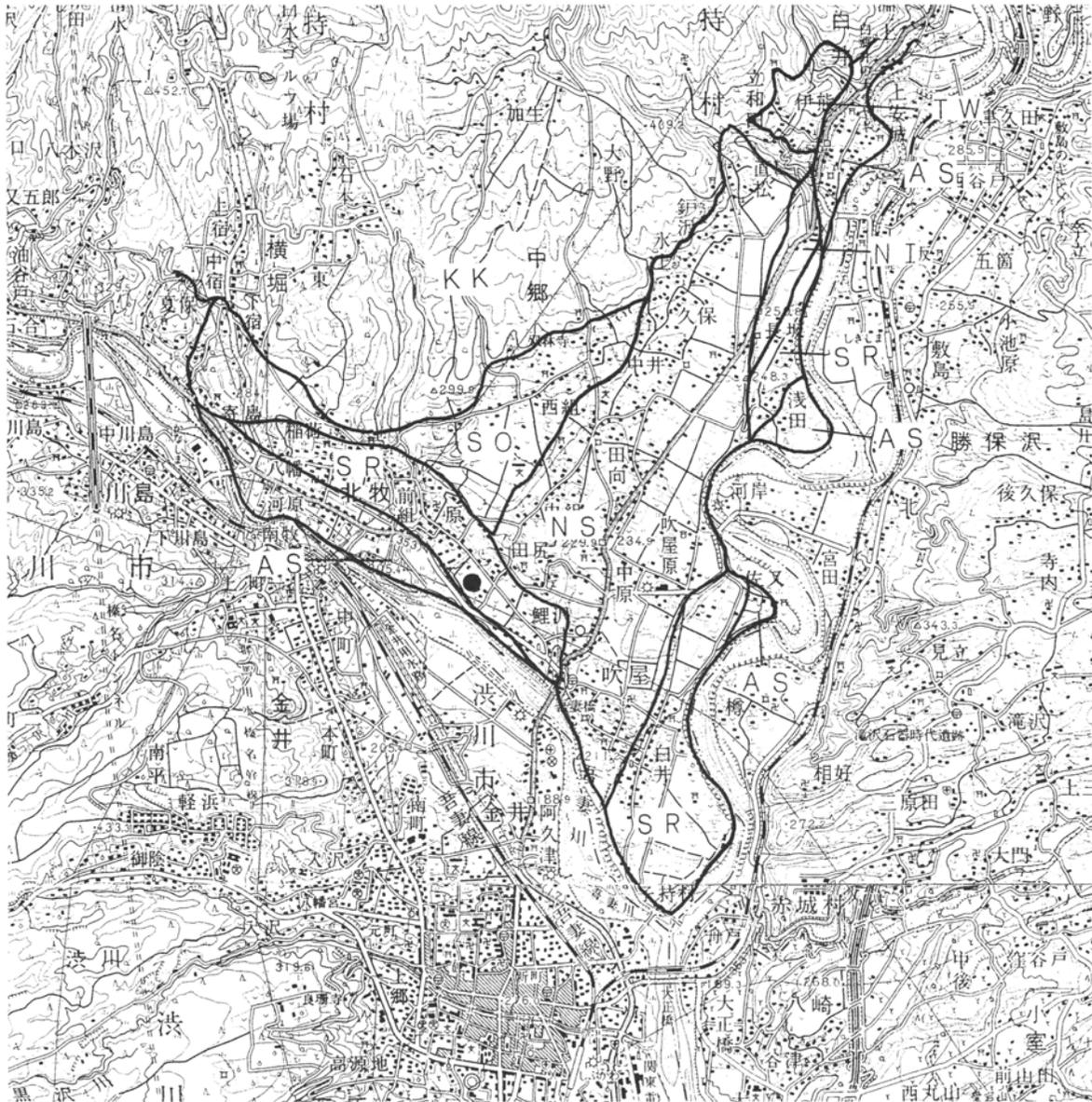


3図 Hr - FA と Hr - FP の降水範囲 (S=1:200,000)

(国土地理院20万分の1地勢図「日光」「高田」「宇都宮」「長野」使用)

6~7万年前の形成といわれる。北から南へ緩やかな傾斜を示し、同様に段丘面の中央を鯉沢川が流れ、両岸に沖積地を形成する。また、湧水点も雙林寺面にかけて見られることから、台地と低地が群在する微地形が予想されよう。Hr - FP直下では、標高の高い台地遺跡、すなわち田尻遺跡や館野遺跡などでは集落跡が検出されており、標高の低い台地遺跡-吹屋犬子塚・中郷恵久保(吹屋恵久保)遺跡では畠や放牧地に供されていたものと捉えられよう。また、鯉沢川が形成した低地帯では水田跡が確認されている。

雙林寺面:子持山南麓~東南麓に形成された段丘である。標高250m以上の最上位段丘とみてよく、子持村市街地を眺望する高さにある。長坂面と同様にローム層の発達が著しい面であり、中部ローム層が確認されて



子持火山噴出物 = KK	雙林寺面 = SO	長坂方面 = NS	立和田面 = TW
西伊熊面 = NI	白井面 = SR	浅田面 = AS	

4図 遺跡位置と子持村段丘分布図(S=1:50,000)
 (国土地理院5万分の1「中之条」「沼田」「前橋」「榛名山」使用)
 (『子持村誌上巻』1987を参照)

II 周辺の環境

いる。北側に広がる子持火山扇状地の裾野と一体化した地形傾斜を示すが、南端あるいは東端に至ると、一際聳える段丘崖を形成する。換言すれば古墳時代中葉においても、眼下の生産域を望む高さであり、黒井峯遺跡や西組遺跡にみるように中核的な集落域が形成されていたものと考えられよう。無論、中ノ峯古墳や水田跡や畠跡の検出状況から、墓域・生産域としても供されていたようだ。

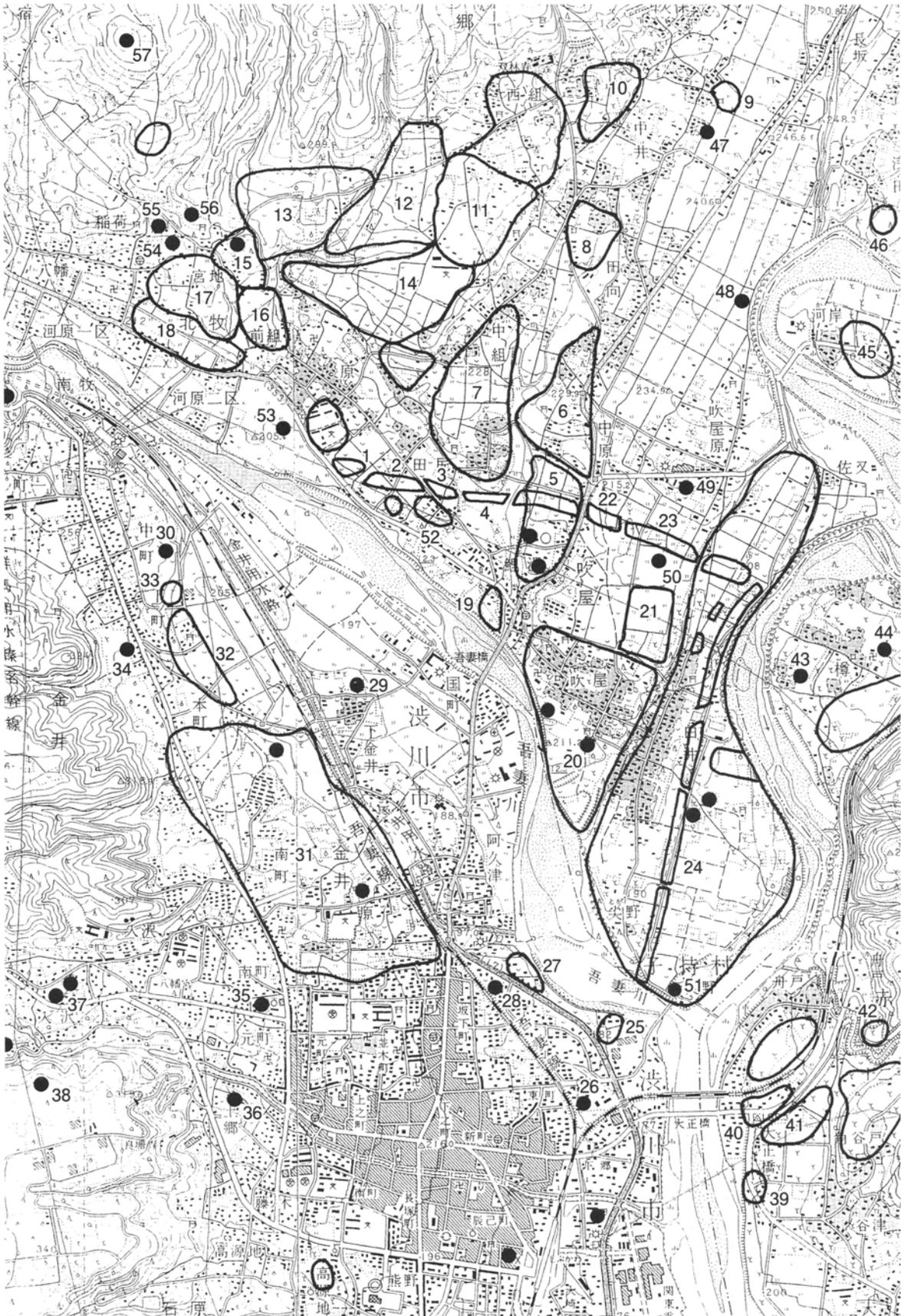
2 歴史的環境

前節で述べたように、子持村及びその周辺は、古墳時代に榛名山の2度の噴火による火山災害を受けた地域であり、利根川と吾妻川による数段の河岸段丘上に多くの遺跡が包蔵されている。その様相は、火山灰及び降下軽石によって古墳時代の地表面が直接的に覆われているため、遺存度が極めて良好であり、降下当時の瞬時の姿をとどめていると言って良い。特に降下軽石 Hr - I (Hr - FP) の堆積は厚く、降下軸線上にある調査遺跡では2mを誇る層厚を示している。このことは、Hr - FP 降下後の攪乱が下層にまで及ばず、重複遺構を見ない状況で、Hr - FP 直下の面 - 6世紀中葉の生活面を検出できる特性を持っている。またその下層に見られる Hr - S (Hr - FA) 面も古墳時代中葉の遺構が Hr - FA 下に及ばない限り、当時 - 6世紀初頭の良好な生活痕跡を我々に提示する。前者 - Hr - FP 直下の集落跡として黒井峯遺跡、Hr - FA 直下の例として渋川市中筋遺跡はあまりにも著名である。子持村とその周辺地域は、古墳時代集落研究・墳墓研究・水田・畠研究に具体的なデータが包蔵されているのである。ここでは、周辺地域の古墳時代及び平安時代～中世の遺跡の分布を概観してみよう。

古墳時代

前述の黒井峯遺跡(14)は子持村の最上位段丘面である雙林寺面に位置する。Hr - FP 直下の古墳時代集落遺跡として知られ、当時の集落内施設が複数単位として捉えられる画期的な集落である。発掘調査も数次に渡り行われ、その都度新しい視点の調査方法と新事実が提供されている。また、周辺にも同時期の集落跡が見られており、西組遺跡(12)・押出遺跡(13)・田尻遺跡(7)が知られる。集落内施設として、竪穴住居跡以外に平地式住居跡・生け垣・畠・水田・樹木跡・水場などが調査されており、総合的な集落様相の把握が可能な地域でもある。これらの集落跡は鯉沢川流域・長坂面・雙林寺面に集中して確認されており、当時の居住中心地域が当該段丘面であることが理解できる。生産跡も上記の段丘面上の埋没谷に水田が営まれており、また台地上には畠が検出されている。さらに下位段丘の白井面では、北牧相野田遺跡(16)や本遺跡(1)、吹屋靴屋遺跡(2)、吹屋三角遺跡(4)、中郷恵久保遺跡(5) 鯉沢瓜田遺跡・吹屋瓜田遺跡(19)など吾妻川流域あるいは長坂面・鯉沢川流域で水田跡が調査されている。いずれも良好な水田跡を検出しており、一地域の水田耕作様相の把握に欠かせない遺跡群であろう。さらに、これらの遺跡では Hr - FA 下水田も同時に検出されており、子持村内で数少ない Hr - FA 下遺構として位置付けられている。これは、Hr - FA 下集落跡の少なさと比較されるが、Hr - FA 降下前後の集落の在り方が同地点に重なる現象を想定すれば、Hr - FA 下集落の検出例は少なくなるものと考えている。

一方、利根川流域の白井面では村教委、事業団で白井遺跡群など多くの発掘調査が行われているが(24)、Hr - FP 下集落跡を検出した例は無い。畠跡・放牧地跡が主体であり、水田の検出も見られない。利根川に注ぐ小河川や現状の調査範囲で広範囲の埋没谷も見られないことから、水利上の理由を一義的に、水田開発あるいは集落設営が敬遠された地域と考えられよう。しかしながら、放牧地跡としての馬蹄痕跡の存在は、当時の家畜馬の管理形態を考える上で、特異な性格を示す遺跡群である。多くの検証を経ているが、未だ様々な研究課題が蓄積しており、さらに考察を重ねなければならないだろう。



5図 周辺遺跡分布図(S=1:25,000)

II 周辺の環境

白井面の下位段丘の浅田面では、浅田古墳が著名である。葺石、埴輪列を当時のまま確認できた例として、注目されている。さらに地点を示せ得なかったが有瀬古墳群は積石塚を主体としており、これも Hr - FP 下より当時の姿を顕在化した例で調査を重ねる度に、新事実が明らかになる重要な遺跡である。その他では、黒井峯遺跡などに近接して中ノ峯古墳 (56) が調査されている。

平安時代

Hr - FP 上で確認される古代遺跡の特徴として、製鉄関連を示唆する例が見られる。吾妻川対岸にある渋川市金井製鉄跡 (31) は国指定史跡であり、半地下式の豎形炉が調査されている。さらに子持村内の平安時代集落からは、小鍛冶跡や鉄碎が多々検出されており、例えば白井遺跡群白井二位屋遺跡 (24) では製錬炉と目される遺構が認められている。Hr - FP 降下後の土壌変化に伴い、通常の水田耕作が果たせない地域であり、生業変化を余儀なくされたのであろうか。その他の平安時代遺跡としては、中組遺跡 (8) では Hr - FP 上の調査でありながら、平地建物跡、掘立柱建物跡などが垣に囲まれた様相を検出しており、礎石建物の存在から小規模な寺が推定されている。また、小単位の集落が営まれる様相と、「利刈牧」の関連性から牧畜を生業とする指摘もある。確かに、本遺跡や隣接する吹屋糶屋遺跡などは数軒単位の集団による集落跡であり、前述の製鉄関連の生業と併せて「牧」の存在も重視しなければならないだろう。

中～近世

中～近世城郭として著名な白井城 (20) が吾妻川と利根川の合流点にある。周辺地域においても、白井上城 (9)、八崎の寄居 (39)、戸隠山烽火台 (57)、図示し得なかったが利根川の対岸に長井坂城があり、当時の重要な拠点であったことが窺われよう。近世遺構としては、各遺跡 Hr - FP 上で墓壙や建物跡を検出している。東町関下遺跡 (25) では天明3年の浅間泥流下の水田を検出している。また、白井遺跡群に加えてしまったが、白井宿は近世の宿場町として著名である。

第1表 主な周辺遺跡一覧表

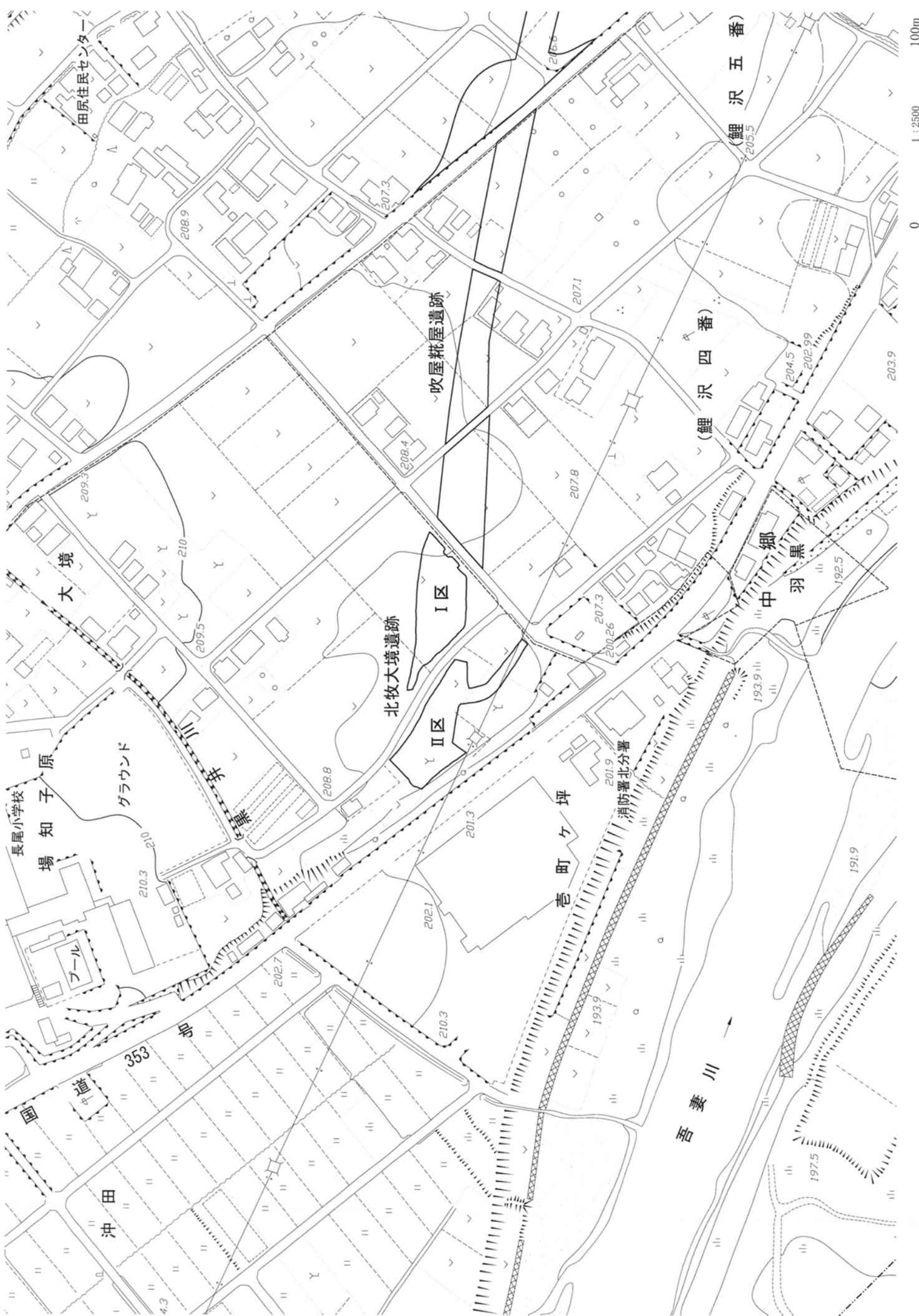
番号	遺跡名	遺跡の概要	文献等
1	北牧大境遺跡	事業団調査。F A・F P下水田。平安時代集落など	本報告書
2	吹屋靴屋遺跡	事業団調査。5 c 集落、F A・F P下水田・畠、平安時代集落など	58
3	中郷田尻遺跡	未調査。平成16年度着手予定	
4	吹屋三角遺跡	事業団調査。F A・F P下水田。北接地点を村教委調査。F P下古墳・水田を検出	56
5	中郷恵久保遺跡 (吹屋恵久保遺跡)	事業団調査。4 c～5 c 集落、F A・F P下水田・畠。南に庚申塚古墳。(長尾村11号墳)がある	56～58
6	八幡神社遺跡	村教委調査。古墳時代前期集落・土墳墓、F P下集落(竪穴住居・平地住居・堰・樹木・屋外カマド)・畠等。	48
7	田尻遺跡	村教委調査。弥生集落・墳墓。F P下集落(竪穴住居・平地住居・家畜小屋・垣)・畠・道等、平安時代集落	48・50～55
8	中組遺跡	村教委調査。F P下盛土跡(境界)・耕起面、平安時代集落(竪穴住居・平地建物・掘立柱建物・垣・礎石建物)	14・45
9	白井上城跡	中世城跡	5
10	池田沢東遺跡	村教委調査。F P下道・畠・境界・耕起面を検出。花塚古墳(F P下古墳)を含む	44
11	館野遺跡	1962年群大調査。F P下集落(祭祀跡・畠・埋没住居による凹地)。村教委調査ではF P下畠を検出	45
12	西組遺跡	村教委調査。F P下集落(竪穴住居・垣・畠・樹木)、黒井峯遺跡の周辺集落か?。平安時代集落	10
13	押出遺跡	村教委調査。弥生時代再葬墓・方形周溝墓、F P下集落(平地建物・畠・境界・埋没住居による凹地)。平安時代集落。縄文時代後晩期の配石・石棺墓を検出した調査としても知られる	11
14	黒井峯遺跡	村教委調査。国指定史跡。F P下集落としてあまりに著名。竪穴住居、平地建物・高床建物・家畜小屋・道・水場・水田等が調査・確認されている。古墳時代後期の集落単位が把握でき、また住居の上屋構造等地上構造物を示唆する資料など情報量は多い	13・14・55
15	丸子山遺跡	村教委調査。弥生時代～古墳時代方形周溝墓、F P上・F P下古墳。丸子山古墳(F P上)含む	49
16	北牧相野田遺跡	村教委調査。F A下・F P下水田。F P下水田面は耕起中を呈す。平安時代集落	28
17	畑中遺跡	村教委調査。F P下水田	49
18	後田遺跡	F P下水田	
19	鯉沢瓜田遺跡 (吹屋瓜田遺跡)	村教委調査。事業団調査。F A下・F P下水田。F P下水田は耕起中を示す。	29・24
20	白井城跡	中・近世城跡。当地域の、中心的存在の城館跡と位置付けられている。15世紀半ばに越後長尾氏の関東進出時の要衝として築城がなされたとされる。村調査では、石敷・土橋・建物跡を検出。他に奈良・平安時代集落。不動塚・金比羅山(古墳?)含む	40
21	源空寺裏遺跡	村教委調査。F P下放牧地跡・境界	
22	吹屋中原遺跡	事業団調査。F P下畠・放牧地跡	56
23	吹屋犬子塚遺跡	事業団調査。F A下水田・F P下放牧地跡 村調査では畠の痕跡を検出	53・56
24	白井遺跡群 (古墳群・白井宿含む) 白井北中道Ⅰ～Ⅲ遺跡 白井上宿遺跡 白井丸岩遺跡 白井大宮遺跡 渡屋遺跡 白井南中道遺跡 白井二位屋遺跡 白井南郭遺跡 白井二位屋城	事業団調査ではF P下放牧地、平安時代集落、中世墓群等を調査村教委調査ではF P下畠、放牧地、平安時代集落を見ている。白井古墳群は金比羅塚、加藤塚等F P上と目される。白井二位屋城に関しては、白井城と一体化した別城一郭の見解もある。渡屋遺跡はF A下集落の可能性はある	56 25 30 49 17・31 49～51 46
25	東町関下遺跡(浜川市)	事業団調査 近世畠・水田跡	27
26	東町古墳	F A下古墳	4
27	坂下町古墳群	F A下古墳群。1962群大調査	3
28	坂之下遺跡	市教委調査 F A下水田、平安時代集落、坂之下館跡	12
29	阿久津製鉄遺跡		59

II 周辺の環境

番号	遺 跡 名	遺 跡 の 概 要	文献等
30	金井丸山古墳		
31	金井原遺跡 金井発京遺跡 金井製鉄遺跡 金井前原遺跡	F P 上古墳?・平安時代集落 製鉄関連遺構が調査されている 金井製鉄遺跡は国指定史跡	8
32	金井下新田遺跡 金井城跡	古墳時代集落・城跡	
33	東裏遺跡	古墳時代集落	
34	西裏遺跡	古墳時代集落	
35	虚空蔵塚古墳	F P 上古墳	35
36	延暦塚古墳	F P 上古墳	38
37	かね塚古墳		4
38	鎧山砦跡		59
39	八崎の寄居(北橋村)	中世城館跡。北橋村教委調査。柵列・掘立柱建物柱・石組遺構	15
40	田尻遺跡	弥生時代後期集落。鉄剣出土	15
41	新宿遺跡		22
42	樽遺跡(赤城村)	弥生時代集落。樽式土器標識遺跡	2
43	野本古墳群(いなり塚)	古墳時代包蔵地 樽田中遺跡	
44	清水・新井古墳・弁天塚 古墳		
45	河岸古墳群	F P 上古墳群	
46	浅田遺跡(子持村)	村教委調査。F P 下古墳6基、埴輪列を残す例が著名。その他に道・境界・水田を調査。	54・55
47	行人塚	F P 下古墳。白郷井村3号墳	
48	筭塚	古墳? 長尾村14号墳	
49	八溝塚		
50	犬子塚	古墳? 長尾村12号墳	
51	白井尖野遺跡(落合1 号墳)	村教委調査。F P 上古墳。平安時代集落。中世墓塚	48・49
52	吹屋Ⅰ～Ⅲ号墳・三夜 塚	F P 上古墳、長尾村5～8号墳	
53	長尾小学校南遺跡	F P 下古墳	
54	デン塚	F P 上?古墳	
55	大日塚	古墳?長尾村1号墳	
56	中ノ峯古墳	1979年調査。県指定史跡。F P 下古墳。袖無型横穴式石室を持つ円墳	9
57	戸隠山烽火台(戸隠権 現砦)	中世砦跡。土居・腰郭を備えるとされる	

-参考文献-

- 1 尾崎喜左雄 1938 『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟天然記念物調査報告 第5輯 群馬県
- 2 杉原莊介 1939 『上野樽遺跡調査概報』『考古学』第10巻第10号
- 3 尾崎喜左雄 1962 『群馬県渋川市坂下古墳群』『日本考古学協会 年報15号』日本考古学協会
- 4 尾崎喜左雄 1971 『北群馬・渋川の歴史』北群馬・渋川の歴史編纂委員会
- 5 山崎 一 1972 『群馬県古城墓址の研究』
- 6 松本浩一 1970 『群馬用水土地改良地域埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和44年調査概報 県教委
- 7 井上唯雄 1975 『金井製鉄遺跡発掘調査報告書』渋川市教委
- 8 松本浩一 1978 『丸山古墳発掘調査報告書』渋川市教委
- 9 松本浩一他 1980 『中ノ峯古墳発掘調査報告書』子持村教委
- 10 石井克巳 1985 『西組遺跡発掘調査報告書』子持村教委
- 11 石井克巳 1987 『押手遺跡発掘調査概報』子持村教委
- 12 小林良光 1988 『坂之下遺跡』渋川市教委
- 13 石井克巳他 1989 『都市周辺の軽石堆積地における遺跡保存方法の検討』昭和62年度実施報告 文化庁
- 14 石井克巳 1990 『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教委
- 15 長谷川福次 1991 『八崎の寄居・田尻遺跡』北橋村教委
- 16 小林良光 1993 『市内遺跡 VI』渋川市教委
- 17 麻生敏隆 1993 『白井大宮遺跡』群埋文
- 18 南雲芳昭 1993 『家形埴輪からみた馬蹄跡』『白井大宮遺跡』群埋文
- 19 黒田 晃 1993 『白井遺跡群-中世編-』群埋文
- 20 黒田 晃 1994 『白井遺跡群-集落編-』群埋文
- 21 南雲芳昭他 1994 『白井遺跡群』-古墳時代編- 群埋文
- 22 長谷川福次 1994 『新宿遺跡』『村内遺跡 III』北橋村教委
- 23 小林 修 1995 『清水・新井古墳・弁天塚古墳』『赤城村内遺跡 I』概報
- 24 遠藤俊爾 1996 『吹屋瓜田遺跡』群埋文
- 25 高井佳弘 1997 『白井北中道 II 遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡 古代中近世編』群埋文
- 26 小林 修 1997 『野本古墳群 いなり塚古墳』『赤城村内遺跡 III』概報
- 27 大西雅広 1998 『東町関下遺跡』群埋文
- 28 石井克巳 2000 『北牧相ノ田遺跡』子持村教委
- 29 石井克巳 2000 『鯉沢瓜田遺跡』子持村教育委員会
- 30 井野修二 2000 『白井北中道遺跡(道の駅地点)』群埋文
- 31 根岸 仁 2002 『白井大宮遺跡 II』群埋文
- 32 1956 『群馬県勢多郡 横野村誌』群馬県勢多郡横野村誌編纂委員会
- 33 1963 『群馬県の遺跡』群馬県遺跡台帳作成委員会
- 34 1971 『群馬県遺跡台帳 I 東毛編』群馬県教委
- 35 1981 『群馬県史 資料編3』-原始古代3 古墳- 群馬県史編纂委員会
- 36 1986 『群馬県史資料編2』原始古代2 弥生・土師 群馬県史編纂委員会
- 37 1987 『子持村誌 上巻』子持村誌編纂委員会
- 38 1993 『渋川市誌 第2巻』通史編・上 原始～近世 渋川市誌編さん委員会
- 39 年報・紀要委員会 1983 『付篇 1. 昭和57年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』2 群埋文
- 40 年報・紀要委員会 1984 『付篇 1. 昭和58年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』3 群埋文
- 41 年報・紀要委員会 1985 『付篇 1. 昭和59年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』4 群埋文
- 42 年報・紀要委員会 1986 『付篇 1. 昭和60年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』5 群埋文
- 43 年報・紀要委員会 1987 『付篇 1. 昭和61年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』6 群埋文
- 44 年報・紀要委員会 1988 『付篇 1. 昭和62年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』7 群埋文
- 45 年報・紀要委員会 1989 『付篇 1. 昭和63年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』8 群埋文
- 46 年報・紀要委員会 1990 『付篇 1. 平成元年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』9 群埋文
- 47 年報・紀要委員会 1991 『付篇 1. 平成2年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』10 群埋文
- 48 年報・紀要委員会 1992 『付篇 1. 平成3年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』11 群埋文
- 49 年報・紀要委員会 1993 『付篇 1. 平成4年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』12 群埋文
- 50 年報・紀要委員会 1994 『付篇 1. 平成5年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』13 群埋文
- 51 年報・紀要委員会 1995 『付篇 1. 平成6年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』14 群埋文
- 52 年報・紀要委員会 1996 『付篇 1. 平成7年度埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』15 群埋文
- 53 年報・紀要委員会 1997 『付篇 1. 平成8年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』16 群埋文
- 54 年報・紀要委員会 1998 『付篇 1. 平成9年度県内埋蔵文化財発掘調査一覽表』『年報』17 群埋文
- 55 年報・紀要委員会 1999 『V 付録 2. 県内市町村等発掘調査一覽』『年報』18 群埋文
- 56 年報・紀要委員会 2000 『VI 付録 2. 県内市町村等発掘調査一覽』『年報』19 群埋文
- 57 年報・紀要委員会 2001 『VI 付録 2. 県内市町村等発掘調査一覽』『年報』20 群埋文
- 58 年報・紀要委員会 2002 『VI 付録 1. 平成13年度県・市町村等発掘調査一覽』『年報』21 群埋文



6図 遺跡位置と周辺地形図(S=1:2,500)

III 遺構と遺物

概要

北牧大境遺跡は北群馬郡子持村に所在する、古墳時代の良好な水田2面を検出した遺跡である。6世紀初頭期に榛名山二ツ岳噴火により、降下したとされる火山灰-FAに埋没した「FA下水田跡」と、6世紀中葉に比定される軽石(FP)下の「FP下水田跡」である。

本遺跡のFA下水田跡は、いわゆる「小区画水田」ではあるが、やや不整形で整然とした方形を基調とはしていない。しかしながら、地形傾斜に沿った区画様相は、迫力のある水田景観を見せてくれた。畦畔遺存状態も良く、水田面や畦畔には人足痕跡や馬蹄痕跡が認められた。

FA水田跡より上層で検出されたFP下水田跡は、整然とした「小区画水田」である。軸長1.5m前後の「極小区画水田」とも言われる水田跡であり、調査区のほぼ全域で検出されたその姿は、圧巻ともいえる様相であった。また、本遺跡で検出されたFP下水田跡は、当地域該期水田跡で屢々見られる、耕起中の水田であり、その状態が面的に把握できた良好な水田である。さらに大畦を挟んで耕起後の水田面も検出されており、当時の農作業工程が一目で判断できる良好な水田跡である。

2回の火山災害で壊滅的な被害を受けた古墳時代の子持村ではあるが、2面の水田跡は、例えば当地域の土地利用の変遷を考える上で重要な要素を提示するであろう。更に古墳時代における水田の在り方に関しても良好な資料として位置付けられよう。当時の水田耕作に関わる基礎的な工程の一部を具体化した水田跡である。特に、FP下水田跡は黒井峯遺跡で調査されたFP下集落跡と同時存在した水田跡であり、黒井峯集落の居住者が眼下に眺めた水田跡なのである。当時の景観復元では欠かせない背景となろう。

その他に本遺跡では、FP上面で小規模とはいえ8軒の平安時代竪穴住居跡を見ることができた。詳細な時期差は把握できなかったが、9世紀代の小規模集落の一部と捉えたい。また、中～近世に比定される土坑群あるいは墓壇群等は、周辺遺跡の例と比較すると遺構密度としては高く、当該期における墓域等としての性格も考えておきたい。

いずれにしても、本遺跡で調査された各文化層から得られた遺構群は、周辺遺跡の資料と併せて巨視的に見るべきであり、今後検証を重ねる際の基礎的な考古資料として報告したい。

1 基本土層と調査面

繰り返し述べているように、北牧大境遺跡のある子持村は、6世紀初頭頃と中頃の2回にわたる火山災害を受けた地域である。その火山性堆積物は、厚く当時の地表を覆い、そのため、後世の古代・中～近世・近・現代の土地開発の影響を殆ど受けない結果となり、極めて遺存状態の良い遺跡が包蔵されている。

さて、当地域の発掘調査としては、最低4～5面調査を基本とする。すなわち、FP上・FP下・FA下・ローム上、ロームの遺存状態が良好ならば、ローム中の旧石器調査が必要となる。しかしながら、この4～5面調査の間に視点を換え、さらに複数面の文化層あるいは調査面を抽出する例が殆どである。すなわち、FP上の調査では、表土とFP上面の間に薄く黒色土が堆積している場合があり、この面で調査を行うと、古代～中・近世の畠等の生産跡、道路状遺構などが確認されることがある。この後、FP上面調査として黒色土面で確認し得なかった竪穴遺構の調査を進めるべきなのであろう。本遺跡の場合、II区調査において上記手続きを踏まえ、即、

III 遺構と遺物

FP 上面調査に着手した経緯があるが、堅穴遺構のみの検出にとどまり、遺跡情報の幾つかを逸した恐れもある。記して反省点としたい。

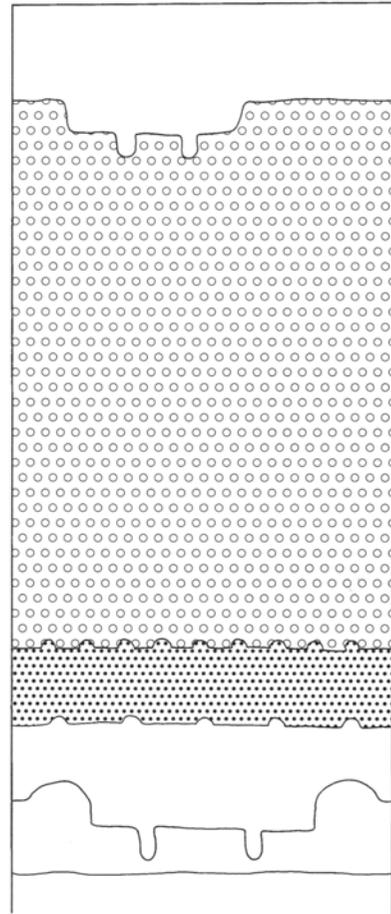
次に FP 下面調査へと調査面を下げることになるが、厚く堆積する FP 中にも情報が隠されている。例えば、FP 直下遺構として堅穴住居や平地住居、本来ならば上屋があって然るべき建築物、さらに生け垣などの立体的な構築物は、FP 降下時に火災をうけていたり、土屋根が残っていれば、FP 中にその痕跡を見ることができる。顕著な例は黒井峰遺跡であり、FP 断面に残影化した住居上屋構造は、他に例を見ない良好な資料となっている。

FP 直下面は、6世紀代中葉の地表面 - 古墳時代後半の生活面が具体像を伴って検出される当地域特有の文化層である。ただし FP - 軽石を除去するのみで、簡便に遺構が検出できると考えられがちだが、実際の調査では、FP の埋まり具合や FP 除去後の地表面の微妙な色調差など詳細な観察項目が要求される。例を挙げれば、FP が地表面に減り込んでいない状態で確認された場合、その地点は水が存在していたのではないかと、推定できるのである。実際に本遺跡でも II 区で検出した「代掻き後」の水田面は比較的 FP が直下面に嵌入せずに認められたため、水田面に水が張られた滞水状態と判断することができた。このような微細な観察に思われる項目であっても、その累積が黒井峰遺跡であり、生活面調査に必須の観察なのである。

次の調査工程として、通常 FP 下面調査後は FA 上面で FP 下水田や畠の耕作痕調査等が行われる。FP 下において放牧跡のみの検出であっても、FA 下で畠耕作に伴う「サク」痕跡が認められた遺跡は多く、FA 降下後 FP 降下直前段階までの復興経過が読み取れる調査なのである。

FA 直下面は、6世紀初頭の地表面であり、FP 同様当時の生活面が FA 災害に会う直前の姿で検出されることで知られる。ただし、子持村内では FA 下集落はやや希薄な様相を見せており、黒井峰遺跡のような明確な集落像は把握し得てない。現在でも中筋遺跡を初めとする榛名山麓部に良好な遺跡が包蔵されているようだ。ただ子持村内においても、FA 下水田は広域に検出されている。おそらく周辺地域に FA 下集落が存在すると思われるが、今後の調査に期待するしかない。FA 除去作業に際して注意すべき点としては、FA 純層も火山灰学的に幾つかのまとまりに細分されているため、その成因を考慮し、遺構に堆積する FA 層の位置付けを考えなければならない。FA 層中には、降灰による堆積の他に水蒸気爆発によるもの、さらに火災流堆積による層位が認められる。FA 下に建物跡などが存在した場合、これらのユニットによる直接的被害を特定する観察も必要である。この観察が反映している例として、渋川市中筋遺跡が挙げられよう。

洪積台地の場合、FA 下面の黒色土を掘り下げ、下位のローム上面(漸移層)に至ると、縄文時代～古墳時代



7図 文化層概念図

前期の堅穴遺構などを検出する。しかしながら、これも地点によっては、FA 下黒色土下位に暗褐色土が存在し、この面で畠状遺構などを検出できる例がある。注意を要する。

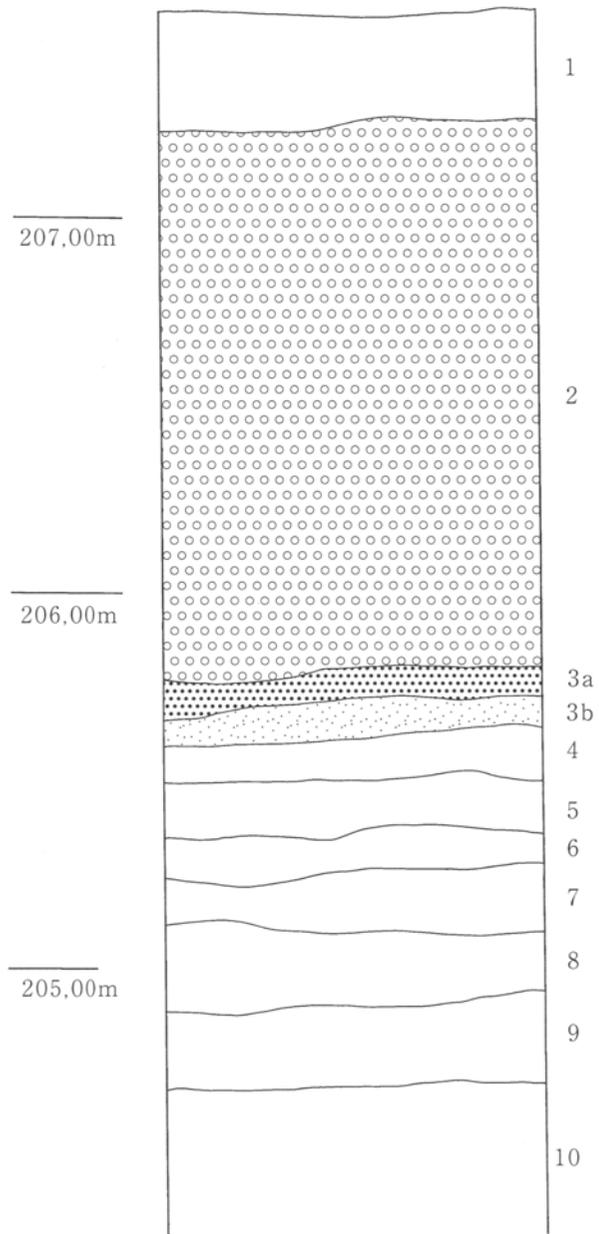
さて、ローム上面の堅穴遺構調査では、掘り込みの深い大型堅穴住居跡などは、FP 除去時段階よりその地点が大きく凹む例が多く、周堤帯をも検出できる状態もある。FA・FP 下の遺構ほどではないが、他地域の遺構に比しては極めて良好な遺存状態を示す。縄文時代の遺構に関しても、浅田遺跡や押出遺跡のように、配石遺構中の立石が状態良く検出できるのである。

ローム中の調査-即ち旧石器時代の調査に関しては、当地域ではまとまった調査例が少ない。調査の集中した白井面ではロームが二次堆積状態であったり、ローム遺存の良好な長坂面・双林寺面では、黒井峰遺跡のように FP 下面が保存対象となり、それ以下の文化層も保存となるため調査には至っていないのである。その中で、長坂面調査である、吹屋犬子塚・吹屋中原遺跡の調査で、As - YP ~ As - BP 層中より石器群が検出されたのは、極めて意義深い。

以上のように、本遺跡が所在する子持村内の包蔵地における調査面を概観した。たしかに、大きな文化層は4面ではあるが、詳細な観察を加え、目的性を持った調査を進めるに、上記のように多数枚の文化層や調査面が把握できるのである。加えて、FP・FA 直下の遺構に関しても、単純な除去作業に偏らず、緻密な観察を経て、当時の生活面を調査しなければならない。

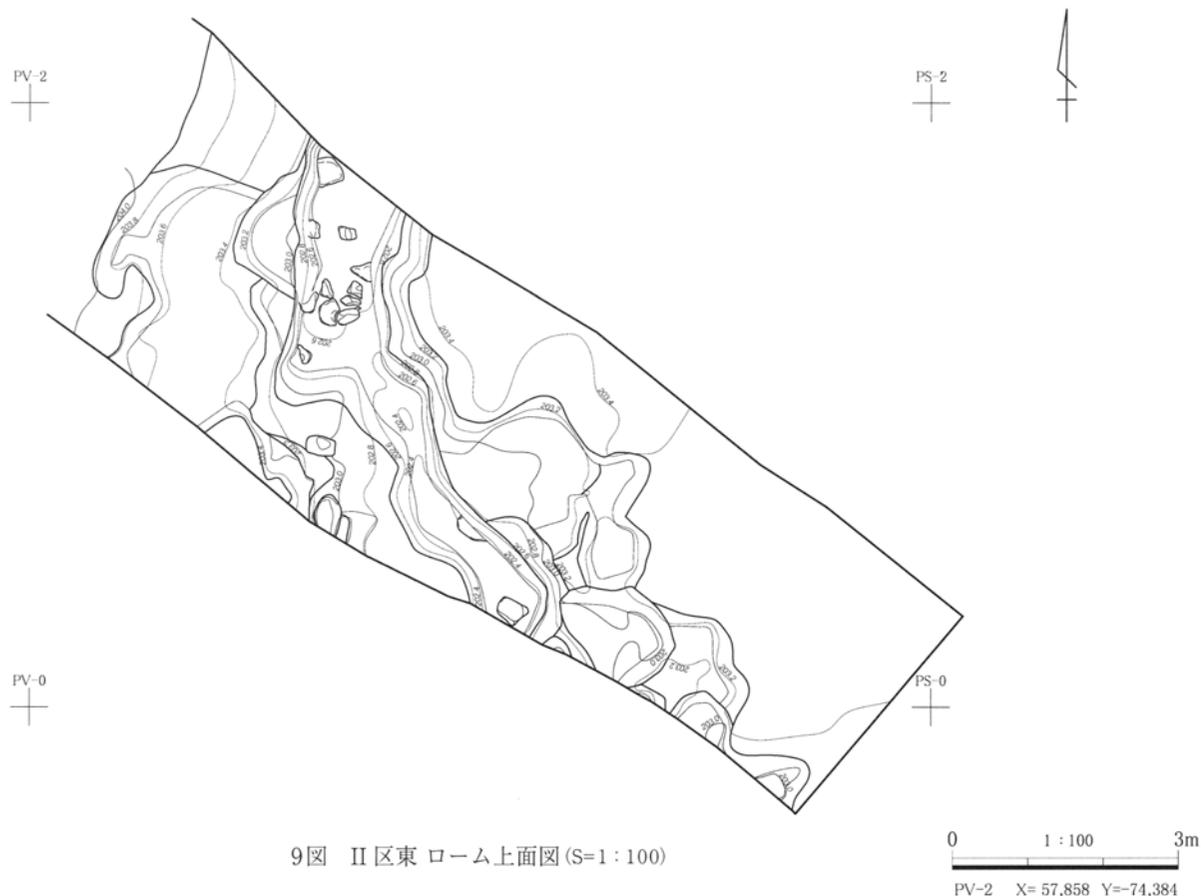
【基本土層】

1. 表土層 黒色～褐色を呈す。FP を多く混在する
2. 榛名山ニッ岳降下軽石層 いわゆる Hr - I(火山軽石層)。本書では Hr - FP あるいは FP と呼称する。本遺跡では層厚1.5～2.0mを測る。上面で平安時代・中・近世遺構を確認する
- 3a. 榛名山ニッ岳降下火山灰層上層 いわゆる Hr - S(火山灰層)。Hr - FA あるいは FA と呼ぶ。3b層と合わせた層厚は10～30cmを測る。上層は暗褐色～褐色、地点によっては黒褐色を呈す。FA層の人為的な攪拌による変色と捉えた。本遺跡の場合はFP下水田の耕作土となる。
- 3b. 榛名山ニッ岳降下火山灰層下層 灰褐色～黄灰色を呈す。上面は黄色味が強い。火山灰純層で粒子の粗密でさらに上下に分層が可能。いわゆる火砕流相当層は上位に含まれる。3b層上面でFP下水田の耕作痕跡等の検出を試みている。
4. 黒褐色土 白色粒・灰色粒を含む粘質土。FA下水田耕作土。硬くしまる。層厚約10cm程度。縄文時代～古墳時代前半期の遺物を包含する。
5. 〃 4に比して明るい。白色粒等の含有は微量。粘質土で硬くしまる。層厚約10～20cmを測る。縄文時代～古墳時代前半期の遺物を包含すると同時に遺構確認面である。
6. 暗褐色土 ローム漸移層。黄褐色ローム質土と斑状堆積を示す。粘質土
7. 黄褐色土 ローム質土。粒子が細かく地点によってはシルト質に変化する。やや軟質で小礫を含む
8. 鈍黄褐色土 砂質で硬くしまる。地点では黄色味が下層に帯びる
9. 〃 鉄分凝縮塊を混在する。均質で硬くしまる
10. 礫層 白井面上面。円礫を主体とする



8図 基本土層図(S=1:20)

III 遺構と遺物



9図 II区東 ローム上面図(S=1:100)

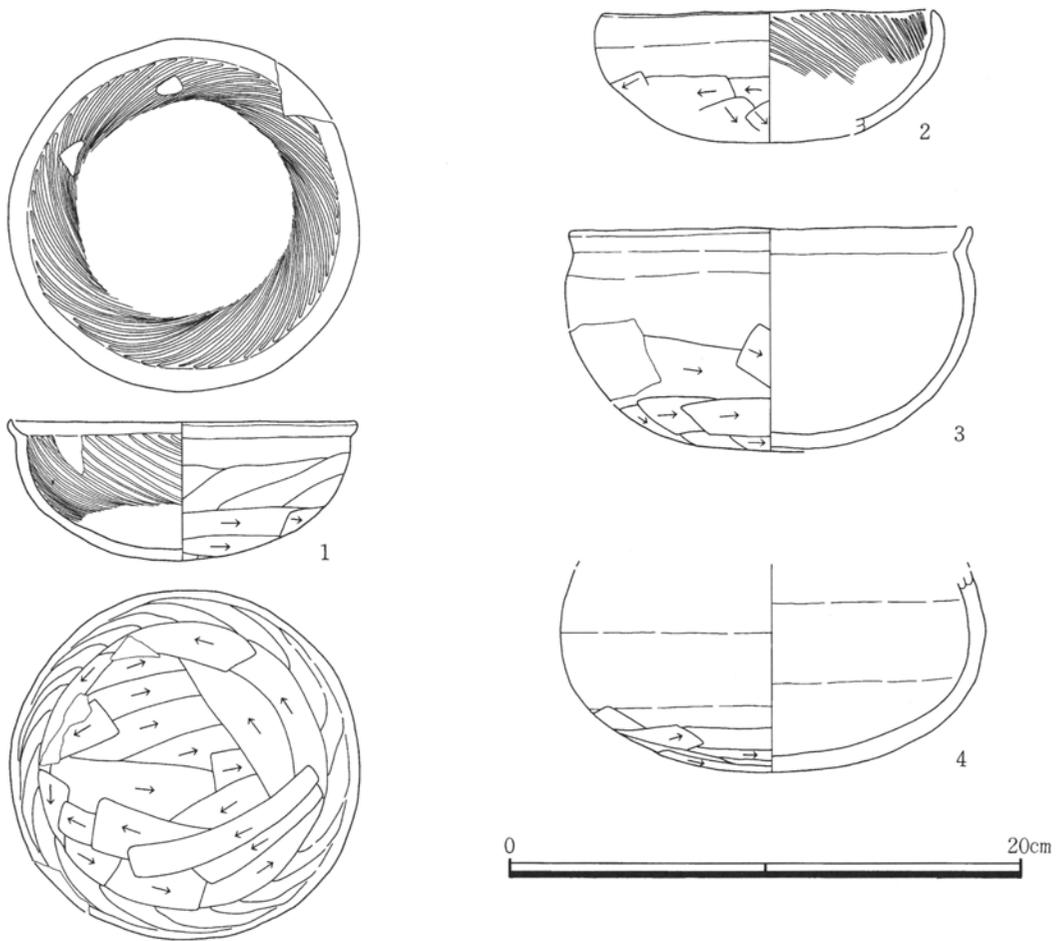
2 ローム上面で検出された遺構と遺物

本文化層は、FP下水田跡・FA下水田跡の調査終了後に黒色粘質土を除去し、ローム上面で遺構を確認する際に検出された、遺構・遺物が対象である。

先にも述べたように、本遺跡のローム上面での調査では、多くの遺構・遺物を確認できなかった。I区では殆どが古墳時代前半期の土師器小破片を少量、縄文時代石器小剥片を少量見るのみである。僅かに、II区で、縄文時代後期土器片(堀之内2式)及び石器小剥片が見られた。これも図示には耐えられない資料のため、本書では割愛する。しかしながら、II区では低地部にあたる東端部分で、5世紀代の土器があるていどまとまって出土しているため、本報告ではこの出土土器とその周辺を記載する。

(土手状遺構)

出土土器の周辺は凹凸が多く、複雑な様相を呈する。また、最東端には土手状の盛り上がりがあり、この出土土器と土手状の盛り上りを重視して遺構として、精査に努めた。調査区の周辺は台地-白井面から低地-浅田面にかかる傾斜地の上位部分で、すでにロームを基盤としておらず、礫混じりの褐色粘質土を確認面として調査した。前述の凹凸を覆う黒色粘質土を取り除き、遺構としての特定に努めたが、周辺の凹凸の掘り込みはしっかりしておらず、平面形も不整形の土坑が連続する結果となった。また、傾斜に沿って、幅約80cm～160cm、深さ約40cm程度の溝が南北に走行して検出された。全体的な傾斜は北から南へ傾くが、溝底面は凹凸が多く、水利に供した溝とは考えられなかった。土手状遺構西側の溝と土坑に関しては、平面形、底面の様



10図 II区東 土手状遺構周辺出土遺物 (S=1:3)

相などから、積極的な有機的遺構とは把握できず、自然営力による落ち込みとして考えておきたい。

東端の土手状遺構も西側が調査区域外になるため全容が判然とせず、また、断ち割り調査による観察では、盛土としては確認できなかった。基盤層の礫層が確認され、旧地形自体が緩やかな高まりを見せていたものと判断できた。

(出土遺物)

遺物は、FA 下面調査時の黒色粘質土中より土師器小破片が少量ながら出土していた。下層に進むに従い、破片はまとまり、10図にある4個体を個体図示し得た。この他に、土師器甕破片・須恵器甕破片も出土したが、個体図示には耐えられないため、省いている。また土師器坏(1・2)は、土坑底面よりまとまって出土したが、出土状態などの図面記録を果たし得なかったため、図示できない。

このように、土手状遺構は調査範囲が狭く、全容は把握できず、盛土も確認できず、周辺の土坑・溝も有機的な遺構とは把握できない状況から、残念ながらその性格特定にまではできない。消極的な考えとしては、谷地形における対岸の地形傾斜と見ることもできよう。しかしながら、周辺より出土した5世紀代の土師器坏・碗類を供献具としてみると、祭祀的な色合いも無視できず、土手状遺構を住居跡周堤や周溝墓の一部としての可能性も捨てきれない。本遺跡の東側に隣接する吹屋糺屋遺跡では同時期の集落を調査しており、その関係性も注意しなければならないだろう。

3 Hr - FA 下で検出された水田跡

本節では、北牧大境遺跡における3面目の調査面で検出したFA下水田を述べる。本遺跡の調査は各調査面ともII区から調査着手したため、調査排土をI区へ仮置きする都合上、II区調査は西側から常に進めていった。FA下面調査も例にもれず、II区西から人力によるFA除去作業を続けた。その結果、II区西では微小な畦状の高まりが見られ、調査当初、これをFA下水田畦畔と判断したが、調査が東へ進展するに従い、明瞭なFA下水田が検出されるに至った。当初見られた微小な畦状の高まりは、FA下水田跡の畦畔ではなく、FP下水田の影響で残された圧痕と考えるに至った。12図にみる西側の小区画あるいは不整形区画の水田様の波線や細線は、記録上残したもので、水田ではないことを申し添えたい。ここでは、本遺跡のFA下水田跡として、II区大畦より東側の区画の明瞭な水田跡及びI区で検出された水田跡を位置付けたい。II区西側で認められた、FP下水田跡の圧痕現象については後述したい。

(全体観)(12図)

本遺跡のFA下水田跡は、前述のようにII区東側とI区全域で検出された。北から南へ、西から東へ緩やかに傾斜するほぼ平坦地形に営まれた水田跡である。I区西側が205.65mでII区東側が205.25mを測り、平面距離約45.0mに対し40cmの比高差を見ることができる。これは現地地形にほぼ沿うものである。FA水田跡の限界はII区東の谷にかかる箇所を確認された。東に急激に傾き、棚田状を形成しながら狭小な谷地形を望んでいる。また、西接する吹屋糶屋遺跡ではFA下水田跡は検出されておらず、台地状地形が確認されている。北牧大境遺跡と吹屋糶屋遺跡の間は現道が走るが、おそらくこの直下にFA降下時の土地利用変換が見られるものと考えられる。

さて、本遺跡のFA下水田跡の遺存状態はほぼ良好といえる。畦畔も明確に判断でき、水口や田面の人足痕や馬蹄痕も観察することができた。

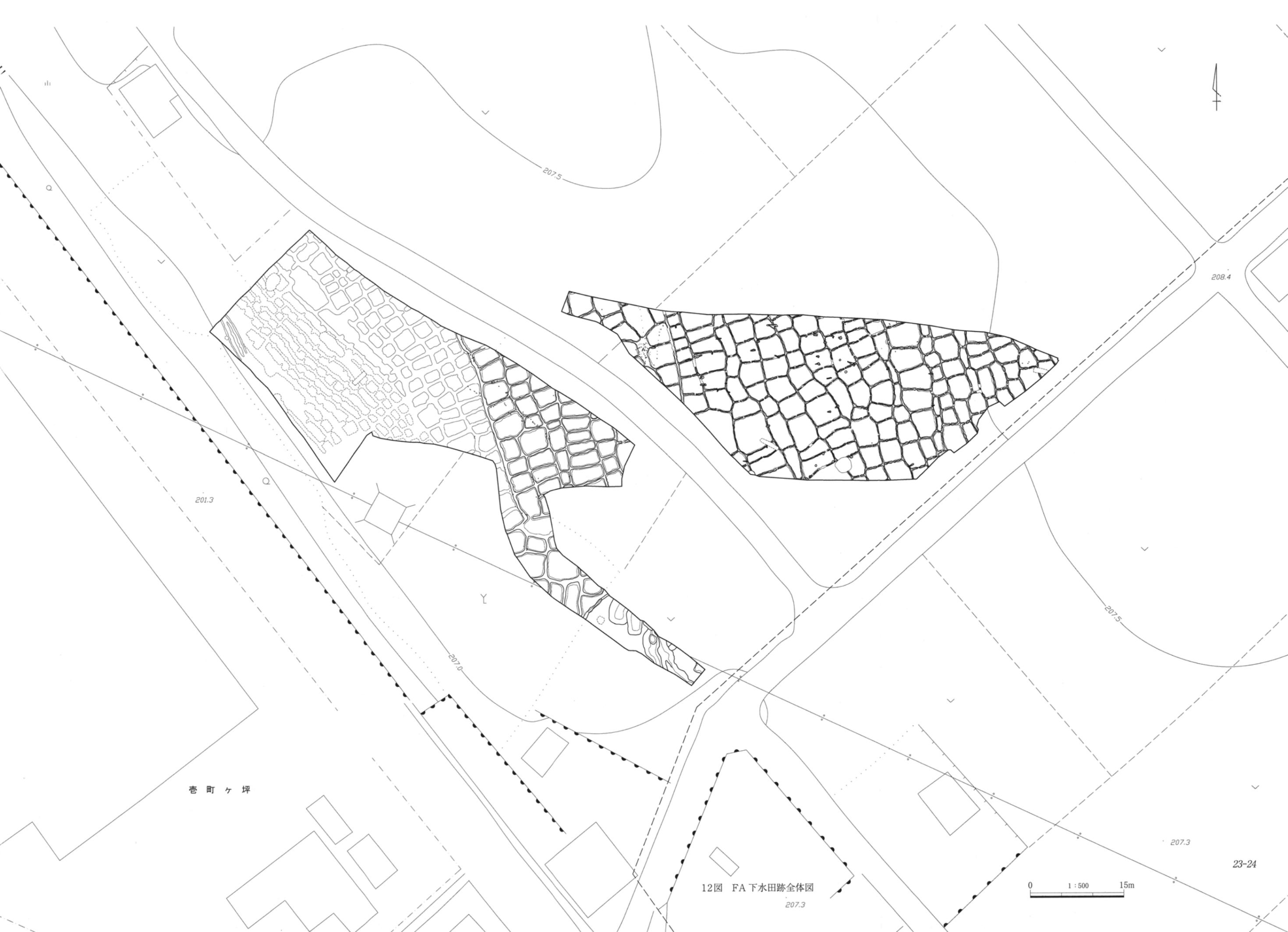
I区を概観すると、方形区画を基調としながらも、不定形区画水田跡の連続が特徴的である。区画の大きさも大小様々であり、統一性は取れていないようだ。この不定形区画は西の大畦に接する区画に関しては、整然とした区画となり、直線的な大畦を際立たせるようになっている。大畦より西側は不定形区画が接する。また、馬蹄痕集中箇所も見られ、大畦を境にした水田機能の差が見受けられよう。後述するが、水口は多くの区画で観察することができた。しかしながら、閉じている区画もあり、水を頻繁に掛け流す工程時すなわち耕起や代掻きに際した水田ではないようだ。

II区は、I区に比してやや遺存度が悪い。全体的に畦畔の高まりが弱く、幅広の印象を得る。しかしながら、水田区画は不揃いな箇所もあるが、概ね方形区画を連ねる傾向が看取できるように、水田遺構としての存在は確定的である。前述のように、西側の大畦を境にして区画が判然とせず、微小な高まりはFP下水田の圧痕と見ることができた。また、II区ではI区で多く見られた水口が数カ所しか見受けられなかった。調査精度の差もあるが、水田機能や状態の差も念頭におきたい。また、東側調査部分は低地部分への傾斜が続き、一部に棚田状の水田区画が見られた。ただ排水用の有機的な溝は付設されておらず、自然地形の幅狭の谷地形に排水していたものと思われる。

なお、II区西側に関しては、FA下水田の誤認もあり、水田以外の用益地として位置付けられなかった。本来ならば水田遺構外の諸施設を探らなければならないのだが、FP下水田の圧痕に左右され、詳細な観察を果たし得なかった。反省材料である。



11図 II区東 ローム上面図(1:40)



壱町ヶ坪

12図 FA下水田跡全体図

207.3

0 1:500 15m

23-24

16
X=57914

PY

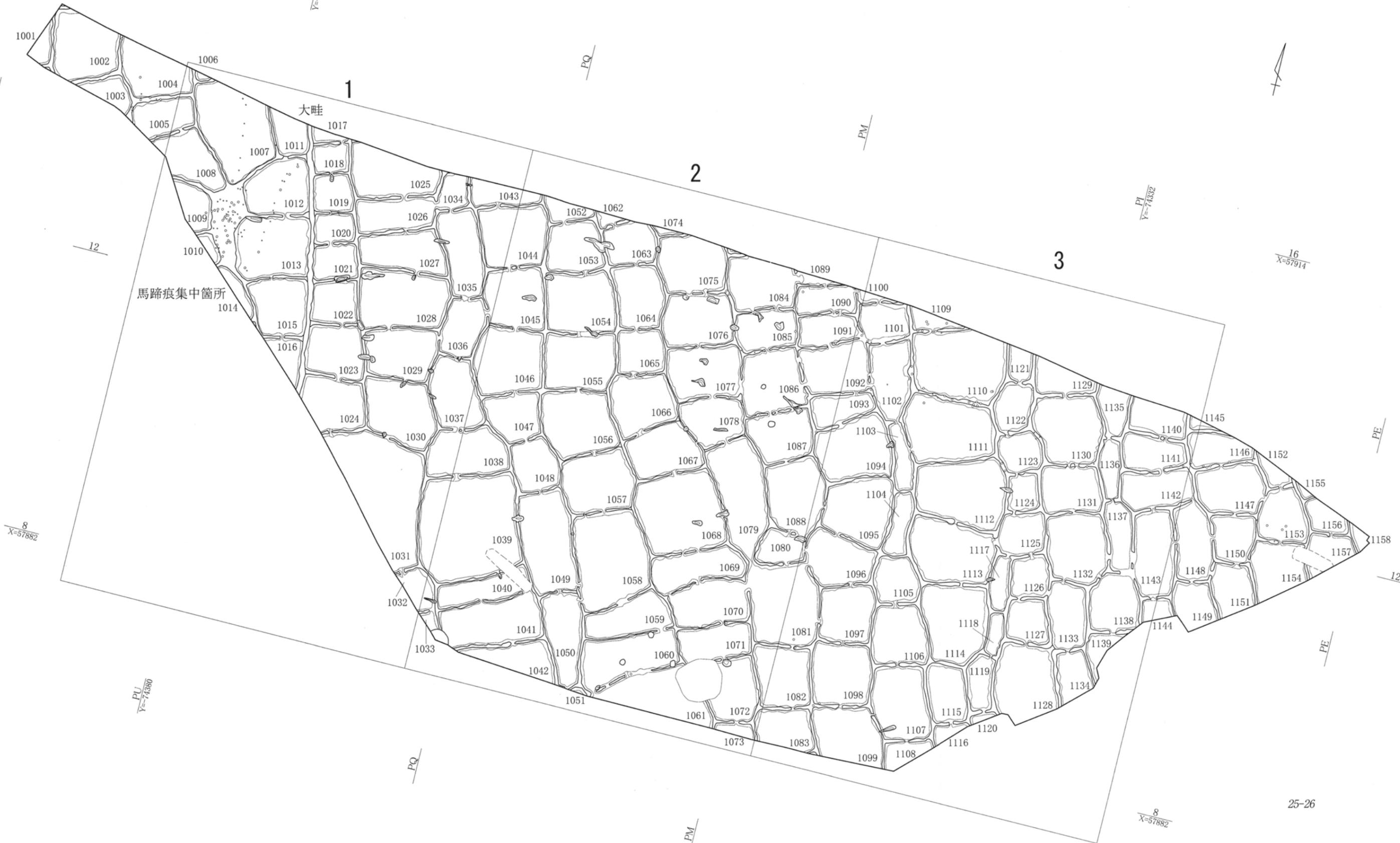
PU
Y=74380

PQ

PM

PI
Y=74332

16
X=57914



8
X=57882

PU
Y=74380

PQ

PM

8
X=57882

25-26

0 1:200 5m

13图 I区FA下水田跡(1)

PI
Y=74332

(大畦)

大畦は明瞭なものをⅠ区とⅡ区に各1条を確認できる。いずれも南北方向を向く縦畦であるが、やや北西に傾く傾向を見せる。Ⅰ区大畦は下端幅で約50cm、高さ約15cmのしっかりしたものである。Ⅱ区大畦は下端幅約110cm、高さ約10cmを測り、これも他の小畦畔に比して存在感ある規模を示す。ただ、Ⅱ区大畦はⅠ区に比して幅広で高さもやや低く緩やかな立ち上がりを示す。調査における当初の水田区画誤認が災いしたとも考えられるが、あるいは、水田そのものの変化—例えば収穫後の水田で雨水や霜による要因、さらに西側の非水田部分との境界の在り方が原因するのではないか。さらに、Ⅱ区大畦は下位の東側傾斜部分に達すると横畦・縦畦の区別がなくなり、ほぼ均一化する傾向が見える。また、本遺跡FA下水田跡の大畦は、2条とも縦畦であり地形傾斜に沿うもので、横畦を兼ねる様相は見られない。あるいは、大区画意識は無く、地形に左右された大畦の設定方法も窺うことができよう。おそらく、水利上の原因によるものであり、北西方向から南東方向への給排水を促す施設としても、大畦の機能を解釈できよう。

(小畦畔)

一般に古墳時代水田跡は、大畦によって画された間をさらに縦畦によって分割し、その中を横畦で小区画する手順が想定されている。よって、その水田の製作工程は、大畦→縦畦→横畦となり、水口の多くは横畦に付される例が圧倒的に多い。また、横畦は毎年作り替えられるため、その位置は前年のものとは違う箇所には設けられるといわれる。本遺跡の場合も、その例に漏れず、縦畦は大畦と同様に南北方向を軸として設けられており、横畦は主に東西方向に作られている。縦畦の方が横畦よりも規模的にもやや大きく、高さも数cm高く盛られている。縦畦の下端幅が約30～40cmに対し、横畦幅は20～30cm程度であり、横畦は土の寄せ方も弱く貧弱な印象を得る。しかしながら、例えばⅡ区東側の区画を見ると、縦畦と横畦の規模差は大きくなく、さ



Ⅰ区西大畦



Ⅱ区東大畦



Ⅰ区中央の小区画水田

III 遺構と遺物

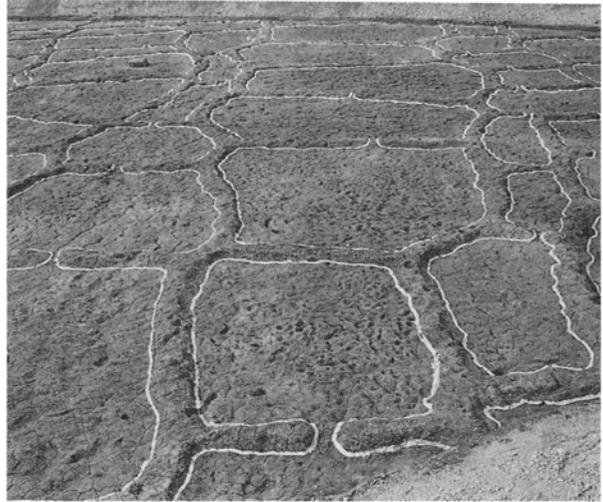
らに低位標高の東部分に至ると、縦畦や横畦の分別すら困難になる。また、I区についても縦畦と横畦の高さがほぼ同じ場所も見られる。本節での推測だが、毎年移動が予測される横畦だが、地形的な制約等から、固定的な横畦も存在していた可能性があり、そのため縦畦と横畦の規模差も生じていないのかも知れない。

次に、本遺跡のFA下水田跡の畦畔は全体的に見て、若干丸みを帯びており、断面形も蒲鉾状を呈する。後に述べるFP下水田の断面方形の畦畔とは対象的であり、このことから、本遺跡のFA下水田跡は耕作直後の様相ではないことが窺えよう。

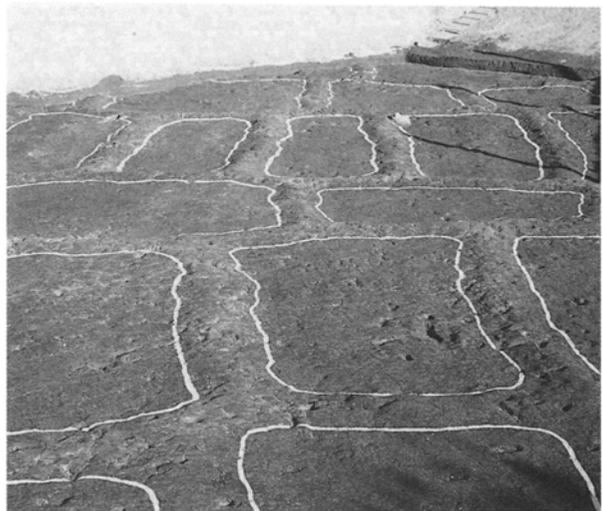
尚、I区・II区とも大畦や小畦畔を調査終了後断ち割り調査を重ねたが、芯材となるべき木材や木器の存在は無かった。また、土層観察も試みたが全て黒色粘質土で構成されており、明瞭な分層は行えなかった。黒色粘質土を盛り上げて形成されているのだが、工程を示唆する土層は見られなかった。

(区画形状・規模)

I区水田跡には、不定形区画が多く見受けられ、II区はやや整った方形区画になる傾向は前に述べた。全体的には、2~3m前後の軸長を測る方形基調の小区画水田跡といえよう。大型のものは軸長5mを超える1031や1039(5.4×5.3m)等が、小型のものとしては1080や1105のように2m前後の区画も見られる。横長区画を呈するものとしてはI区の1041や1059、1141(1.7×3.3m)、II区では2018・2023・2029・2030(1.6×4.3m)等のように南北に連続する配置をみせる。また、縦長長方形の縦長区画がI区、II区ともに東側に数箇所(1103・1104・1117・2028等)が見受けられ、水口による分岐排水が認められる区画や横長区画と組み合わせ例が見られる(16図)。1117や1118は横軸長が1m以下であり、水田としての機能よりも水通し等の水利上機能が求められたのではないかとと思われる。整然とした方形区画は、前述したようにII区大畦東に接して連なる。しかしながらその東西の区画は不定形な形状が配されており、方形区画を



I区中央の小区画水田



II区東の小区画水田



区画形状の多様な小区画水田(I区)

連続する区画配置ではない。大畦に近接し平行する縦畦は直線的な走行を示すに対し、距離を置く縦畦は湾曲を加える走行を示す。この湾曲に左右された不定形区画であり、縦畦が継続的な施設とすれば、FA 下水田不定形区画は長期間永続した水田形態と考えることも可能であろう。

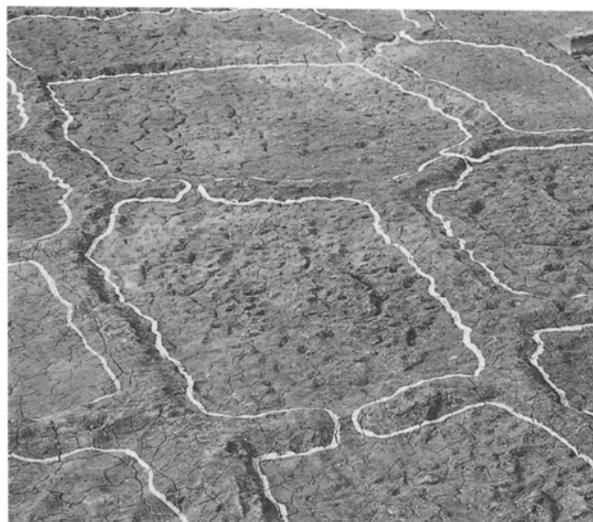
このように本遺跡のFA 下水田跡は、小区画水田ではありながら、整然とした方形区画の連続ではなく、不定形区画が連なる様相を示している。その景観はあたかも、圃場整備前の水田風景を想起させる。周辺遺跡の例を見ると、子持村内の吹屋瓜田遺跡や鯉沢瓜田遺跡ではやや大型区画で、不定形区画も混じる様相を示すのに対し、渋川市中村遺跡や有馬条里遺跡では、方形区画は比較的整然とした景観である。地形的な要因なのかは不明であるが、不定形区画を配する利便性も敢えて考えておきたい。つまり、地形傾斜に沿った区画形状を念頭におけば、より広い平坦地形が保証された、渋川市の利根川右岸下位段丘等においては、整然とした方形区画が取りやすく、合理的な意図の元に小区画水田が営まれたと捉えられ、一方、下位段丘を更に下に控えた北牧大境遺跡のような地域は、水利と地形の制約から、不整形方形区画の水田を形成したのではないかと考えられる。

(水口)

I 区と II 区で大きな差が見られた。I 区の水田区画南側畦畔には殆ど水口が検出されているのに対し、II 区は水口が検出され得なかった区画が多い。これは、I 区と II 区での耕作工程差と捉えたい。すなわち I 区では、水田面に貯まった水を一度掛け流して乾燥させた状態であり、II 区の水口のない区画は水がある程度は貯まっていた状態と見ることができよう。これは、後述する馬蹄痕の在り方からも類推することができる。また、本遺跡の FA 下水田の



区画形状の多様な小区画水田 (I 区)



水口 (I 区)



2方向に開けられた水口 (I 区)

III 遺構と遺物

水口の特徴として、「水口下位に見られる流水による凹み」が極めて少ないのである。このことから、水田区画内の貯水を掛け流す工程も1回程度と見ることができよう。貯水する区画と乾燥する区画があり、全体的に水田面の様相にムラが見られる状況と考えておきたい。

無論、区画南側に水口を設けることから、区画相互の高低差は北側が高く南側が低い。また、南側のみならず区画東西に水口を設けた例が1148に見られる(22図)。これは東西に隣り合う区画に、西から東へ水を供給させた処置とみたい。

(馬蹄痕集中箇所)(24図)

その他の施設としては、I区大畦西側に馬蹄痕集中箇所が見受けられた。この箇所のみ区画されておらず、水田としては供されておらず、夥しい馬蹄痕が集中して検出された。区画はされていないが、周辺の畦畔とは高さの差はなく、周辺には水田区画が展開することから、水田の内部施設と判断できよう。また、周辺の畦畔の走行をみると、この馬蹄痕集中箇所を意識した配置になっており、区画形状も歪な様相を示している。このことから、この箇所を水田内部の重要な施設として意識されていたものと捉え得よう。馬蹄痕は大型のものが殆どで、径20cmを超える例も多かった。おそらく水田耕作に利用されたものと捉えたいが、牛馬耕などの痕跡は認められなかったため、確証的ではない。この馬蹄痕集中箇所より、派生するように幾筋かの馬蹄痕の列は看取されたが、耕作に伴う動きとは思われなかった。ただ、何等かの水田耕作に関わる馬の使用であり、例えば荷役馬としての用途等が想定されよう。その場合の馬蹄痕集中箇所は、馬の休憩場所あるいは荷物の仮置き場のような、性格が想起される。

(水田面様相)

水田面は比較的平坦で区画内で大きな差はない。また、耕作途中の痕跡や稲株等の栽培植物の痕跡も見られなかった。全体的に、角が取れた状態で、短期間ではあるが放置されていた状態とも観察された。しかしながら、馬蹄痕は、上記の集中箇所以外



水口近接 (II区)



馬蹄痕集中箇所 右は大畦 (I区)



畦畔を跨ぐ馬蹄痕 (II区)

にも何箇所かで確認できた。子持村内のFA下遺構では、馬蹄痕の検出は注目されていないが、吹屋瓜田遺跡等でも確認されており、6世紀初頭段階でも確実に馬は村内に存在するといえよう。特に本遺跡のように馬蹄痕の集中箇所が見られることから、人間の管理下に置かれた、家畜馬として位置付けることができる。本遺跡のFA下水田面に残された馬蹄痕には、歩行が看取される状態のものもある(30図)。このII区の馬蹄痕には人足痕も平行して検出されており、馬の歩行と沿った状態にも見て取れる。断定できないが、人間に牽かれた馬の歩行と考えることもできよう。I区東側も馬蹄痕跡は見受けられる。ただ、歩行を示唆する状態ではなく、畦畔に集中した状態で検出されている。これは、畦畔に沿って歩行したのではなく、水田面が馬蹄痕跡の残存し得ない、硬い状態であったと捉えられる。畦畔部分の水田面に比して軟質だった可能性もある。

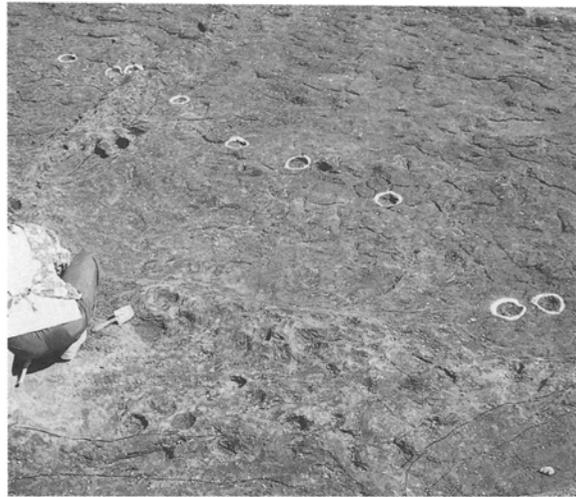
この水田面が硬かった例として、I区東側では水田面にヒビが各所で確認された。おそらく乾燥状態の水田面と見なすことができよう。水口の項でも述べたが、貯水が残る区画と乾燥状態の区画があり、多様な水田面様相と観察できた。この例から、水田跡を埋めたHr - FAの降下季節も類推できるのではと考えている。水田面が乾燥し、馬と人が作業を行う季節としては、春が妥当なのではないかと考えられる。

(耕作痕)

耕作痕と思われる不定形な穴がI区各所で確認されている。鋭い鋤先状の工具で抉ったような痕跡と見られるが、規則性はなく、水田耕作作業の復元には至らない。また、耕作痕に堆積するFAを観察するに、あるいはFP下水田の耕作痕とみることも可能であり、検討を要する。

(耕作土)

FA下水田の耕作土は、黒色粘質土である。粘性が高く、乾燥すると硬く締まる土壌である。畦畔や馬蹄痕集中箇所も同様の粘質土で占められ、水田土壌として特筆すべき特徴を見いだせなかった。また、



馬蹄痕 歩行方向が解る(I区)



水田面の様相(I区)



水田面のヒビ検出作業(I区)

III 遺構と遺物

畦畔や水田面の下部における分層でも、特徴的な土層は明確には把握できなかった。おそらく畦畔などは盛り土行為が行われていたと思われるが、今回の調査では、確証的な事象を得ることができなかった。本遺跡のFA下の黒色粘質土は、均質性という特性から水田土壌の動きの観察には困難である。

(東側谷部分)

東斜面肩部にかけて、棚田状の区画2枚が検出された。ただ、区画と見るより、平坦面を持つ段状面であり畦畔や水口は見られなかった。調査中は棚田として水田跡の一部と見たが、本書では畦畔や水口等の水田特有の施設を持たないこと、水田面自体に傾斜が見られることから、やや消極的な性格付けをしたい。削平行為が及ぶ平坦面として位置付けたい。

さらに斜面下位に至ると、ローム上面で確認された土手状遺構が残存する状況で検出された(29図)。同様に土坑状の凹凸と自然流路が確認され、おそらくFA下水田の排水路として機能していた谷地形と考えられる。水田面との比高差は1m以上を測り、急峻な景観に近く、下位段丘面である浅田面への給水も果たしていたと思われる。

(FP下水田畦畔圧痕現象)

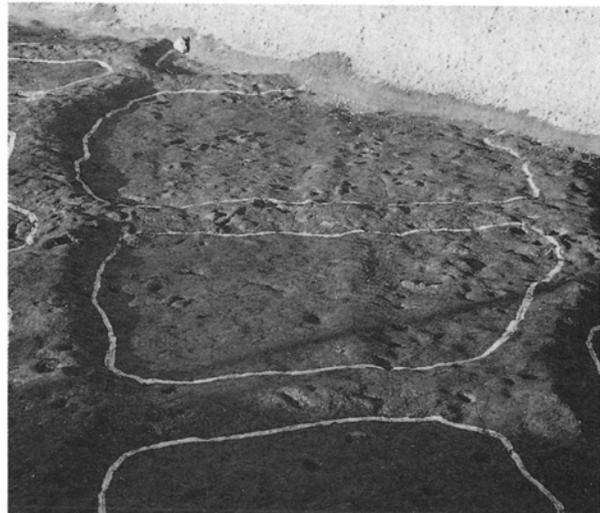
当現象は、本遺跡のII区で顕著に見られた。先述のようにII区調査着手を西側から行ったため、当初はこの圧痕現象をFA下水田畦畔と誤認した経緯がある。II区東側やI区全域でも各所に見られ、FA下水田畦畔と交差あるいは重なって検出されている。本遺跡ではFA下水田の畦畔が明瞭なため、その区別は容易であったが、II区西側のように、FA下水田畦畔が無い箇所あるいは不明瞭な場所においては、誤認が生じやすかった。この現象は、FP下水田が上層のFPや水压等の重量によって、下位のFA下水田面にその圧痕を残す、「スタンプ」状の疑似畦畔である。FA下水田土壌が黒色粘質土であることもかなり影響するものとする。吹屋瓜田遺跡のFA下水田面でも認められ、FA下水田以前の水田跡として位置付けているが、同時に子持村教委の石井氏からの助言を踏まえ、FP下水田の影



黒色粘質土上の耕作痕？(I区)



II区 東側谷部分



FA上で見られたFP下水田畦畔圧痕(II区)

響による圧痕現象も指摘している。

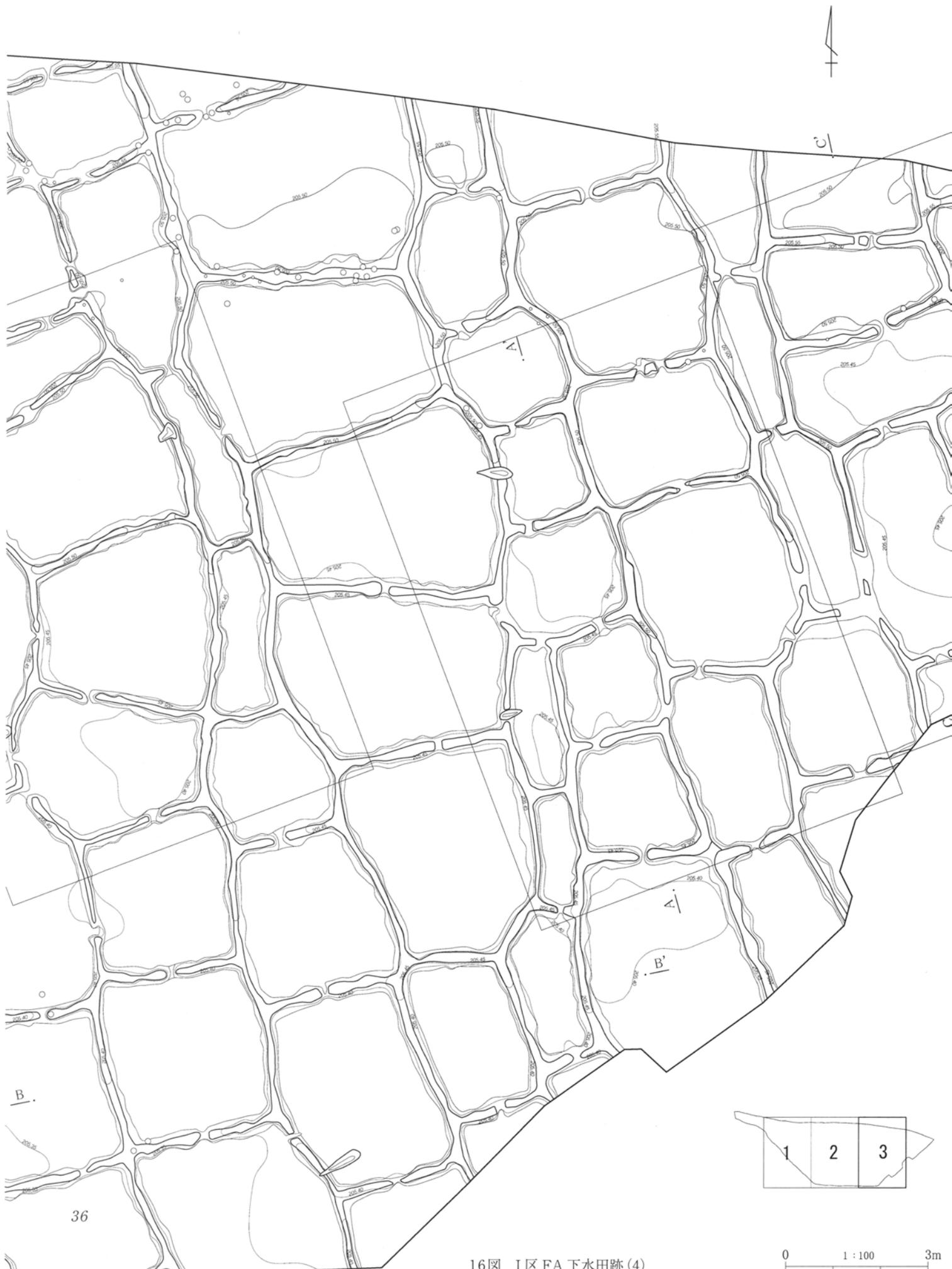
(Hr - FA 下水田跡小結)

以上のように、北牧大境遺跡で検出された Hr - FA 下水田跡は、良好な遺存度で、5世紀末～6世紀初頭～古墳時代中葉の水田の様相を具体化した資料である。北西から南東へ緩やかに傾く台地状の段丘面に営まれた水田跡であり、畦畔も高く、区画形状も明瞭に検出できた。平均軸長2～3mの小区画水田であり、南北に走る大畦に平行して縦畦が設けられ、その間を横畦が繋ぐ様相は、通常の該期水田跡と同様だが、区画形状はやや不整形を呈し、次節で報告する整然とした極小区画水田の FP 下水田跡とは対照的であった。つまり南北方向に走る大畦によって東西に画された水田地域を、縦畦で分割し、その後横畦を設けて方形に区画する手法をとりながら、区画技術あるいは意識は整然とした区画を意図せずに、不定形区画を連続する様相が本遺跡の FA 下水田跡の特徴である。これも前述したが、継続的な縦畦走行を基準とした不定形区画形状をみるに、この不定形区画水田の継続性が看取された。また、いくつかの箇所、相互状に長区画・小区画を設ける配置が見られた。これは、取排水の都合から生じる現象、地形上の制約から区画規模と区画単位の変更が余儀なくされ、さらに水田区画としてよりも、取排水機能を優先させた形状とみる事が可能である。

次に、畦畔の様相や水田面の状態を観察すると、若干ながら丸みを帯びた、放置された状態が看取され、そのことから、本遺跡の水田跡の状態を、水田耕作前の状態と考えた。これは、水口の様相や水田面に遺された馬蹄痕さらに田面のヒビの存在からも類推できた。当時の水田耕作工程の初期作業である、水田環境を整える作業―すなわち、春先に、閉じていた水口を開け、水を流しながらゴミなどを除去し、水田面の水平面を確認し、さらに農作業に必要な道具類を馬等に運ばせる状態と類推した。ただし、これはあくまでも推論であり、編者の想像の域を脱していない。さらに、検証を重ね実証的な分析を提示しなければならないだろう。



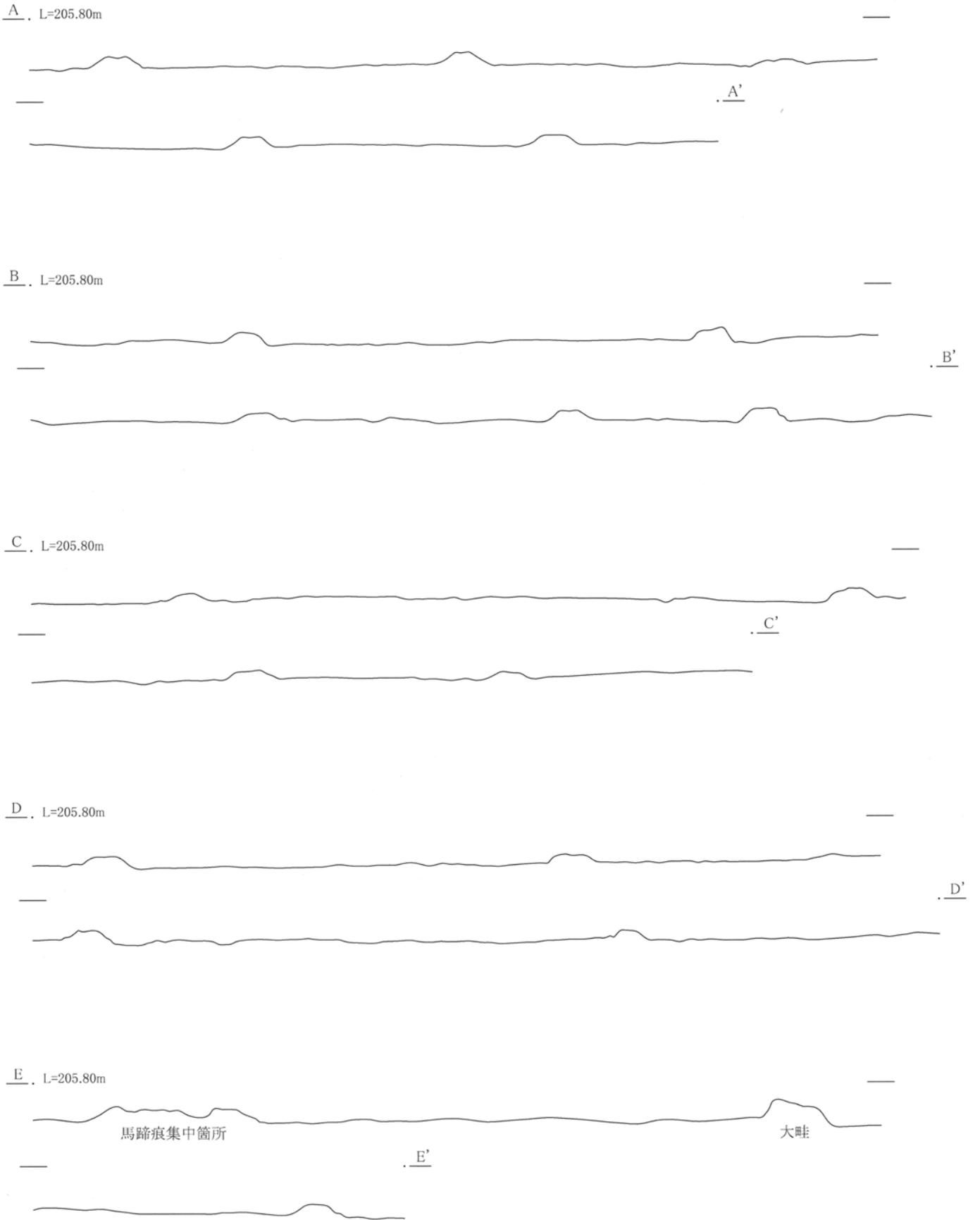




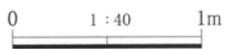
16图 I区FA下水田跡(4)

36

0 1 : 100 3m



17図 I区FA下水田跡断面図(1)



III 遺構と遺物

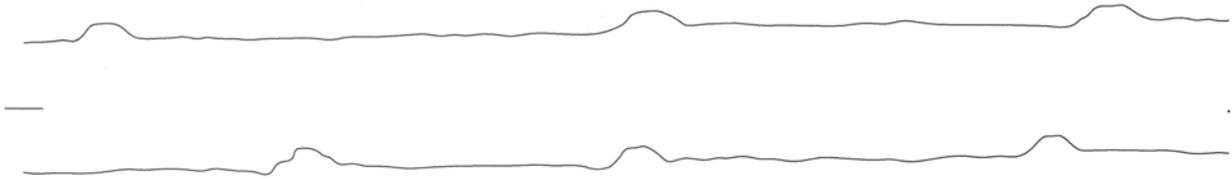
F . L=205.80m

F'



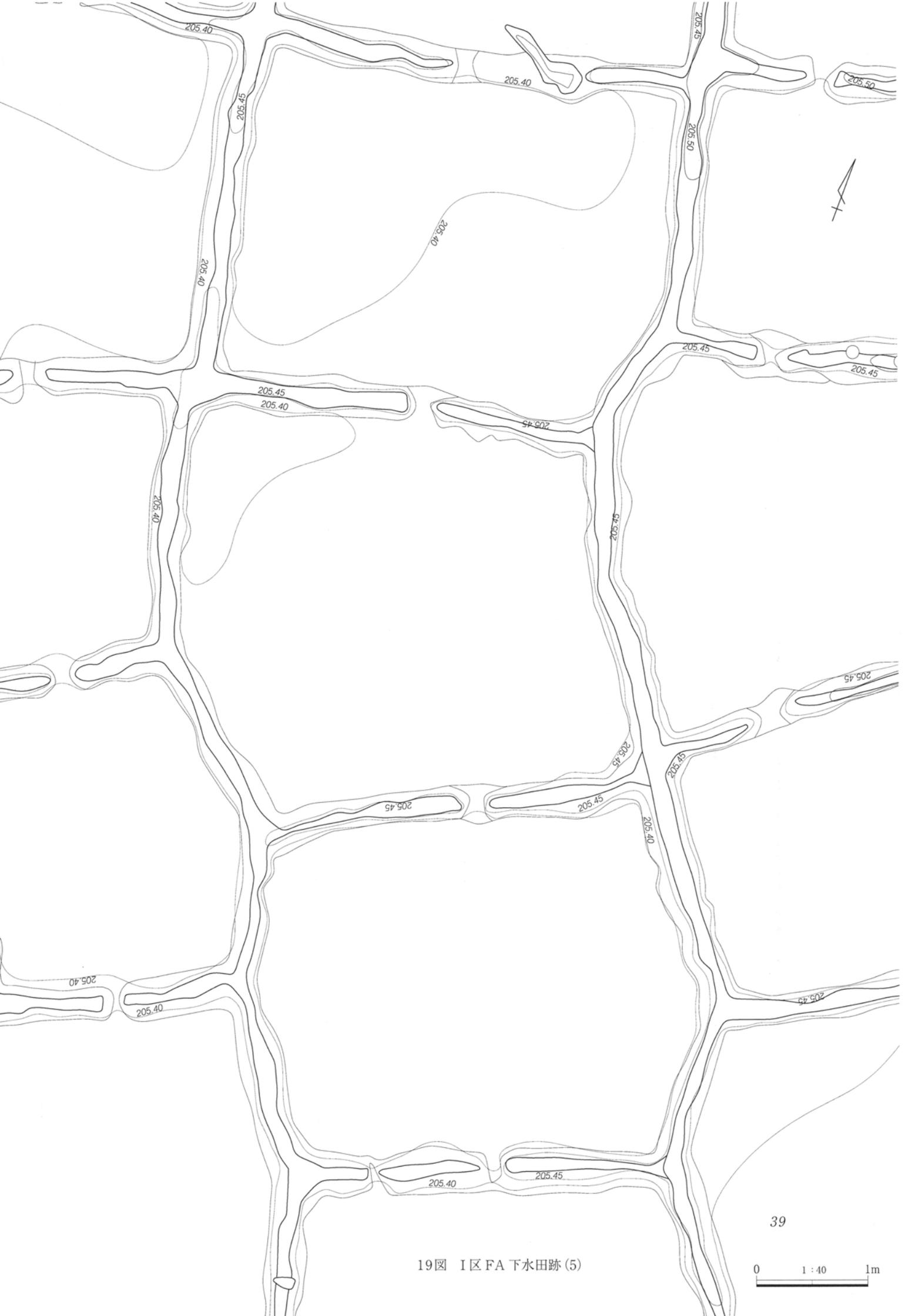
G . L=205.80m

—

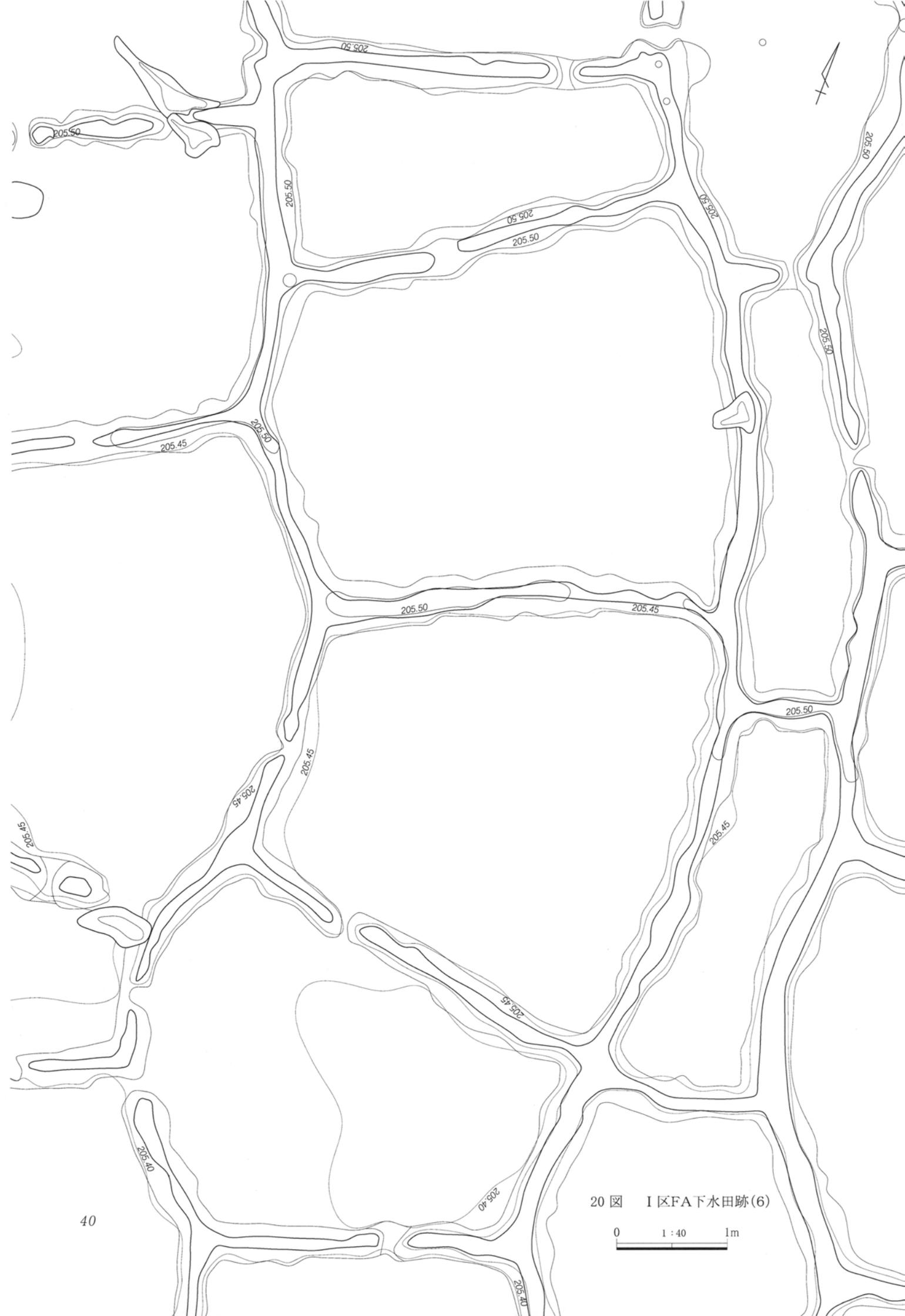


18図 I区FA下水田跡断面図(2)



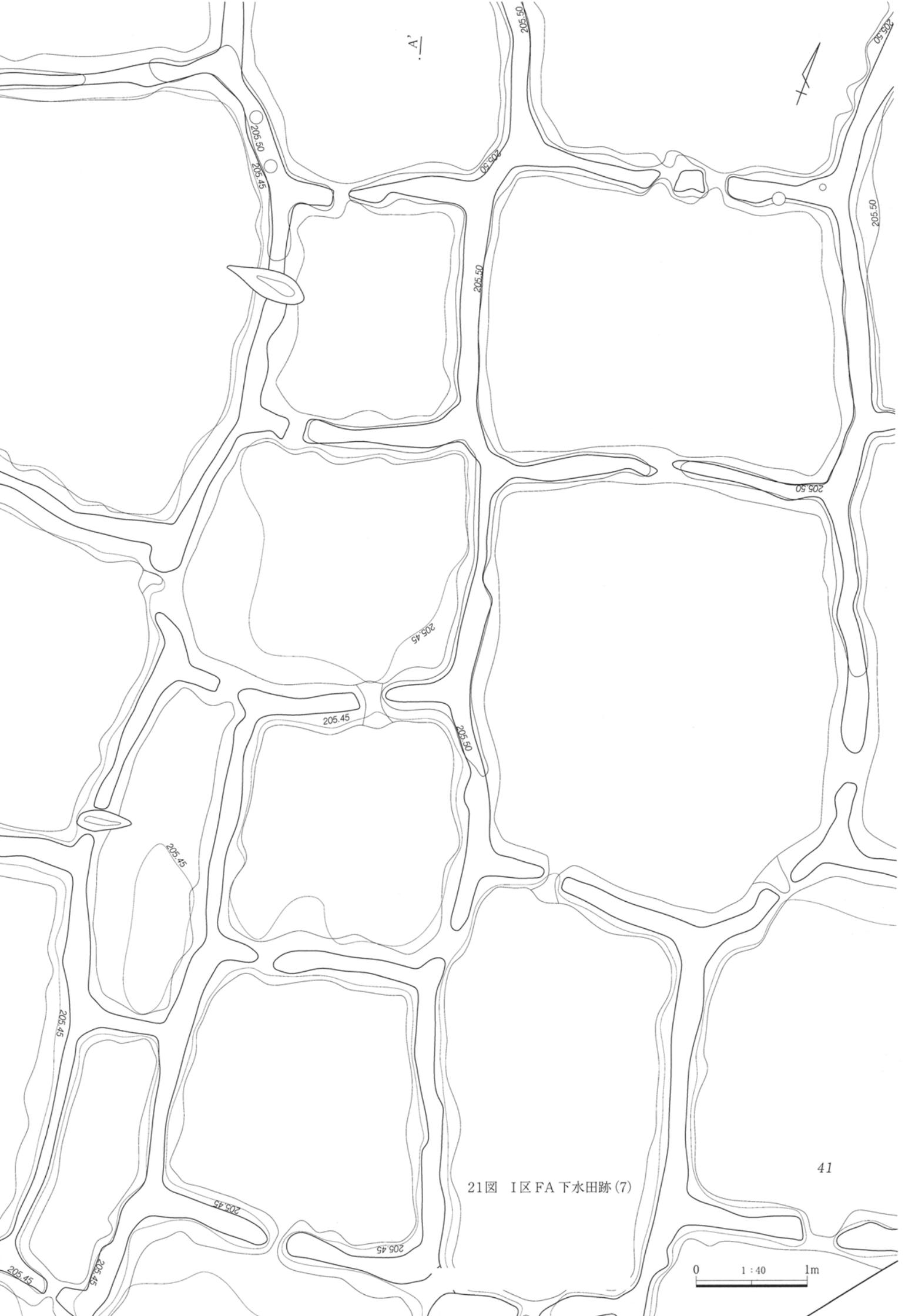


19図 I区FA下水田跡(5)



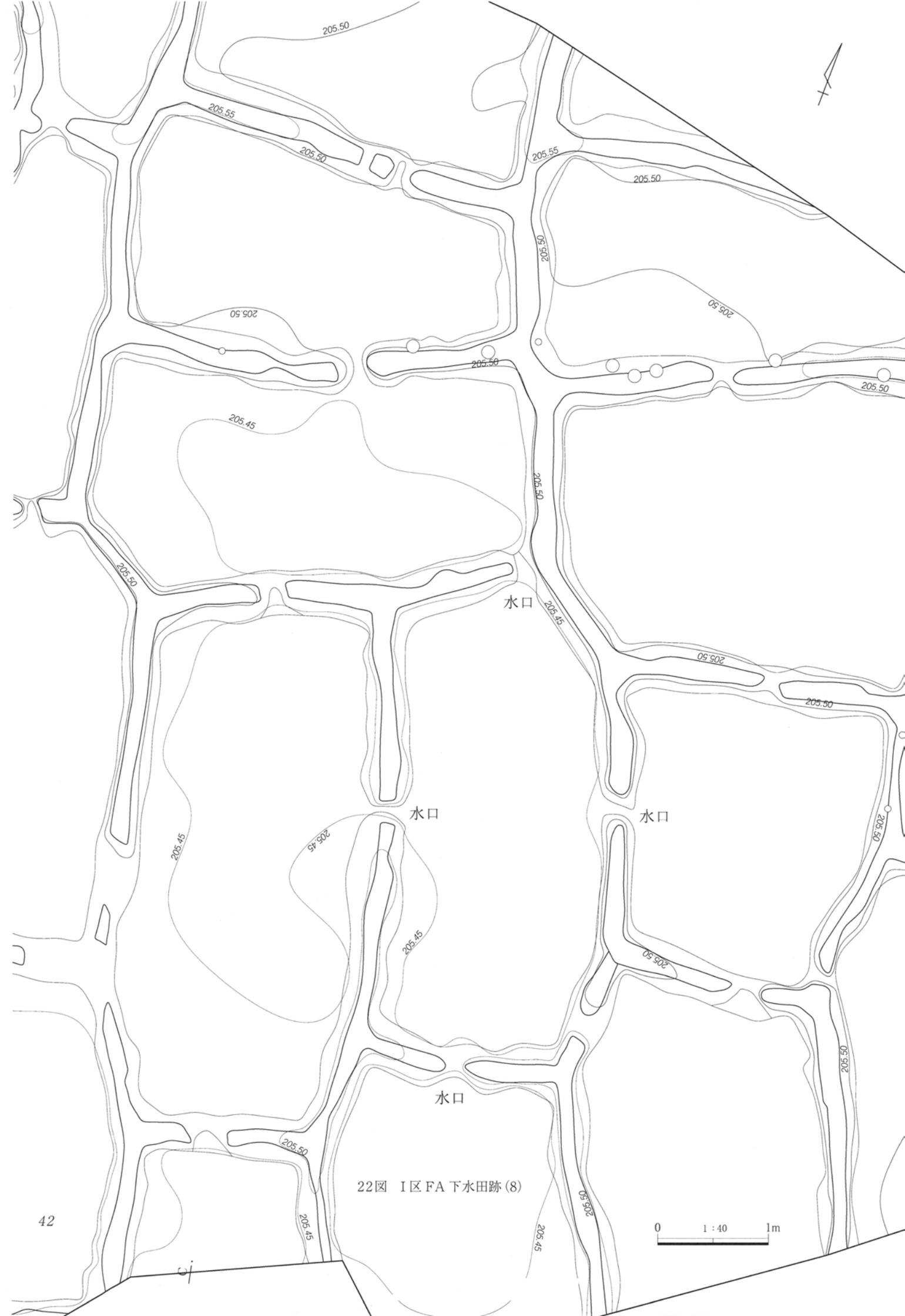
20 図 I区FA下水田跡(6)

0 1 : 40 1m



21図 I区FA下水田跡(7)

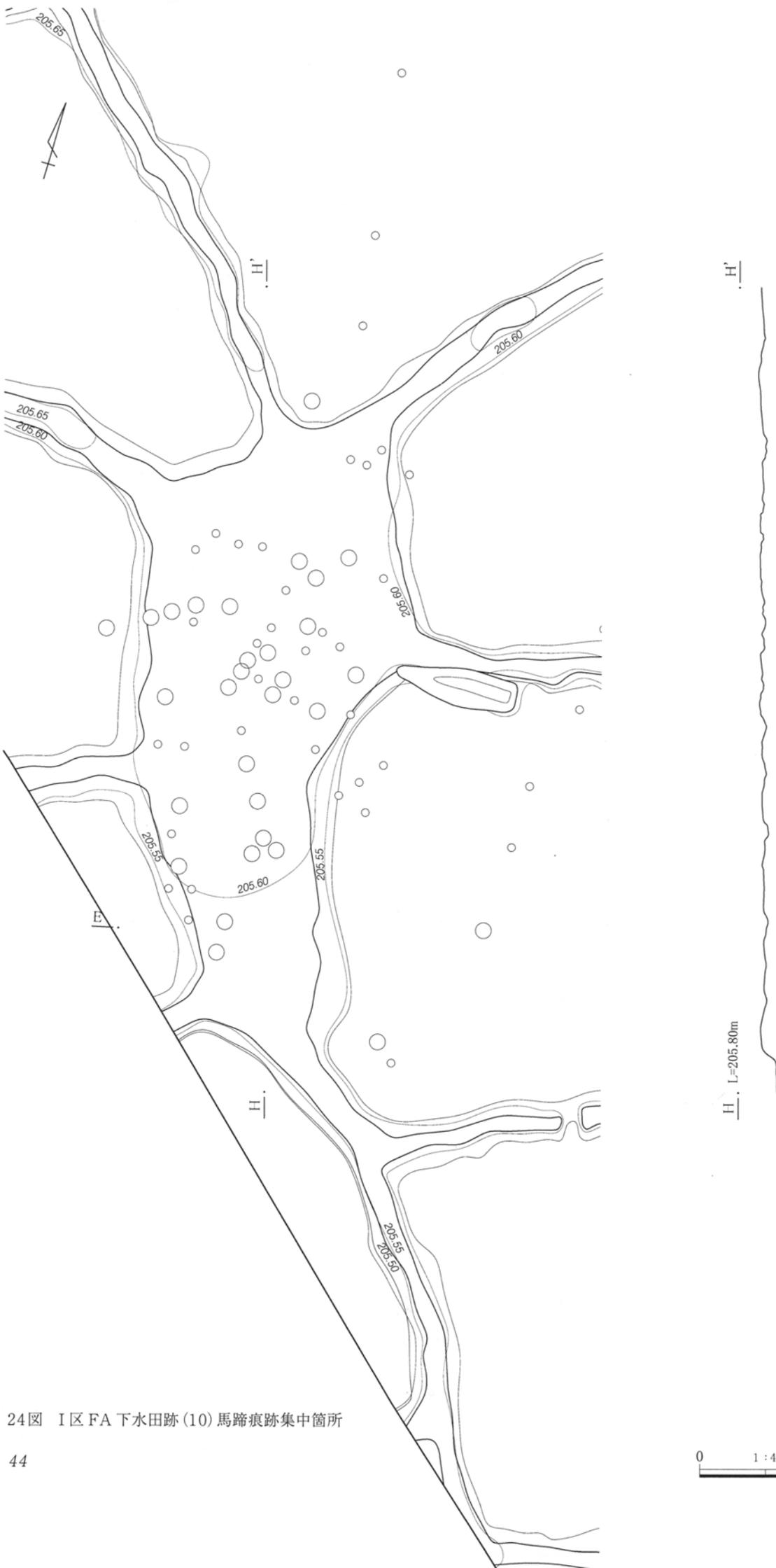




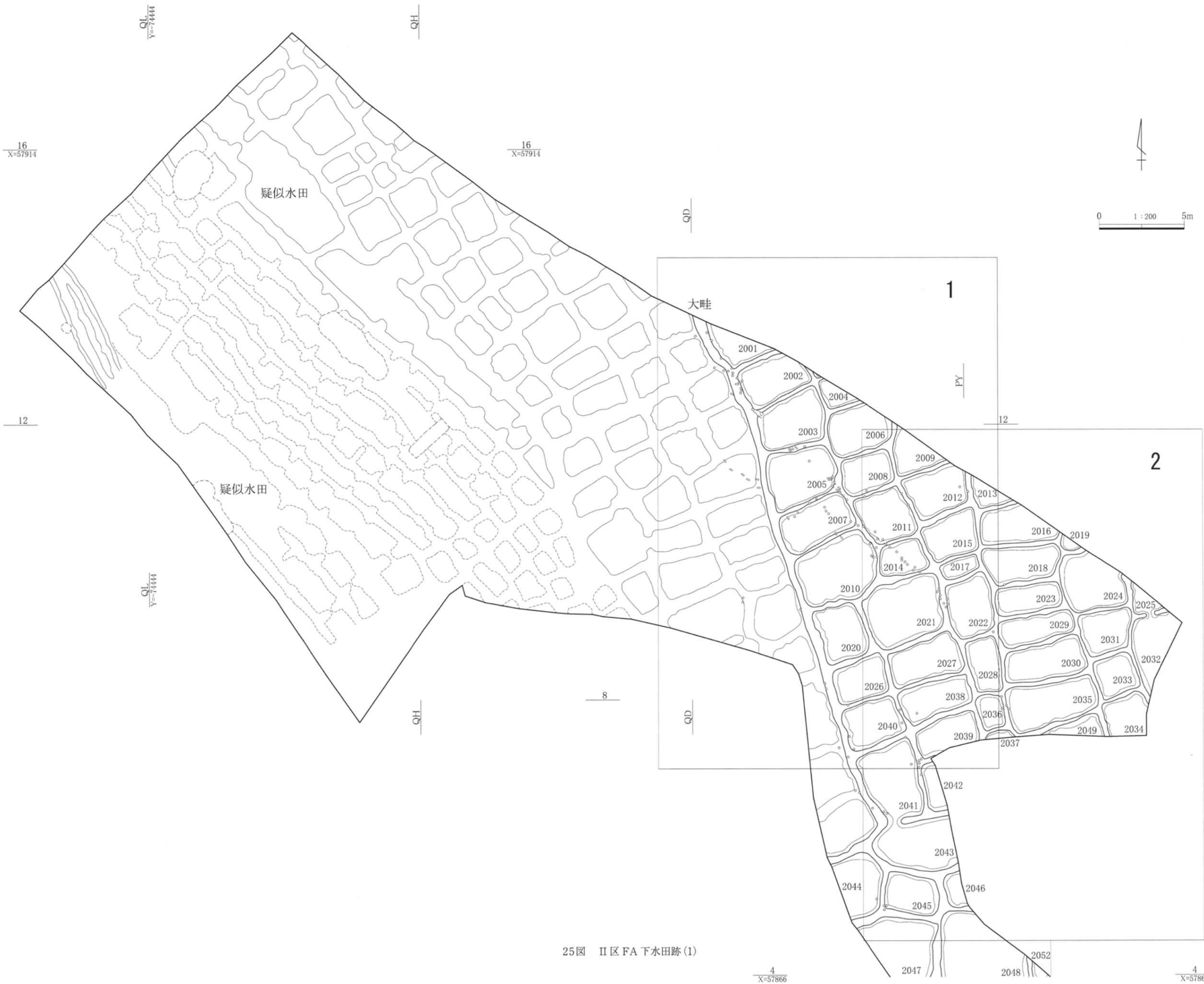
22図 I区FA下水田跡(8)



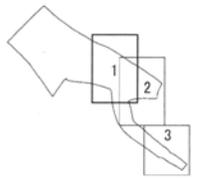
23図 I区FA下水田跡(9)



24図 I区FA下水田跡(10)馬蹄痕跡集中箇所



25図 II区FA下水田跡(1)



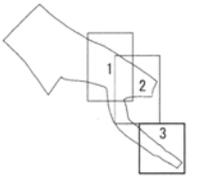
0 1 : 100 3m



27图 II区FA下水田跡(3)



28图 II区FA下水田跡(4)



0 1 : 100 3m



A. L=206.00m

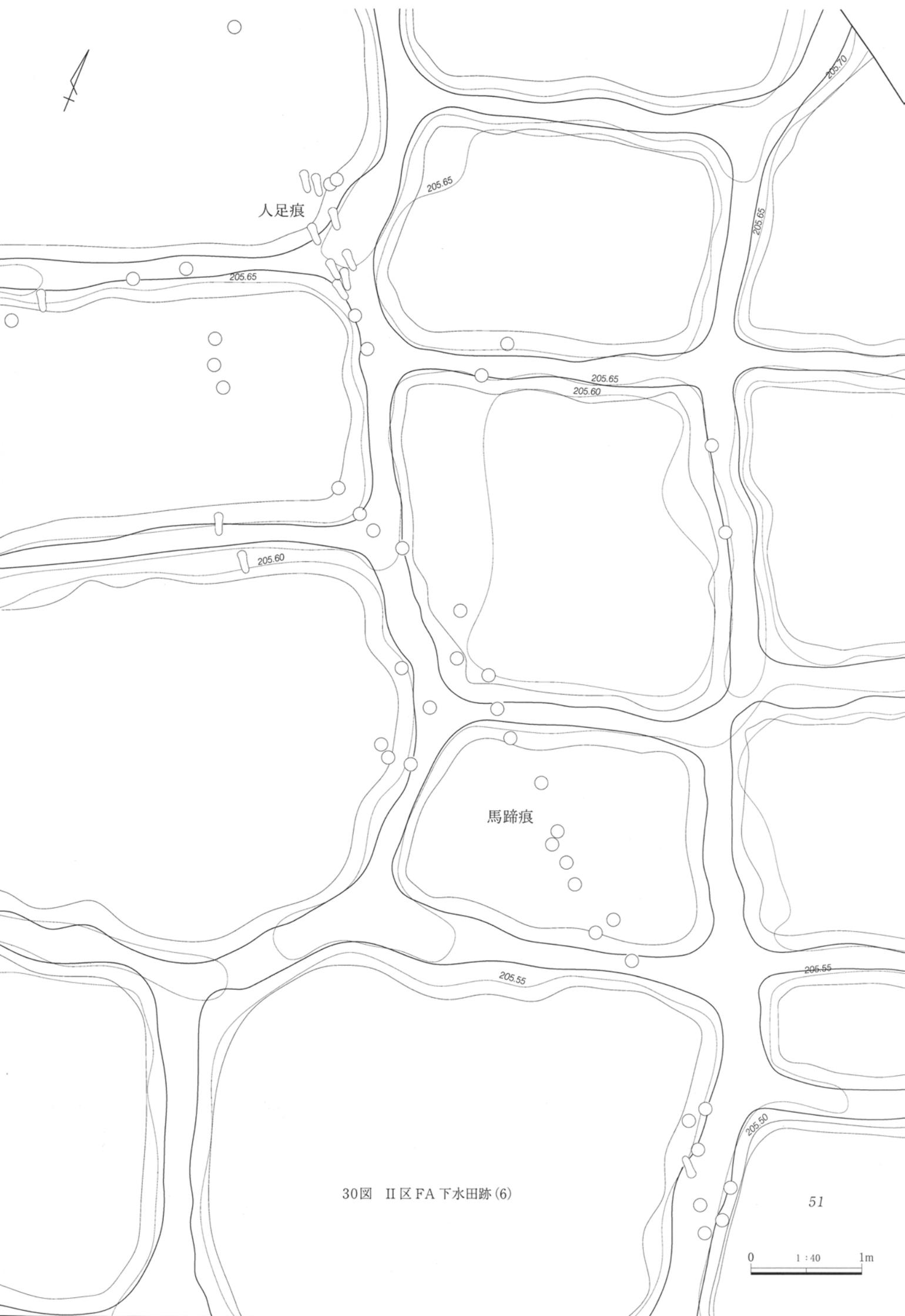
A'

B. L=206.00m

B'

0 1 : 100 3m

29图 II区FA下水田跡(5)谷部分



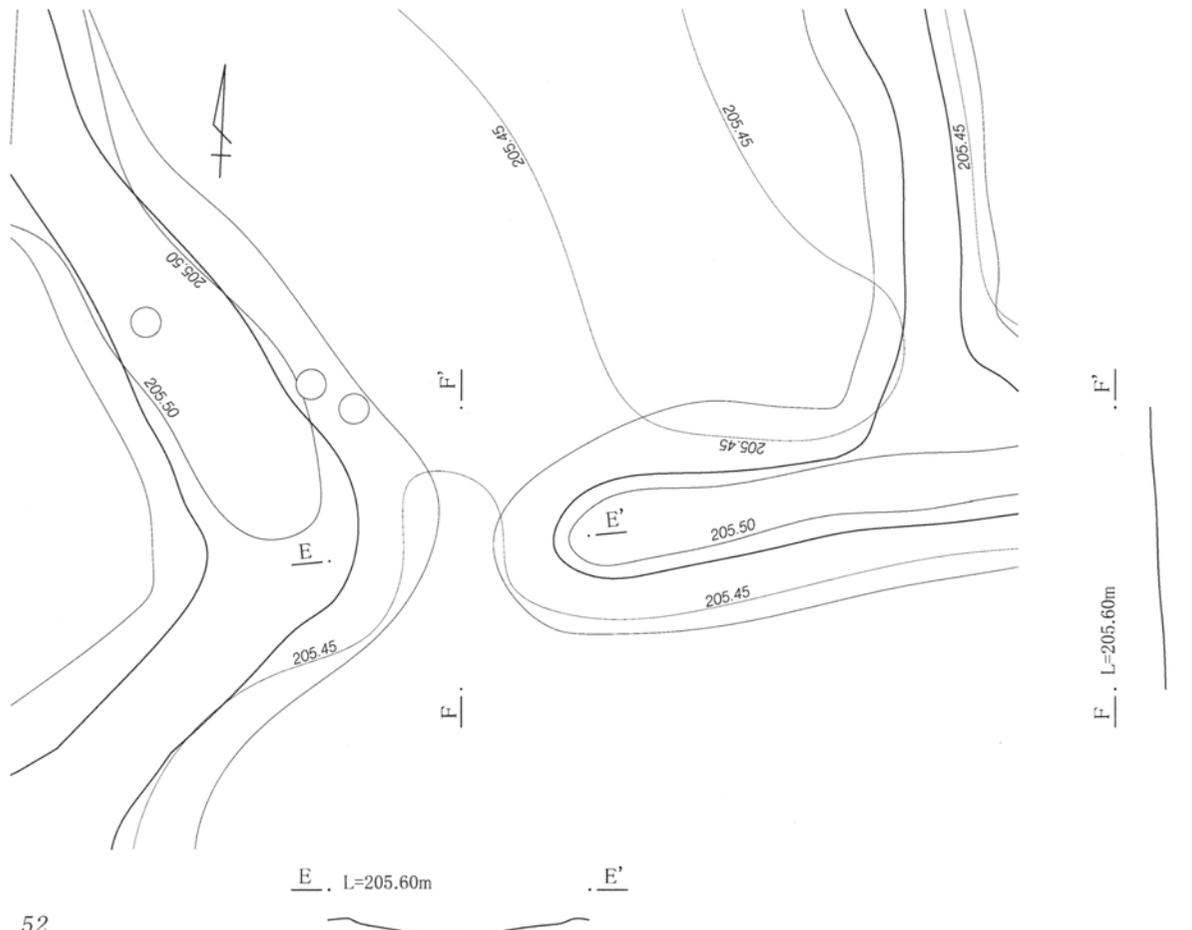
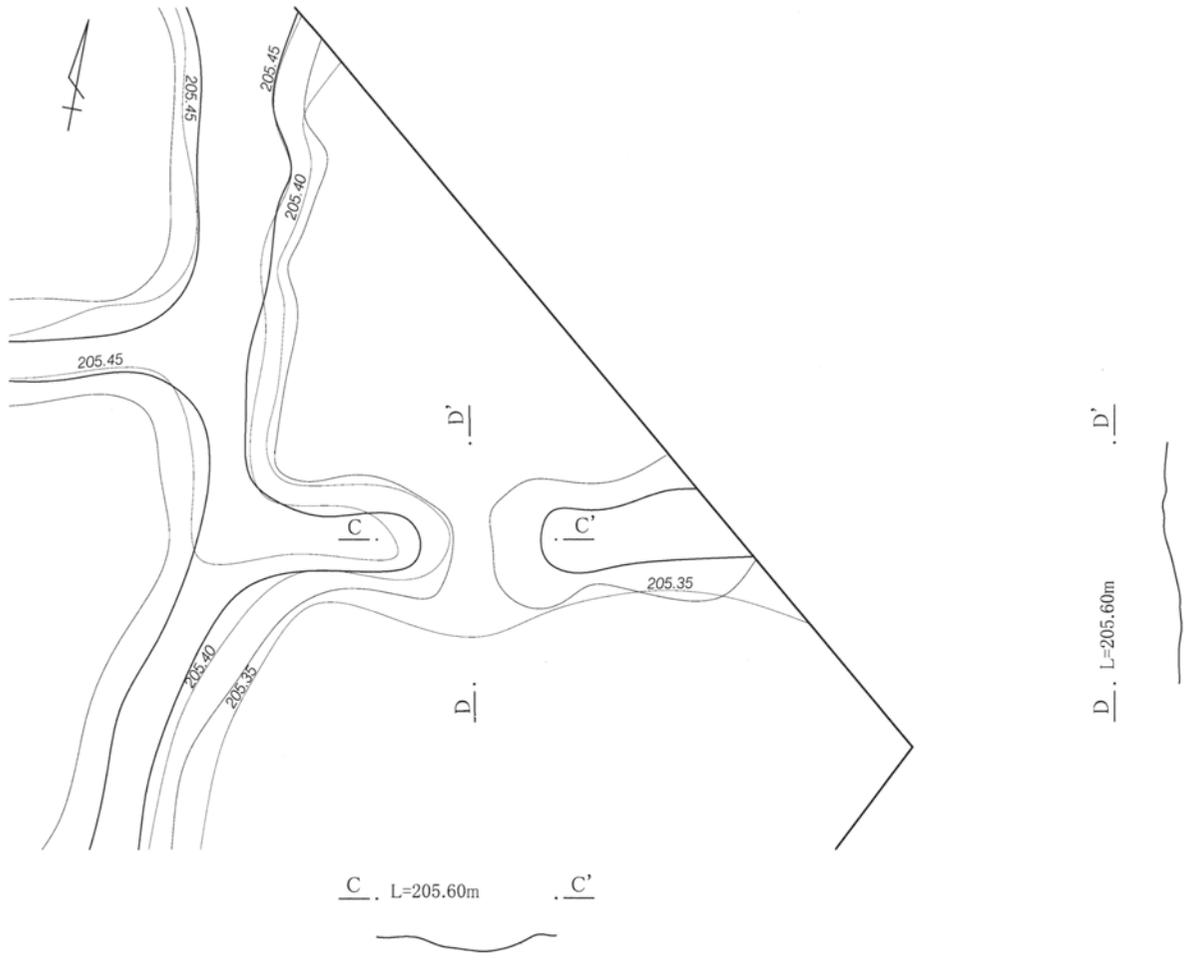
人足痕

馬蹄痕

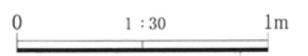
30図 II区FA下水田跡(6)

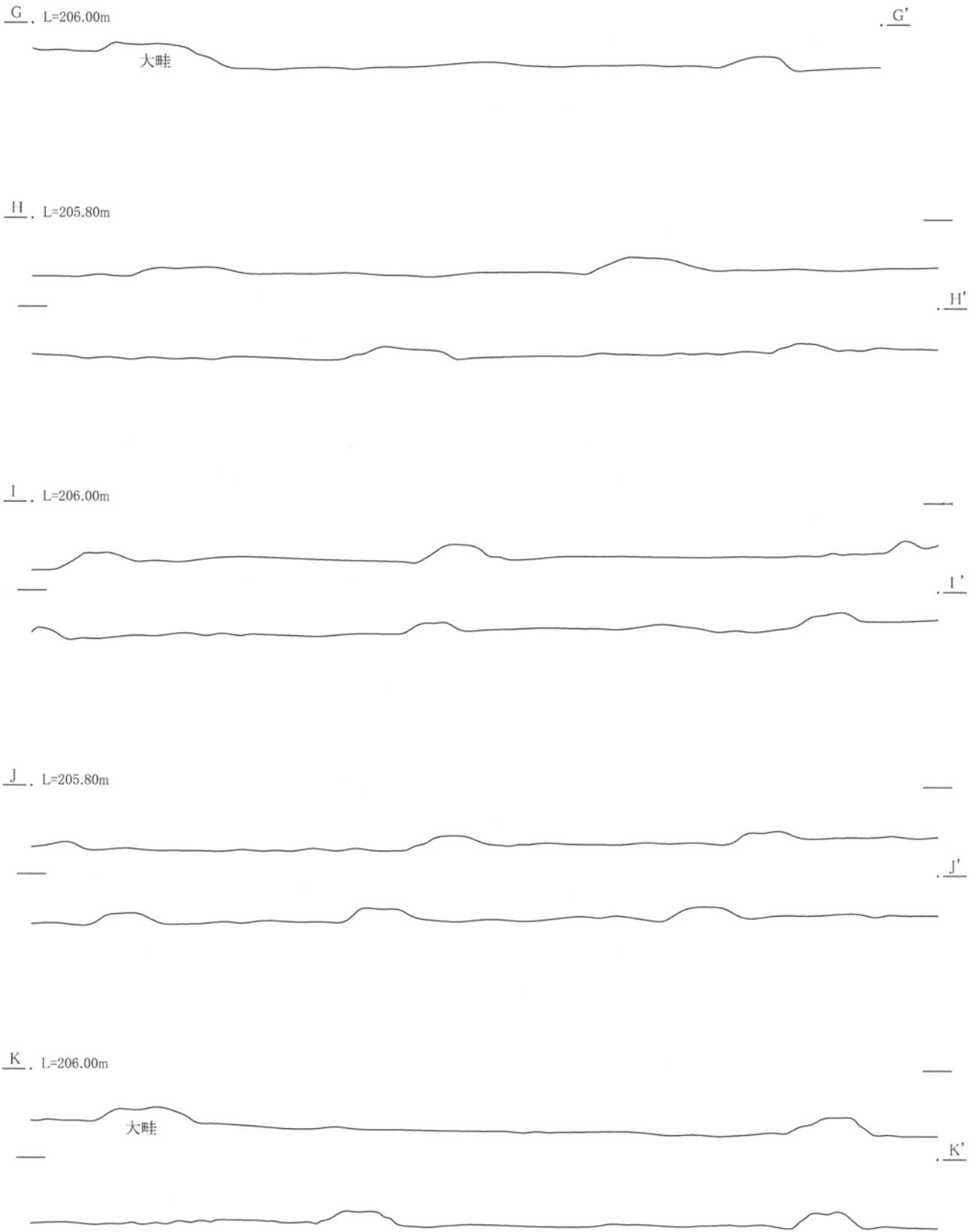
51





31图 II区FA下水田跡(7)(水口)





32图 II区FA下水田跡断面图

0 1:40 1m

4 Hr - FP 下で確認された水田跡

北牧大境遺跡で検出された遺構で最も遺存度の良好な資料である。おそらく今後、古墳時代の水田研究で参考にされるべき水田跡と期待している。著名な黒井峯遺跡と同時期(同時刻)に榛名山二ツ岳を給源とする降下軽石(Hr - FP)に埋没した、古墳時代後期の生活面・生産面であり、このFPを除去することによって当時の景観が復元できる調査である。

通常、水田跡の検出される遺跡地は、現在も水田地であったり沖積地である。調査区内からは湧水し、そのため相応の湧水対策を経て調査にあたり、畦畔を検出するのであるが、水分を多く含む土壌のため、その検出・確認は容易ではない。また、平野部の水田遺構は埋没土壌除去後の畦畔及び水田様相を把握する際に、微小な高さの畦畔を頼り水田区画を認定する調査例が多い。このように水田遺構の検出は、かなりの熟練を要するのである。

一方、本遺跡のFP下水田跡は本来は段丘上の地形であり、かつ少量の湧水があるとはいえ、渇水期の調査にあたったため、湧水対策が必要な湧出量ではなかった。さらに、1mを超えるFPのため、畦畔の残存も非常に良く、水田区画の認定は極めて容易であった。このように、良好な条件が重なり、本遺跡のFP下水田はI区及びII区全域で整然とした姿を見せたのである。調査はII区から着手し、バックホウによる大まかなFP除去後、人力によりFPを取り除いた。この際、刷毛による除去作業は行わず、移植ゴテと竹箆を主な掘削工具として使用した。これは、FP直下面の当時の地表様相の観察を果たすためであり、刷毛による精査を経るとその擦痕で多くの情報が失われるからである。

(全体観)

前述のように、本遺跡のHr - FP下水田跡は、非常に良好な状態でI区・II区全域で調査された。前節で述べたFA下水田跡と同様に、現地形に沿った北から南へ緩やかに傾斜する平坦地形に営まれた水田跡である。標高はI区北西部は205.90mでII区東の水田面で205.45mである。距離400m程で45cmの傾斜となる。また、これもFA下水田跡と同様であるが、I区で東に接する吹屋糶屋遺跡の西端部分ではFP下水田跡は検出されず、畑跡などが確認されている。南北に走る現道下で土地利用の変化があったようだ。

さて、本遺跡のFP下水田跡の特徴としては、水田耕作作業の一環である「田起こし」作業中-「耕起中」の水田面と「代掻き後」の水田が検出されたことにある。耕起中水田跡の多くが、「畦塗り」工程が認められ、水田面中央に土塊群がまとまる様相を示していた。

I区では、この耕起中水田跡が全面に検出された。極小区画水田を主とする水田区画様相だが、東側には短冊状水田区画が占め、中央部は極小区画水田が展開し、西側の畦を境にやや区画を大きくした小区画水田が見られる。

II区では、調査区中央を北西から南東へ走る大畦を境に水田面の様相を異にする。北側に耕起中水田跡、南側に代掻き後の水田跡が検出された。北側の耕起中水田はI区からの延長と捉え得るが、南側の代掻き後の水田は、他の水田跡より工程的に先んじている。大畦を境にした水田耕作の作業差を具体化した例であり、極めて良好な様相と見做すことができよう。

また、東側谷部分にいたる傾斜地では、縦畦が等高線に沿った走行を示し、短冊状区画や不整形区画水田が配され、東端の大畦に平行する溝に排水する水口も認められた。さらに、南東側には道状遺構が南北に見られ、当時の農道として位置付けられた。

(耕起中水田)

本遺跡のFP下水田跡の約3/4を占める水田面の様相である。田起こしー耕起作業途中の水田面である。この耕起作業においても、複数回の作業工程が窺われ、本遺跡の場合は荒起こし→畦作り(アゼ塗り)といった工程が多く見受けられた。この工程を示す区画は縦畦・横畦の両脇が凹み、区画中央に土塊が集まる形態を示していた。畦にも土塊を貼り付けた様相が見られることから、畦両脇の凹みは区画縁辺の土塊を畦に集めた作業によって生じたものと考えられる。区画中央の土塊群は、この後の工程である代掻き作業によって平坦になるのである。

土塊群を観察すると、概ね拳大の固まりが主であり、形状も球形で角の取れた形態が多い。あるいは区画規模も念頭におくと、水田区画内の耕起作業は、人力によるもので、「手ゴネ」作業と想起されよう。

縦畦に付せられた土塊を見るに、横畦と同時に土塊をあてているものの、僅かながら縦畦が高く作られている。縦畦の優位性が反映したものであろう。あるいは縦畦は昨年の既存の畦を補修する程度で、横畦は新規に設定された可能性もある。

水田区画の四隅に注意を払うと、水田面より高く耕土が残る区画がある。畦塗り時に残してしまったものと思われるが、この残土は代掻き時に平坦にされ、後述する代掻き後の水田面となるのであろう。

また、区画中央の土塊群の範囲を概観すると、II区においては、北西の区画では土塊群が畦に近接するに対し、南東の低標高部の区画は土塊群の範囲がやや狭い。おそらく、南東の水田区画群では、代掻き作業に着手していたのではないかと考えられよう。II区より若干標高の高いI区では、土塊群はほぼ一定の範囲に集まることから、I区においては代掻き着手にまでは至っていないようだ。さらに、I区東側に見られる短冊状区画水田も、畦塗り工程に至っており、横畦設定は計画されていない様相を示す。

この耕起中水田においても水口は設けられており、既に用水は掛け流されているようだ。ただ、区



耕起中水田(II区)区画中央が土塊群



耕起中水田(II区)土塊を畦畔に貼付ける畦塗りの様相



耕起中水田(I区)畦塗りにより、畦畔両脇が凹む

III 遺構と遺物

画内で在る程度滞水させた状態で、耕土を軟質にする目的の取水行為と考えられよう。

(代掻き後水田)

II区大畦南側で検出された水田跡である。おそらく、田植前の姿と想定したい。縦畦は大畦に沿い、横畦が規則性を意識して設けられている。大畦から調査区南西側の段丘崖線までは約15mを測り、やや幅狭の大区画が予想される。また、南西端をかくする畦畔は比較的小規模で、地形による区画が優先されたものと考えた。

代掻き後水田には、耕起中水田に認められた土塊は殆ど見られず、水田面は平坦面が構築される。先に述べた、区画四隅の残土も丁寧に平坦化され、区画内に整然とした代掻き作業が及んだ行為が想起された。

水口も丁寧な作りで開けられ、円滑な給排水機能が働いたようだ。余談だが、調査中に何回かの降雨に見舞われたが、耕起中水田は一様に滞水したのに対し、代掻き後水田は水が溜ることなく調査区域外に排されていったのである。

さらに畦畔を観察すると、耕起中水田に比して全体に丸みを帯び、かなりの量の水の影響が窺える。あるいはFP降下時には水が流れていた可能性もある。これは、代掻き後の水田面に付着するFPがめり込んでおらず、水の影響で比較的低速でFPが着底したものと観察できた。

代掻き後水田は、耕起中水田に比して低標高域で検出された。また、耕起中水田も低位部分で代掻き着手の痕跡が認められたことから、本遺跡周辺の水田耕作工程においては、代掻き作業は低標高地を優先して行われた可能性が高い。これは、給排水工程をより利便よく利用するためであり、掛け流し回数を少なくしつつ効率よく代掻き作業が行われたものと考えられる。

(区画形状・規模)

前節で報告したHr-FA水田跡は不定形の小区画水田を基調としていた。一方、Hr-FP下水田跡は、軸長約1~3m程の整然とした方形からなる



耕起中水田(II区)中央土塊群の一例



代掻き後水田(II区)中央土塊群は殆ど無い



代掻き後水田(II区)畦畔も丸みを帯びる

「極小区画水田」で構成されている。小規模な区画としては、I区1061 (1.12×1.51) や1063 (1.17×1.20)、II区2057 (0.98×1.24)・2060 (0.92×1.32)・2152 (0.98×1.22)・2155 (0.93×1.30) と1m前後のものも見られる。やや大規模のものもあるが、I区1027 (2.78×2.60)・1029 (3.08×2.50)、II区2024 (4.01×2.29)・2033 (2.82×4.70)・2034 (2.00×3.40)が見られる程度である。形状も四隅が直角に近く、辺長の差も少ない正方形に近い文字どおり「田」字状の区画が連なる。

縦長方形区画もI区・II区とも大畦近辺に認められる(例、1073・1080、2173・2174・2198～2200)。横長方形区画(2241・2242)も縦長方形下位に設けられており、大畦に近接することによる区画規模の調整が行われたと考えられる。

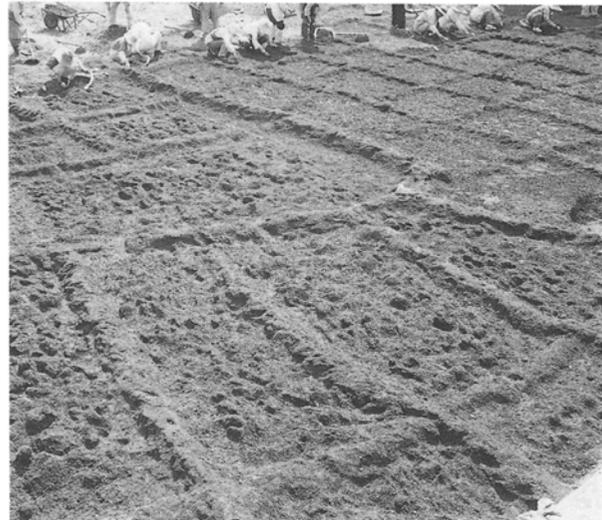
このように整った方形区画水田の連続であっても、その規模の差に多様性が見られる。これは、区画設定-縦畦設定が西から東へ、横畦設定は標高上位から下位へ設けられていったのではないか。それ故、最後の区画に不都合が多々生じ、長方形区画が充てられたのではないかと考える。

I区東側、II区東谷部分にかけて短冊状区画が見られる。特にI区の短冊状区画は1246のように15mを超えて横畦が設けられておらず、10cm近い比高差が1枚の水田区画に生じていることになる。横畦が無いと、区画内の滞水が図られないことから、短冊状区画は小区画水田製作途中の水田と位置付けることも可能だが、本遺跡の短冊状区画をみるに、既に縦畦を畦塗りしており、また他の水田区画には給水していることから、あるいは短冊状区画のみで区画水田として機能させたのかもしれない。また、II区の短冊状区画にあるように地形変換点や排水箇所に近い地点に設定されており、排水機能を主とした区画としても考えておきたい。

次に、整然とした極小区画水田にあって、不整形区画水田が各所に見られる。1094・2021・2375が顕著な例であるが、いずれも大畦に接する区画である。2021は大畦の屈曲に影響されたものと捉



II区遠景 極小区画水田の連続様相



長方形区間(II区)畦塗り途中と思われる



短冊状区間(I区)縦畦には畦塗りを施している

III 遺構と遺物

えられ、2375も排水機能を持つ大畦のため、区画調整が行われたものと考えられる。しかしながら1094は、北側に連なる方形区画から一変し不整形区画へと変化させている。さらに、1094及び下位区画の1095A・B、1096A・Bは畦塗り作業が極一部にしか認められず、横畦も耕起土塊に埋もれた状態である。この区域だけ工程に遅れが見られることから、不整形区画と併せて意図的な作業の遅れと見たい。また、これは水利上の問題あるいは下位水田跡であるFA下水田跡の大区画(13図No.1031)水田に影響されたものか検討を要する。

(大畦)

大畦は3条を検出した。I区は西側で南北に走行を見る1条がある。これは、FA下水田跡で確認された大畦と位置・走行とも一致し前代からの水田施設を継続したものと捉えられる。II区は北西方向から南東方向へ、他を圧倒する規模を誇る主幹ともいふべき大畦を検出した。さらに、この主幹大畦に南の調査区域外で繋がる大畦を東側谷部分で検出している。

I区大畦は、調査区西側をほぼ南北に走る直線的な大規模な畦で、下端は幅約60cm、高さは約20cmを測る。先に調査したFA下水田跡の大畦と重なる。これは、FA降下後、他の小畦畔は埋没し痕跡も不明ながら、この大畦は微小な高まりを以て存在が明らかであり、且つ給排水さらには全体の大区画設定の際に極めて重要な位置にある畦のため、FA降下後も大畦として復旧されたものと考えられる。

また、I区大畦を境に区画規模の差が歴然とする。西側はやや大型で整然とした方形を呈するに対し、東側は小型で、不整形区画も接する。これは区画形状でも述べたように、縦畦設定の際の微調整によるものと考えている。

I区大畦南側は調査区域外に消えるが、おそらくII区東谷部分の大畦に延長するものと思われる。

II区大畦(主幹大畦)はFA下水田跡では見られず、FA降下後に新たに設けられた、いわば耕地拡



II区西の不整形区画 大畦の湾曲も示唆的である



I区西の不整形区画 耕起初期か、縦畦も埋もれた状態



I区西の大畦 下は不整形区画

大時に新設定された大畦である。I 区大畦と対比的に走行を北西から南西に向け、僅かに屈曲気味に蛇行する。強く屈曲する箇所が調査区西側に認められ、中央やや南側は緩やかな蛇行である。また、この屈曲部から畦規模も大きくなる傾向があり、下端幅80cm、高さ30cm と比類無き規模を誇る。

このように、本大畦は入念なしっかりした作りであり、調査範囲内では大畦に穿たれた水口は見られず、南北を隔絶する境界畦と捉えられた。これは、水田耕作の工程上にもみられ、この大畦北側が耕起中水田、南側が代掻き後水田であることを加味すれば、当時の水田大区画意識の一端を窺うことができよう。

II 区主幹大畦は調査区東側で一旦区域外に消えるが、東側谷部分で検出された大畦に繋がるものと予想される。

II 区東側谷部分で検出された大畦は、南西から北東へと緩やかな彎曲した走行を見せ、水口を設ける。水口下位には溝が設けられており、谷へと続く。地形変換点、水田区域端部に設けられた大畦であるが、例えば主幹大畦との規模差はあり、やや貧弱な印象を得る。下端幅約50cm、高さ約15cm である。水口は東側に接する溝に向かって2箇所設けられ、さらに南側へ接する不定形な水田区画に1箇所開けられている。

各大畦土層であるが、29図と49図にあるように、他の小畦との土層差は大きくない。FA を基調としており、その下位層の黒褐色粘質土を構築材とはしていない。また、芯材として自然木や木器などは加えられておらず、II 区主幹大畦下より出土した大型自然石にしても、FA 降下時に吾妻川から巻き上げられた河原石の可能性もあり、その区別は判断できなかった。

(小畦畔)

FP 下水田跡も縦畦と横畦で構成される。大畦による地形分割後縦畦による再分割がなされ、縦畦間を横畦が繋ぐことにより、方形を基調とした水田区画が形成される。本遺跡のFP 下水田跡も同様であ



II 区主幹大畦(左端)縦畦との規模差は歴然としている



主幹大畦断ち割り調査 自然石の集中が見られたが芯材ではない



II 区東の大畦 溝が沿う例。左端は道状遺構

III 遺構と遺物

るが、前にも述べたように、本遺跡のFP下水田跡は、大別して耕起中の水田跡と代掻き後の水田跡という2種類の耕作工程が看取されている。耕起中水田区画を画する畦は土塊が付されており、凹凸のある様相であるが、代掻き後の畦畔は、給排水の影響から、丸みを帯びた穏やかな印象を得る。

また、これもFA水田跡の節で述べたが、縦畦の優位性はFP下水田でも踏襲されており、縦畦が数cm高く盛り上げられている傾向がある。さらに、縦畦は給排水効果を誘導する役目でもあり、地形に沿った設定が意識されている。特に東側谷部分に至る傾斜地では等高線に沿った縦畦の設定方法であり、効率の良い水回しを目的とされていたものである。

横畦は、水口が設けられ上位の水を下位へ誘導する施設である。当然水口を塞げば区画内は滞水し、稲の生育を助けることになる。また、傾斜地水田は水田面を平坦にし区画内に滞水するためには、横畦を効率よく設けなければならない。その意味で、平坦地形とはいえ段丘上の緩傾斜地形に営まれた本遺跡の水田跡にはより効果的な横畦が必要となってくる。極小区画水田という形態もこのような利便性から採用された水田形態なのであろう。

(水口)

水口を設けない水田区画として、I区1035・1076・1077など数区画が挙げられるが、大多数の区画に水口が設けられる。なぜ、水口が設けられないのかは不明だが、滞水した状態での作業を要していた場合等が考えられ、何れにしても特殊な状況下におかれた区画と考えられよう。

代掻き後水田としたII区南側は、分岐排水する2055と2126のみ2箇所に見られるが、全ての区画に1個ずつ設けられる。水口の設けられる箇所は、横畦中位が基準的な位置であるが、縦畦に偏った場所に開ける例が見られる。これは大畦に接した区画に顕著である。さらに交互に縦畦に接して設ける例が大畦から数えて4列目に見ることができる。

また、代掻き後水田の水口下位には排水時の浅い



耕起中水田横畦に水口が設けられた例(II区)



縦畦の優位性(II区)地形に沿い、横畦より高く作られる



代掻き後水田区間の水口(II区)連続性に富む様相

穴が観察されることが多い。頻繁な用水の掛け流しが行われていたものと思われる。水口断面形を観察するに、上位から下位へ緩やかな傾斜で水を流していたものと捉えられた。

一方、耕起中水田区画の水口は、未完成のものが多く、水口中位が僅かながらも高く、スムーズな水の流れは保証できない形態である。これは、畦畔を完覆する程の取水後、ある程度区画内に滞水させる意図をもった水口設定方法と考えた。すなわち、耕起中水田区画の水口は仮設定の水口である可能性があり、水の掛け流しや代掻き時の水田面の状態を勘案して新たに水口を設ける場合もあることを踏まえておきたい。これは、隣合う斜め下位の区画に水を流す行為 - 区画隅に水口を設けた例(2242・2255・2280)等も影響し、これら区画隅の水口も仮設定の水口と捉えておきたい。

(人足痕・馬蹄痕)

FA 下水田跡に顕著であった馬蹄痕や人足痕であるが、FP 下水田跡では馬蹄痕跡は見られなかった。人足痕は、II 区南西側の代掻き後の水田面上に確認することができた。代掻き後水田の南西側から西側にかけて比較的広い範囲で確認されたが、歩行の方向や人数など詳細は判然とせず、人間の行動を復元するにはいたらなかった。ただ、全体的な動きは縦畦に沿った南東から北西方向を目指した動きが取られた。

耕起中水田における人足痕も注意深く抽出に努めたが、耕起による土塊の凹凸によって確認には至らなかった。水田面が平坦面ではないかぎり、足跡痕跡の検出は困難なようだ。また、馬蹄痕が確認されなかった事象を考えると、耕起作業や代掻き作業においては馬を使用しなかったものと考えている。FA 下水田跡においても荷運び程度の利用であり、実際の耕作に伴う牛馬の使用は、本遺跡の場合、FP 降下時では採用されていないものと考えている。一方、周辺の台地には例えば東接する吹屋糶屋遺跡の畝跡には馬蹄痕が確認されており、水田跡のすぐ近くにまでは馬が存在していたのは確実である。



代掻き後水田区間の水口(II区)丸みを帯びた仕上げである



耕起中水田区間の水口(I区)凹凸が多く比高差も不統一である



耕起中水田区間の水口(II区)区間隅に設けられた例。一時的な設定か?

III 遺構と遺物

(流砂痕) 52図

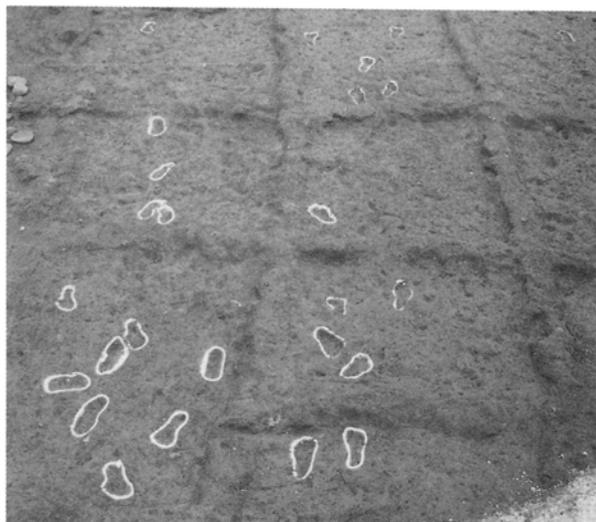
II区代掻き後水田西端で確認された。区画No. 2001～2008にかけて顕著に見られ、2014～2018・2030にまで達している状態である。流砂は黄褐色～白黄色を呈しており、堆積の厚い箇所でも1cm前後で全般に数mmの薄い堆積であった。この流砂痕は耕起中水田には認められず、かなりの水量を保たなければ流入しないものと思われる。代掻き後の水田での流砂痕の様相は、北西から南東へ水の流れと共に砂が流れ込んだ状態を示しており、この流砂痕の存在から、FP降下直前まで水が流れていた可能性が高く、さらに流砂痕の北西側には砂を供給する施設—即ち取水用の溝あるいは河川の存在が想定される。残念ながらII区西側の調査区は大きく攪乱を受けており、溝の痕跡も認められなかったが、おそらく調査区北西側には取水用施設が存在していたものと指摘したい。

(耕作土)

さて、FP下水田跡の耕作土であるが、当地域の全面を覆うFAを耕作土としている。ただ、FA降下後数十年が経過しているため、土壌変化がある程度は進み、FA上面は暗褐色～褐色、地点によっては黒褐色を呈している。土壌変化の要因の一つに、FAとして荒れ地と化した休閑地を畑・放牧地として利用し、植物の生育を助長させていたものと考えられる。ただし、火山灰土壌であるFAそのものは、栽培植物の成長には有効ではなく、特に畑作物には不適ともいえる土壌であったようだ。水田作物である「イネ」に関しては、土壌の有機性は重要な生育要素だが、不適土壌においても、水稲栽培における、養分を含む水を取水することによって、「イネ」の生育はなし得たものと考えられる。

(東側谷部分)

II区東には水田跡東端の大畦と溝、及び南北に走る道状遺構が確認された。道状遺構は、幅約30cm、深さ約10cmを測り、南から北へ向い大畦東の溝手前で途切れる。形態としては1条の浅い溝



代掻き後水田上の人足痕(II区)東西方向の動きが類推される



代掻き後水田に見られる流砂痕(II区)



小畦畔断ち割り(I区)変色したFAを耕土とする

状に近いが、中央底面が硬く締り、人足痕は見られないが、明らかに人が頻繁に往来した痕跡と見られる。農作業に伴う南から北への導線と考えたい。

ローム上及びFA 下で確認された土手状の高まりは残存しており、水田跡東端の急斜面と併せて狭い谷状の地形を呈す。北から南への急傾斜を呈しており、自然地形と判断したが、FA 下水田跡と同様に下位段丘面への水田用水給水施設となっているようだ。

(耕作痕)

FP 下水田跡の耕作土はHr - FA で占められている。上層は暗褐色～褐色を示すため、耕作痕の調査は畦畔を全て取り除き、黄灰色を呈すFA 堆積層の中位で耕作痕の検出に努めた。その結果、僅かな攪拌痕跡や微小な工具痕様の痕跡を見たが、規則性も無く、積極的に耕作痕として認定できなかった。あるいは、工具は使われずに、「手ゴネ」による耕作作業が主とされていたのかもしれない。

耕作痕は見いだせなかったが、FA 中位層の調査では、II 区主幹大畦に沿う2条の浅い溝を検出した。確認層位の差で北西部分は1条のみだが、底面痕跡も見られたことから、2条の溝が存在していたと思われる。この溝は、主幹大畦形成時の溝であり、FA 土塊を継続的に大畦に寄せた結果溝状になったと考えられる。2条の存在は、2回にわたる大畦補修とも捉えられる。

また、II 区南の段丘崖上には、極めて浅い溝が検出された。特に崖線に沿った走行であり、畦寄せの溝とも考えたが、底面が僅かに硬く、道状遺構の痕跡とも考えられる。FA 降下後の水田開発にともなう頻繁な往来を想定している。

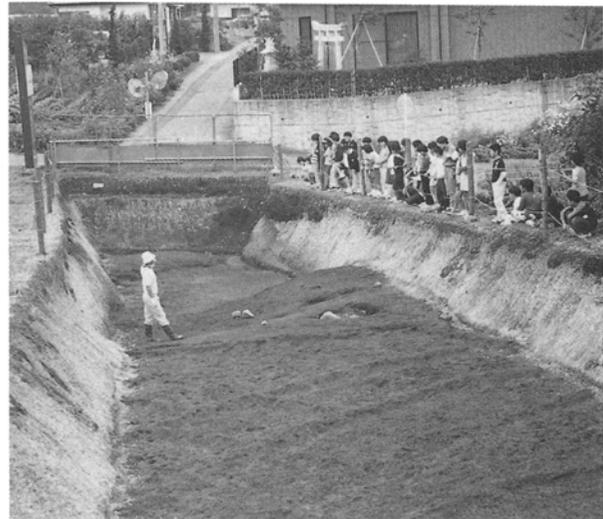
東谷部分でも浅い溝が2条検出された。図化したのが、掘り込みも不安定であり地形的な要件を勘案すると自然営力によるものと考えた。

(Hr - FP 下水田跡小結)

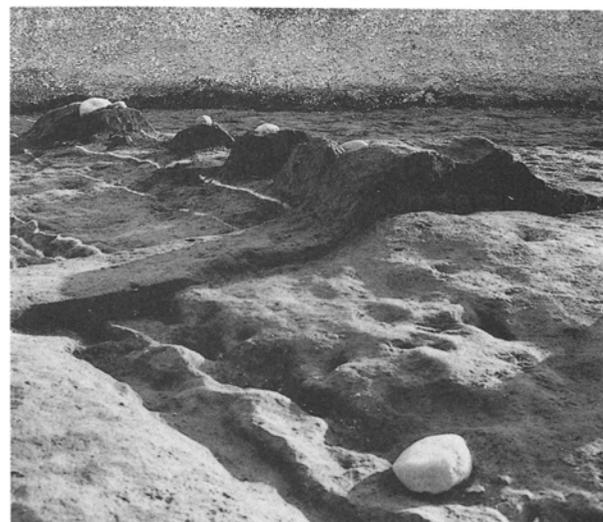
以上のように、本遺跡で検出されたHr - FP 下水田跡は、6世紀中葉段階の水田跡としては、極め



II 区東側の谷状地形



II 区東側の谷状地形 長尾小児童の見学風景
手前水田部と谷部との比高差は1m 以上ある



II 区主幹大畦の断ち割り (FA 上) 手前の2条の溝が平行する

III 遺構と遺物

て良好な状態で検出された水田跡であり、その様相は県内の水田遺構の中でも屈指の景観を見せる。耕起中水田と代掻き後の水田が大畦を挟み同時に看取された例は極めて貴重であり、当時の水田耕作工程を窺い得る水田跡である。

本遺跡のFP下水田跡から捉えられた、当時の工程を概観してみよう。

季節は初夏である。田植の時期と重ねても5～6月と見ても良いだろう。I区東側では、縦畦の設定が終り、畦塗りもほぼ完了している。この後横畦を設定する区画とそのまま短冊状で残す区画と別れるが、横畦は北から南へ順次設けていく傾向が見られる。

I区中央は横畦の畦塗りまでが終了している。この後徐々に代掻き作業に移行するものと考えられる。整然とした極小区画であるが、西の大畦付近になると縦畦の設定の調整からか、さらに幅狭の区画が見られる。これは南側の不整形区画水田に影響されるものか。この不整形区画水田だけは畦塗りに至っておらず、特別な意図をもったエリアと考えられる。

I区大畦の西側はII区東側と同じ大区画内にある。すなわちII区を南北に分割する主幹大畦とI区西大畦に画された大区画である。この区画内も耕起中水田で占められる。しかしながら、I区東側の耕起中水田とやや様相を異にしており、標高下位部分(南東側)より代掻き作業への準備に移行しているようだ。すなわち区画中位の土塊が少なく、各所に区画隅に設けられた水口は水回しを意識した所産と捉えられよう。ただ、標高上位-北西側の区画を見ると、未だ畦塗りは未発達で土塊の範囲も広い。標高下位部分から代掻き作業に入るため、若干の作業の遅れが認められる。

II区の主幹大畦より南側は代掻き後水田である。耕起中水田と違い、畦畔も丸みを帯び水田面も平坦である。穏やかな景観である。極小区画水田のほぼ完成形といえよう。水口は丁寧に開けられ、水の流れは淀みなく下位へと誘われたものである。水田面に残るFPの観察で貫入度が少ないことから、FP降下時には水が流れていた可能性を指摘した。これは西端の流砂痕でも確証している。また、流砂痕の存在は北西に近接して取水用の水路あるいは川の存在を想定した。代掻き後水田には人足痕が見られた。歩行の方向性等は明瞭ではないが、東から西へという動態は窺うことができた。代掻き終了後の当時の農民の動きを示しているのであろうか。





208.8

207.5

208.4

201.3

207.0

207.5

菅町ヶ坪

207.3

65-66

33図 FP下水田跡全体図

207.3

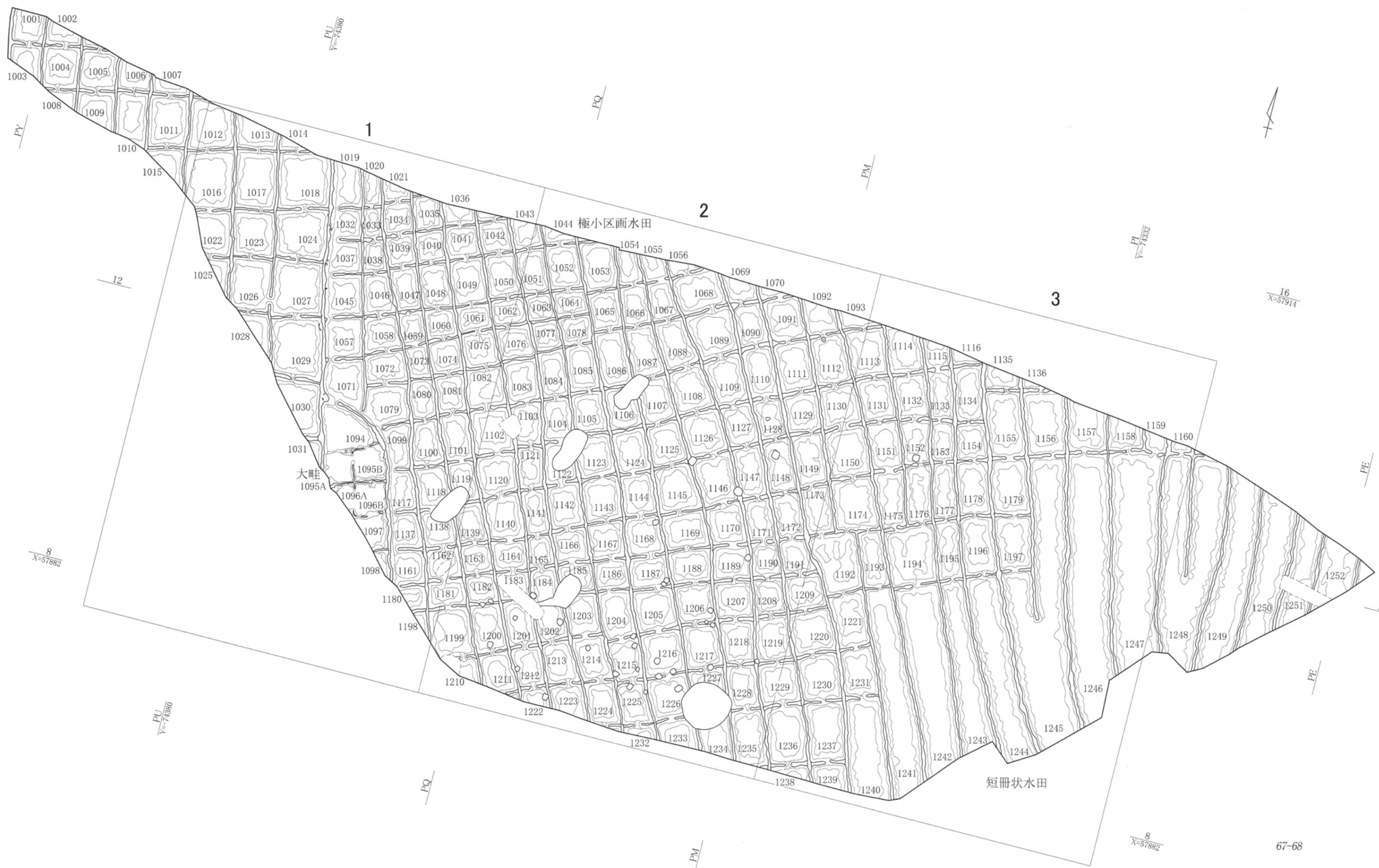
0 1:500 15m

201.9

16
X=57914

PY

PU
Y=74380



16
X=57914

8
X=57882

PU
Y=74380

8
X=57882

67-68



34図 I区FP下水田跡(1)耕起中水田

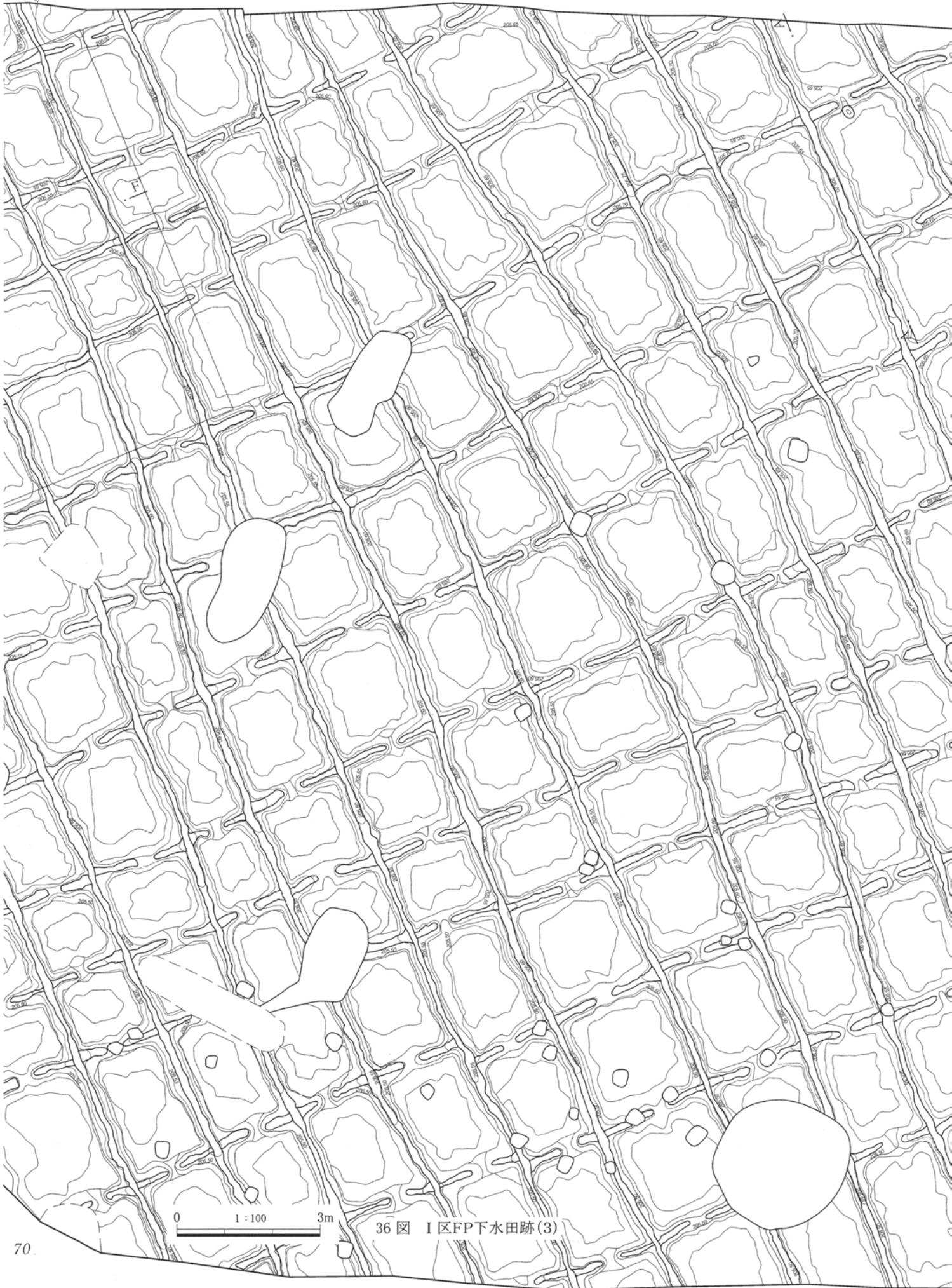
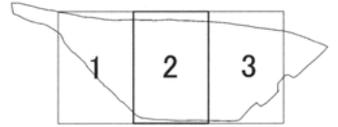
PI
Y=74332



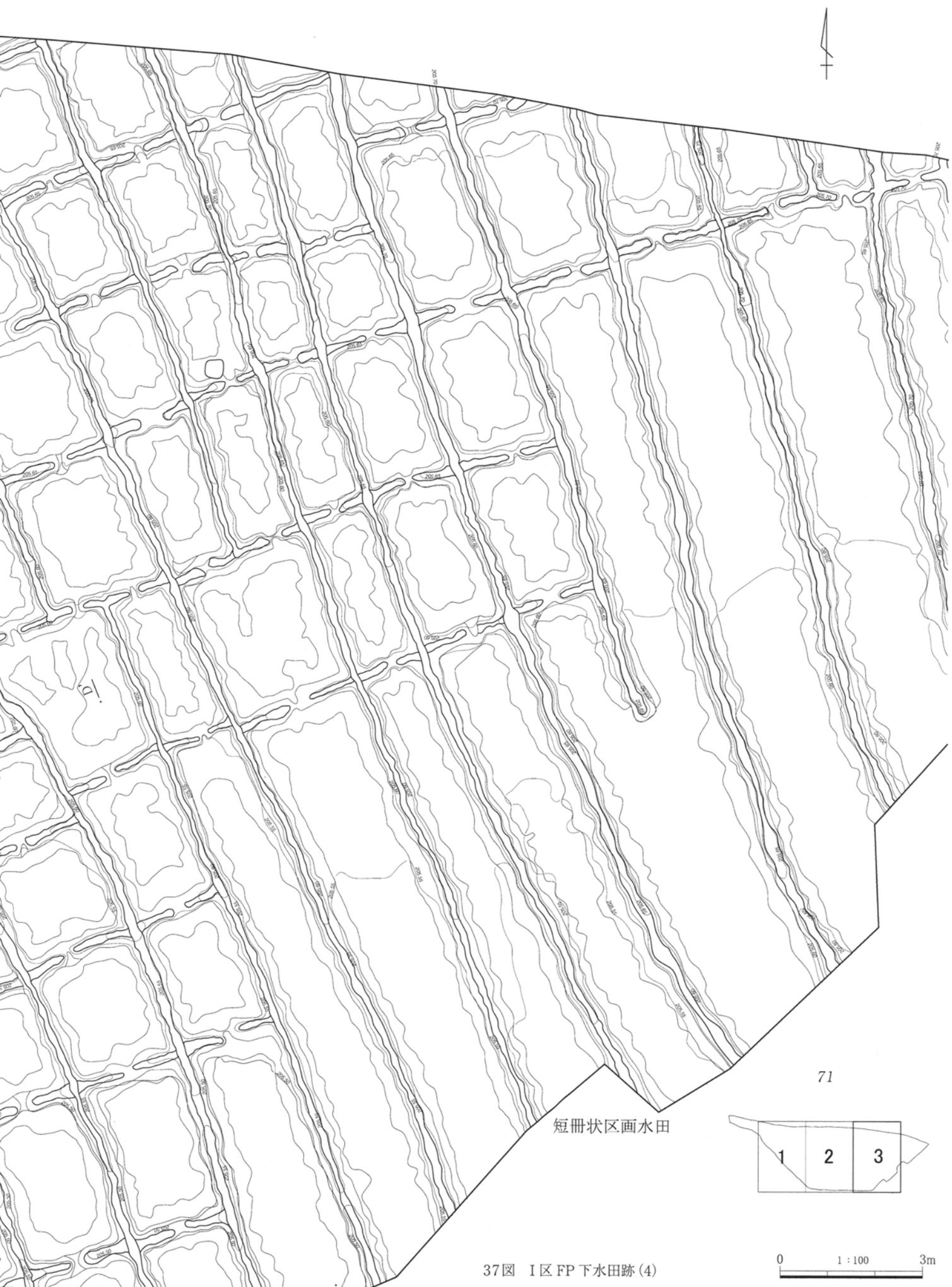
35図 I区FP下水田跡(2)



極小区画水田



36 図 I 区FP下水田跡(3)



短冊状区画水田

71

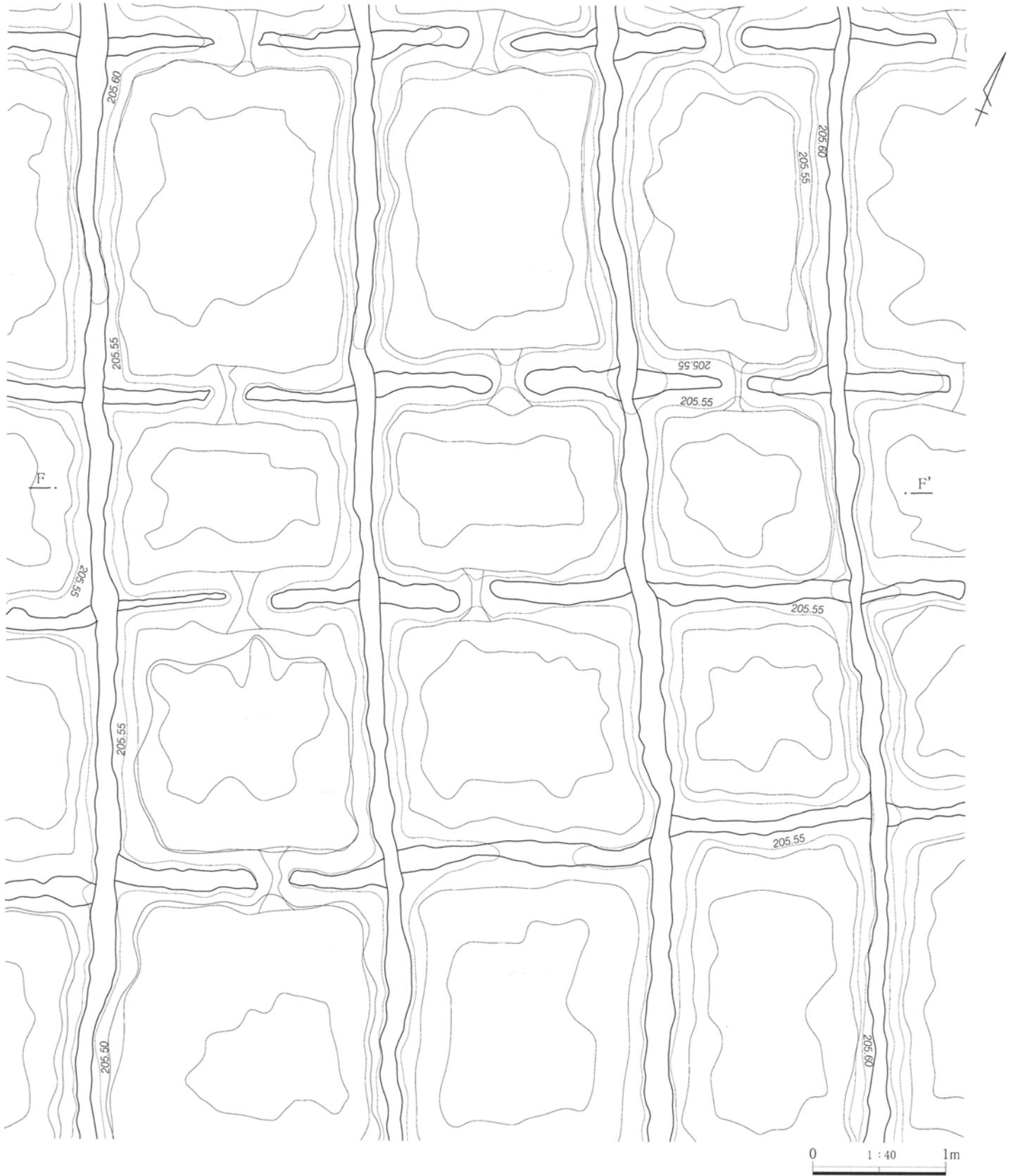


37図 I区FP下水田跡(4)

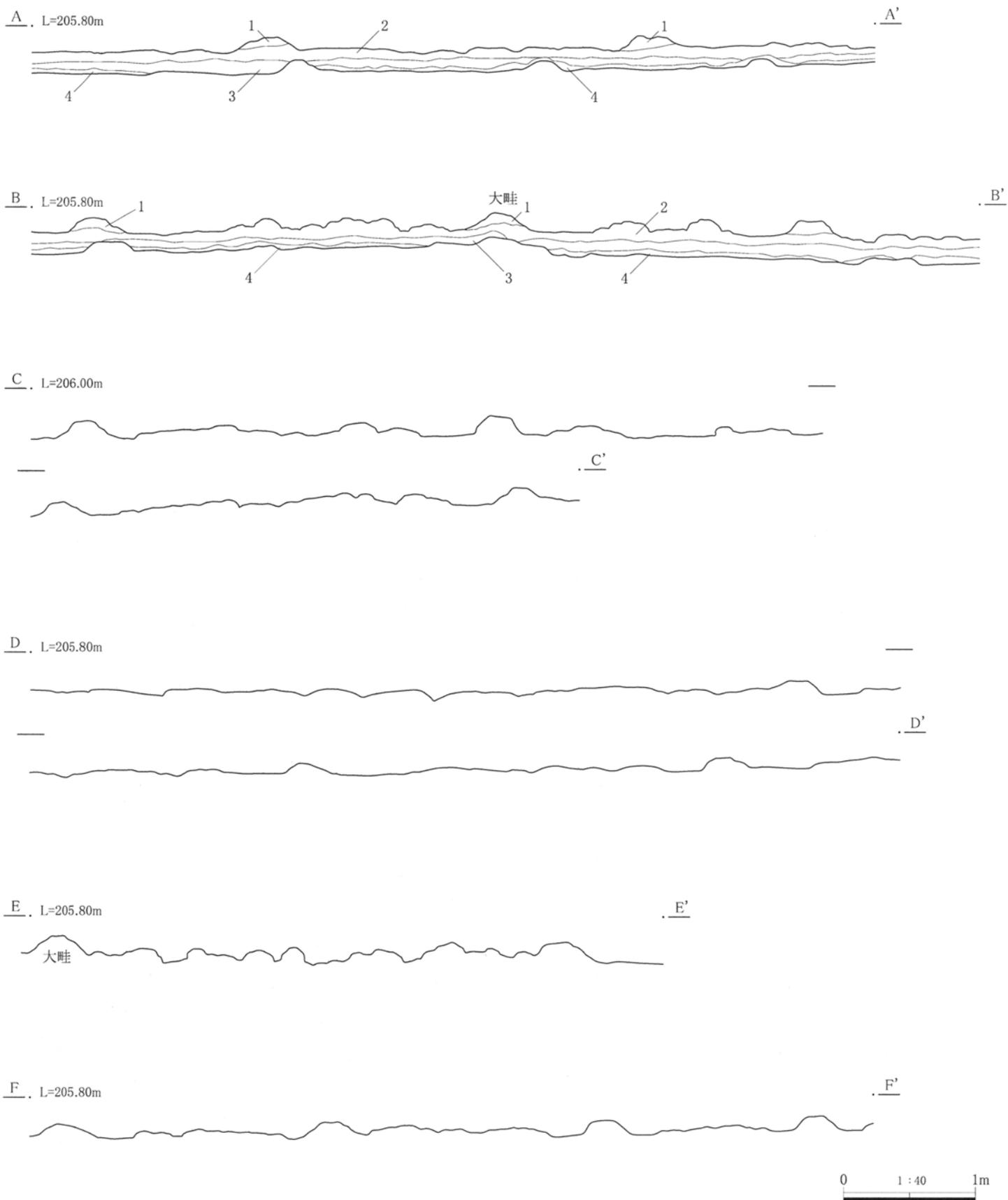
0 1 : 100 3m



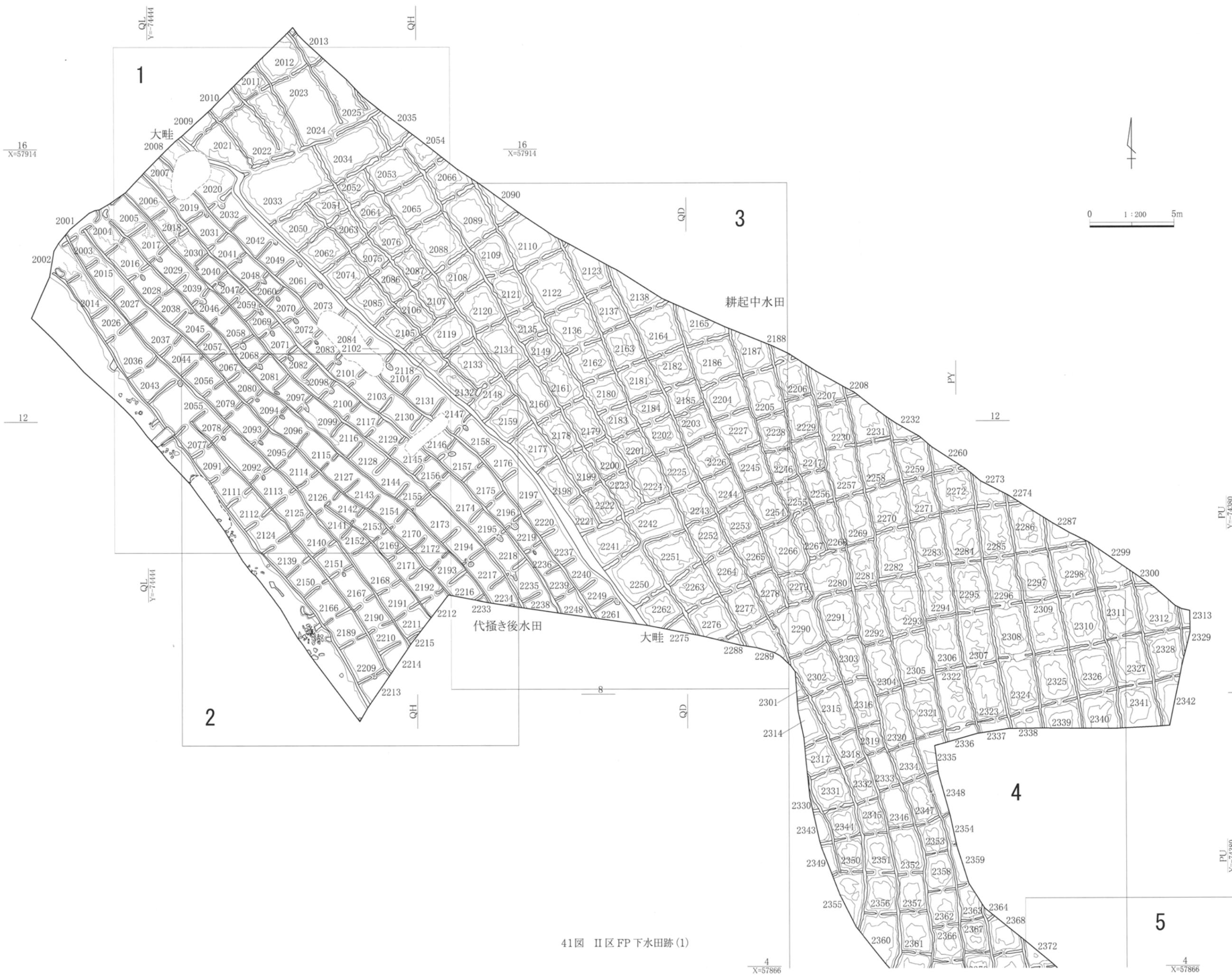
38图 I区FP下水田迹(5)不整形区画水田



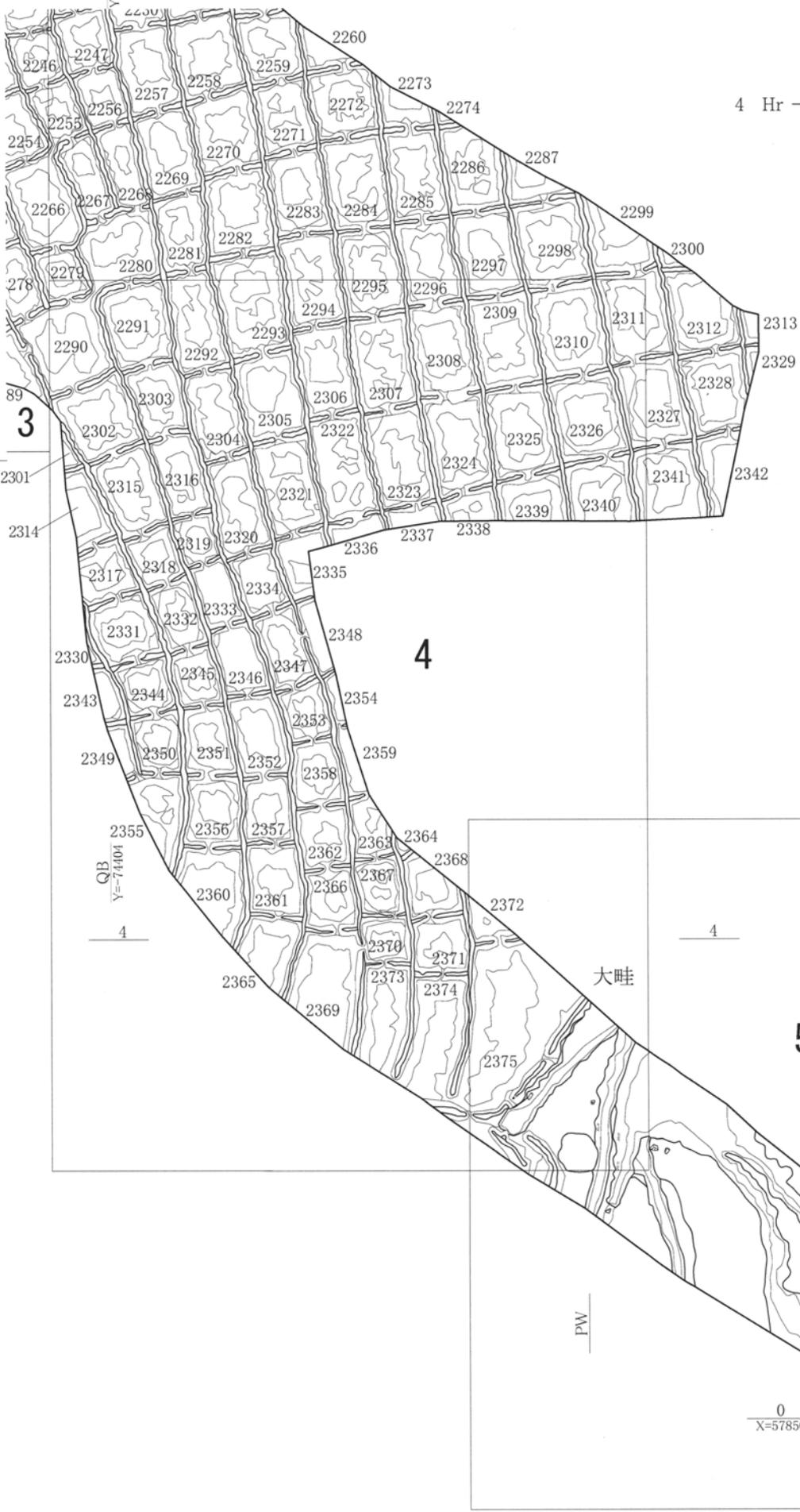
39図 I区FP下水田跡(6)極小区画水田



40图 I区FP下水田迹断面图



41図 II区FP下水田跡(1)



4 Hr - FP 下で確認された水田跡



0 1 : 200 5m

8

4

5

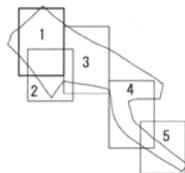
大畦

谷部分

42 図 II 区 FP 下水田跡 (2)



0 1 : 100 3m



耕起中水田

大畦

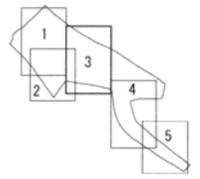
代掻き後水田



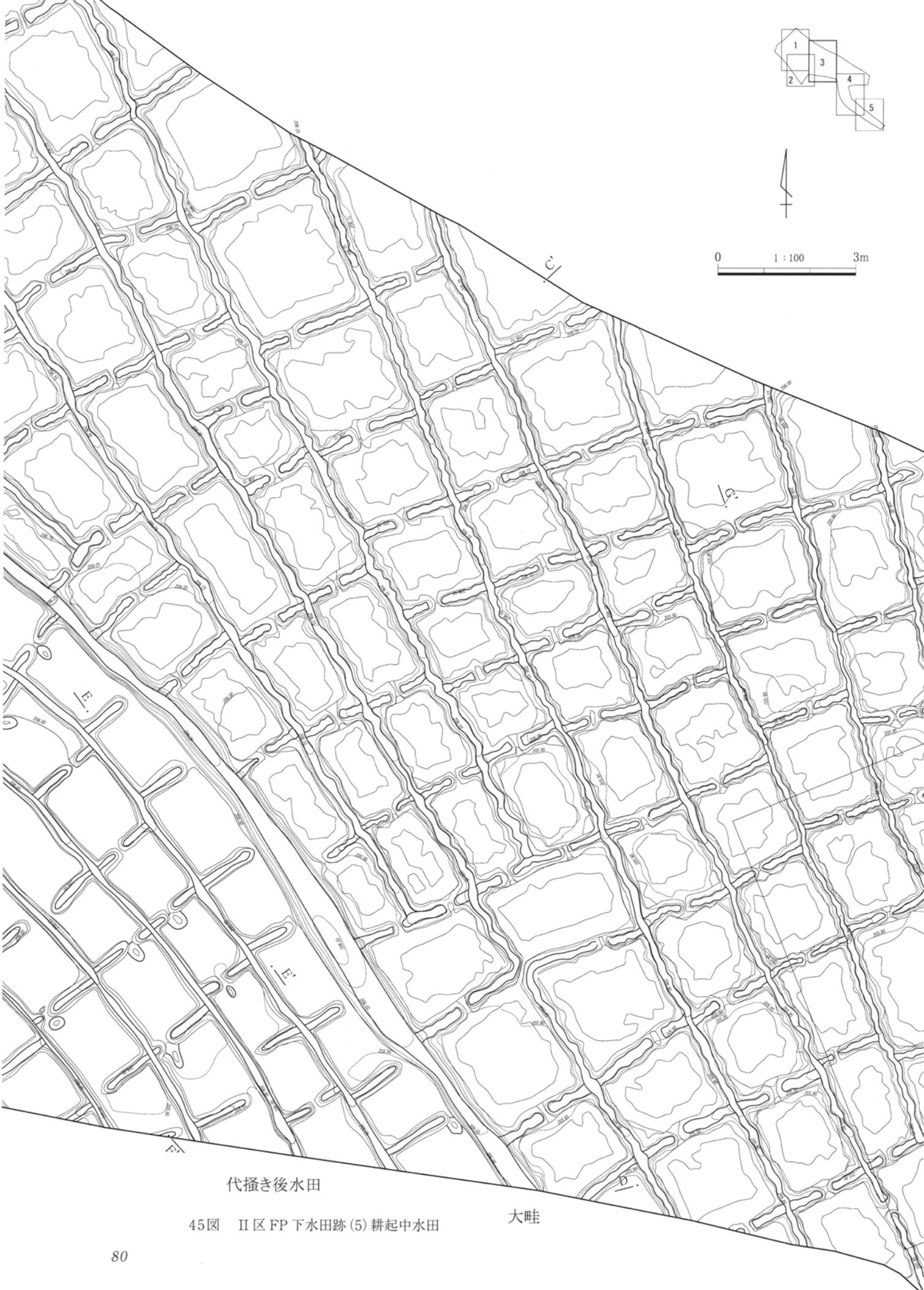
43図 II区FP下水田跡(3)



44図 II区FP下水田跡(4)代掻き後水田



0 1 : 100 3m

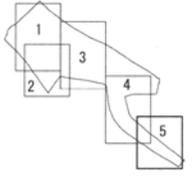


代播き後水田

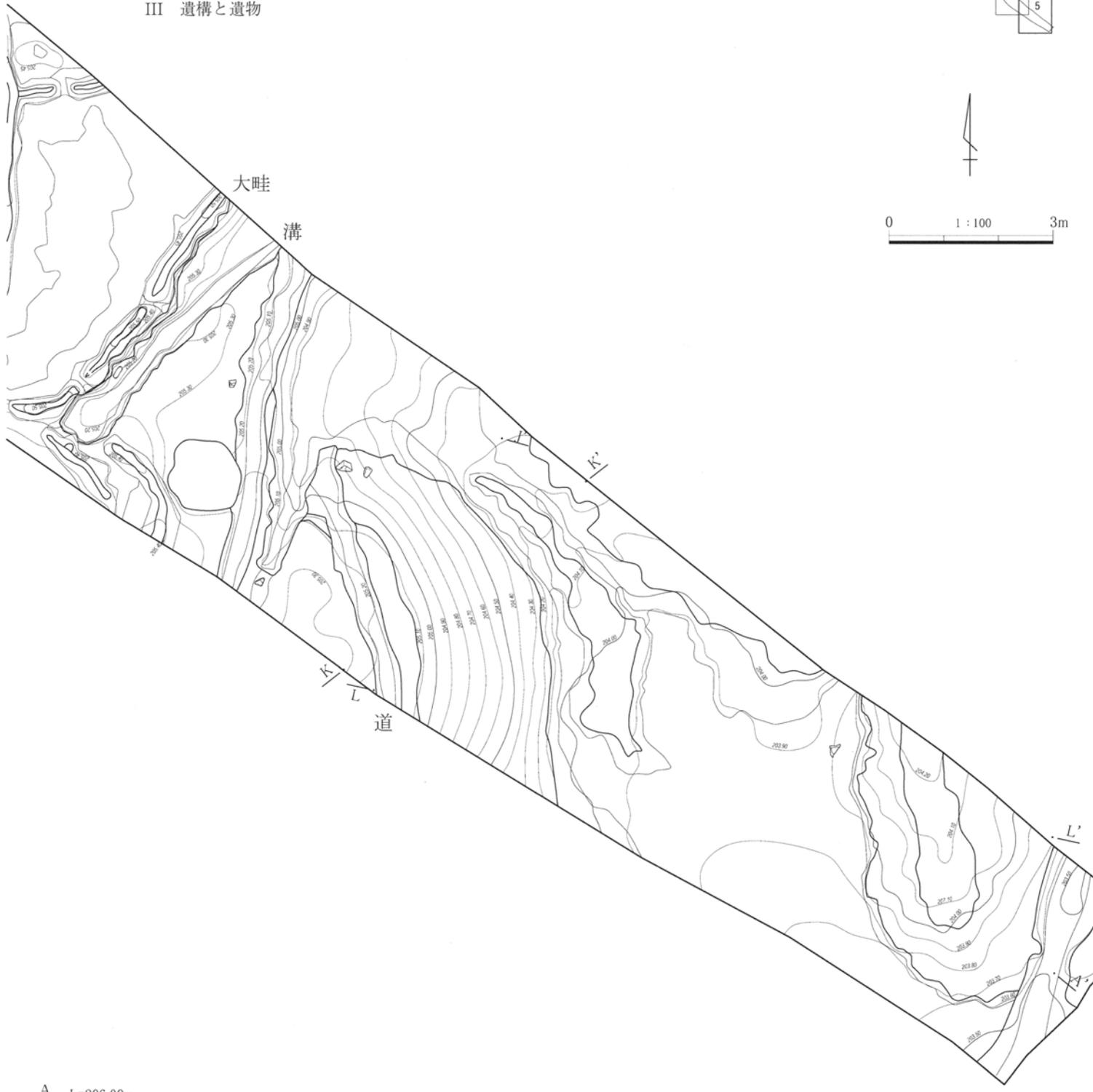
45図 II区FP下水田跡(5) 耕起中水田

大畦

III 遺構と遺物



0 1 : 100 3m



A . L=206.00m



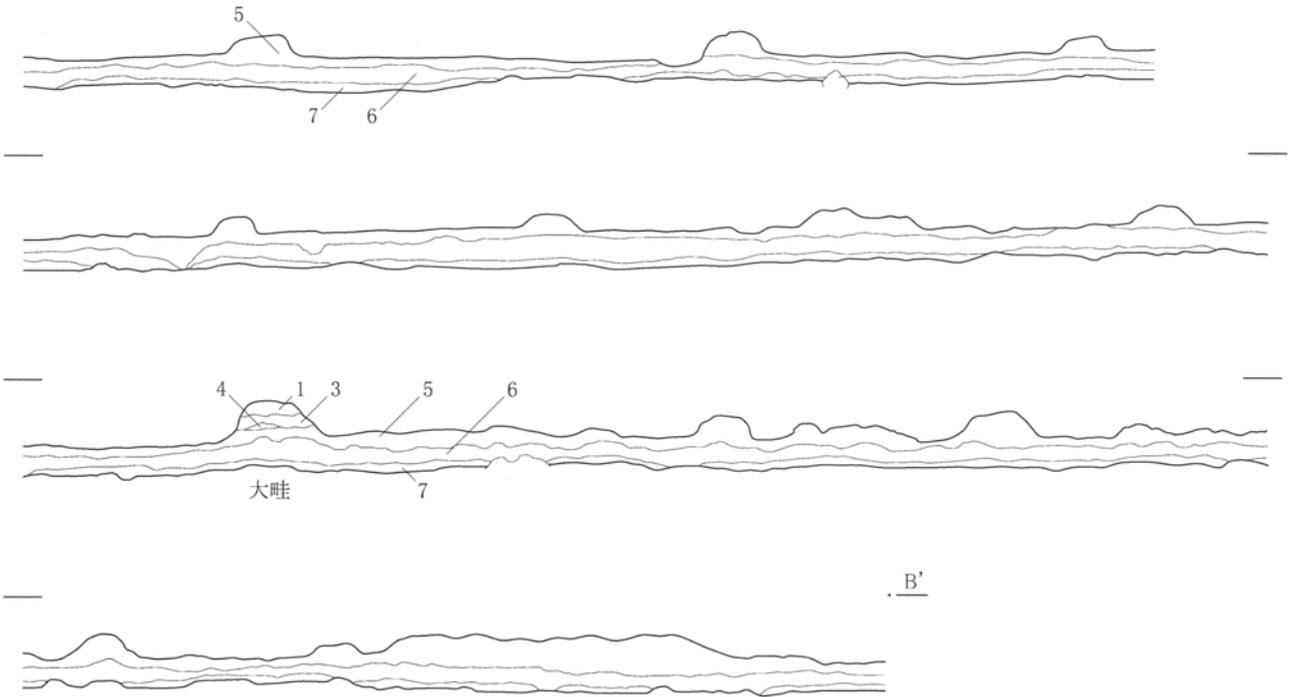
A'

47図 II区FP下水田跡 谷部分

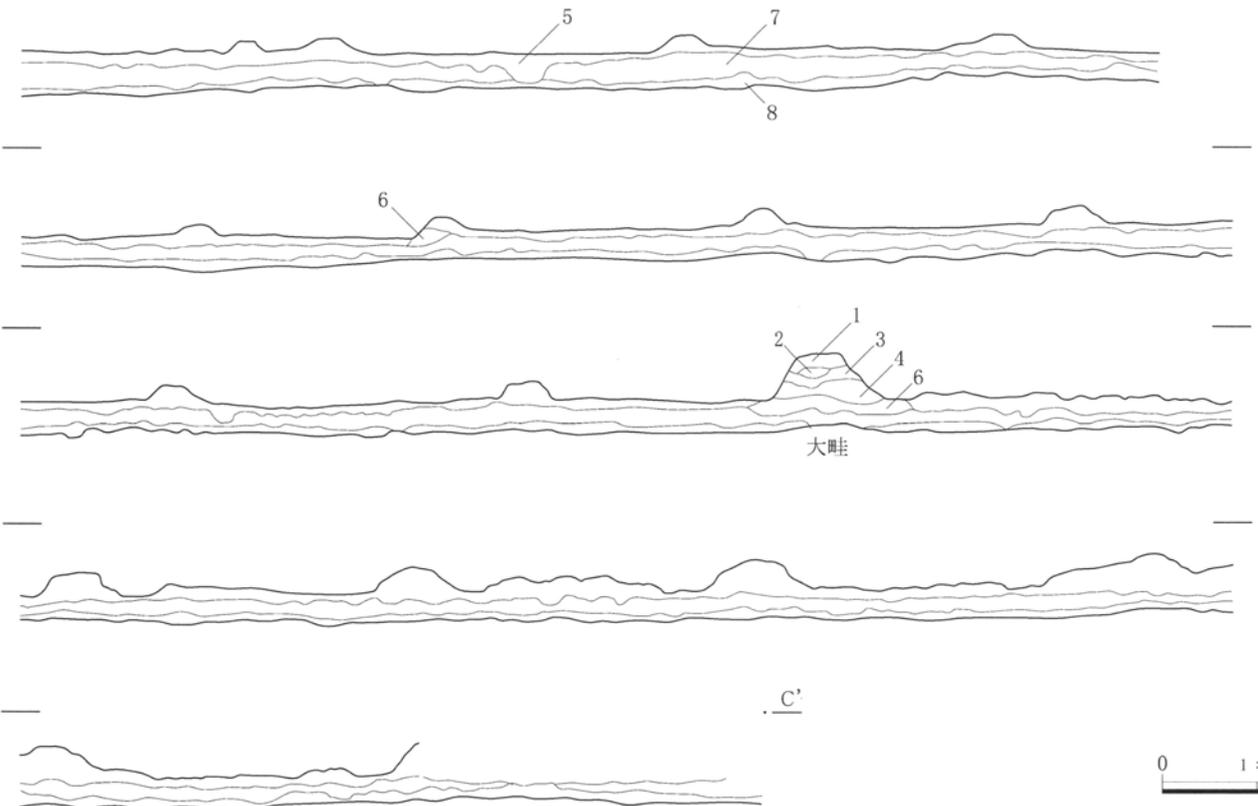
0 1 : 100 3m

4 Hr - FP 下で確認された水田跡

B. L=206.40m

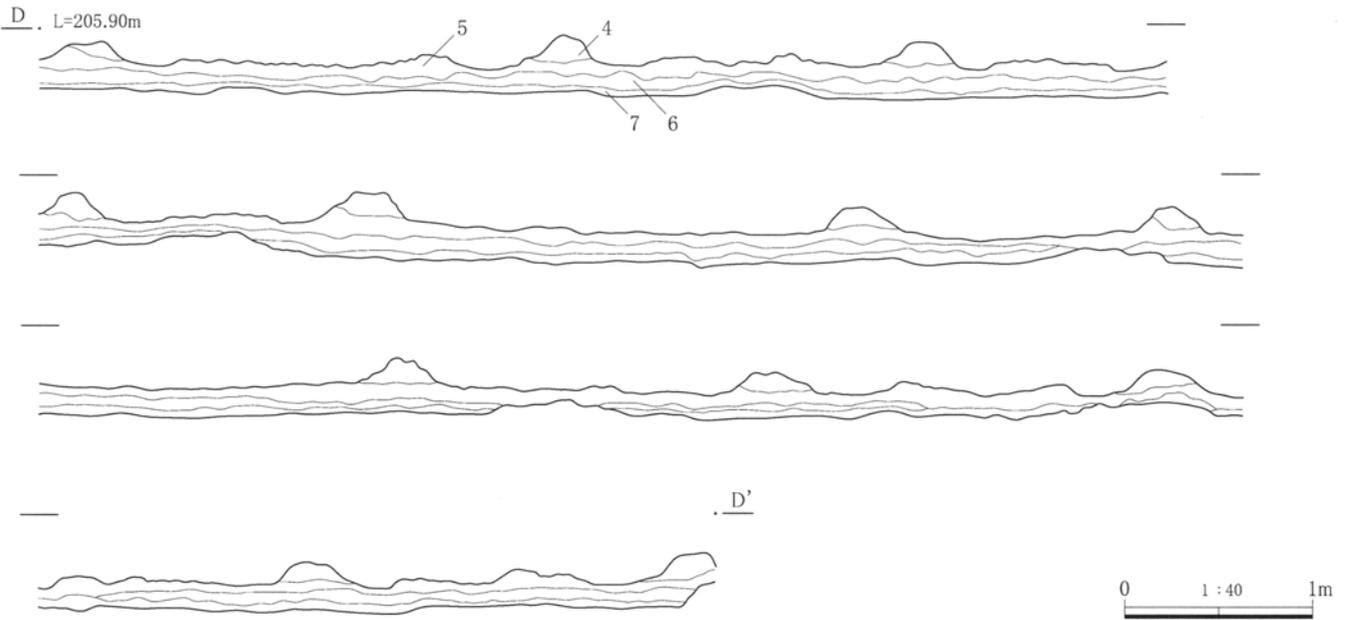


C. L=206.40m



48 図 II 区 FP 下水田跡断面図 (1)

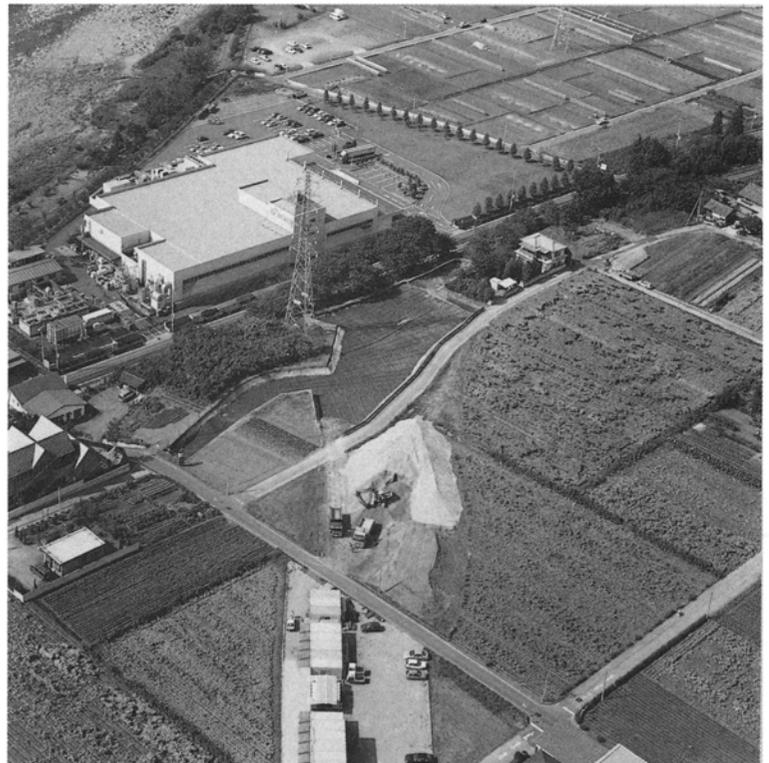
III 遺構と遺物



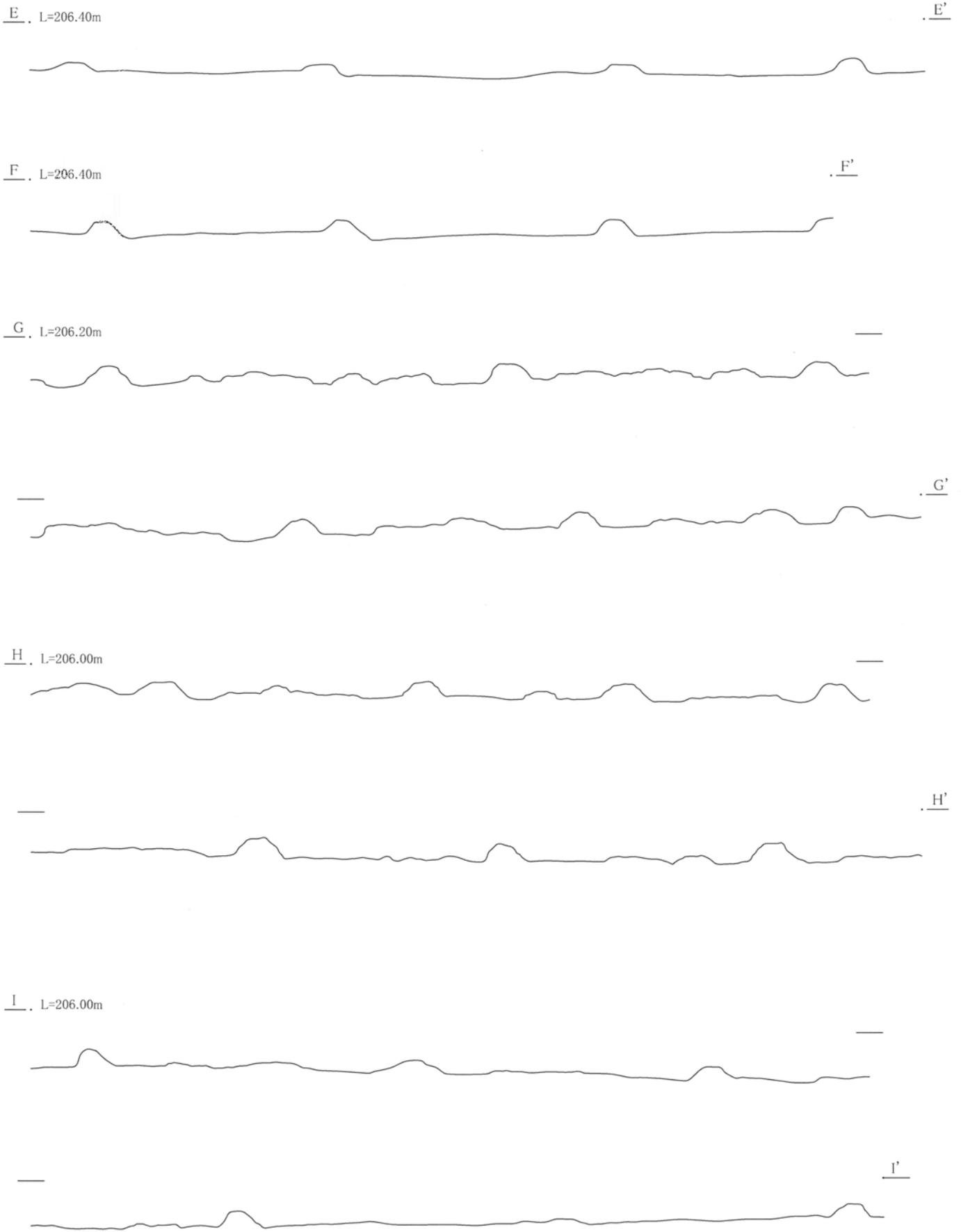
49図 II区FP下水田跡断面図(2)

FP下水田跡 土層註

- 1 褐灰色土 大畦上位土層。やや暗い色調を呈し、全体に軟質。上面は塊状の堆積を見せるが、隙間などの観察による構築過程の把握には至らなかった
- 2 鈍黄褐色土 大畦中位土層。黄褐色を呈するFA塊を主体とする。軟質。大畦形成時にFA下層部より採取した土層であろうか
- 3 褐灰色土 大畦下位土層。大型の灰色FA塊を多く含む。全体に明るく軟質。大畦形成時にFAを主体とした構築が判断できる
- 4 褐灰色土 やや暗い色調を呈するFA塊主体層。軟質土で、緻密な感。FAが耕作等により有機物を含むことによって変色した土層。小畦部分は塊状堆積を見せ、隙間等が観察できる
- 5 褐灰色土 やや暗い色調を呈する。黄褐色FA塊を多く含む軟質。FA変色土。また、耕起中水田中位も塊状堆積を示す
- 6 鈍黄褐色土 FA純層(s-8)を基準とするが、上位の耕作により不連続な箇所もある。調査区南側にみる大型の自然石の多くは6層に含まれる。火砕流により吾妻川から吹き上げられたものか
- 7 鈍黄褐色土 FA純層(s-1)を基準とする。概ね数cmの規模の層厚で残存する。粘性に富み、地点によっては硬く締まる
- 8 黒褐色土 FA下水田耕土



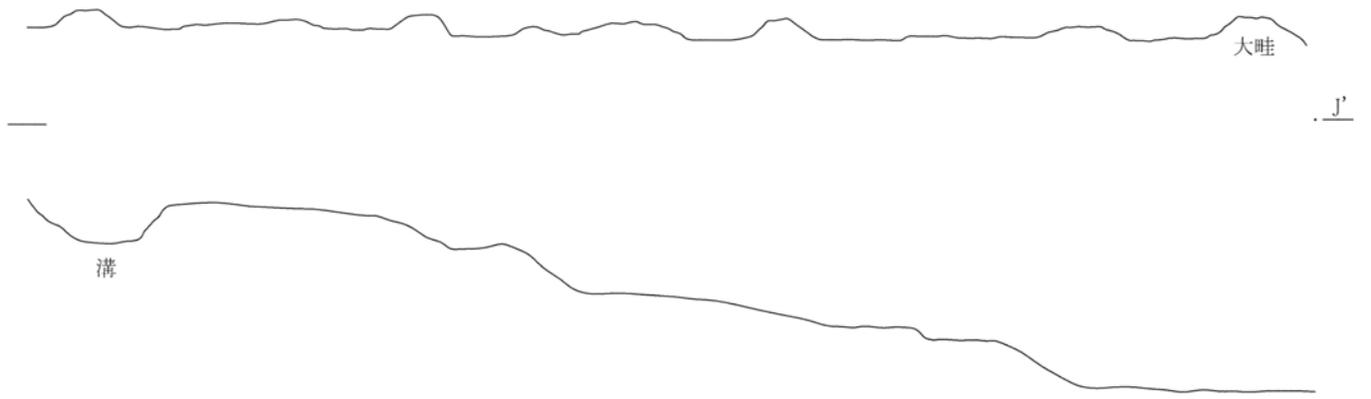
4 Hr - FP 下で確認された水田跡



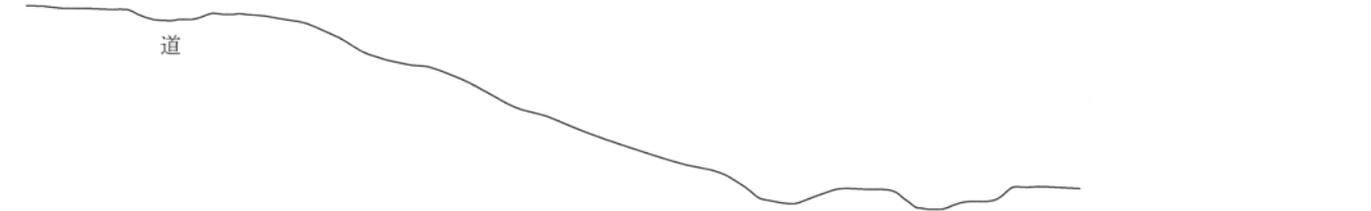
50図 II区FP下水田跡断面図(3)

III 遺構と遺物

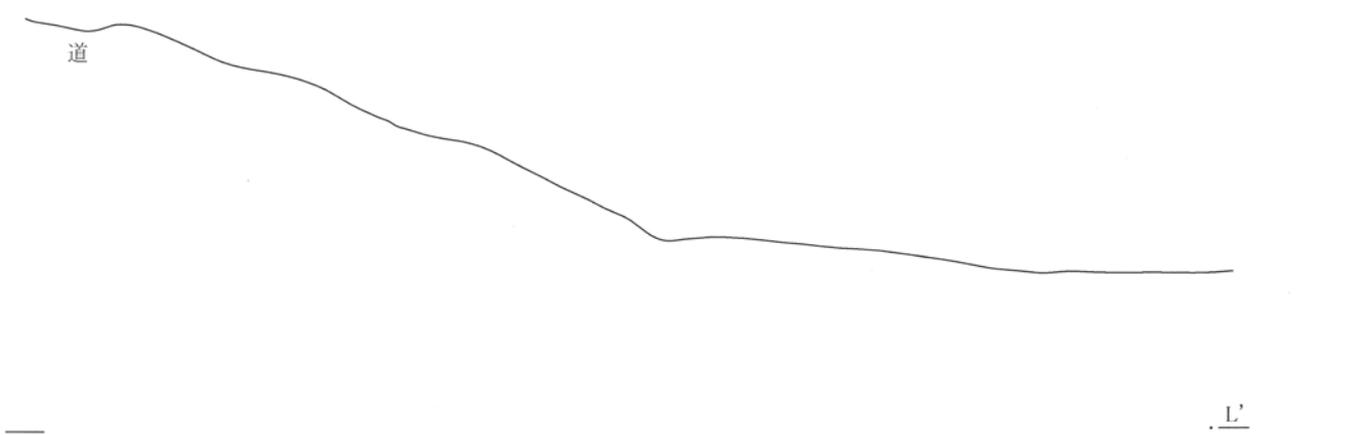
J . L=205.80m



K . L=205.40m

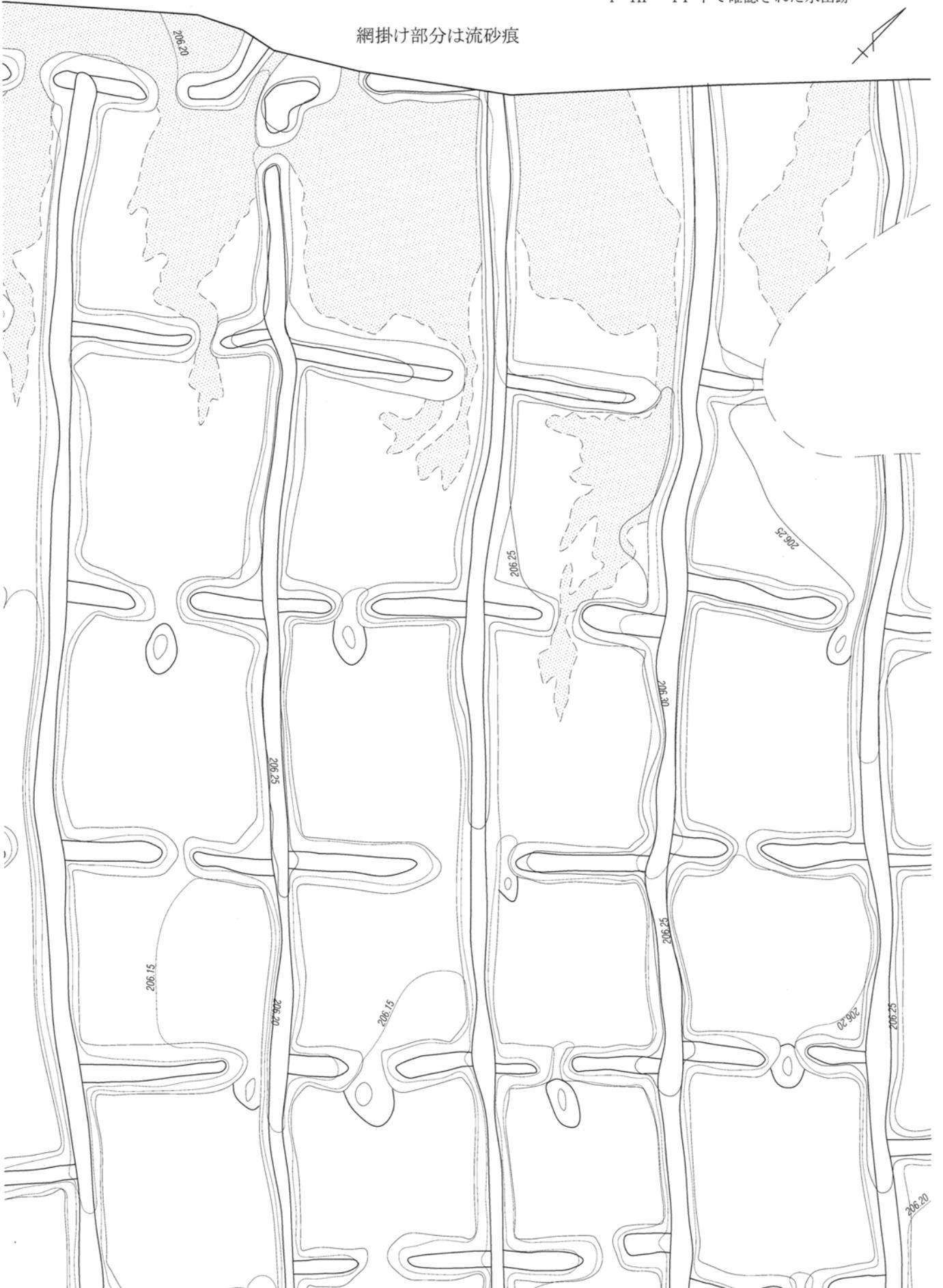


L . L=205.40m

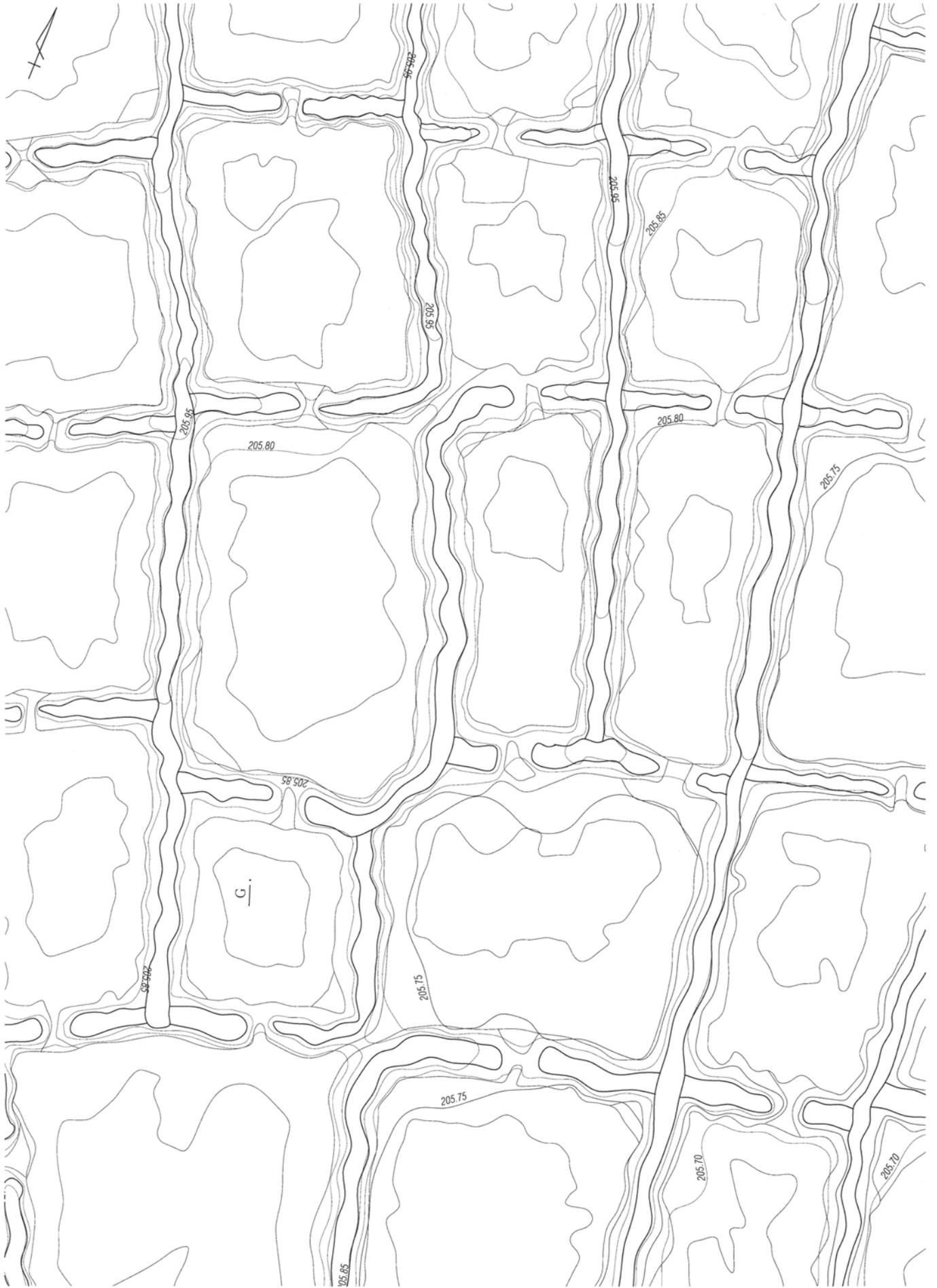


51図 II区FP下水田跡断面図(4)

網掛け部分は流砂痕



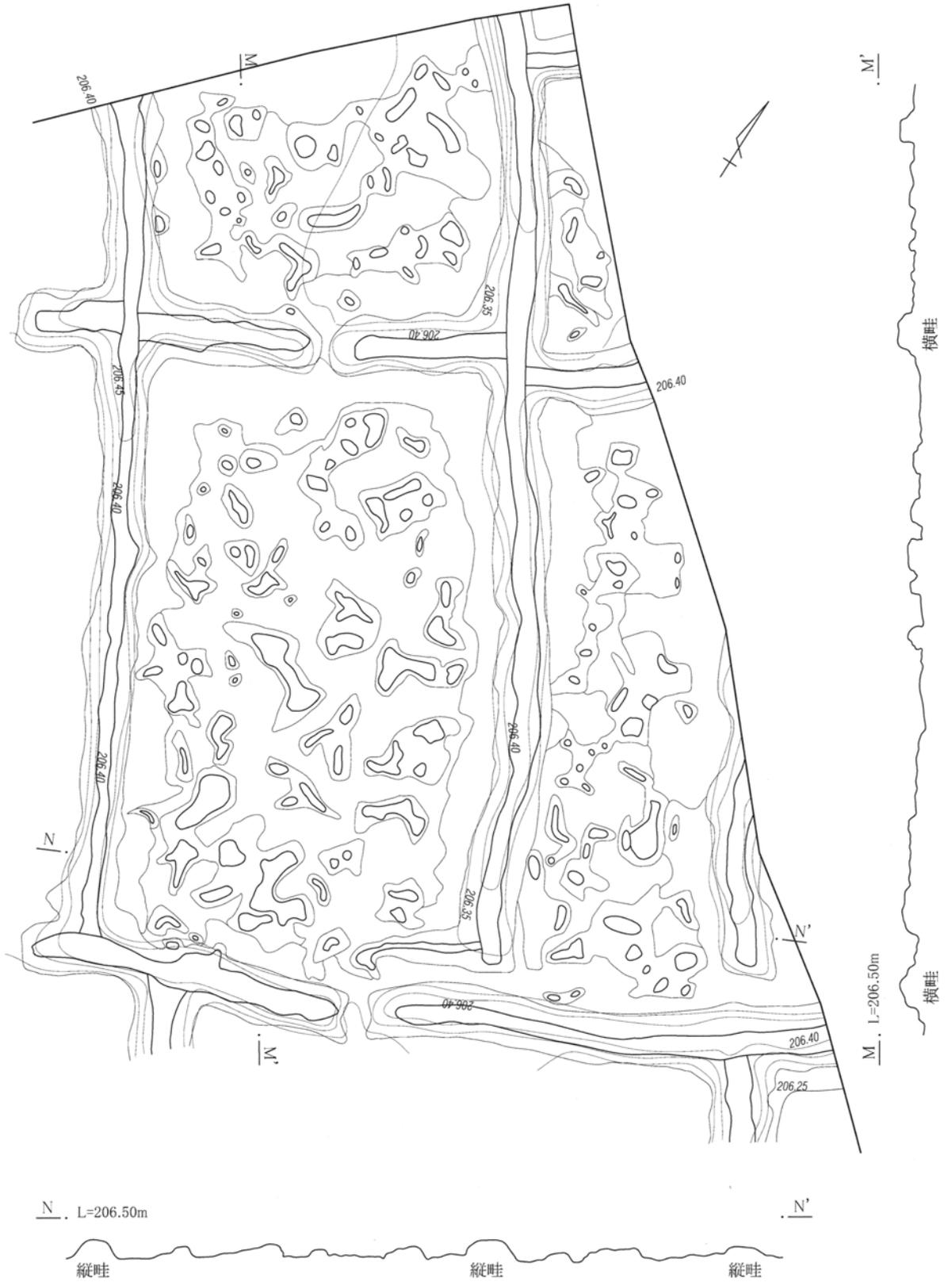
52図 II区FP下水田跡(7)代掻き後水田





54图 II区FP下水田迹(9)耕起中水田

III 遺構と遺物

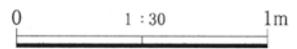
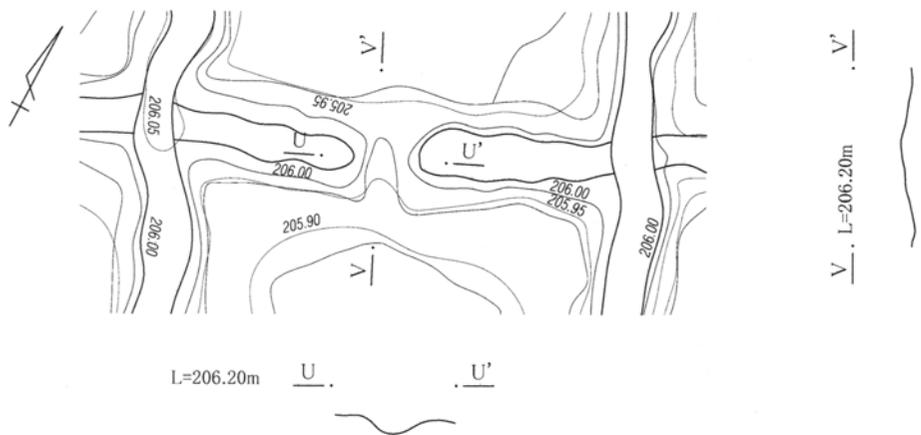
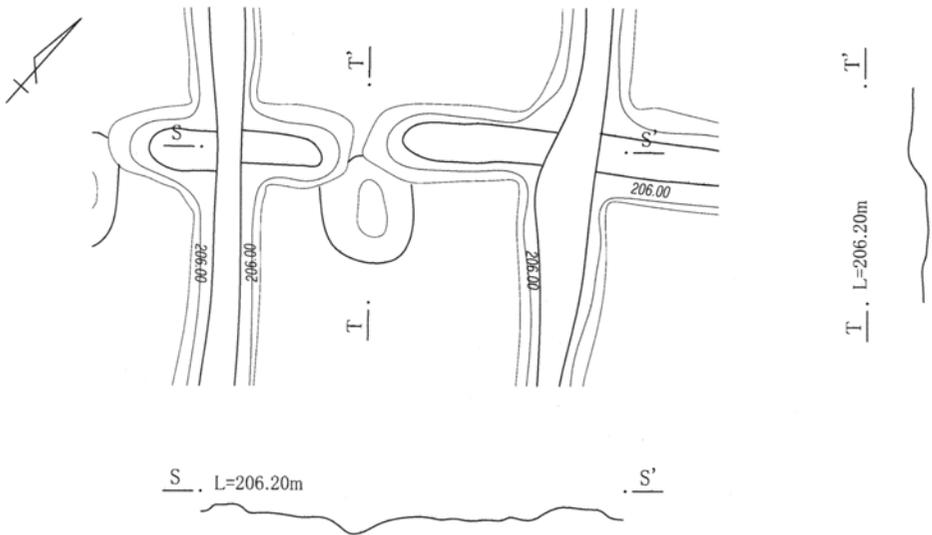
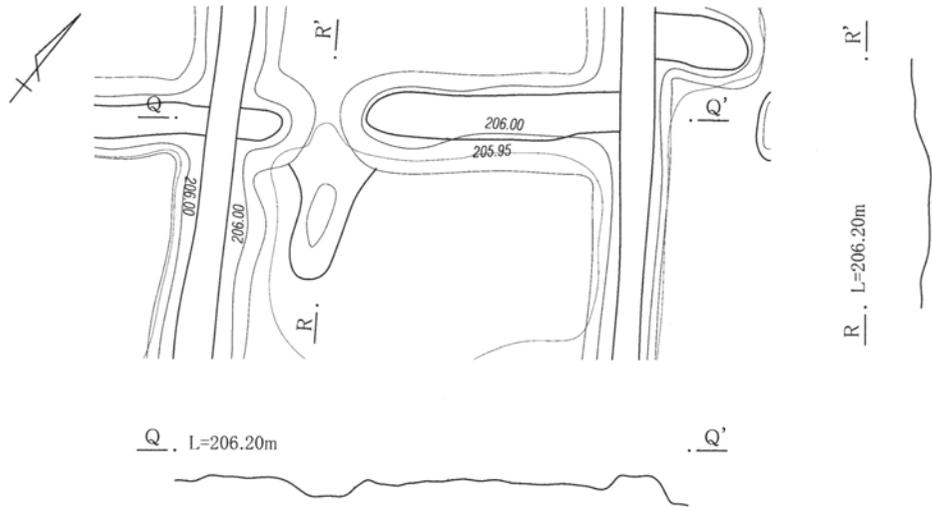


55図 II区FP下水田跡(10)耕起中水田

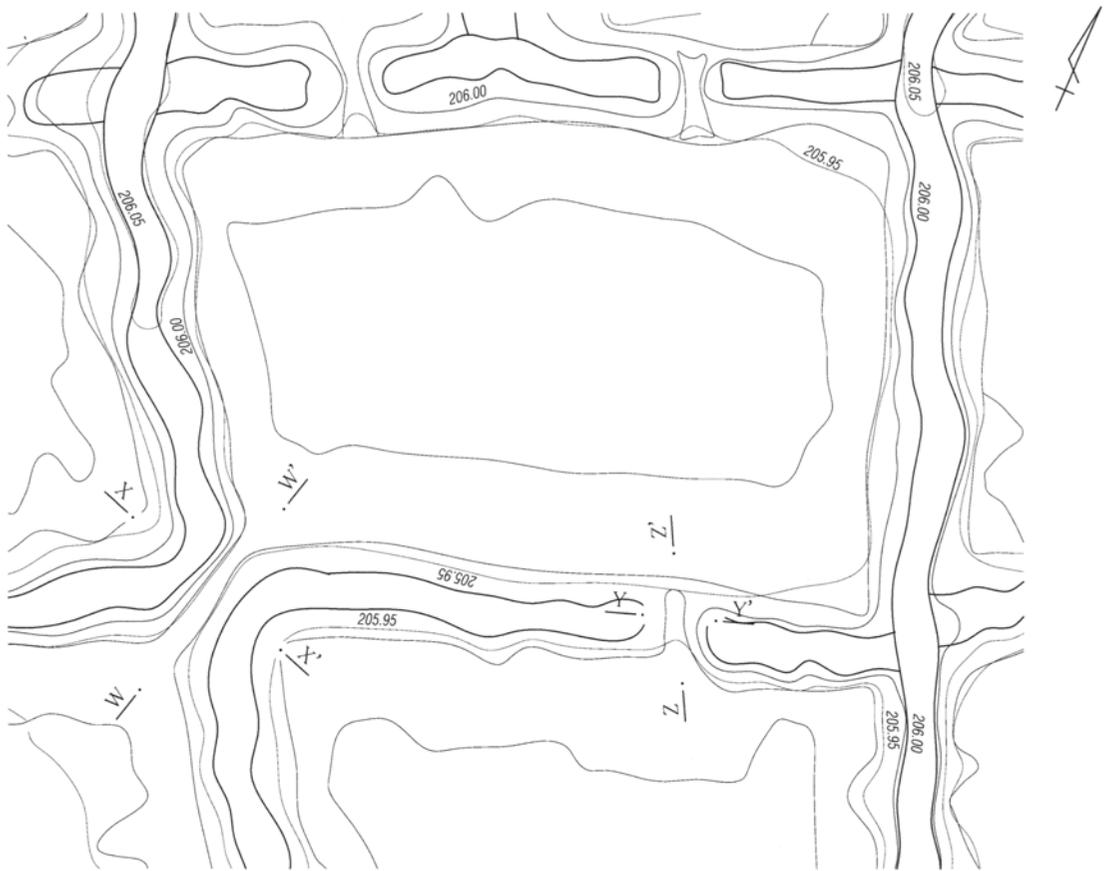
4 Hr - FP 下で確認された水田跡



56図 II区FP下水田跡(11) 耕起中水田



57图 II区FP下水田跡(12)水口



W . L=206.20m

W'



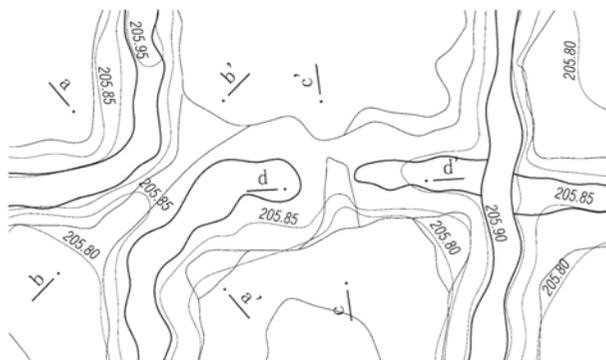
L=206.20m Y . Y'



L=206.20m Z . Z'



X . L=206.20m X'



a . L=206.20m a'



b . L=206.10m b'



c . L=206.10m c'

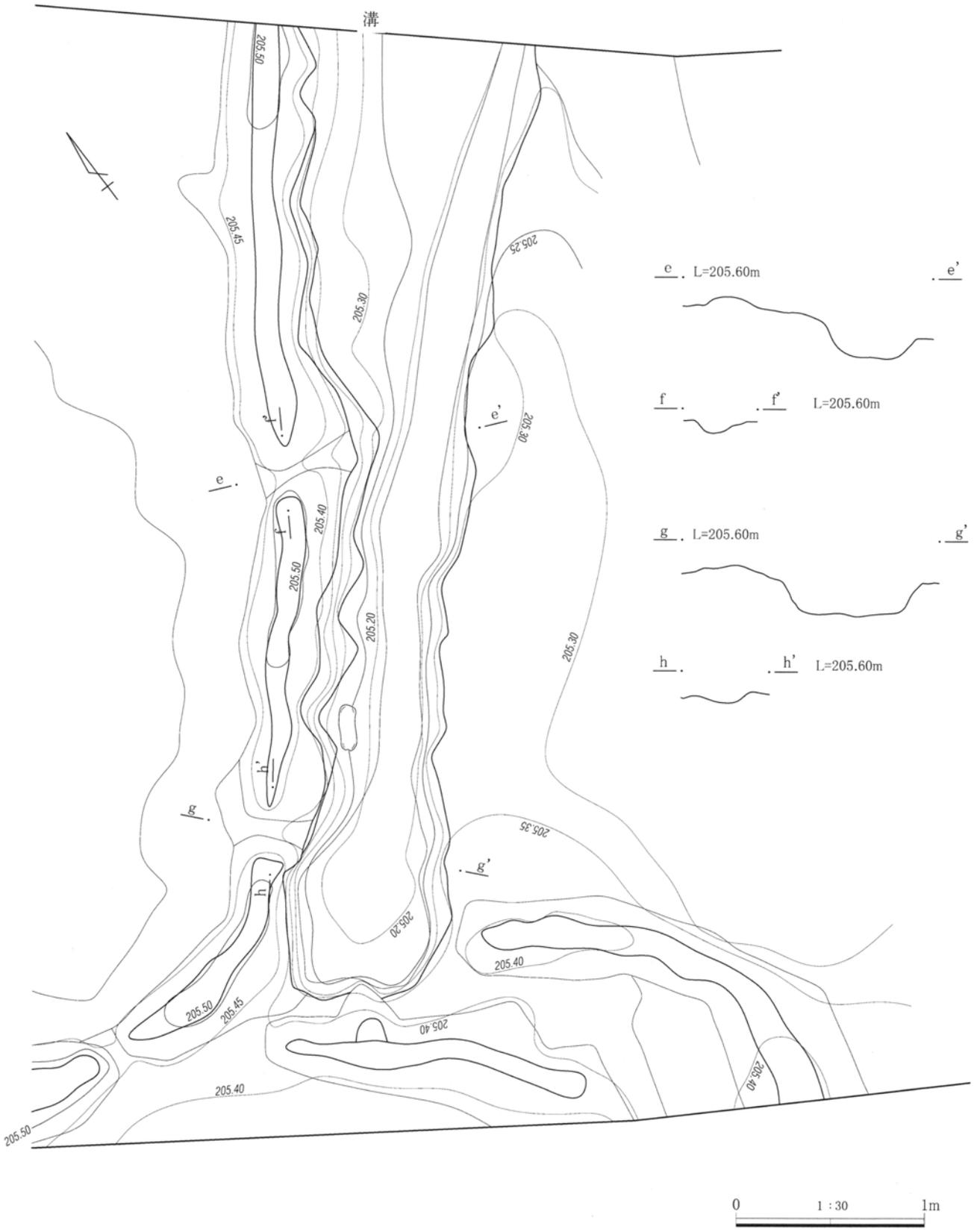


d . L=206.20m d'



58图 II区FP下水田跡(13)水口



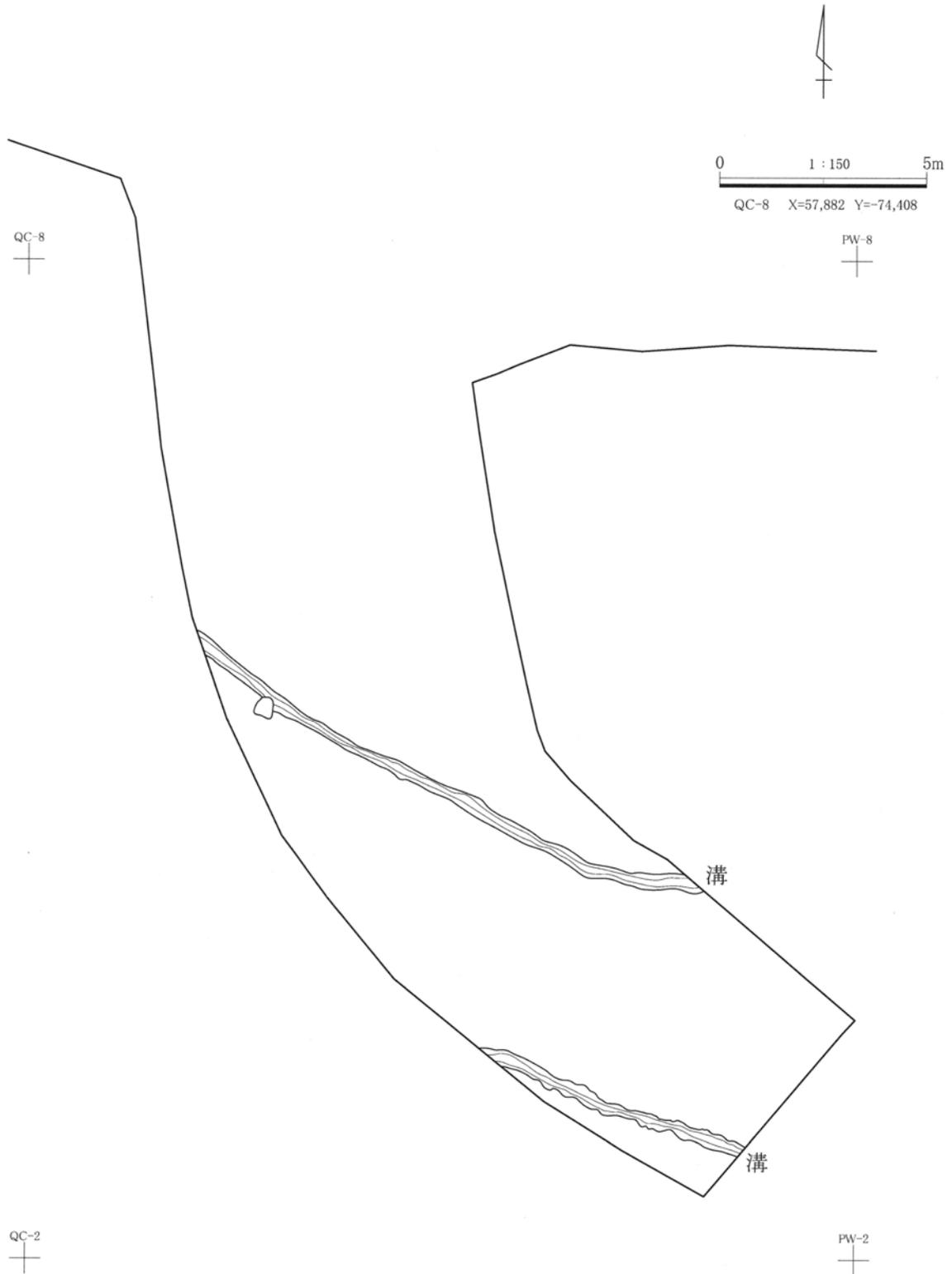


59图 II区FP下水田跡(15)東端部分

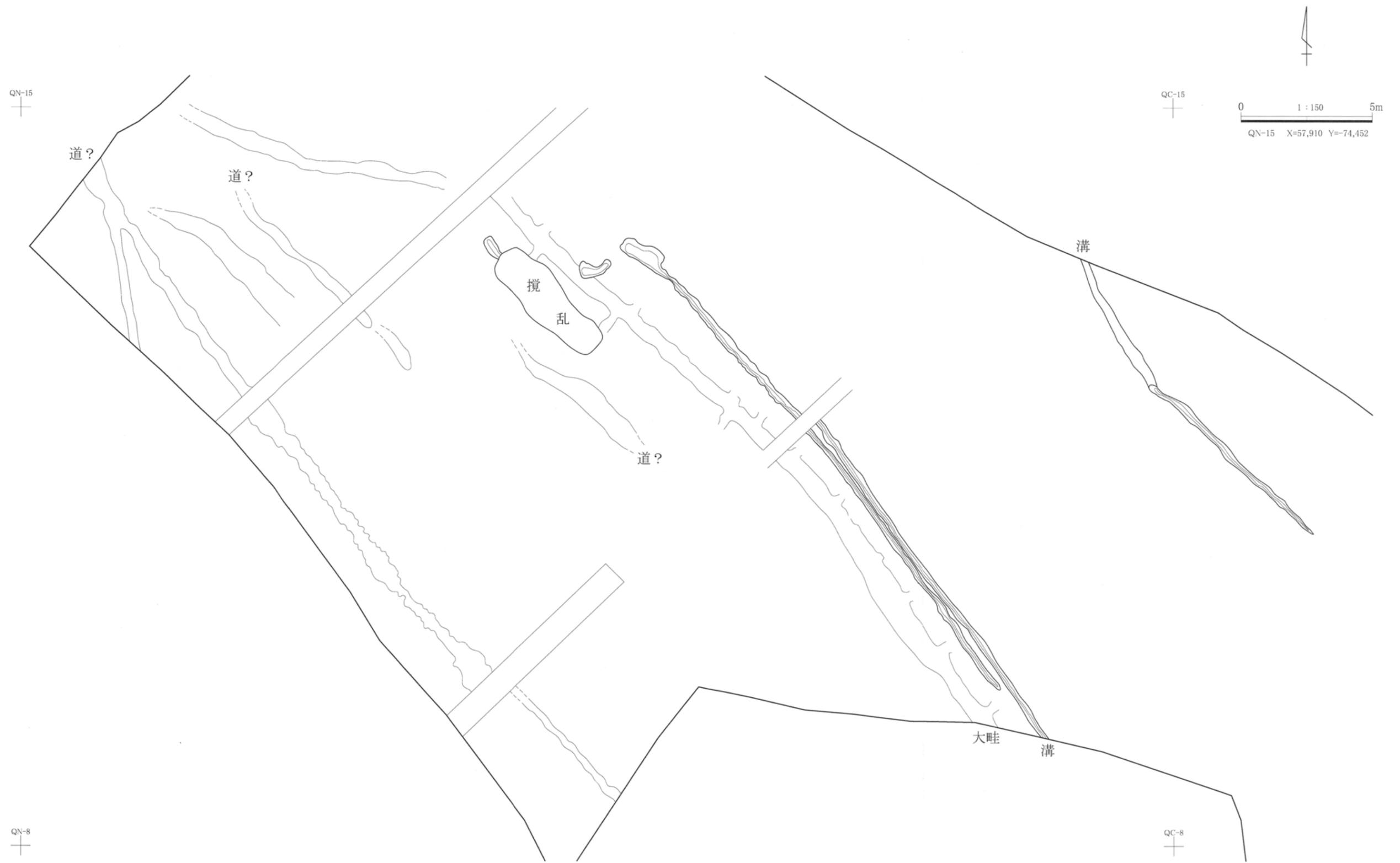


60図 II区FP下水田跡(16)代掻き後水田

III 遺構と遺物



61図 II区FP下水田跡下溝状遺構等(1)



62图 II区FP下水田跡下溝状遺構等(2)



208.8

207.5

208.4

201.3

207.0

207.5

207.3

207.3

巻町ヶ坪

63図 FP上全体図

99-100





64图 I区FP上遺構配置図



64图 I区FP上遺構配置图

5 Hr - FP 上で検出された遺構と遺物

本節では、FP 上で調査された、古代～中・近世、近代の遺構と遺物を主に述べる。FP 上で検出される遺構はいうまでもなく FP 降下後に構築されたものであり、求められる時代としては、6世紀中葉、古墳時代後半以降ということになる。ただ、本遺跡では FP 降下直後の遺構・遺物は確認されておらず、居住痕跡が認められる時期は、9世紀前半、平安時代以降である。

平安時代の集落は、住居跡8軒、掘立柱建物跡1基、土坑数基である。住居跡はI区に4軒、II区に4軒を見る。このうちII区3・4号住とI区5・7・8号住が道路を挟み一群をなす。1・2号住と6号住はやや距離を置く占地である。小規模な集落様相ながら、I区西側で見る住居跡は近接しており、あるいは北側の調査区域外でまとまった集落となるかもしれない。集落の時期は、9～10世紀に比定される集落で、性格は不明であるが、周辺一帯がFPに覆われていることから、既に水田耕作には向かない地域であり、限られた栽培植物を対象とする畑作、あるいは羽口・鉄碎の出土から製鉄関連の生業と考えられる。掘立柱建物跡は、II区の1号掘立柱建物跡が該期に相当するものとする。

土坑・墓壙は概ね中世に比定されるものが多く、特にI区の集中が目立つ。墓壙、2号掘立柱建物跡・3号掘立柱建物跡など墓域・居住域として周辺-特に北側平坦地への広がりが予想される。

近代～現代にかけての遺構としては、II区のサク状遺構群が相当する。特に抽出掲載はしていないが、全体図に概略を記した。

(住居跡)

8軒の竪穴住居跡を検出した。すべてFP上で確認され、床面もFP層中に留まる。規模も軸長4m前後の中～小型のもので5mを超す大型住居跡は見られなかった。また小鍛冶遺構を持つ住居跡としては、8号住が相当する。以下各住居跡の概略を述べる。

1号住居跡

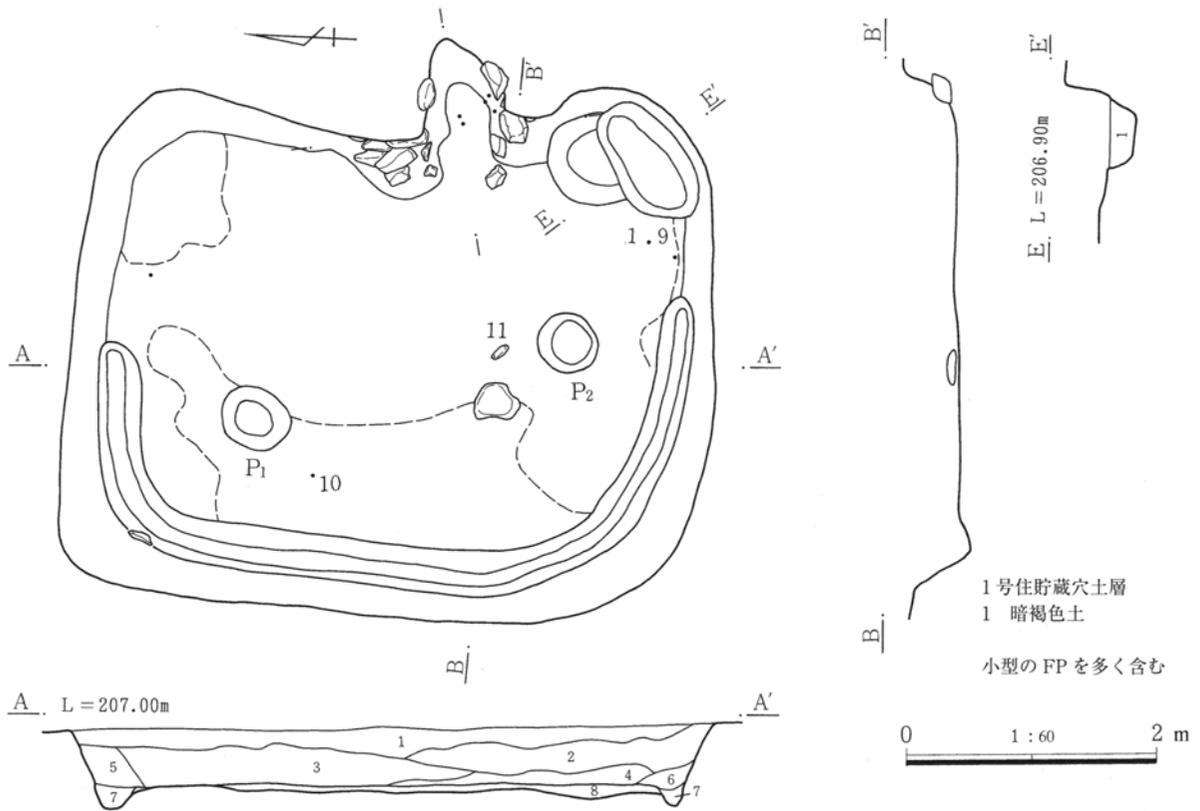
II区東側の傾斜変換点で確認した。周辺は南東方向へ低位に傾く地形で、南側の段丘崖から20m程北にある。西側及び北側は緩やかな傾斜ながらほぼ平坦地形が広がる。

近接する遺構としては、南7m程に2号住居跡が見られる。また、周辺は長方形土坑やピット状の土坑が群在しており、本住居跡の西には5号坑・143号坑が近接する。本住居跡内にも土坑が重複しており、東南隅の貯蔵穴を切る状態で不整形の土坑が見られる。この土坑からは土師質土器坏が1点出土しており、1号住居内土坑として取り上げている。

平面形は、全体的に大きな攪乱や重複遺構が少なく、全体観や平面形は把握しやすかった。主軸長3.7m×横軸5.0mを測り、横長の不整形長方形を呈す。南西隅が丸みを帯びた彎曲を呈し、竈が付される東辺が竈と貯蔵穴の影響で歪みを持つ。壁高も約50cmで、良好な遺存度といえよう。立ち上がりはやや開き気味で弱い印象があるが、これは住居跡放棄後に壁材であるFPの崩落があったものと考えられる。

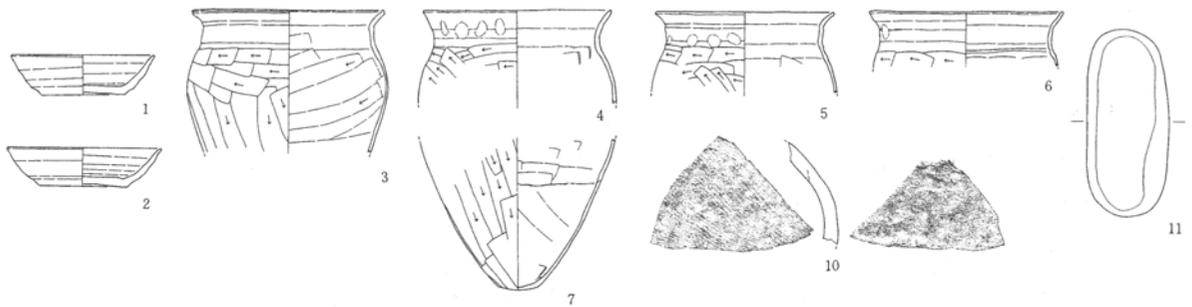
床面は、FP中層で留まる。僅かな凹凸があるが、ほぼ平面を築き、鈍褐色ローム質土を貼床していた。貼床は厚さ3～5cm程度で、床面中央部分から竈にかけて広がりを見せている。床面西側は貼床がなされず、FP面平坦にし床面としていた。硬化面は見られなかったが、褐色土の主要範囲である床面中央部分が僅かに

III 遺構と遺物



1号住土層

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色土 | 黒味が強く、上層全体を覆う。小型のFPを多く含む | 5 灰黄色土 | FPの塊状堆積。壁崩落土か |
| 2 暗褐色土 | 軟弱で崩落著しい。FPを多量に含む | 6 暗褐色色 | FPの塊状堆積。褐色土塊を混在する |
| 3 | やや明るい。FPを塊状に含む | 7 | 鈍褐色土塊・FPを多く含む |
| 4 | やや暗い。小型のFP・炭化物を含む | 8 | 細粒ローム状褐色土を主体とする。貼床土 |

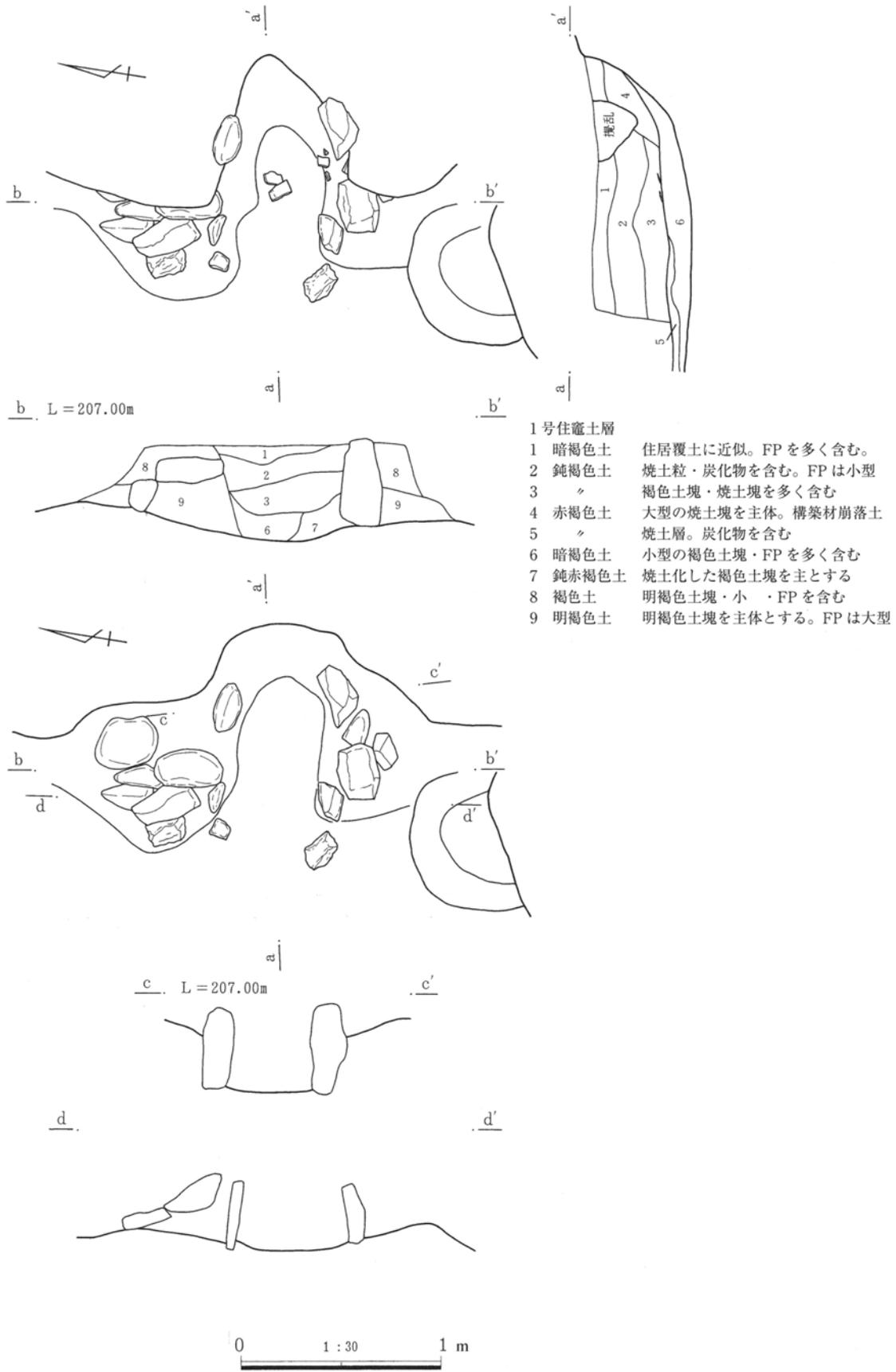


66図 1号住居跡(1)

硬く締まる。軟質な床面といえよう。

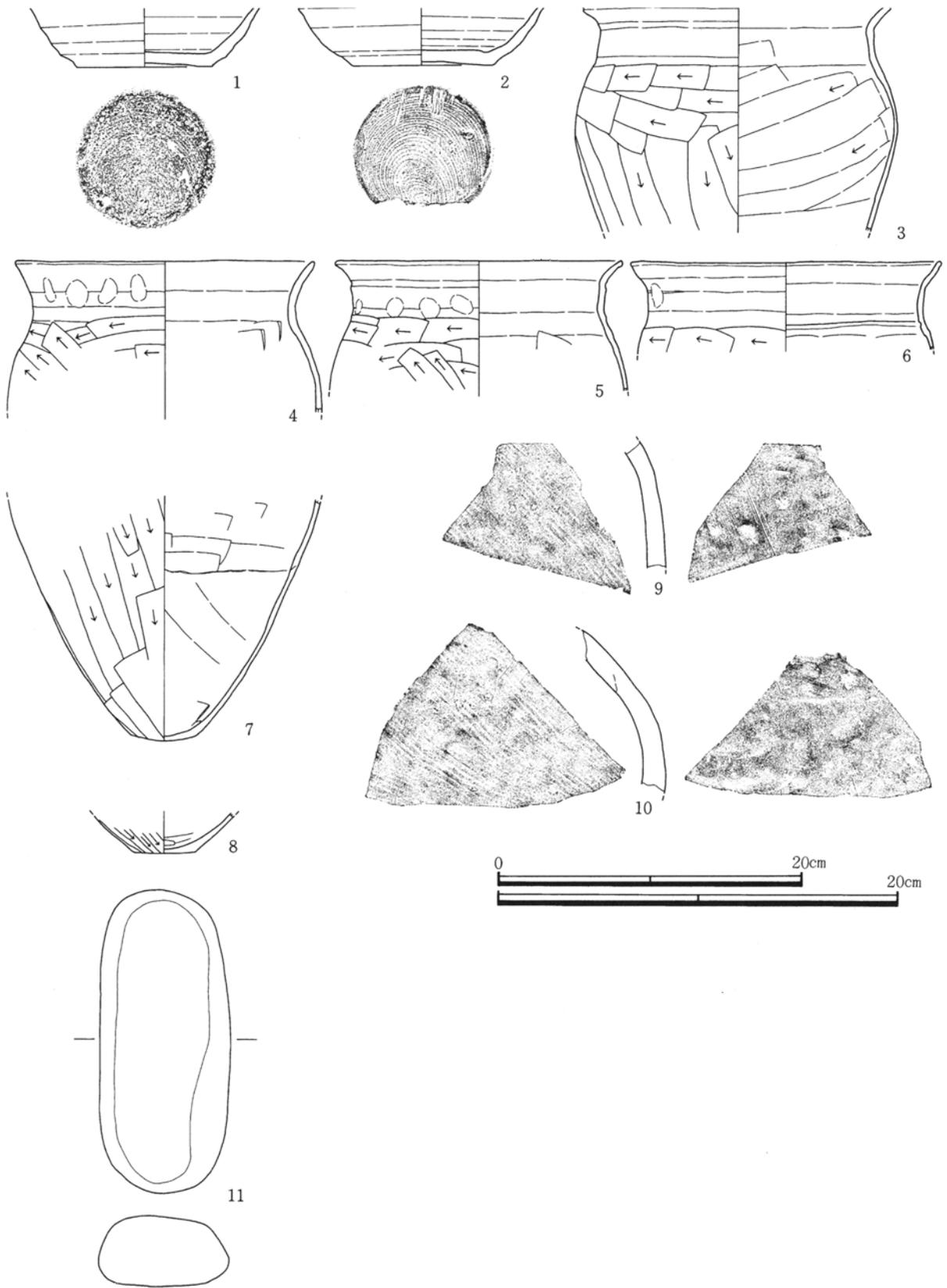
床面上の施設としては、柱穴2基、貯蔵穴、壁周溝等を確認した。柱穴は床面中央やや北西よりに1基(P1)、中央南寄りに1基(P2)を見る。両者とも深さ約20cm程度でやや浅く、柱痕も認められなかったが配置から柱穴として位置付けた。貯蔵穴は不整楕円形土坑に切られるが、南東隅に開く。浅い凹み状の断面形である。壁周溝は南壁際中位から北壁中位にかけて半周を検出した。北壁東半は僅かに窪むが壁周溝等ではなく、貼床が及ばなかったためと考えた。

竈は東壁やや南寄りに設けられる。竈主軸は住居主軸と違い、やや北東を向く。煙道を壁外に突出し、比較的強く立ち上がる。竈壁・袖を自然石や大型のFPで補強する。特に北側袖は大型の自然石多数を積み上げ、明褐色土を充填して作られていた。焼土は竈底面に全域に散らばるが、まとまった量ではなく範圍としては図



67図 1号住居跡(2)竈

III 遺構と遺物



68図 1号住居跡出土遺物

示できなかった。炭化物も同様な分布を示していた。埋土土層中にも焼土・炭化物が多く特に3・4層は焼土塊を主体としており、竈構築材崩落土と捉えた。

床下土坑などは褐色貼床土を除去し検出に努めたが、確認できなかった。

遺物は埋土中より土器片が出土したが、量的には多くはなく、また埋土中遺物の殆どに良好な接合関係を見なかった。図示し得たのは、11点の遺物である。このうち1の須恵器坏、9・10須恵器甕破片、11の磨石が床面あるいは床直上より出土している。土師器甕類(3~7)は竈内埋土中より多く出土した。また、P2北西に大型の扁平な自然石が床直で出土している。平坦面を上に向けた正位ともいえる出土状態で、あるいは作業台のような用途が想定されよう。ただし平坦面には使用痕跡などは認められなかった。

出土遺物から判断して、9世紀前半~中頃の所産と捉えた。

2号住居跡

1号住居跡と同様にII区東側の傾斜変換点で調査した。東への傾斜が強くなる箇所であり、10mほどで南側の段丘崖に達する。台地縁辺の占地といえよう。西側及び北側は緩やかな傾斜で、本住居跡周辺までが平坦地形を維持する。

近接する遺構としては、北7m程に1号住居跡、南東約2mに1号井戸が見られる。やはり土坑群や近代サク状遺構が密集しており、45号坑や47号坑が重複し、サク状遺構は数本が本住居跡を北東から南西に壊す。しかしながら、サク状遺構の深度は浅く住居跡の床面までは達しておらず、住居跡規模等の把握には支障はない。

平面形は主軸長3.5m、横軸長4.1mを測り、1号住居跡と同様に横長の長方形を呈す。南壁の東寄りにやや乱れが見られ、重複する土坑に南東隅と北西隅が切られているとはいえ、全体観としては、比較的整った平面形を示している。壁高は約30cmで概ね良好な遺存度といえよう。立ち上がりも開き気味ながら、しっかりした掘り込みを呈す。

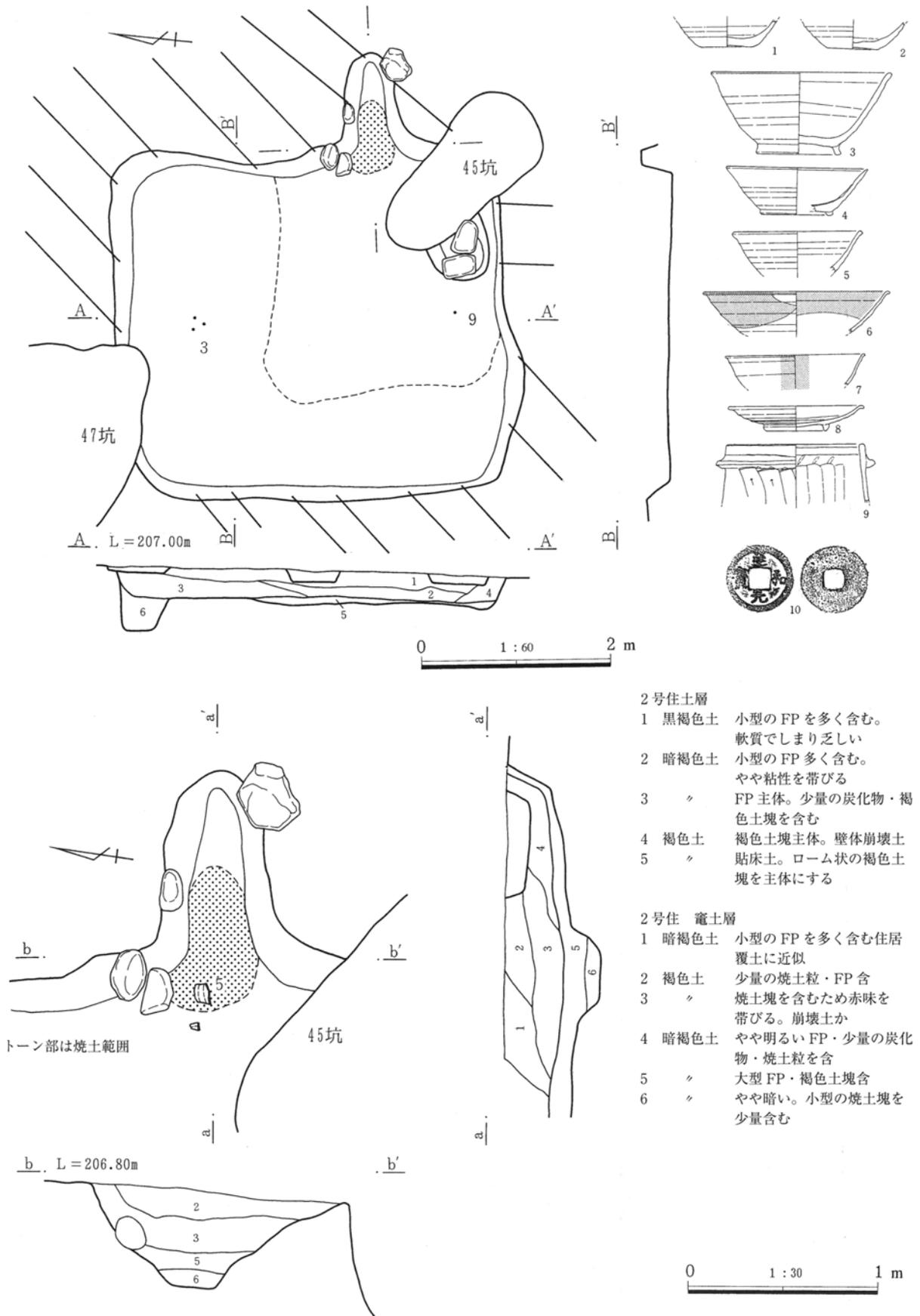
床面はFP中層で留まり、若干南側へ傾斜するが、ほぼ平坦面を築きあげる。貼床土は鈍褐色ローム質土で、3cm程度の厚さで、床面中央部から南東へ広がる。硬化面は竈周辺にかけて見られたが、光沢を持つ程ではなくやや軟質な床面と言えよう。尚、図示した貼床範囲は方形を呈し間取りを示唆する形態を見せるが、これはセクションベルトに沿うものであり、若干の過掘も生じているため、厳密な貼床範囲ではないことを申し添えておく。

床面上の施設としては、当初貯蔵穴のみが確認されていた。南東隅に45号坑に切られる形態で検出した。自然礫が混在し、20cm程度の深さで、浅く掘り込みも不明瞭であった。その他の施設は床下遺構調査で得られたピットである。柱穴として位置付けたいが、配置は不規則であり確証に欠ける。深さは40~60cmでしっかりしたものである。壁周溝は認められなかった。床下遺構としては、床面北東側に楕円形状の土坑を確認した。深さは40cm程で掘り込みもしっかりしていた。床下土坑として位置付けた。

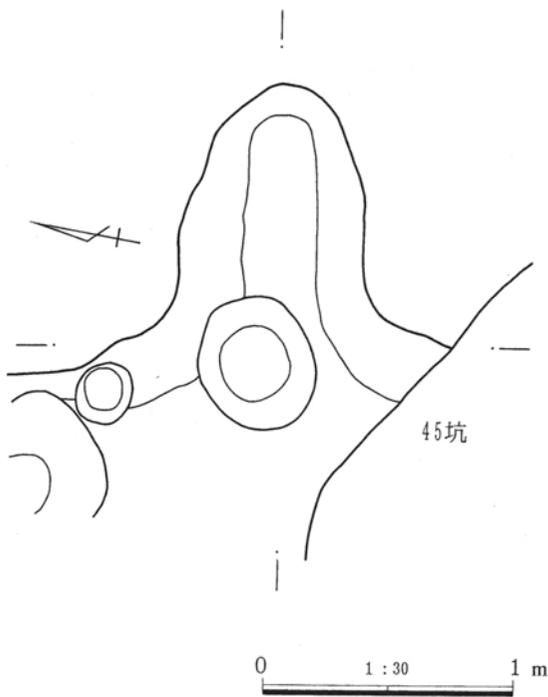
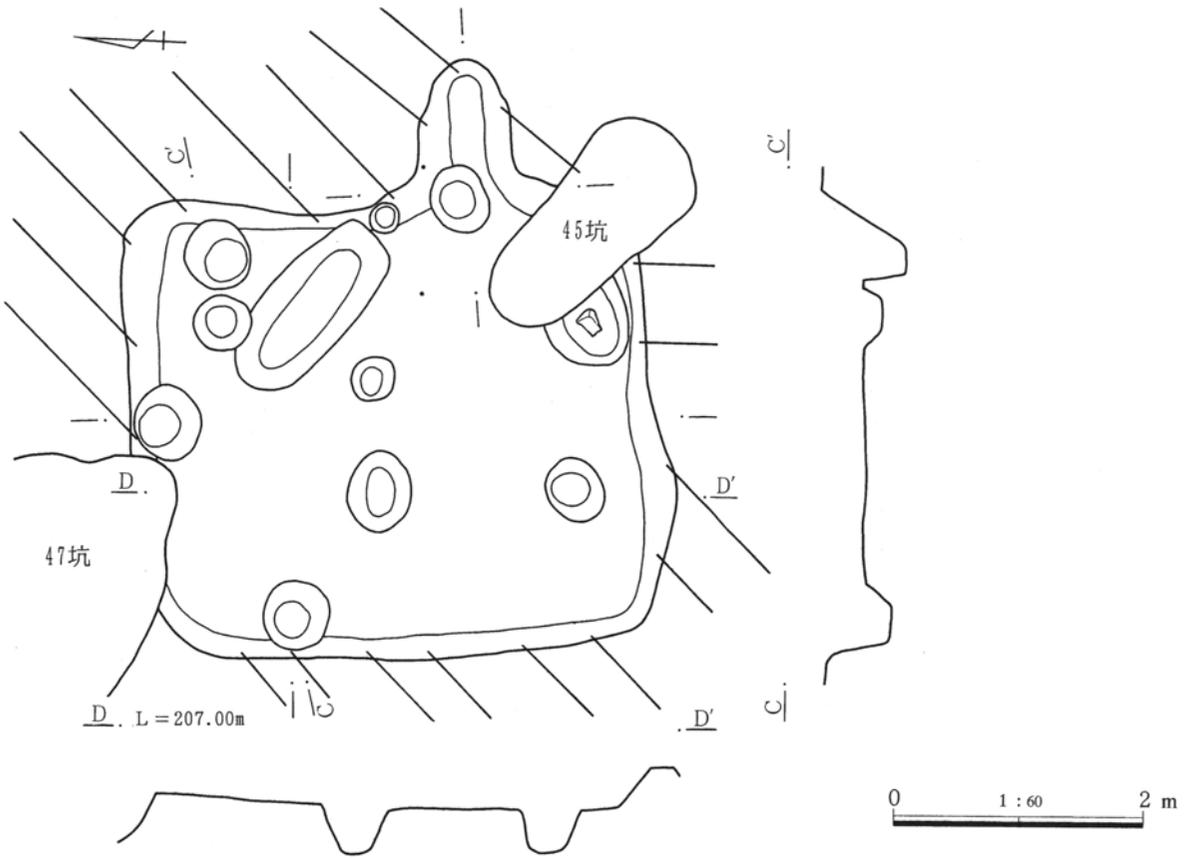
竈は東壁のやや南寄りに設けられる。煙道は東壁外へ大きく1m程突出し、立ち上がりも強い。竈補強材として数個の自然石が出土したが、北側壁への補強のためか貼り付けられた状態を示す。煙道東端にも大型の自然石が見られたが、近代サク状遺構によって原位置を移動しているものと考えた。焼土範囲は焚口燃焼面にまともって確認された。焼土・灰・炭化物からなり2cm程度の層厚である。竈埋土中からも焼土塊は多く出土し特に3層に顕著に見られた。構築材崩落土と判断した。また、焚口部下位に径50cm程の不整円形の土坑を床下調査で得た。焼土塊が含まれており、焚口部の何等かの施設であろう。

遺物は須恵器類を中心に少量が出土し、土器類9点、古銭1点を図示した。このうち古銭は至和元寶と思われ、

III 遺構と遺物

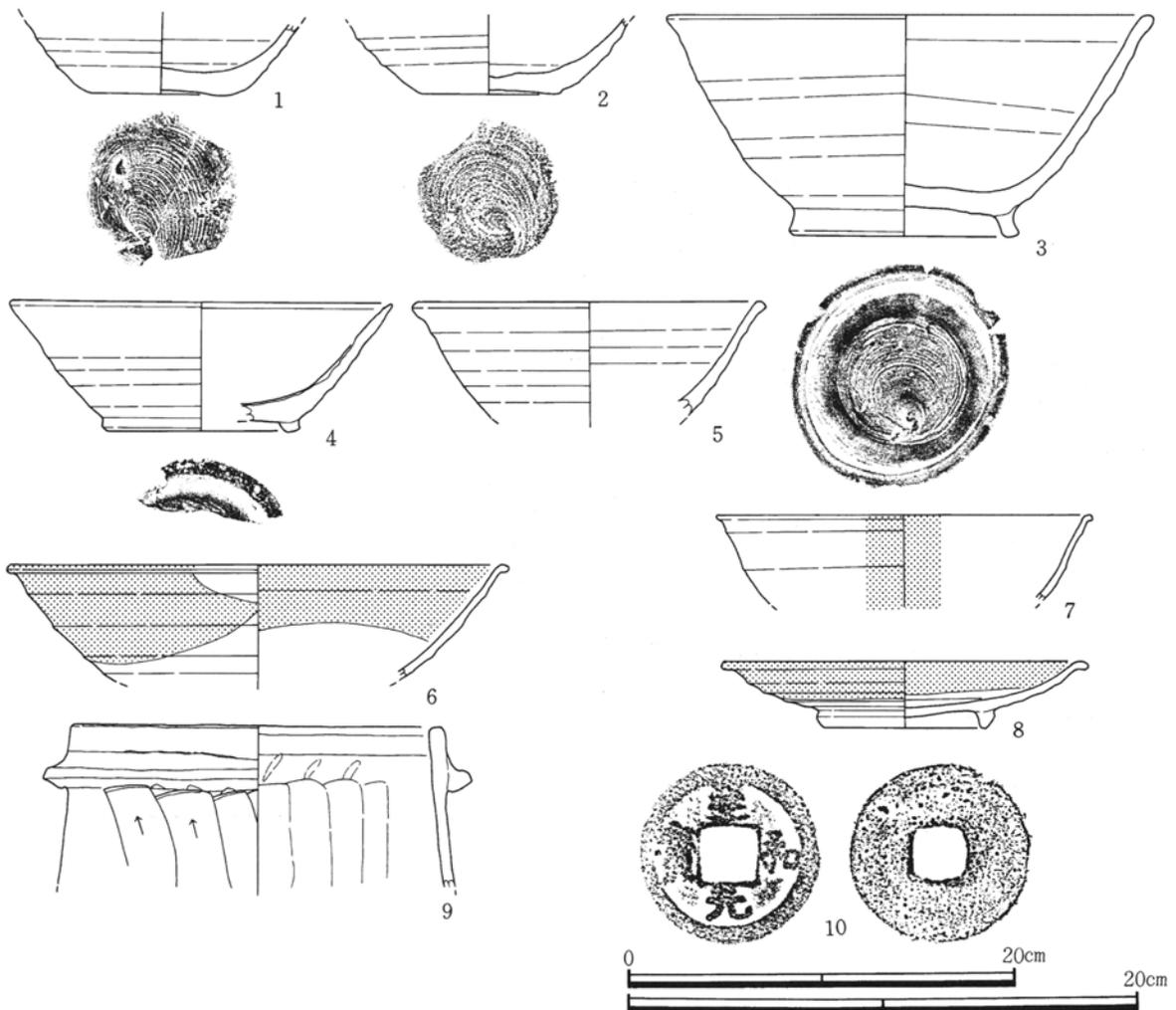


69図 2号住居跡(1)



70図 2号住居跡(2)床下

III 遺構と遺物



71図 2号住居跡出土遺物 トーン部は施釉範囲

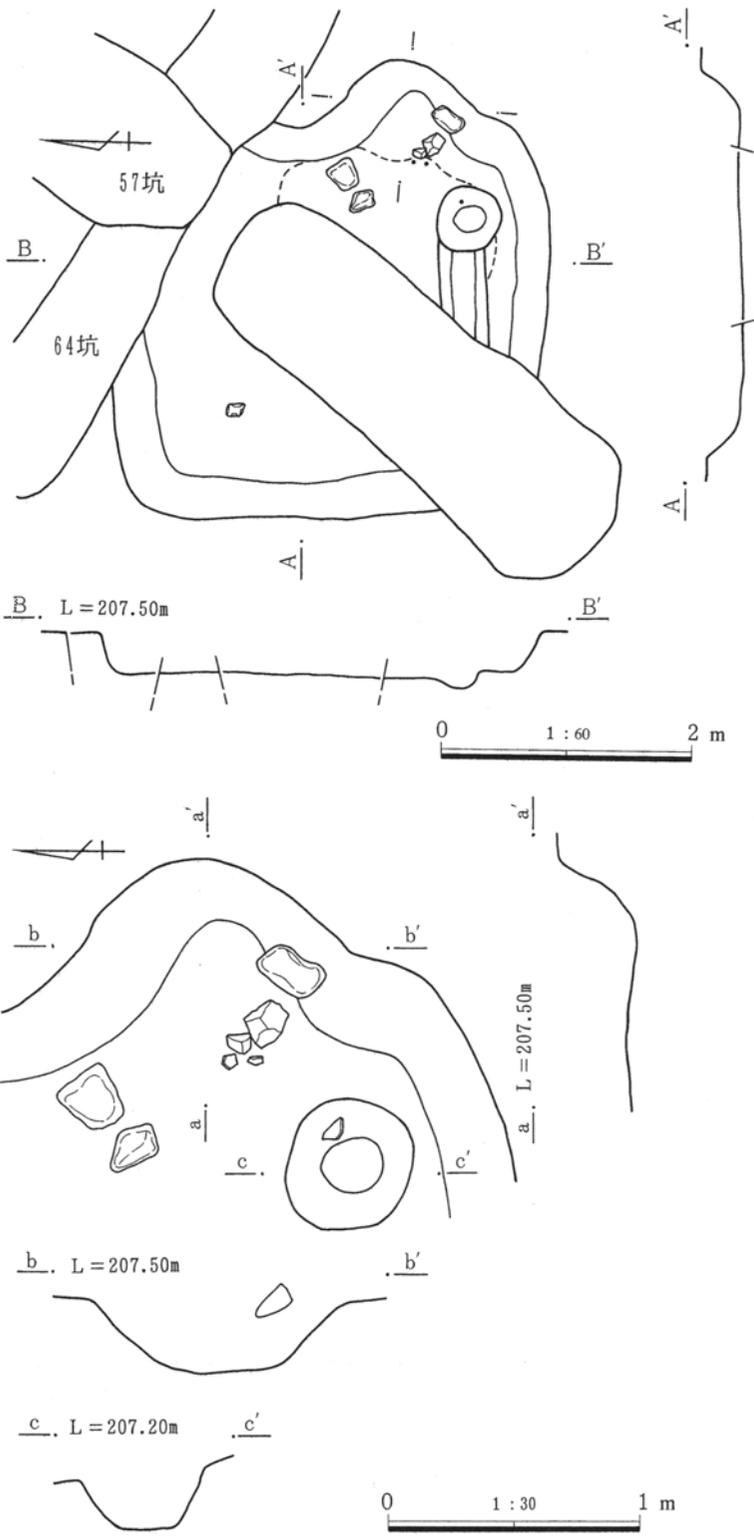
若干の時期差が見られる。重複する土坑出土の可能性もある。土器類としては、須恵器大型碗(3)が床面中央北寄りで床直で出土した他、羽釜口縁部破片(9)が南壁際、須恵器碗口縁部破片(5)が竈から出土している。その他は埋土中の出土となるが、土器類に関しては灰釉陶器や羽釜の組み合わせから、時期差の大きな隔たりはなく、10世紀前半段階の所産と考えられる。

3号住居跡

II区北西側で、南西方向と南東方向への傾斜が緩やかに見られるが、ほぼ平坦地形に占地する。周辺は大型の長方形土坑群が存在し、そのため本住居跡も複数の土坑と重複しており、57号坑や64号坑等に大きく切られる。遺存度としては極めて不良である。近接する遺構としては重複する土坑以外に、北1mに4号住居跡が近接する。また、3・4号住居跡は現道を隔てて5・7・8号住居跡と一群をなし、本住居跡はこの一群の南端に位置することになる。

平面形は、3.3×3.7mのやや小型の不整形を呈す。北東隅及び南西隅を土坑に切られ判然としないが、北西隅が整った形状であり、遺存度が良ければ整った平面形を示すものと思われる。壁高は約30cmで、立ち上がりは緩やかに開く。

5 Hr - FP上で検出された遺構と遺物



72図 3号住居跡

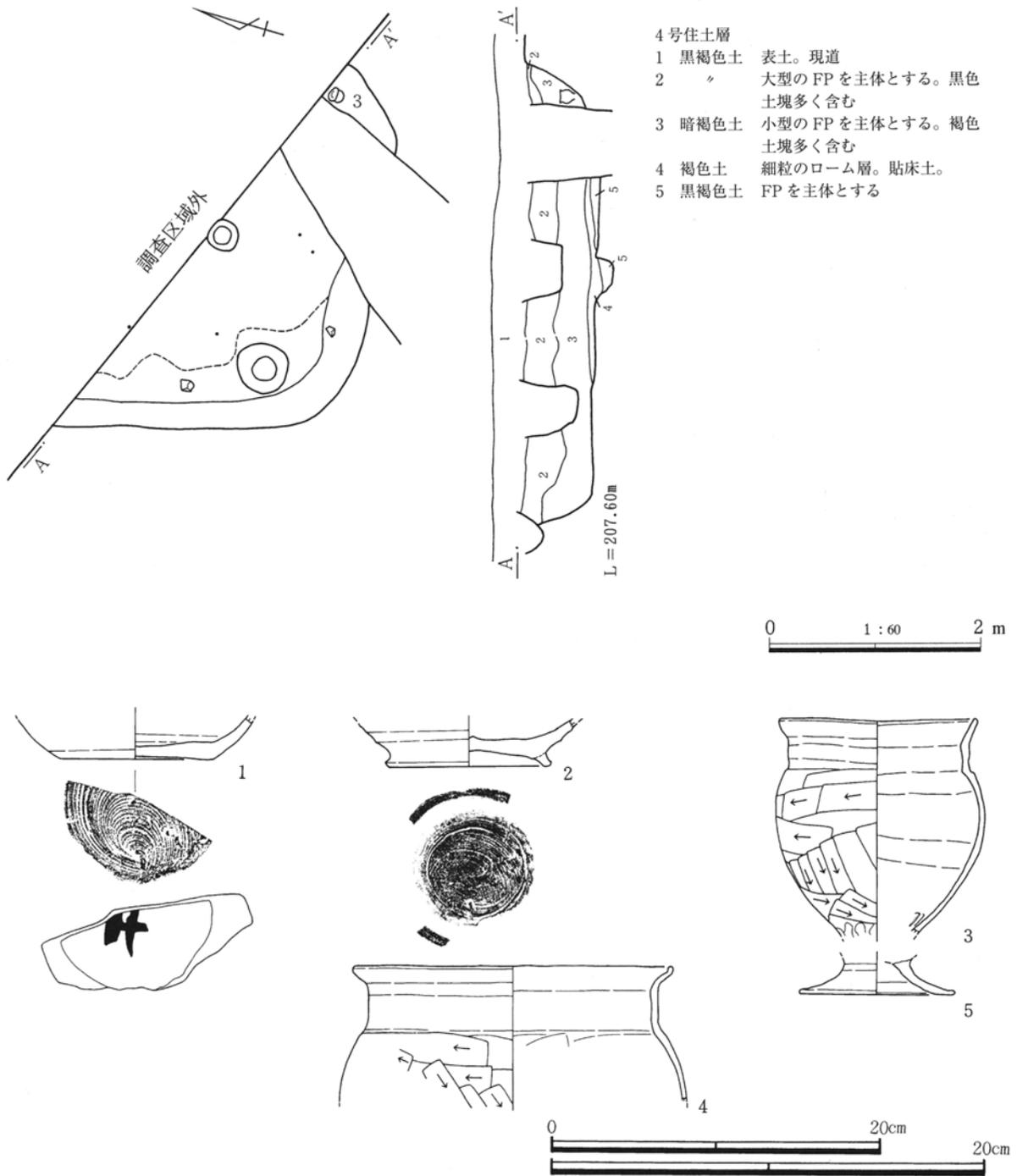
床面はFP中層で留まる。前述のように土坑による破壊が著しく判然としないが、僅かに南側へ傾く兆しを見せるがほぼ平坦といえよう。貼床は鈍褐色ローム質土が竈周辺及び南側壁付近に認められたが、その範囲は不明である。硬化面も見られず、残存部判断では軟質の床面と捉えられよう。床面北西部はFP層を平坦に仕上げている。

床面上の施設としては、南東隅に径約50cm・深さ約20cm程度の不整形円形の貯蔵穴を見る。この貯蔵穴から、西へ幅約35cmの浅い溝が延びるが、壁周溝としては広く、検討を要する。あるいは床下壁際の凹みと壁周溝が重なった誤認も可能性があり、ここでは壁周溝としての位置付けも踏まえておきたい。柱穴・床下土坑は見られなかった。

竈は東壁南寄りに設けられ、東南隅と一体化する。調査当初、竈位置を誤認し64号坑重複部においていたため、後に竈を確認に至った際には土層の観察は果たし得ない状態であった。竈は、住居跡規模に比してやや大型である。煙道は東壁から突出し、やや緩やかに立ち上がる。おそらく、住居跡廃棄時に竈の破壊が大きく行われたのか、構築材としての自然石が散乱した状態で出土した。袖及び壁補強材として考えられよう。

遺物は住居跡埋土・竈内・貯蔵穴から少量の須恵器・土師器甕破片を見たが何れも小破片で接合関係も思わしくなく、図示に至らなかった。編者の観察では9世紀後半に比定したが確定的ではない。

III 遺構と遺物



73図 4号住居跡及び出土遺物

4号住居跡

3号住居跡と同様にII区北西側で調査した。住居跡北半分以上が現道下にかかるため、安全対策上南半のみの検出となった。3号住居跡やI区5・7・8号住居跡と一群の住居跡群を構成する。3号住居跡と近接し、57号坑に切られる。

平面形は不整形を呈し、3.5m程の主軸長と思われる。南西隅に比して、南東隅の形状はやや不整で貯蔵穴・竈の影響が窺われる。壁高は確認面で約50cmだが、土層では65cmを観察することができた。

床面はFP中層まで掘り抜き、僅かな凹凸があるもののほぼ平坦面を築く。貼床は褐色ローム質土を厚さ10cm程度で西壁際以外に広がりを見せた。硬化面は見られず軟質な床面といえよう。

柱穴・貯蔵穴等は特定できなかった。壁周溝も認められなかった。床面上で検出できた2基のピットでは、床面中央に径約30cm程の小ピットが柱穴としての可能性を持つ。また、南西隅で検出した径50cm、深さ20cmに満たない浅い土坑があるが、あるいは貯蔵穴として位置付けることもできよう。

竈も未検出である。ただし、東側壁にかけては焼土の散布が見られ、調査区域際で出土した小型台付甕と併せて、竈の存在を示唆するものである。おそらく東壁に設けられるものと判断した。

床下遺構も見られなかった。遺物も少量の出土である。殆どが埋土中よりの出土で床面からのものは無い。前述の小型台付甕(3・5)が東壁際で出土するものの、遺物の出土量が少なく、時期の確定は困難である。9世紀中頃とみたい。

5号住居跡

II区西端部で調査された。今回の調査ではもっとも標高の高い位置に占地する。周辺は東側と南側へ緩やかに傾斜するがほぼ平坦地形である。また、表土の堆積も薄く約20cmでFP上面に達する。

周辺は住居跡が密集する傾向を示す。7・8号住居跡が西に近接し、II区3・4号住と併せて一群となるものと考えられる。また189号土坑も近接するように、中・近世遺構も群在するが、本住居跡に限れば重複遺構は少なく大きな破壊は免れている。

平面形は4.1×4.7mの比較的整った方形を呈す。東辺が西辺に対しやや短いため若干不整の印象は得るが、各隅が整っているため、直線的な各辺が保たれている。ただし壁高は浅く20～30cmを測り、遺存度としてはあまり良くない。

床面はFP上層で留まり、均一な平坦面を築く。貼床として鈍褐色ローム質土が薄く数cmの厚さで広がる。概ね床面中央から竈周辺にかけて比較的広くその範囲を見る。硬化面は竈周辺に認められたが、僅かであり、全体的に軟質な床面といえよう。

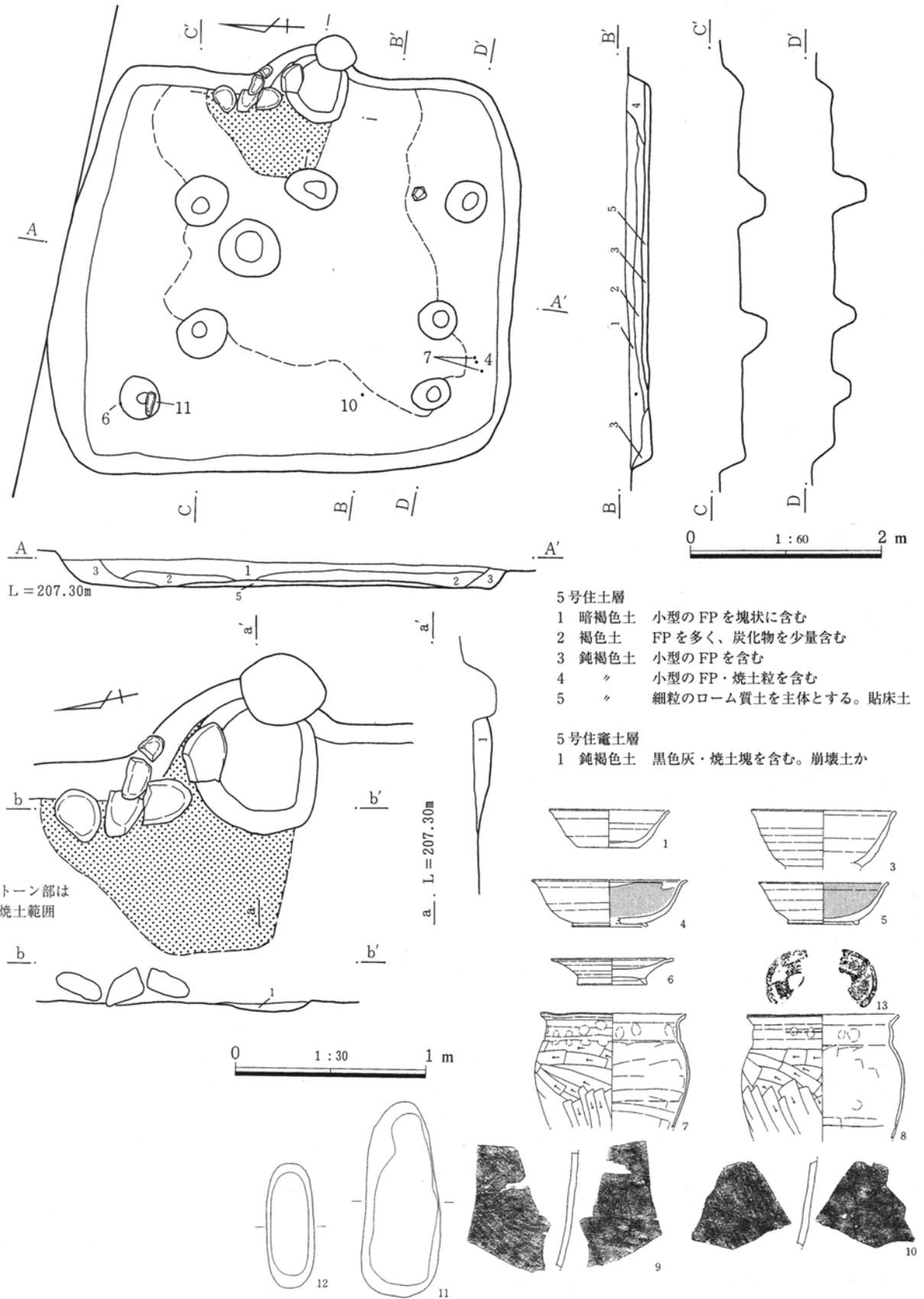
床面上からは、8基のピットが検出された。このうち配置からP1～P3・P5・P6は柱穴としての可能性が高い。あるいはP7・P8も柱穴として考えられるが、貯蔵穴としても位置的には妥当性がある。埋土の状態も柱痕は見られず、FPを混在する褐色土で均一であり、性格を確定するには根拠も少ない。壁周溝は認められなかった。

竈は東壁のほぼ中央に設けられる。煙道端部に小ピットが重複し、一部が判然としないが、東壁への突出は僅かで、緩やかな立ち上がりを示す。壁高が少ないせいであろう。全体的に遺存土は不良である。袖は明瞭ではなく、構築材として北側に自然石が置かれていた。散乱状態に近いが、北壁補強に使用されたものとする。土層も殆どが把握できず、最下層の焼土塊を確認したのみである。放棄時の竈破壊が大きかったのであろうか。焼土範囲は焚口部から床面にまで及ぶ。これも破壊時の散布とも捉えられ、燃焼に伴うものではないと思われた。

床下調査による床下遺構としては明確には検出できなかったが、P4は貼床下にあり、床下土坑として位置付けた。径約60cm、深さ約30cmで不整形を呈す。埋土はFP主体の暗褐色土である。

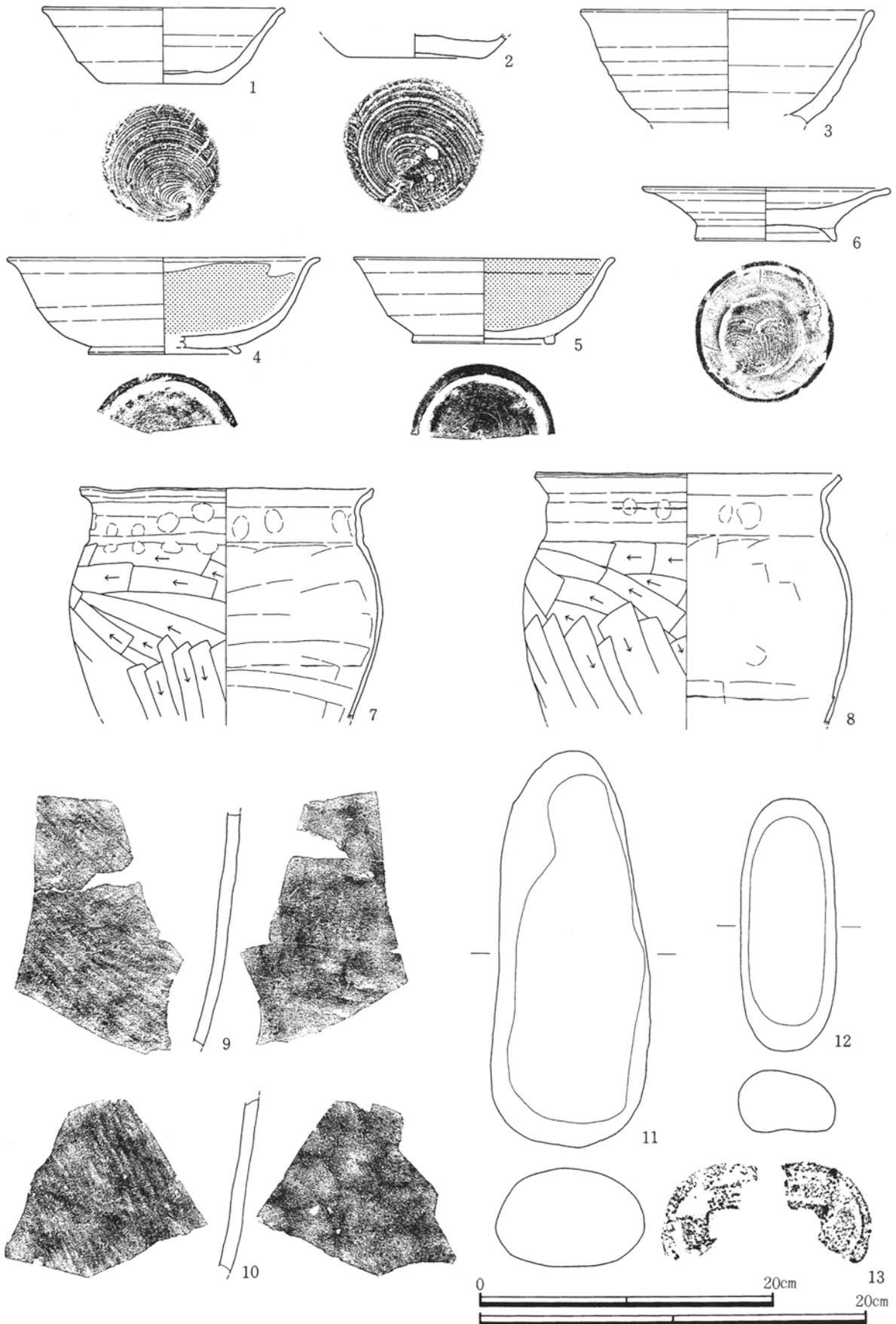
出土遺物は遺存度の割には多い。平面形確認時から出土遺物が多く見られ、12点を図示した。殆どの遺物が床直あるいは埋土下位の出土である。P7と周辺からは須恵器皿(6)や薦網石(11)、南側壁際からは灰釉陶器椀(4)と土師器甕(7)が出土している。5の灰釉陶器椀は平面形確認時の出土である。また、古銭が出土しているが、混入の可能性が高く確証的ではない。

III 遺構と遺物



74図 5号住居跡

5 Hr - FP 上で検出された遺構と遺物



75図 5号住居跡出土遺物 トーン部は施釉範囲

III 遺構と遺物

上記の床面出土の灰釉陶器や土師器甕の様相から9世紀中葉に時期を求めたい。

6号住居跡

I区東側で住居跡としては単独で検出した。調査当初は大型の土坑として判断した経緯があるが、調査中に僅かに残る竈と出土遺物から住居跡と確定した。周辺地形は南西に緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦地形の中にある。

本住居跡周辺には同時期の住居跡は近接しておらず、中・近世土坑群等が群在する。北側には長楕円形土坑の160・161号土坑が近接し、東には5号溝が南北に走る。また、住居跡中央を現代の攪乱坑が東西に走り本住居跡の竈など主要なデータを逸失している。これとともに、西壁北半を近・現代の土坑が大きく重複している。

平面形は不整長方形と思われ、各辺とも若干ながらの彎曲が見られる。規模は残存部の計測で約4.3×3.4mを測り、中型の住居跡である。深さは40cm程度で、壁の立ち上がりは緩やかに開く。

床面はFP中層に留まり、水平を維持するが凹凸が各所に見られた。貼床は鈍褐色ローム質土が、薄く竈周辺に認められた。硬化面は無く軟質な床面といえよう。

柱穴は床面中央を中心に開けられた1対のピットを充てたい。やや南寄りだが配置・規模からも妥当性が高い。貯蔵穴は見られなかった。当初南東隅と南西隅に重なるピットを貯蔵穴として考えたが、積極的な確証に乏しく、重複遺構として位置付けた。ただし南西隅のピットは配置・規模としては貯蔵穴の可能性は残る。壁周溝及び床下遺構も認められなかった。

竈は、東壁のほぼ中央に設けられるようだ。前述のように現代の攪乱坑で、竈本体が破壊されているので詳細は不明である。東壁を突出する煙道、南壁に残る補強材としての自然石と周辺の焼土の分布が僅かに観察された。住居跡の土層観察でもこの周辺に焼土・炭化物の堆積が認められた。

遺物は破片状態の灰釉陶器椀・須恵器甕・土師器甕・磨石等が埋土中より出土した。極めて少量と言わざるを得ない。6点を図示した。9世紀後半段階であろうか。

7号住居跡

I区西側の住居跡群東端で調査した。周辺は緩やかな傾斜をみるがほぼ平坦地形であり、土坑群あるいは近・現代の攪乱が密集する。

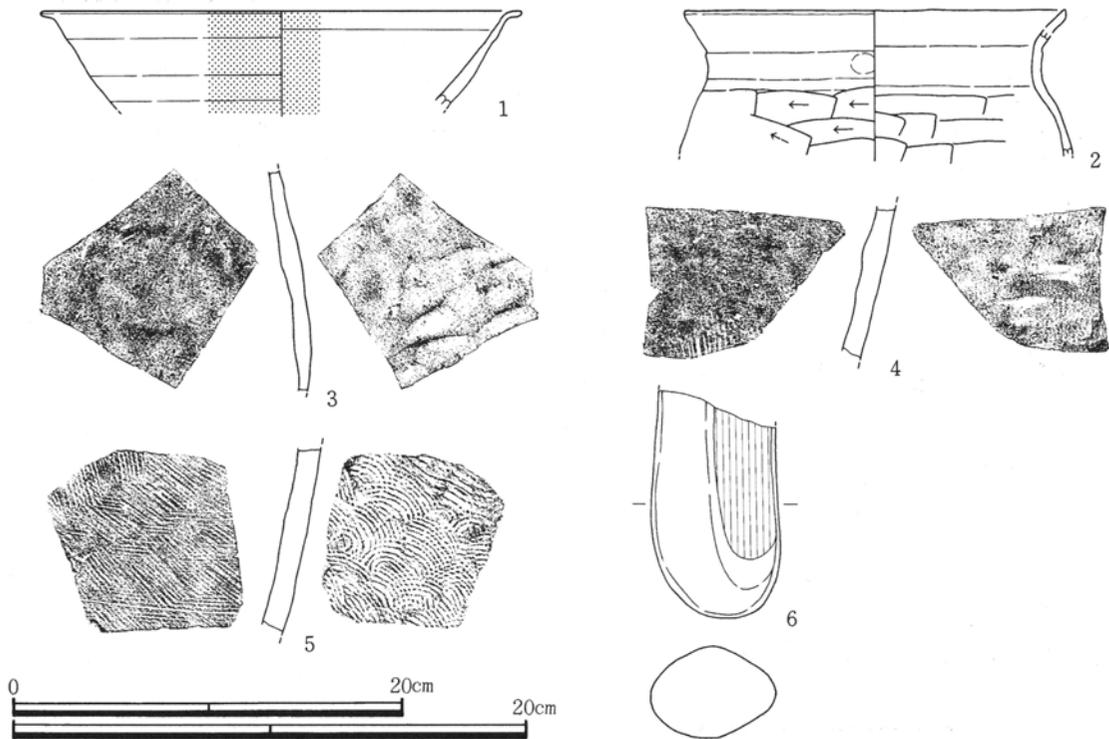
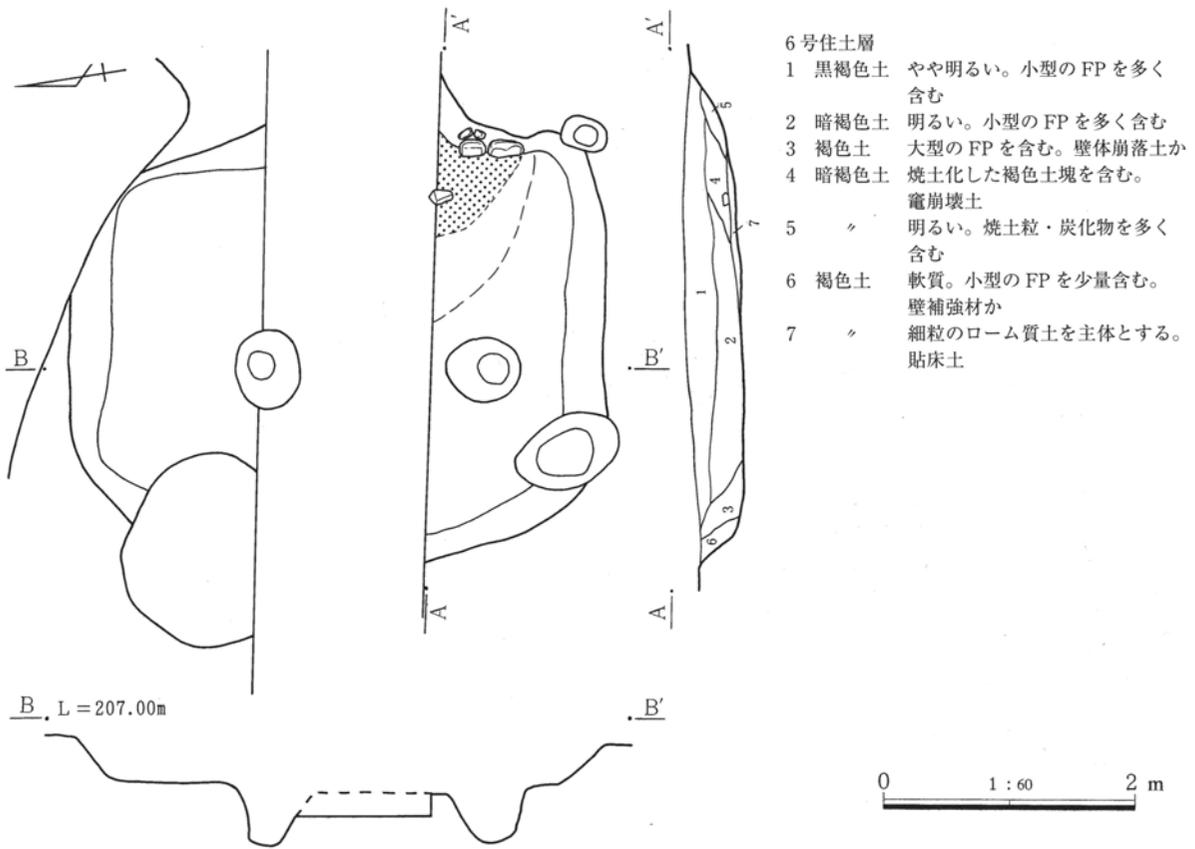
本住居跡も周囲を大きく攪乱される。竈北側は179号土坑が接する。床面西側には231号坑が南北に重複する。南壁は現代の井戸が構築され大きく壊される。また北西隅周辺は現代の攪乱坑と近代土坑が重なり、平面形の把握に大きな支障をきたした。

近接する住居跡としては前述の5号住居跡と8号住居跡が北西に位置する。何れも主軸方位が近く関係性のある集落と考えられよう。

平面形は、前述のように攪乱が多いため、詳細は判然としない。特に西壁の検出は、231号坑や北西隅を壊す近・現代の攪乱坑のため、苦慮を重ね図のようになったが、重複する別住居跡西壁の可能性もあり、判然としない。おそらく、4.5×5.6mの横長の不整方形を呈するものとする。深さは遺存度の良好な南東隅で30cm程度だが、東壁は確認面とほぼ同一であり、極めて不良と言わざるを得ない。上記のように、本住居跡の調査に関しては、平面形の把握に手間取り、断面観察主軸など不都合が生じ、記録化した土層図も掲載には至っていない。埋土の特徴としては、暗褐色土を主体としており、FPが混在する。

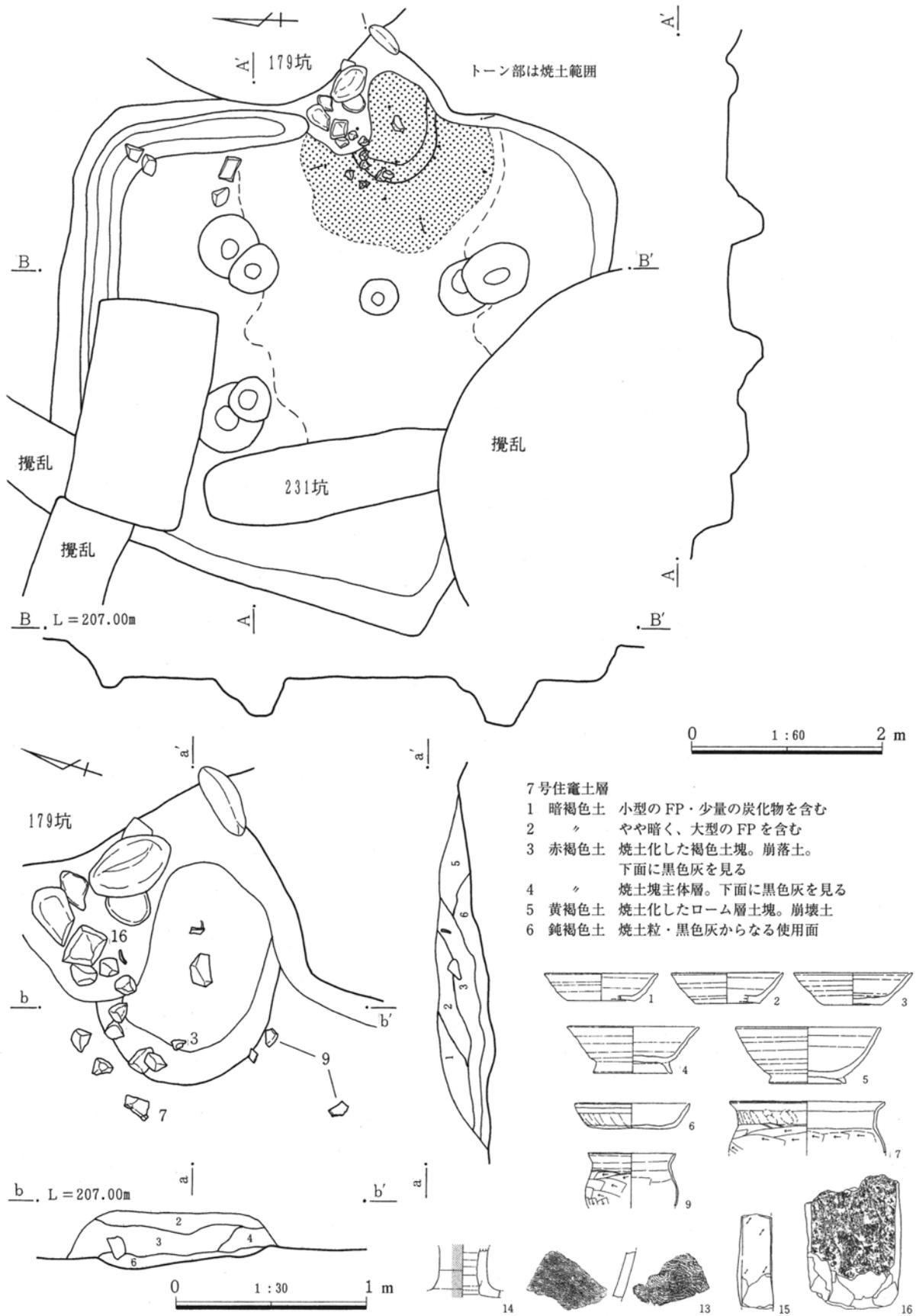
床面中央の攪乱は比較的少ない。僅かながら南側と東側への傾斜が認められるが、ほぼ水平といえよう。貼

5 Hr - FP 上で検出された遺構と遺物



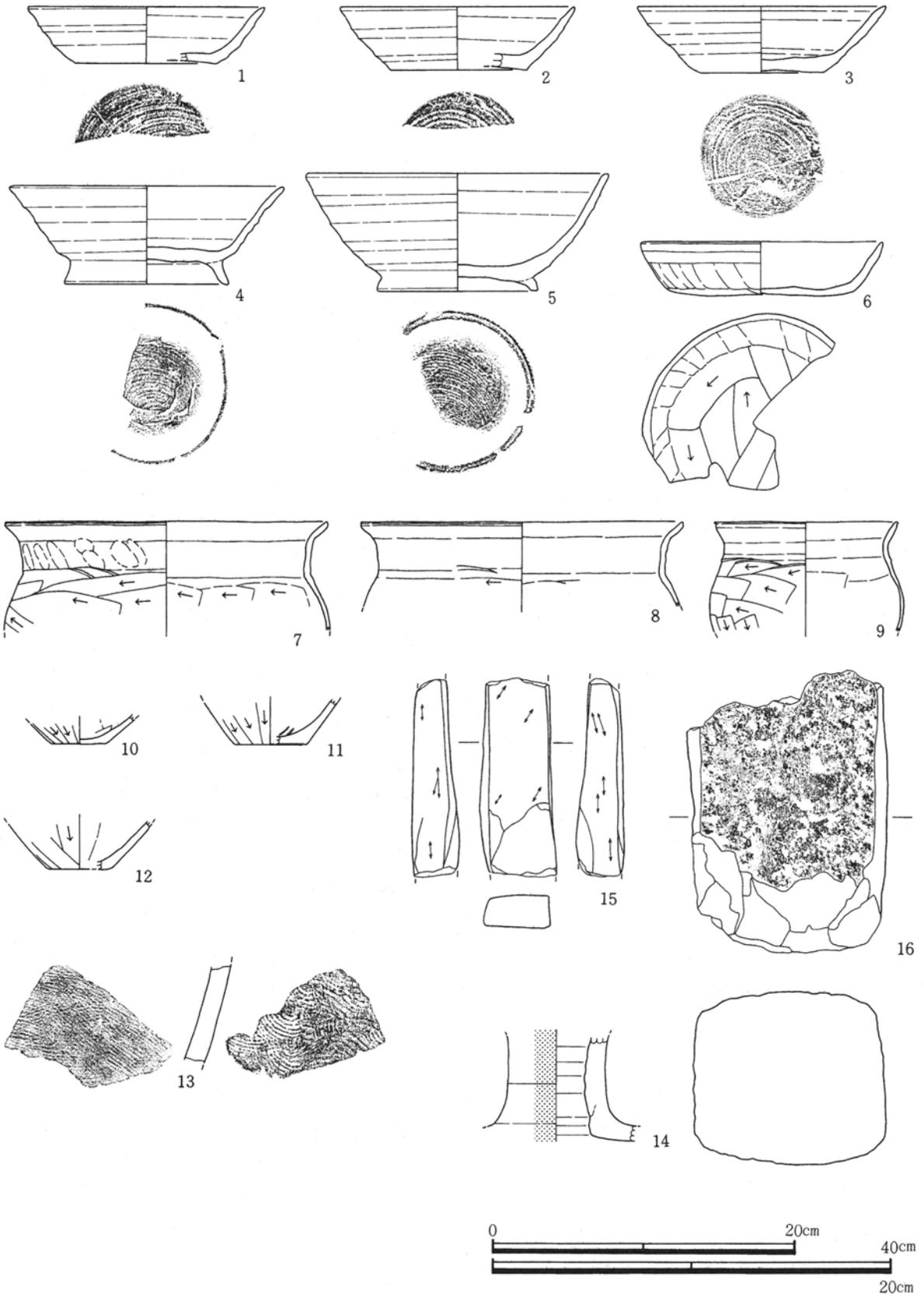
76図 6号住居跡及び出土遺物 トーン部は、1. 施釉、6. 磨り面範囲

III 遺構と遺物



77図 7号住居跡

5 Hr - FP上で検出された遺構と遺物



78図 7号住居跡出土遺物 トーン部は施釉

III 遺構と遺物

床は中央部分から竈周辺にかけて、鈍褐色ローム質土が薄く広がるが、西側は231坑により不明である。硬化面も見られず軟質な床面である。

柱穴は3箇所を確認した。おそらく4箇所の柱穴で構成されていたものと思われるが、南西部分は現代の井戸によって不明となっている。3基の柱穴はすべて重複状態で検出されている。恐らく住居建て替えに伴う柱穴の移動と考えられる。壁周溝は東壁北半から北壁にかけて検出した。北西隅で留まるものと考えられる。貯蔵穴・床下遺構は認められなかった。

竈は東壁中央で確認された。179号土坑が北接し、確認面との差が少ないため遺存度は悪い。煙道は東壁を突出し、袖は北側が顕著である。補強材として大型の自然石が散らばる。北側への遍在は他の住居跡にも共通する。竈内燃焼部にかけては僅かに凹み、焼土塊が充填していた。構築材崩落土と捉えたが、下面に黒色灰が見られた。焼土範囲は黒色灰も混在し床面にかけて広がる。

出土遺物は比較的多いが、床面上のものは小破片であり、殆どが竈内(3・7・9)あるいは埋土や床下調査時の出土である。また、竈袖石として4面加工された大型のFP(16)が使用されていた

8号住居跡

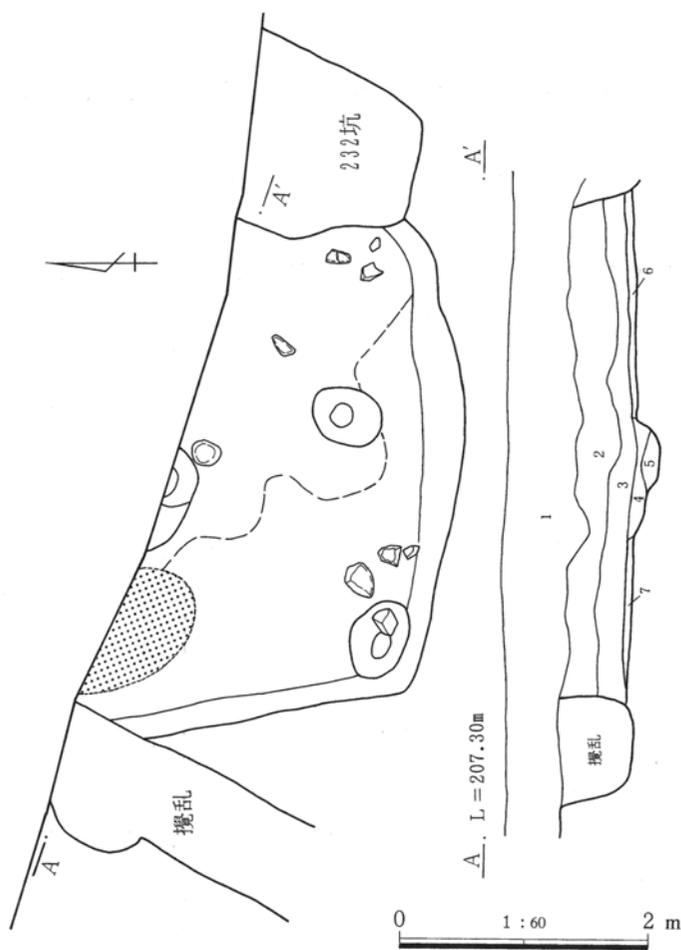
I区西側の住居跡群内で5号住居跡と7号住居跡間で検出された。北半は調査区域外のため調査は南側のみとなった。また、周辺は中・近世土坑群や近代の攪乱が多く、本住居跡の東側は232号土坑の重複によって逸失していた。また西壁の一部も近代攪乱坑で破壊される。

平面形は不整形を呈し、軸長は約4m程度の規模と考えられる。深さは断面観察で50cmを超えるが、確認面では35cm程度である。壁の立ち上がりは緩やかに開く。床面はFP中層で留まり、平坦面を築く。貼床は鈍褐色ローム質土が東側にかけて認められた。硬化面は見られなかった。

柱穴は東壁からやや距離をおいた箇所にピットを検出した。配置的に柱穴として位置付けたい。貯蔵穴は南東隅が232号坑に切られるため、判然としないが、南西隅にも浅い土坑が設けられており、これを貯蔵穴とする可能性もある。竈・壁周溝は確認できなかった。

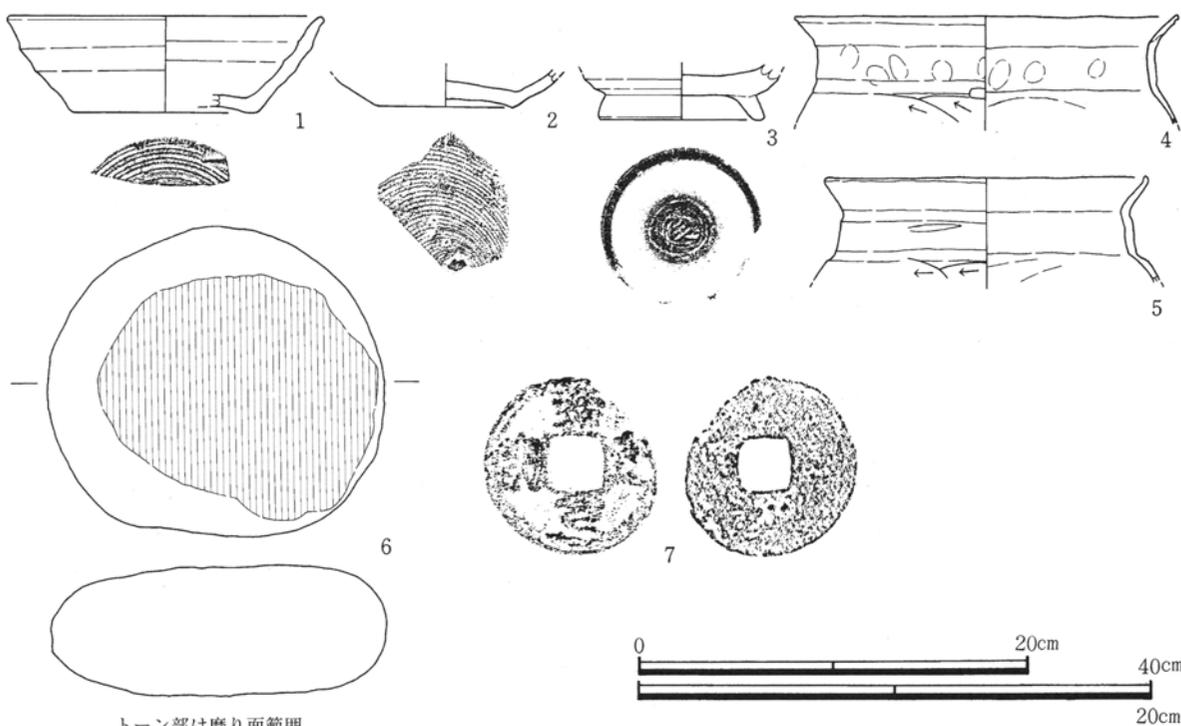
本住居跡は中央に炉を持つ。ただしこれも北半は調査区域外に延びるため南半のみの調査である。長軸80cmの楕円状の平面形を呈す。ただし主体部は東側にあり径50cm、深さ20cm程度の円形の炉である。埋土として、焼土・炭化物を主としていた。炉の西側にかけて、焼土が広く散布しており炉に伴う所産と捉えられた。また、炉東側には径25cmの扁平な自然石が出土している。平坦面に磨痕が認められ作業台として位置付けた。本住居跡の平面形確認時に、少量の鉄砕が出土しており、このことから、羽口などの出土は見られないが、小鍛冶機能を持つ住居跡と考えたい。

出土遺物は、前述の台石以外に埋土中より須恵器坏や土師器甕が出土している。また古銭を見るが、これは混入と捉えておきたい。時期は判然としないが、出土遺物から9世紀後半と見ている。



- 8号住竈土層
- 1 褐色土 表土
 - 2 暗褐色土 大型のFPを多く含む
 - 3 〃 大型のFP・炭化物・焼土粒を含む
 - 4 赤褐色土 焼土化したローム質土を主とする
 - 5 暗褐色土 焼土粒・炭化物を含む
 - 6 褐色土 ローム粒子を主体とする。貼床土
 - 7 鈍褐色土 焼土粒を混在する貼床土

トーン部は焼土範囲



トーン部は磨り面範囲

79図 8号住居跡及び出土遺物

III 遺構と遺物

(土坑)

本遺跡のHr - FP層の上面調査では、多数の土坑を検出した。その多くが中世～近代に比定され、本遺跡のFP上遺構は当地域の該期居住域・墓域を考えるに重要な資料と位置付けられよう。しかしながら、殆どの土坑の出土遺物は土坑の性格や時期を示唆するものは少なく、また埋土等の特徴も有機的ではないため、確証的な把握には至らない。

尚、調査中は近・現代の攪乱坑をも結果的に掘削対象としたが、記録段階で該期土坑と判断された場合は、調査対象から外し、その土坑番号は欠番としている。そのため本報告書でも土坑欠番が多く生じているが、ご容赦願いたい。

ここでは、全ての土坑の記述を避け、特徴的な土坑を抽出し概略を述べたい。個々の土坑規模や土層の特徴は巻末の土坑計測表を参照されたい。

1号土坑：II区西側で検出した不整楕円形状土坑である。規模は4m×2.5mで深さも1.5mと深い。土坑底面は鈍褐色ローム層に達しており、東壁は大きくオーバーハングしていた。壁体となっているFPは極めて崩れやすく、安全対策上土坑下位はFA下遺構調査後に行った。故に土層図の整合性にズレが生じ2層と3層の間の観察が及ばなかった。土坑の用途であるが、ローム面にまで掘削が達していること、壁のオーバーハングの状態から、小規模な粘土採掘坑の可能性もある。出土遺物は無く時期が不明だが、あるいは平安時代住居跡床面に供給した鈍褐色ローム質土の採掘坑として性格を想定しておきたい

2号・11号・12号・34号土坑：II区東側で4基が群在して検出された。東への斜面地形に占地する。径1.2m前後の不整円形の土坑群である。深さも60～80cmあり、しっかりした掘り込みである。一群をなす円形土坑として、墓壙等の性格が想起されるが、出土土器も細片であり時期も特定できない。

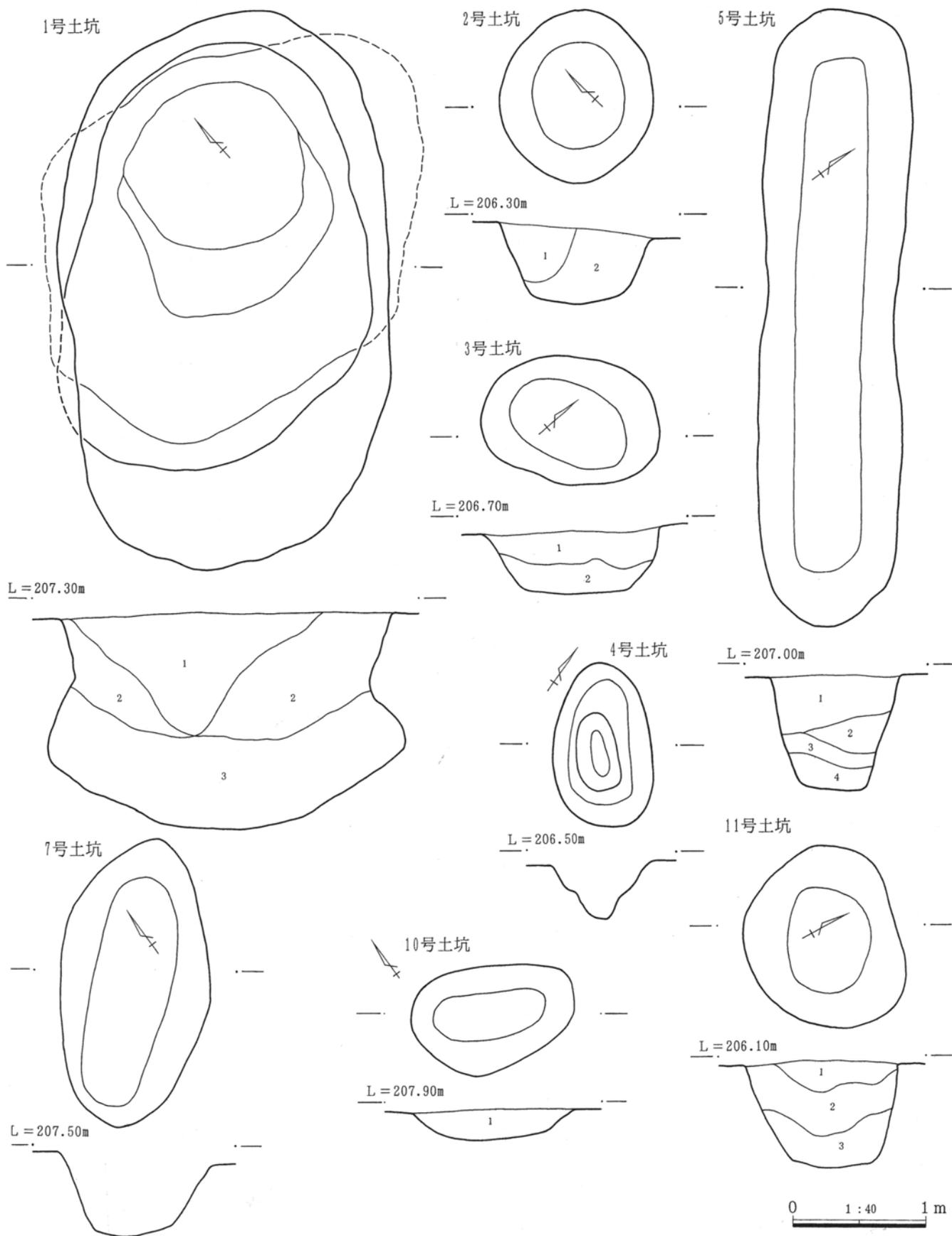
5号・19号・37号・88号土坑：II区東側で1号住居跡の西で群在する。長軸4mを超える長楕円状土坑で、掘り込みもしっかりしており、深く70cm以上を測る。5号・19号・37号土坑が軸を北西に向けるに対し、88号土坑は北東を向く。88号坑のみが前3者と直交する配置である。あるいは後述する87号坑と関連があるのかもしれない。出土遺物は19号土坑より砥石が出土する。時期は近世であろうか。

14号・21号・35号土坑：II区北西で調査した縦長方形の土坑である。35号坑に北接して13号土坑(欠番)があるが、近代の所産と判断した。5号坑などと同様な縦長の土坑であり、区画土坑等の用途が想定される。14号・35号坑は13号坑と同様に北東に軸を向け、21号坑は北西に長軸を持つ。21号坑からは磨石が3点出土している。時期は近世～近代であろう。

20号・23～25号土坑：14号坑と同様にII区北西で検出した不整円形土坑である。20号坑と24号坑が径120cm程、23号坑と25号坑は径80cmとやや小型である。特徴的な土坑ではないが、20号土坑から古銭(永樂通寶)が出土しているため、墓壙群の可能性もある。

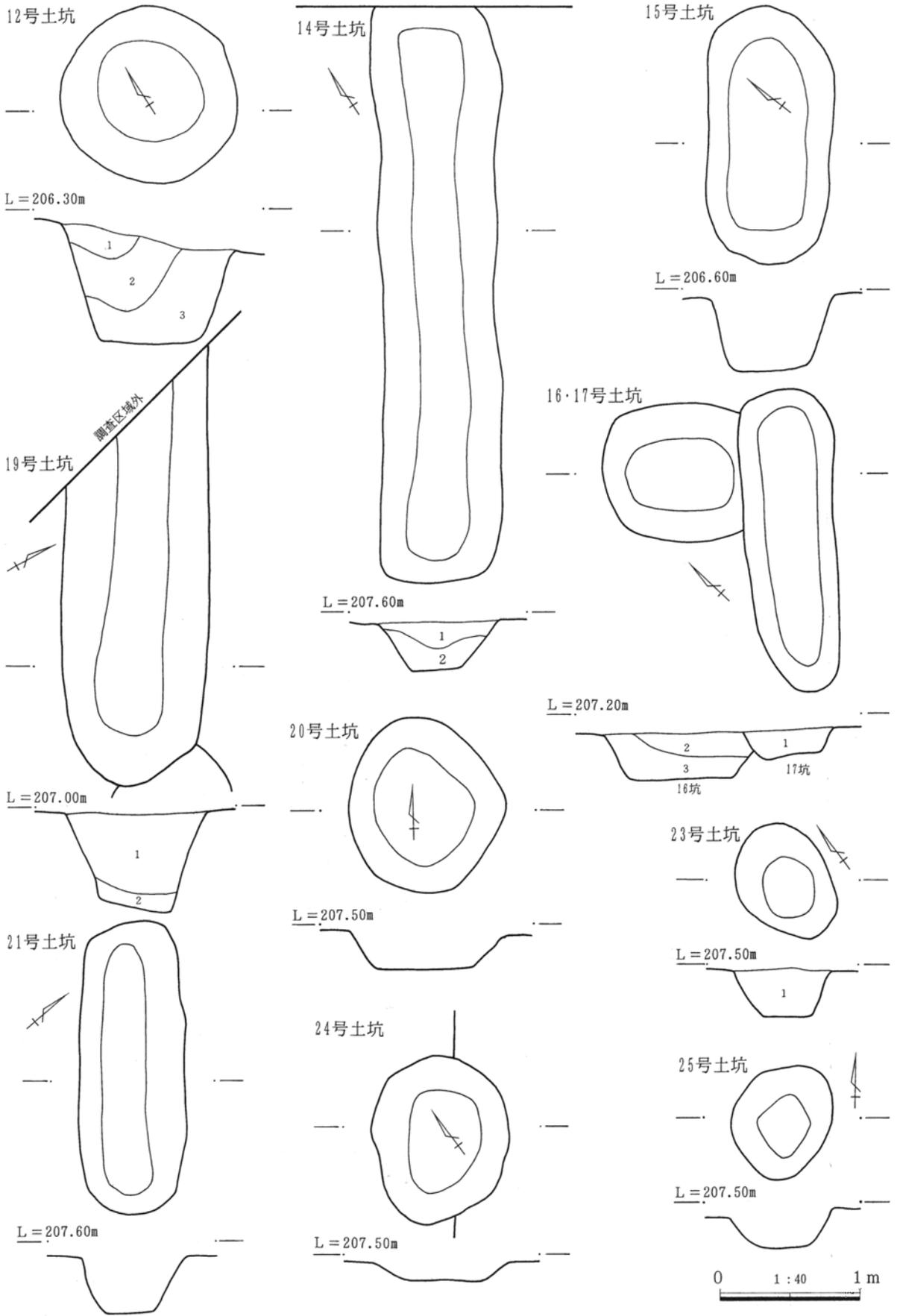
33号・55号・54号・57号・58号・64号土坑：II区中央北側で3号・4号住居跡と重複・近接して調査された。縦長長方形・長楕円形状を呈す土坑である。前述の5号土坑や14号土坑と同様に長軸を北東に向ける57・58号坑と北西に向ける54号坑・64号坑に分けられる。33・55号坑はやや軸をずらす55号坑が北西を向くようだ。54号坑からは軟質陶器鉢口縁部破片、55号土坑からは鉄釘、57号土坑からは須恵器碗破片が出土しているが、いずれも時期特定には至っていない。

45号・47号坑：何れもII区東で2号住居を切る重複関係で検出された。45号坑はやや小型の楕円形状、47号坑は不整円形の平面形を呈する。埋土に黒褐色土が充填される共通性を持つ。

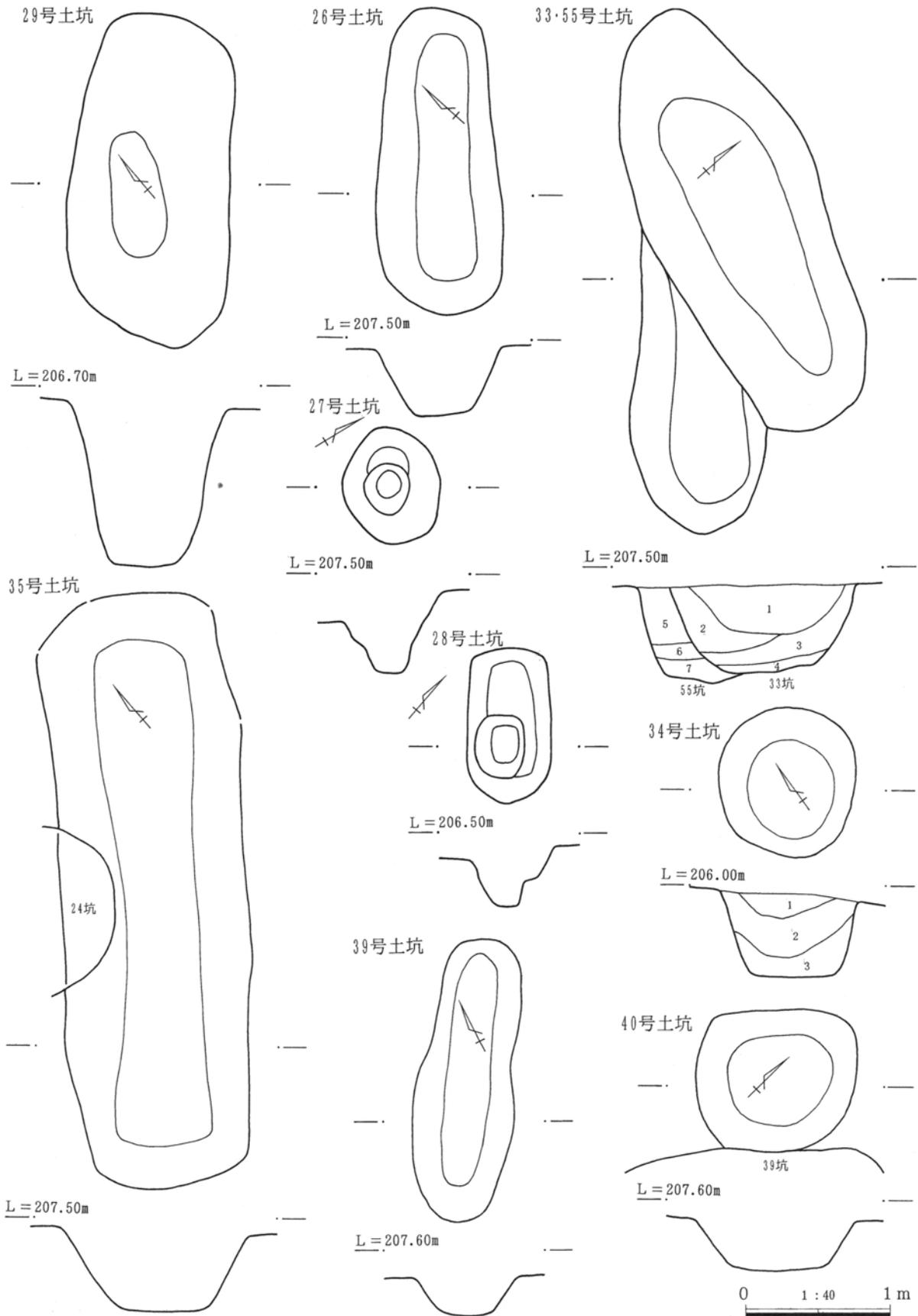


80図 土坑(1)

III 遺構と遺物



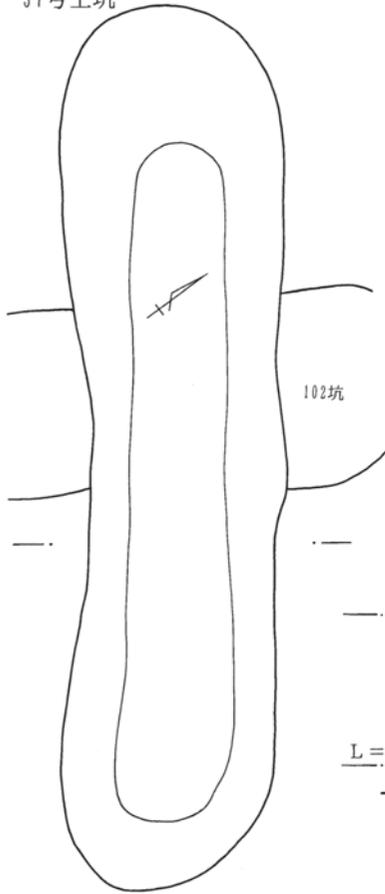
81図 土坑(2)



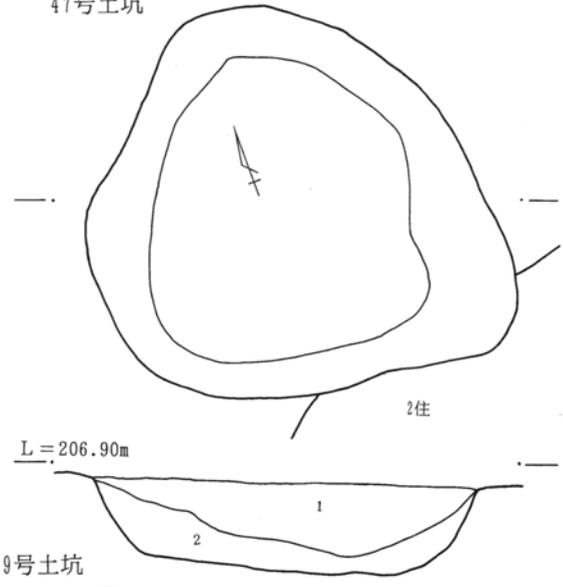
82図 土坑(3)

III 遺構と遺物

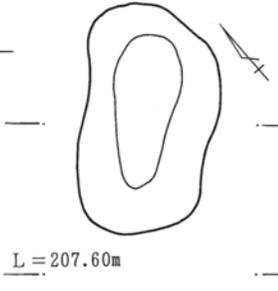
37号土坑



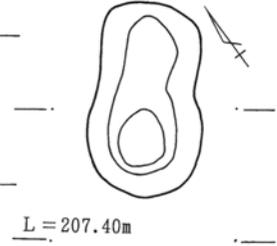
47号土坑



42号土坑

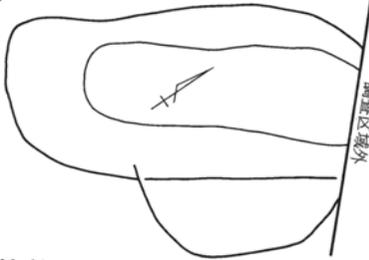


49号土坑



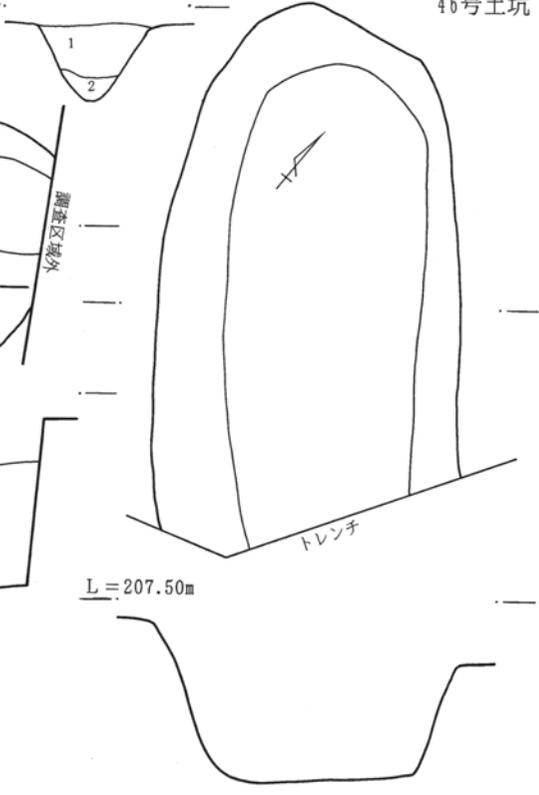
L = 206.50m

41号土坑

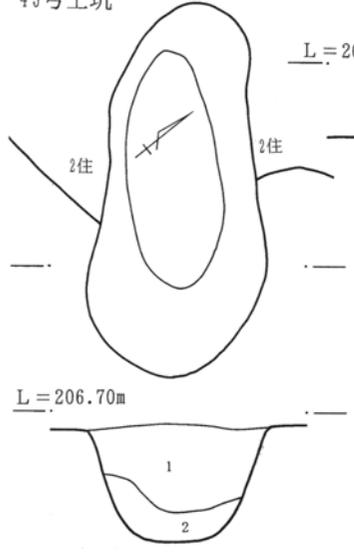


L = 207.40m

46号土坑



45号土坑

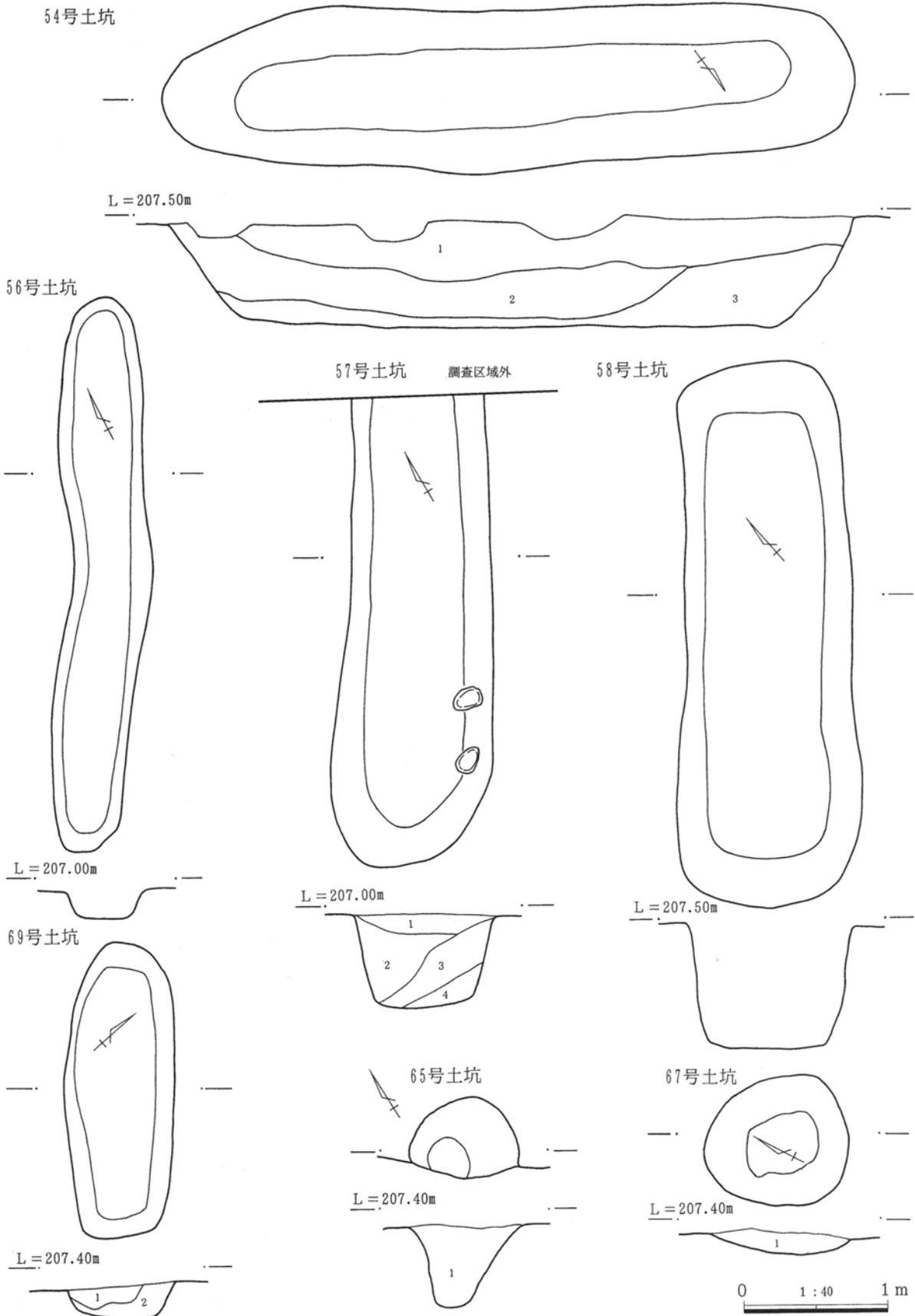


L = 206.80m

L = 207.50m



83図 土坑(4)



84図 土坑(5)

III 遺構と遺物

62号・63号・66号土坑：II区北西で調査された長楕円形状土坑である。特に66号坑は長軸長約5.5mを測り、溝状をなす。これらの土坑も他の縦長土坑と同様に軸を北西と北東に向け直行する傾向を見せるものである。

71号・73号土坑：II区中央やや西側で検出された、不整形を呈する土坑である。南北に連なる状態で近接している。73号坑が大型で浅い状態に対し71号坑は小型で深い。出土遺物もなく、埋土の特徴も見られないが形状が類似する土坑の近接例として注意した。

76号坑：II区中央南側で75号土坑とともに調査された。重複関係は不明である。2.7×1.5mの比較的整った長方形を示し、深さも52cmを測る。軸を北西に向ける。褐色土を主体とした明かな埋土状態であった。遺物としては土師質土器片が出土している。

79号土坑：II区南側で検出された。78号土坑と近接する。やや小型の不整形長方形で軸を北東に向け、76号坑と対症的な在り方を示す。褐色土を主体とした埋土である。

82号土坑：II区中央で69号土坑と近接して調査された。1.9×1.6m程の不整形長方形の平面形で、深さも50cmを測る。坑底面は凹凸が見られるが水平が意識され平坦といえよう。黒褐色土を中心とした埋土である。出土遺物は無い。

87号土坑：先述の88号坑土坑の西に近接する。調査区東にあたる。比較的整った長方形を平面形とし、しっかりした掘り込みを示す。規模は2.5×2.1mで深さは70cmを超える。坑底面は平坦である。軸方位は周辺の5号・19号・37号・88号坑と同一であり、縦長方形土坑に囲堯された何等かの施設であろう。

92号土坑：II区中央東よりで、1号掘立柱建物跡に近接して検出された。大型の方形土坑である。規模は軸長2.2×1.9m、深さ70cmの不整形長方形を呈する。断面形は87号坑と同様に箱形を示す。周辺に縦長方形土坑は無く、87号坑との差が見られよう。

103号～143号土坑：II区で確認されたその他の小土坑・小ピットである。全てが無機的な土坑ではなく、埋土などの様相から、古代・中世～近世に比定され得るものと捉えている。例えば、1号掘立柱建物跡周辺の小ピットは、付帯設備の在り方を示すものと考えている。さらに、大型土坑や攪乱坑のために把握・抽出し得なかった建物跡も存在するものと考えている。今回は雑駁な報告方法であるが、これら小規模な遺構に関しても有効な調査・整理方法を模索する必要があるだろう。

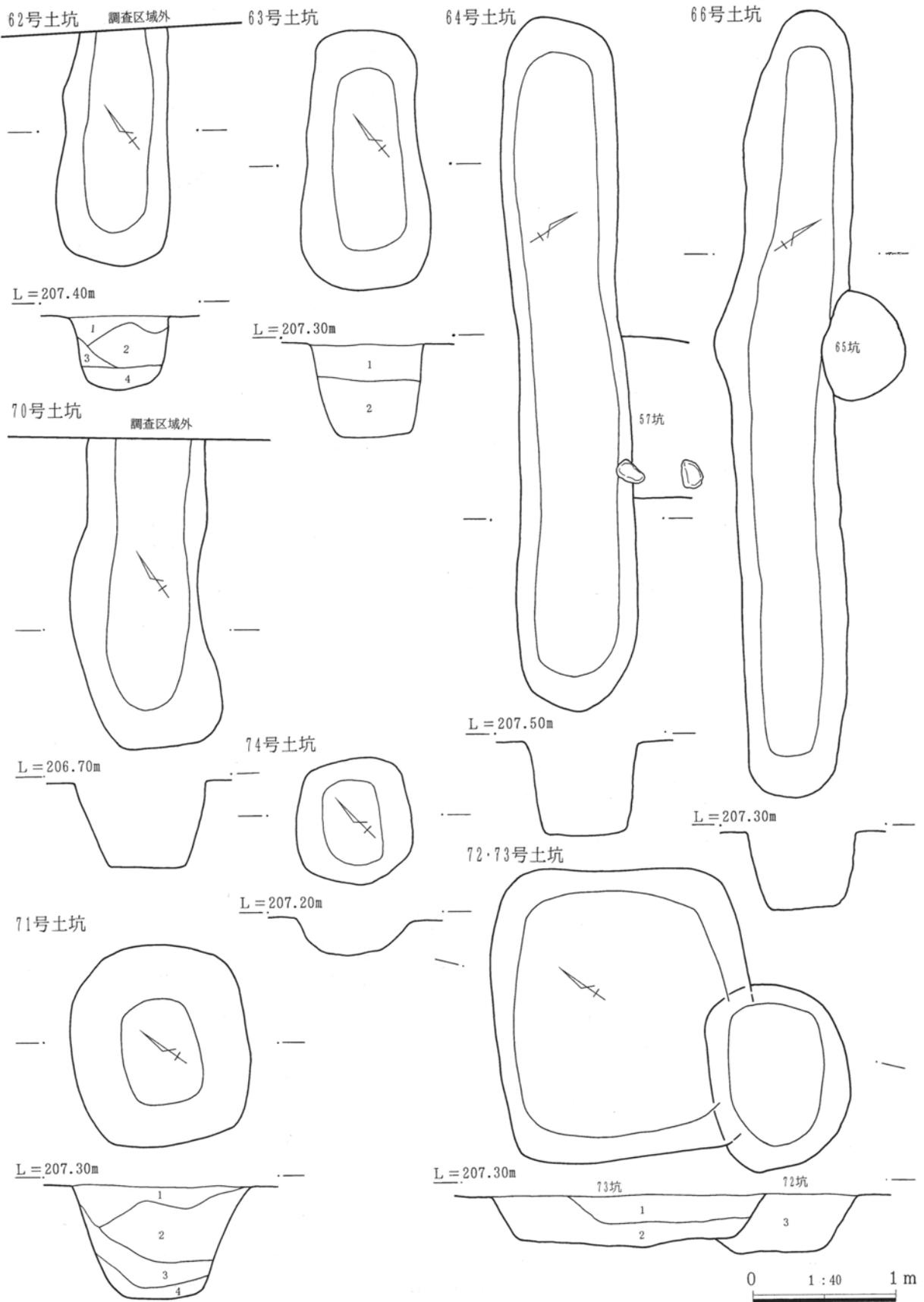
144号・145号土坑：I区中央の北寄りで検出された。径1.5m程の不整形円形を呈す。浅く立ち上がりも緩やかである。埋土は黒褐色である。近接した2基一対の施設を念頭において注意した。

146号～148号・153号土坑：I区中央の2号掘立柱建物跡東で検出した。同様に不整形円形の浅い土坑である。暗褐色土を埋土としており、群在する同形態の土坑と見た。

149号・150号・156・157号土坑：I区東側でやや距離をおいて調査された、縦長方形土坑である。4号溝～6号溝に囲堯された中にある配置をとり、149号坑が4号溝と重複する。II区で見た縦長方形土坑と同様に主軸方位を北西(149坑)と北東(150・156・157坑)を向く傾向を見せる。囲堯する溝の走行に近く、検討を要しよう。

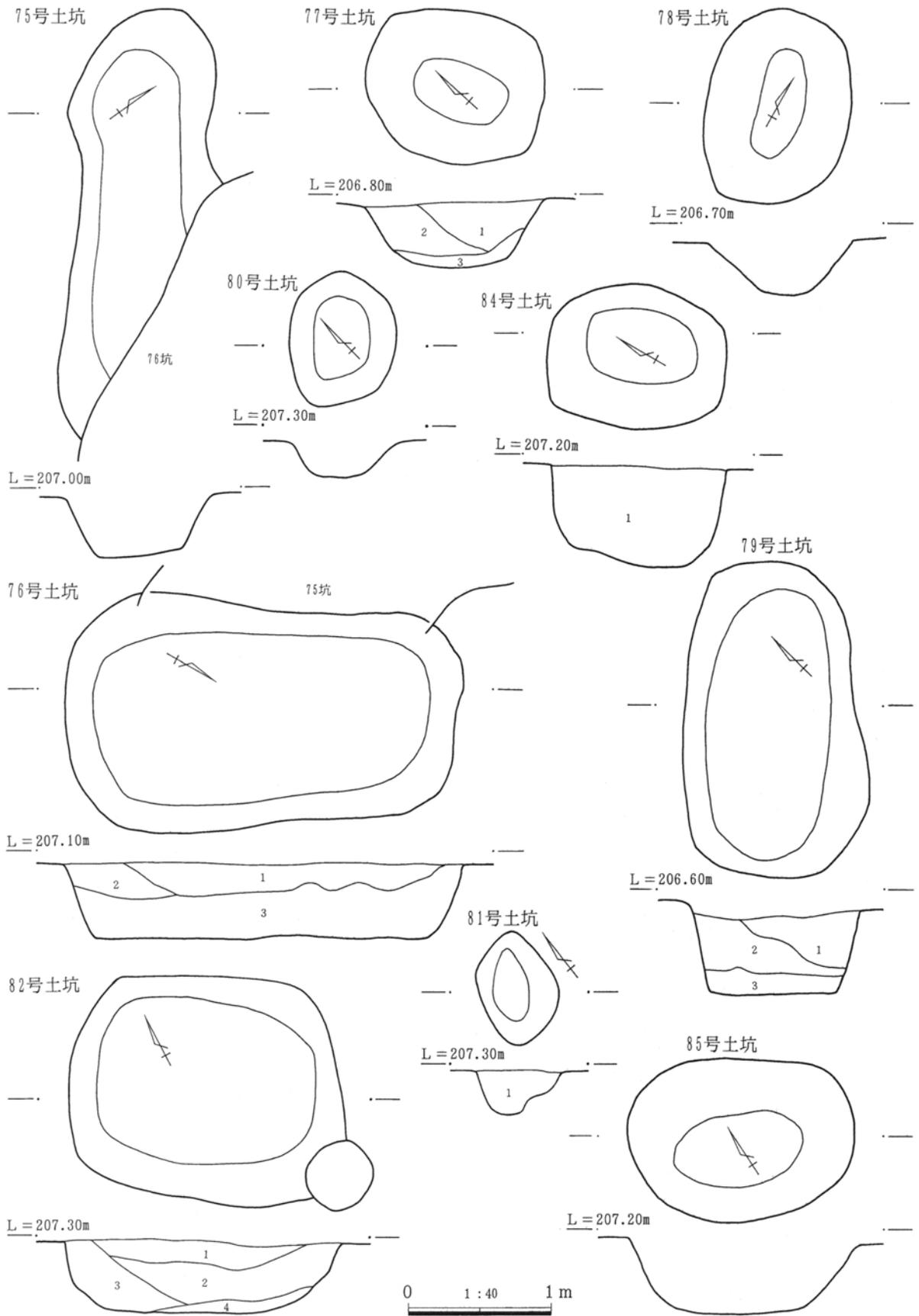
151号土坑：II区東側で4～6号溝に囲まれて検出された。約3.0×2.0mの大型の不整形長方形の土坑である。坑底面は凹凸があり、立ち上がりも緩やかである。長軸方位が149号坑等と近いため、注意が必要であろう。

159号土坑：II区南東側で調査された。大型の不整形長方形を呈す土坑である。規模は3.3×2.7m、深さ50cmを測る。坑底面は凹凸を持ち、壁は緩やかに立ち上がる。周辺は小ピットが群在し、本土坑にも幾つかが重なる。土層図1層は重複する小ピットである。長軸方位を北西に向けており、周辺の土坑・溝との関連性を窺わせよう。

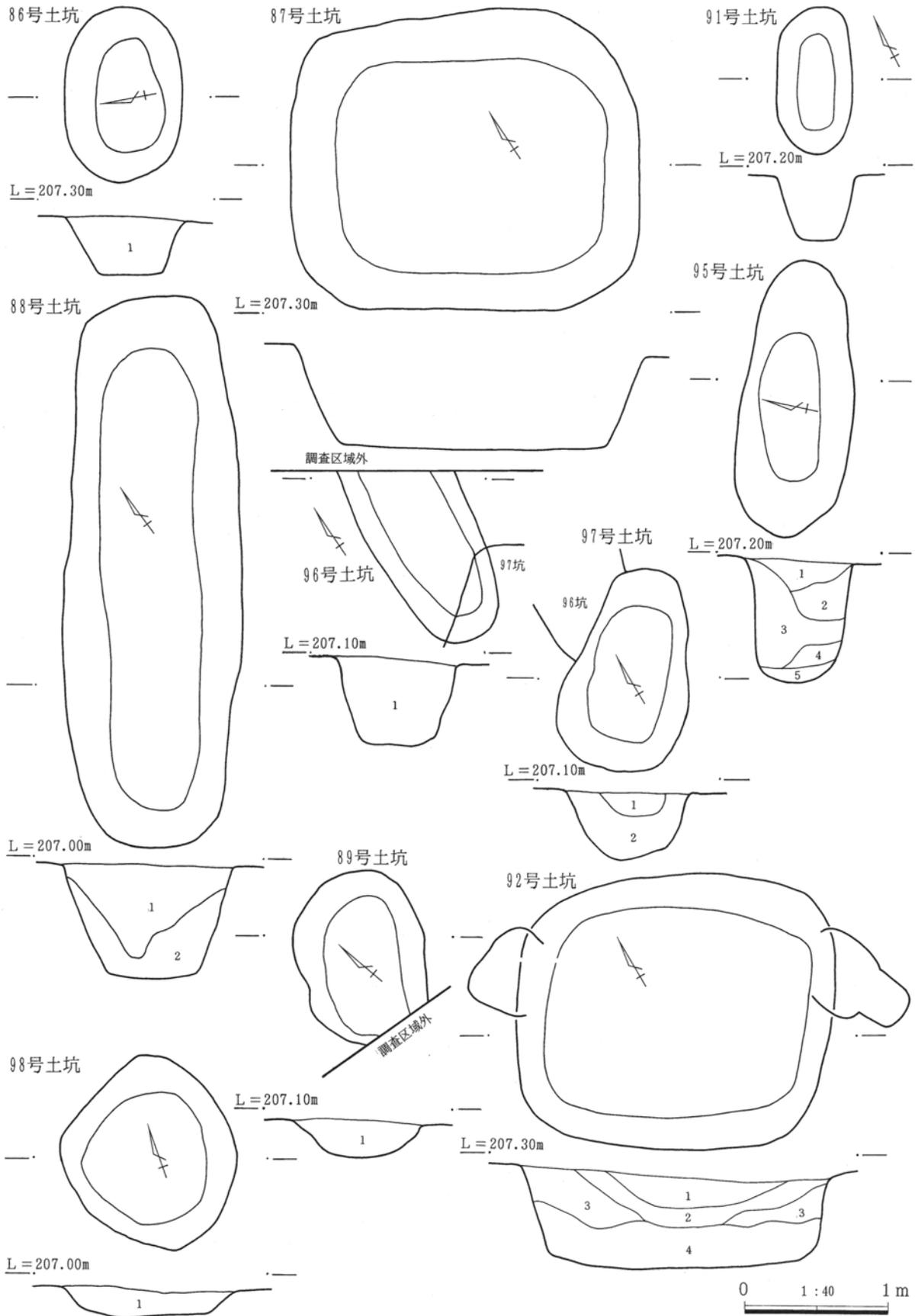


85図 土坑(6)

III 遺構と遺物

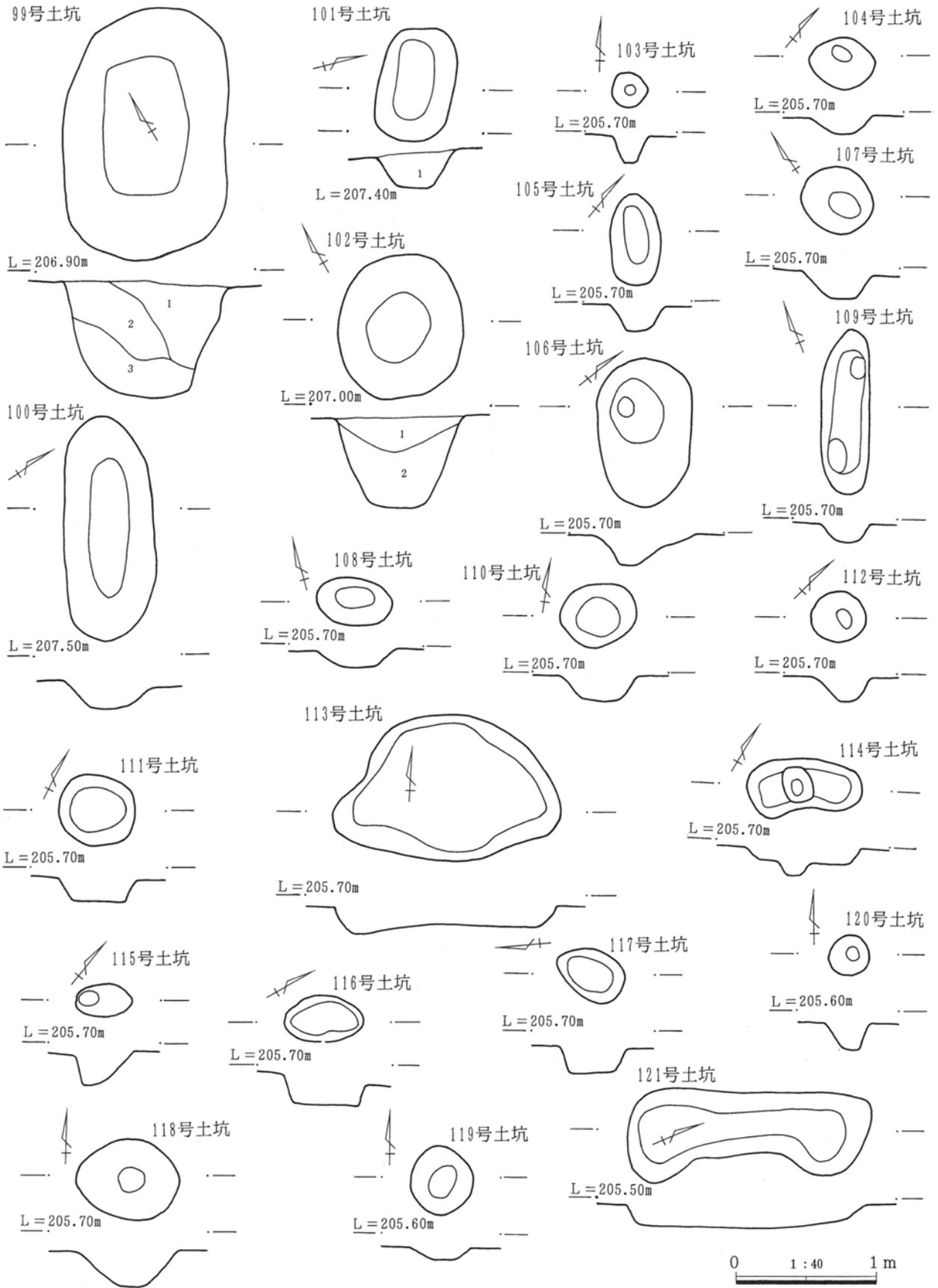


86図 土坑(7)

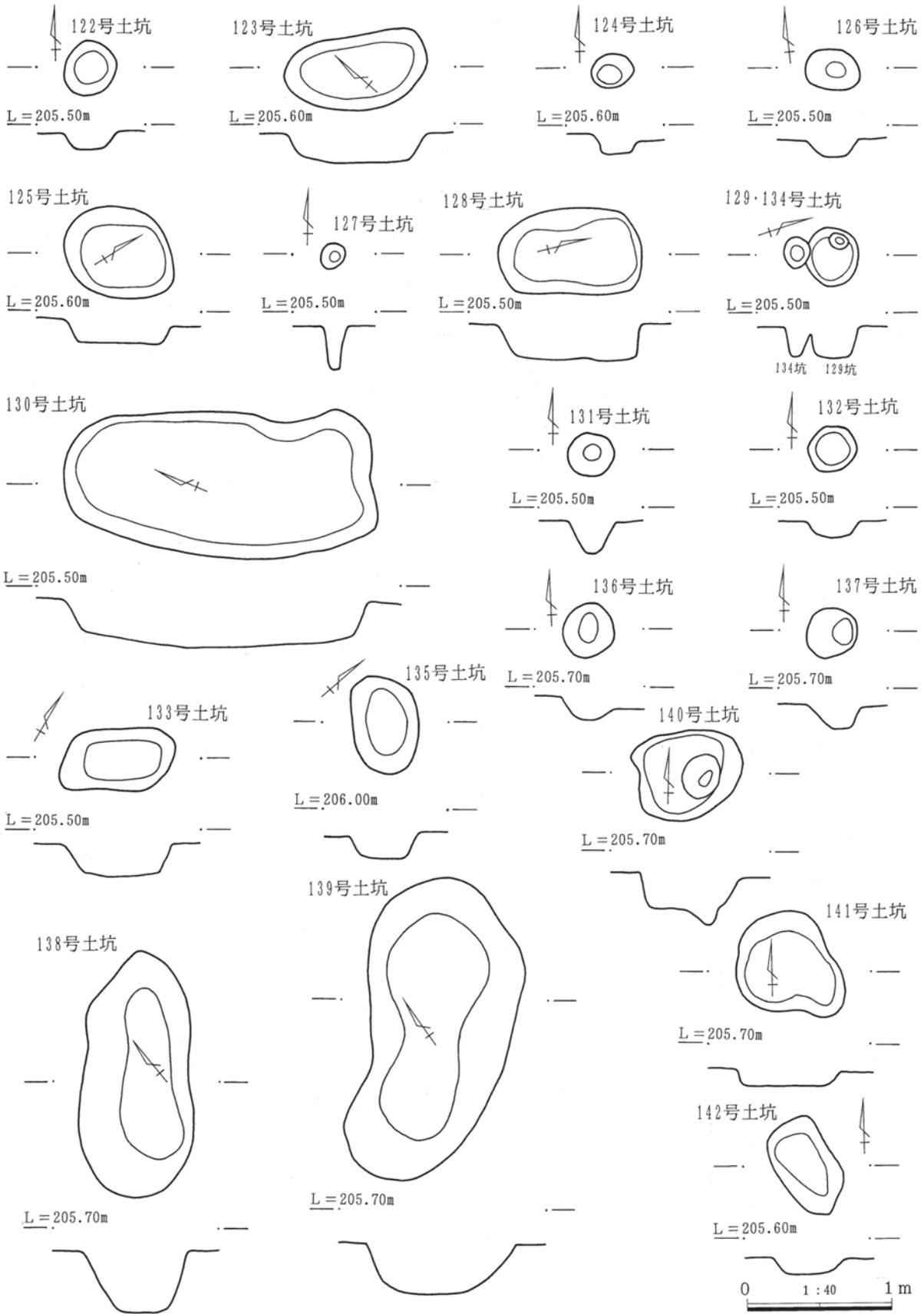


87図 土坑(8)

III 遺構と遺物

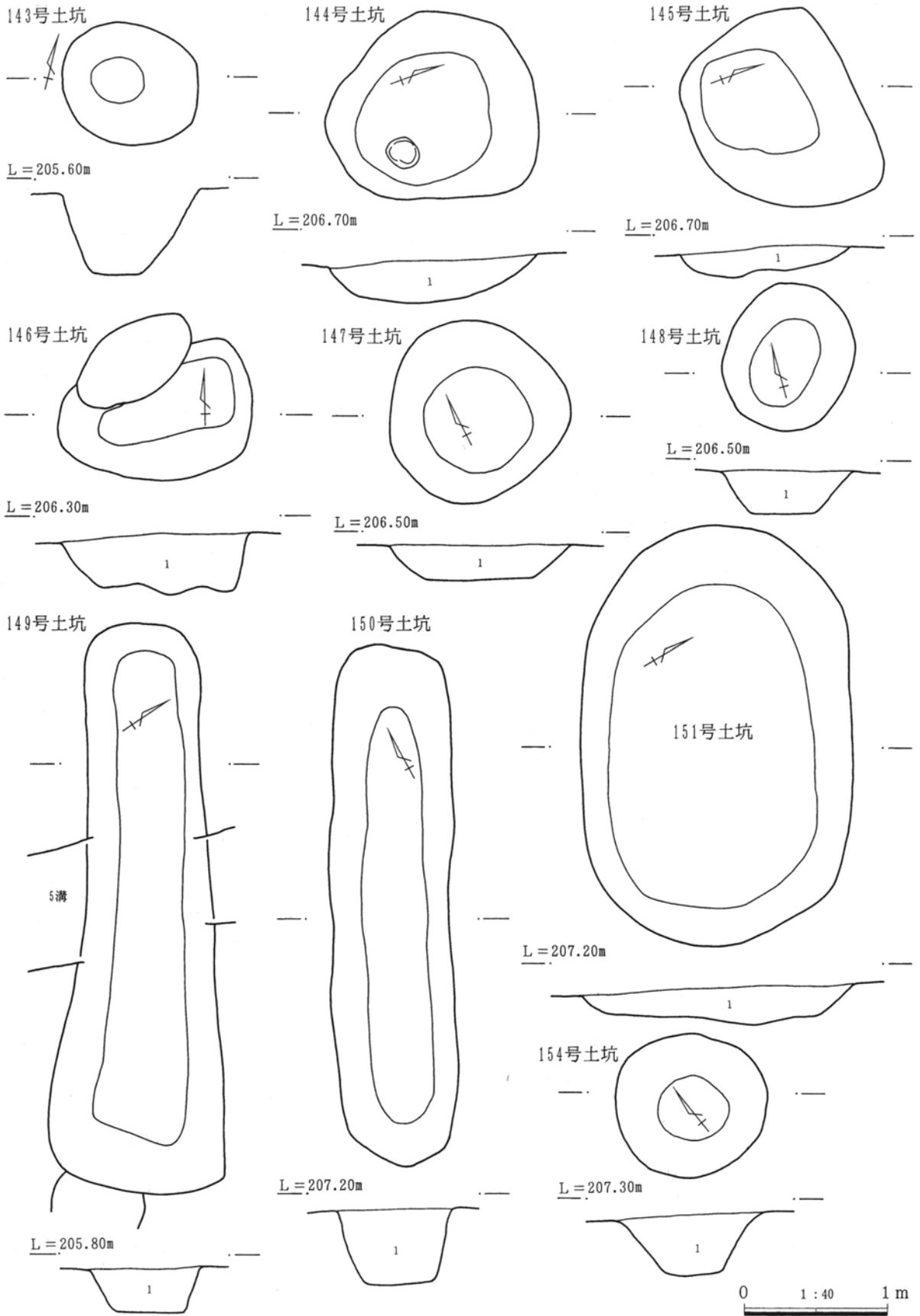


88図 土坑(9)

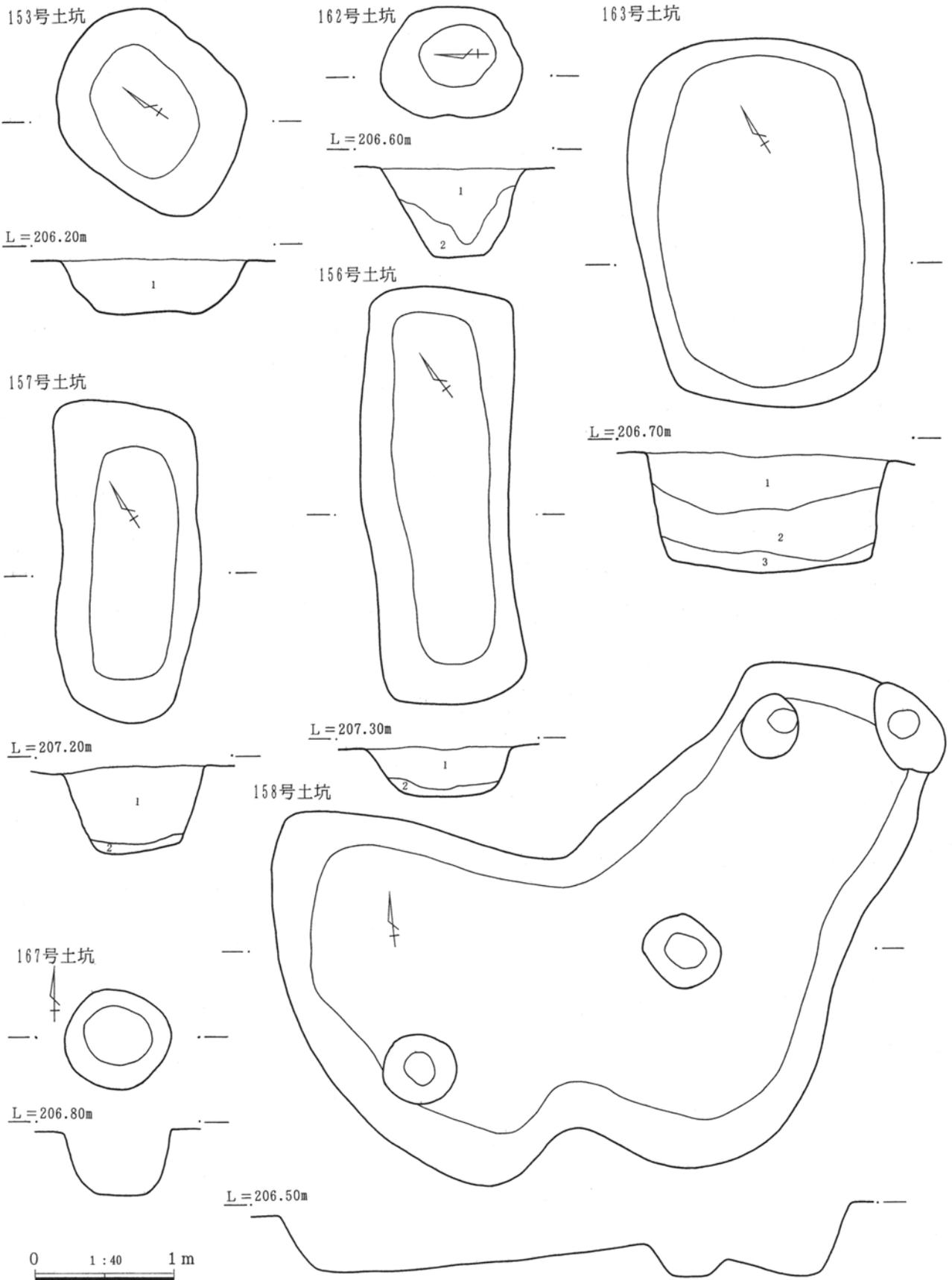


89図 土坑(10)

III 遺構と遺物



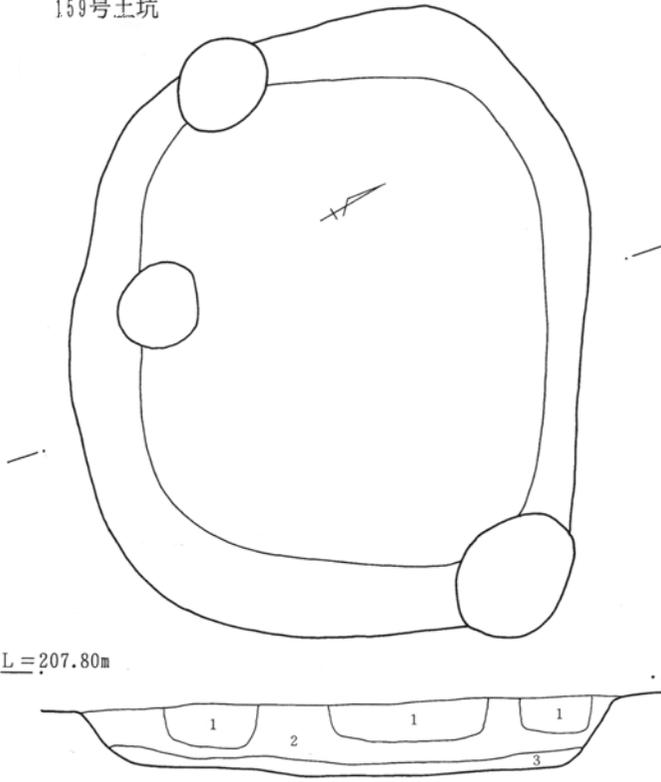
90図 土坑(11)



91図 土坑(12)

III 遺構と遺物

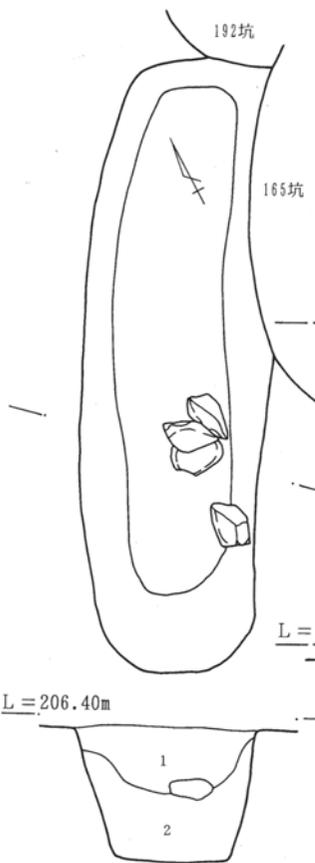
159号土坑



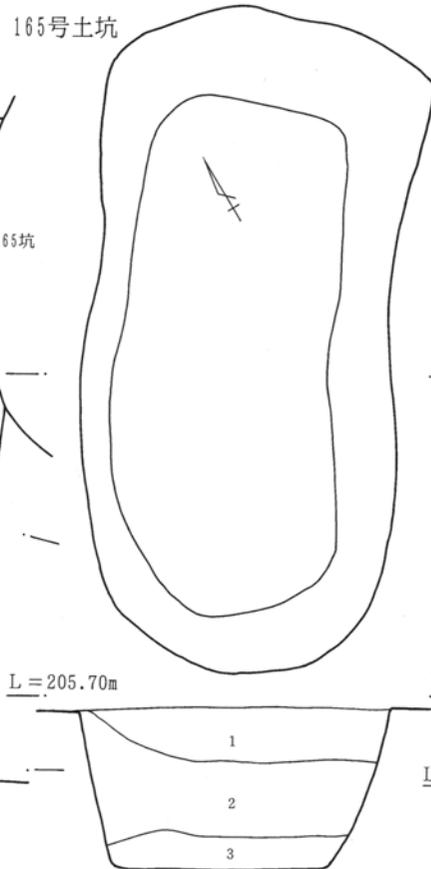
160・161号土坑



164号土坑



165号土坑



92 図 土坑 (13)

160号・161号土坑：II区北西側で重複して検出された。6号住居跡北東隅を切る。溝状の長楕円状土坑である。160号坑は8.0m近い長軸である。やや短い161号坑も6.0mを超えており、溝状の意識化に設けられたものと理解されよう。さらに、長軸方位を北西に向けており、東に近接する5号溝の走行に直交する配置である。周辺土坑・溝との関係性は深い。

163号・170号土坑：I区中央の北寄りで調査された。144号・145号坑が東に近接する。163号坑は2.6×1.7m程のやや大型の土坑である。90cm近い深さであり、壁の立ち上がりも直立気味でしっかりしている。170号坑は163号坑の西で、軸長3.6mで深さ30cm程である。軸方位は163号坑は北西を170号坑は直交して北東を向く。

164号・165号・171号土坑：164号坑と165号坑はI区中央やや北西寄りで重複して検出された。縦長方形の土坑である。165号坑は192号土坑と重なる。規模としては両者は近く長軸長3.3m前後で方位も北東を向く。周辺土坑の関係性が窺われる。出土遺物は石臼片と鋳状鉄製品、古銭2枚が出土している。171号坑は164号坑の南で軸をほぼ同一にして検出された。80cmの深さで掘り込みもしっかりしている。

168号土坑：I区東側で4号溝と5号溝が接する箇所に占地する。191号土坑が南側に重なる。また194号土坑と219号坑が東壁に重複する。これらの重複遺構との新旧関係は不明だが、あるいは同時期に存在していた可能性がある。軸を他の土坑群と同様に北西と北東に向けており、関連在る施設として捉えられる。平面形は約3.4×3.3mの不整正方形を呈し、深さは最深部で約80cmを測る。断面形は2段構成で、底面に軸長2.0m前後の方形の施設が設けられる。

本土坑は石組の施設と考えられる。北壁と東壁に石組が残存しており、1段目の平坦部に大型の自然石を中心に2～3箇重ねて壁を補強していた。おそらくこの石組は西壁や南壁にも設けられていたと思われ、坑底面から浮いた状態で多量の自然石や石臼片がまとまって出土した。土層観察は果たし得なかったが、調査所見では黒褐色土を主体とした埋土と捉えられた。人為的な埋没過程に伴い南壁や西壁の石組が破壊されたものと考ええる。出土遺物は軟質陶器鉢底部破片、石鉢1点、石臼6点、永樂通寶等古銭が7点出土した。

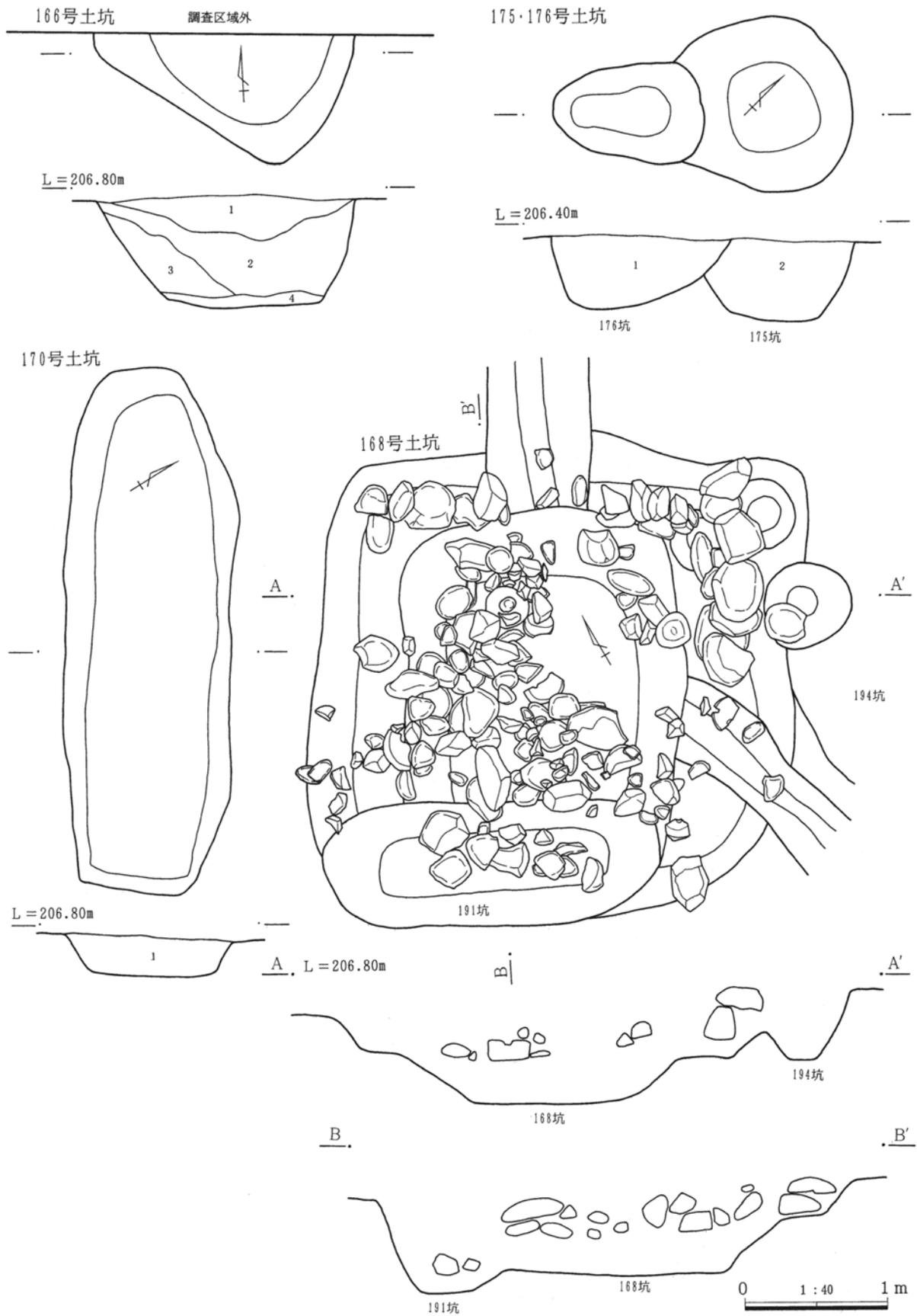
出土遺物等から本土坑の比定される時期としては中世後半段階と考えられるが、性格に関しては問題が多い。溝の屈曲部に位置することなどから、水利に関わる施設とも考えられるが、古銭の出土と石組の存在から特殊な墓壙とも捉えられる。人骨の出土はなかったが、「マイリ墓」等としての性格も想定しておきたい。なお、191号坑からは鉄釘1点が出土している。

169号土坑：II区西側で検出した。大型の不整楕円形を呈する平面形である。軸長約3.9×3.0m、深さは1.0mを測る。坑底面は鍋底状で壁も開き気味に立ち上がる。本土坑の周辺は小ピットが多数検出されている。そのうち本土坑に付随する可能性のあるピットを抽出し図示した。土坑周辺を12基のピットで囲まれ、各々対角線状に対応する配置を見せる。柱穴として本土坑に上屋を想定した次第である。しかしながら、土層観察においても、土坑を切る状態で小ピットが開けられており(土層図1層)、必ずしも周辺ピット群が良好な配置を呈しても、上屋を想定するのは早計かもしれない。あるいは掘立柱建物跡の存在も念頭に置かなければならないだろう。本報告では、上屋の存在を可能性ある検討課題として掲載した。

172号・173号土坑：I区南端で調査された土坑である。172号坑は軸長5.6mで縦長方形の土坑である。一方173号坑は不整長方形でやや浅く、自然石の出土を見ている。両者の共通項目は少ないが、軸方位が他の土坑とは違いやや東に向く傾向がある。

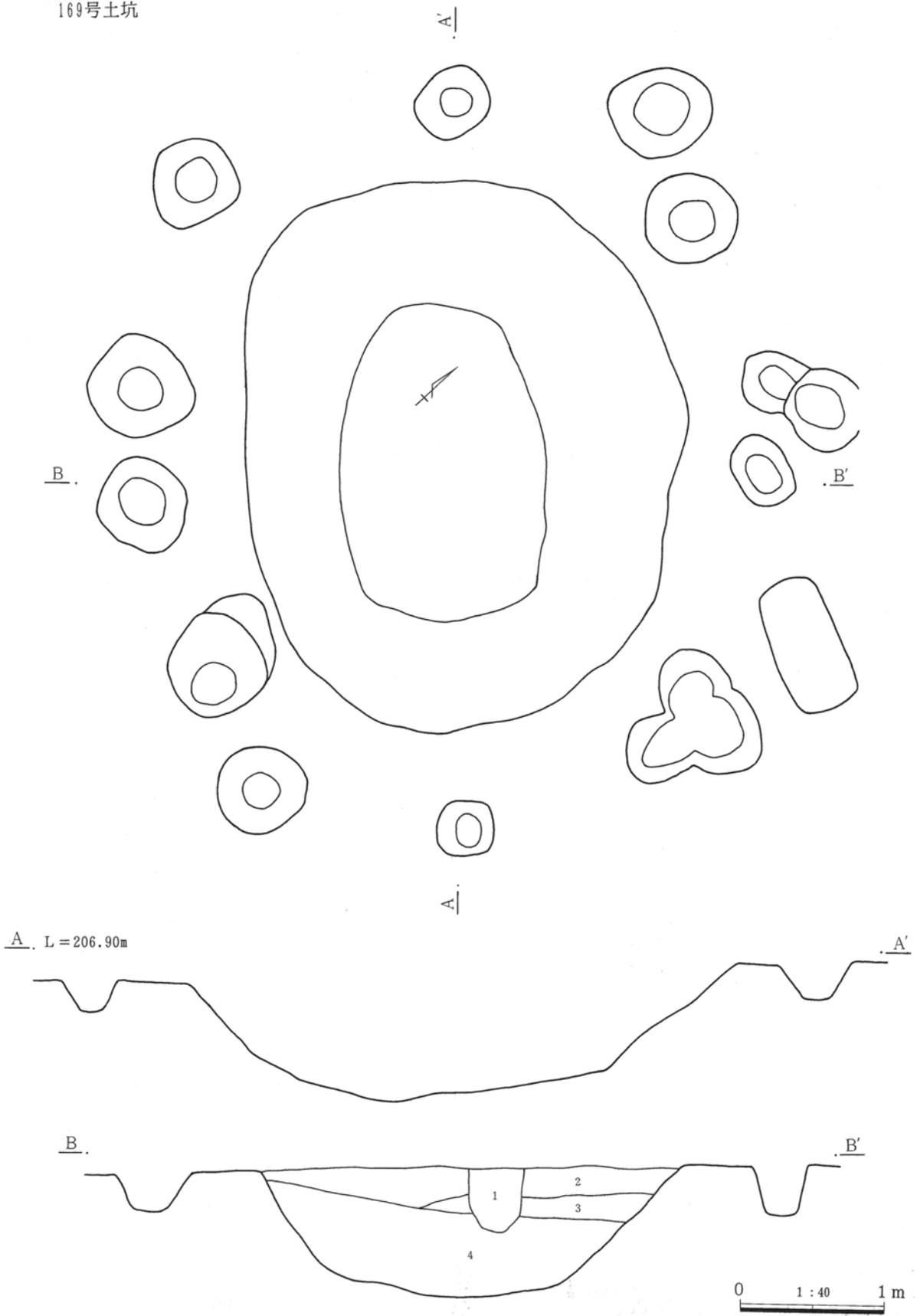
174号土坑：I区北側で区域外に延びる土坑である。縦長方形のであるが6mを超える軸長であり、溝状の土坑となるようだ。軸方位は北東を向き、南に近接する192号土坑と直交する位置関係にある。

III 遺構と遺物



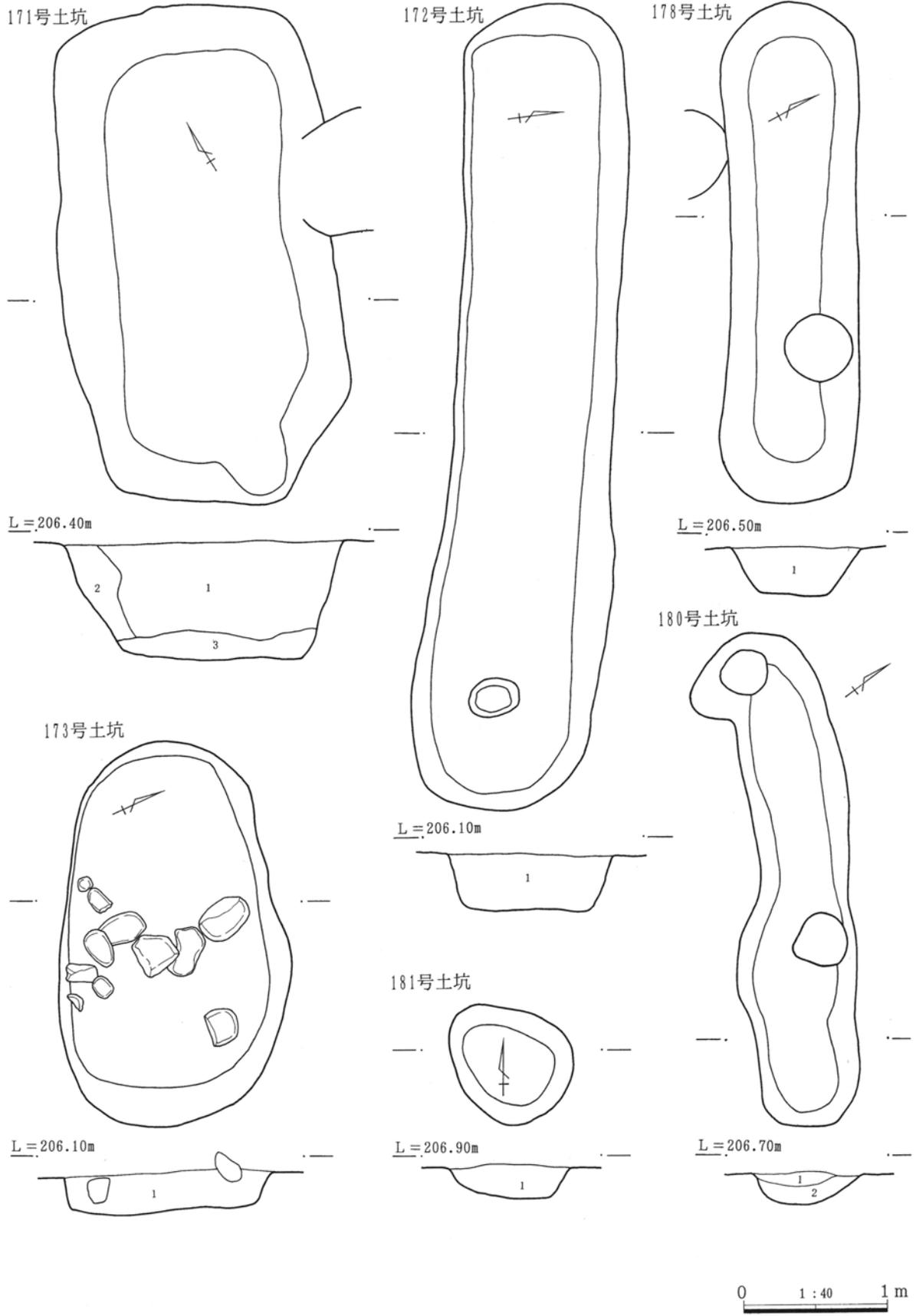
93 図 土坑(14)

169号土坑

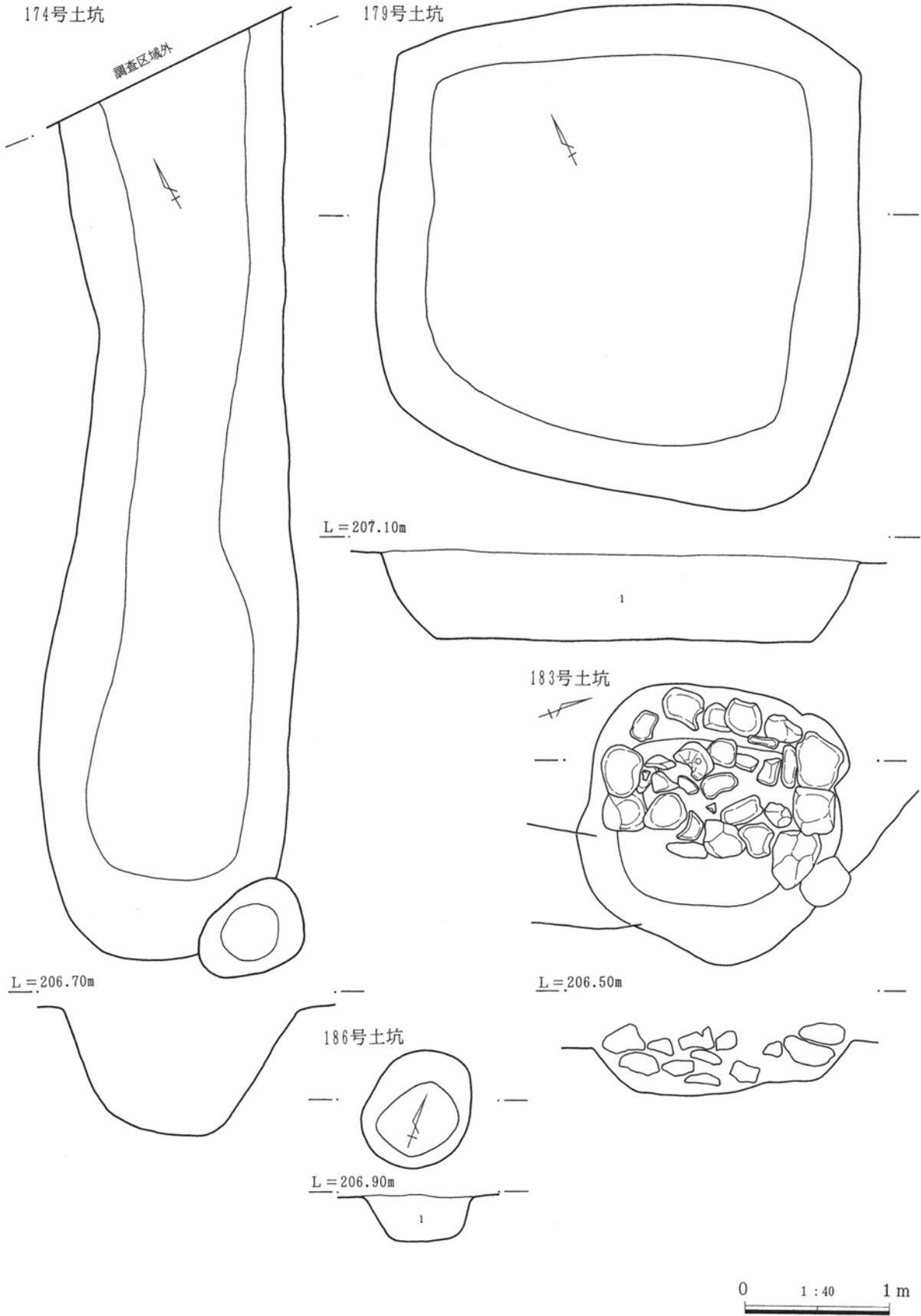


94図 土坑(15)

III 遺構と遺物



95 図 土坑(16)



96図 土坑(17)

III 遺構と遺物

177号土坑: I区北側で検出された。区域外に延長するため全容は把握できなかつた。西側に同様な土坑が重複し、東側の土坑が切る重複関係である。東側土坑は南から北へ傾斜しており、周辺地形とは逆の坑底面である。また東壁及び西壁の一部が自然石で補強されており、石組の土坑と捉えられよう。また、坑底面中位に自然石が置かれ、南北を画する形態をとっていた。軸方位は北東を向くため、周辺遺構との関連性は深いものと思われる。あるいは168号坑と同様の性格も想定できよう。出土遺物は土師質土器坏破片と古銭1点が出土している。

178号・192号土坑: I区中央を軸方位を北西に向け検出された。両土坑もほぼ同一線上にのる位置関係である。178号坑は長方形土坑で軸長3.5m、192号土坑は溝状の縦長方形で7.6mを測る。西側で165号坑と重なり、174号坑と直交する位置にある。

179号土坑: I区西側で7号住を切って検出された。軸長3.4m程の不整正方形で、深さは60cmを測る。坑底面は平坦で、壁も開き気味ながらしっかりとした立ち上がりである。柱穴などは見られなかったが、中世～近世段階の居住に関わる施設の可能性もある。

183号土坑: I区中央南西寄りで検出された。184号土坑や206号土坑と重複する。径1.7～1.9m程の不整円形を平面形とし、30cm程の浅い皿状の断面形を示す集石土坑である。集石は大型の自然石を中心に石臼が混在していた。土坑西側に集石が偏在するがこれは206号坑との重複によるものである。遺物としては、石臼2点を図示した。

184号土坑: 183号坑北側で広がる土坑である。調査当初住居跡の可能性を踏まえて着手したが、住居ではなく浅い落込みであることが判明した。本土坑の南西側に石囲い施設が検出された。石組のような堅牢さではないが、立石状に一部を囲む形態である。183号坑と共に石組遺構として述べた168号坑・177号坑と同様の性格であろうか。

188号土坑: 調査区北側で174号土坑東で検出された。不整長方形の土坑である。2.5×1.4mとやや小型ながら、深さは60cmと深い。軸方位を東西に持ち他の土坑群とは差が見られる。埋土中より古銭(祥符元寶)1点が出土している。

189号土坑: I区西側で5住と8号住の間で調査された。東西に大きくトレンチで破壊されており、底面の様相など判然としない。規模は2.7×2.2m程の幅広の楕円形土坑で、深さは60cmと深い。軸方位を北東に向け他の土坑と同様の傾向を示す。出土遺物は土師質土器坏3点を見る。

193号土坑: I区中央南西寄りで183号坑や184号坑と重複して検出された。184号坑との重複関係は184号坑に付帯する石囲いが本土坑に乗ることから、本土坑埋没後に184号坑構築と考えている。3.2×1.5mのやや幅広の長方形土坑である。軸方位は北東を向き、周辺土坑との類似性が認められる。

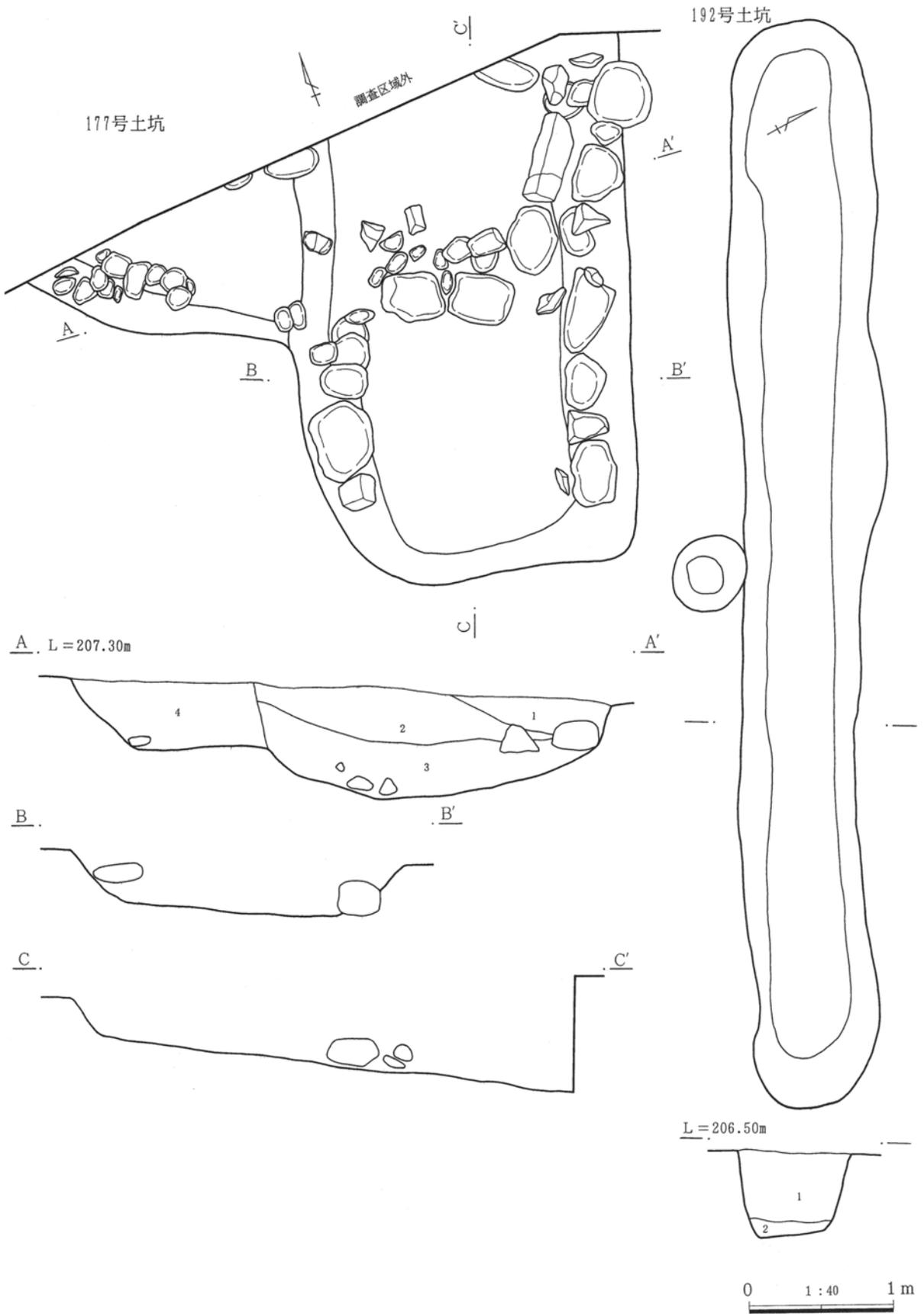
195号土坑: I区西側で軸を北東に向けて検出された縦長方形土坑である。北東半をトレンチに切られており、全容の把握はできないが、周辺には土坑群が密集しており、北域に延長する遺構群の存在が想定されよう。

197号土坑: I区北東側で6号溝北片と平行して検出された長楕円状土坑である。断面形が浅く皿状を呈することから、あるいは溝として位置付けられるかもしれない。

200号土坑: I区東端で、東半を調査区域外に延ばすため西半のみの調査となった。おそらく方形を呈する平面形で深さは1m近いしっかりしたものである。集石土坑であり、下位にかけて大型の自然石が集中した。

201号土坑: 調査区東側で156号坑に北接して検出された。2.0×1.6mの長方形を平面形とし、浅く坑底面は凹凸が見られた。周辺土坑群や溝との関連性が求められるが、若干ながら軸方位に差が見られる。

204号土坑: I区中央やや北西寄りで重複して検出された。164号坑の西に近接する。浅い小型の不整円形土坑である。埋土中より古銭(皇栄通寶)が出土している。あるいは流入かもしれない。

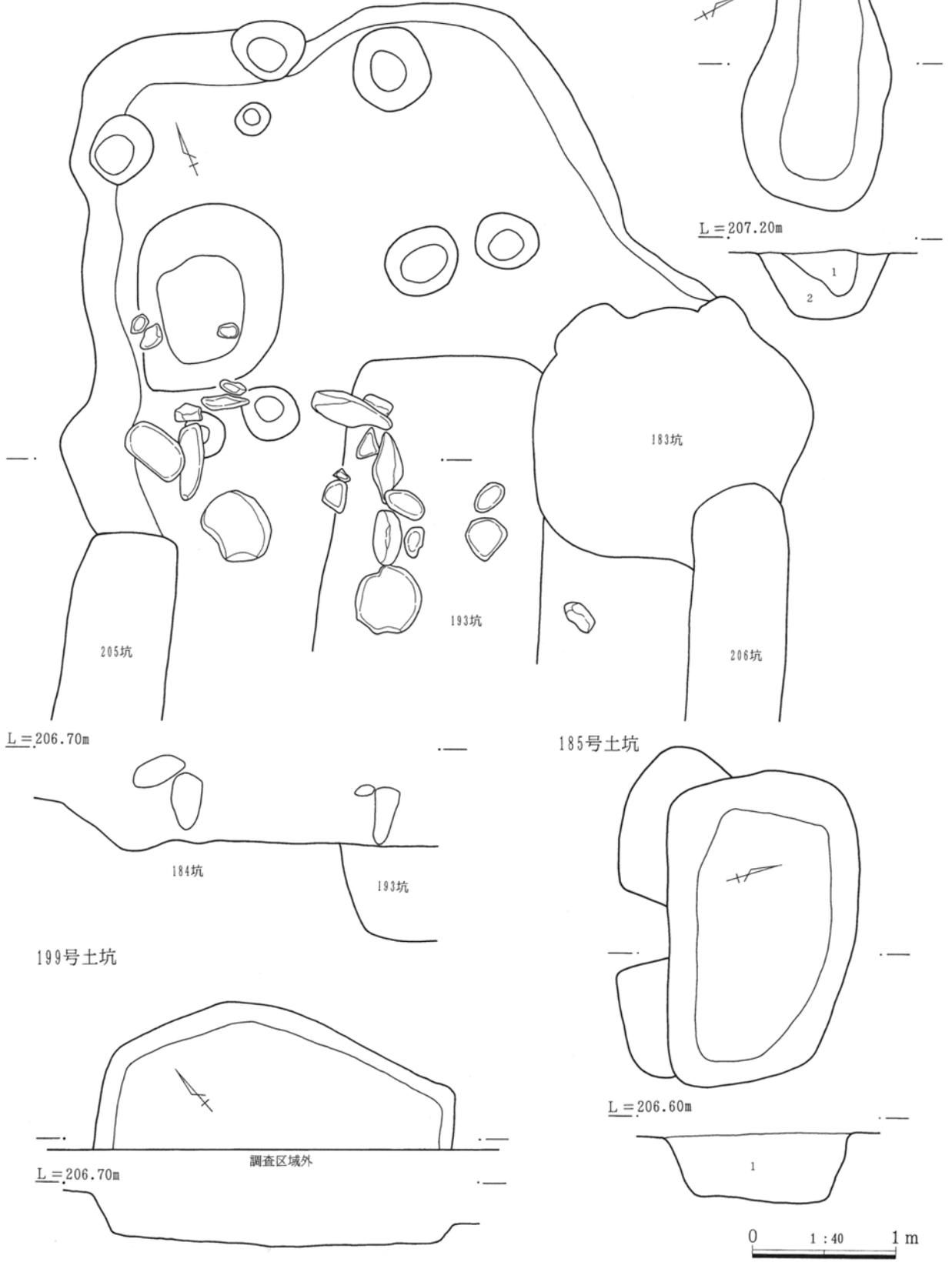


97図 土坑(18)

III 遺構と遺物

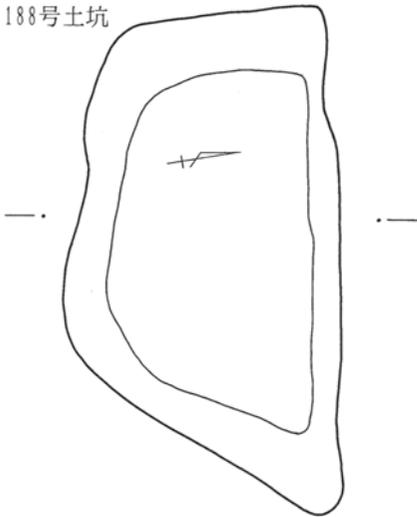
184号土坑

198号土坑



98 図 土坑(19)

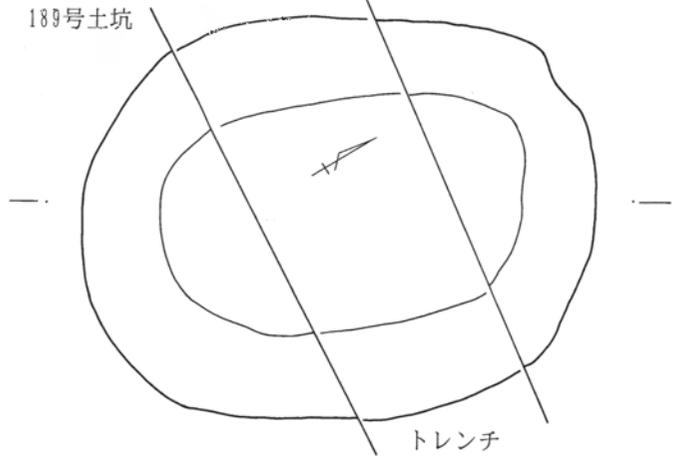
188号土坑



L = 206.80m



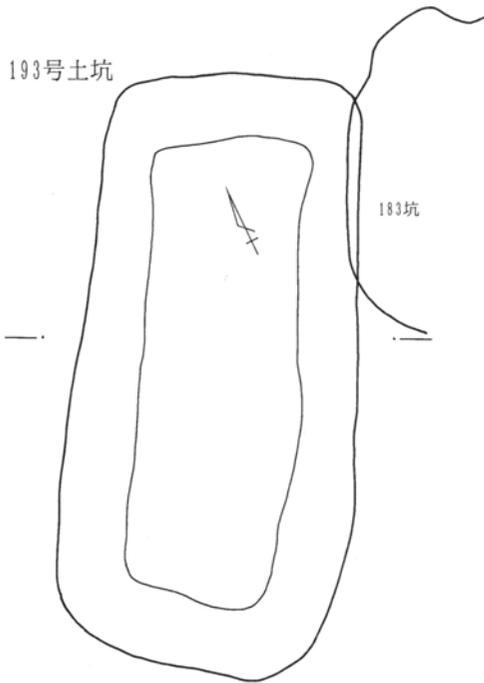
189号土坑



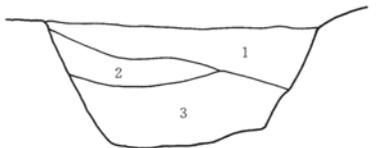
L = 207.00m



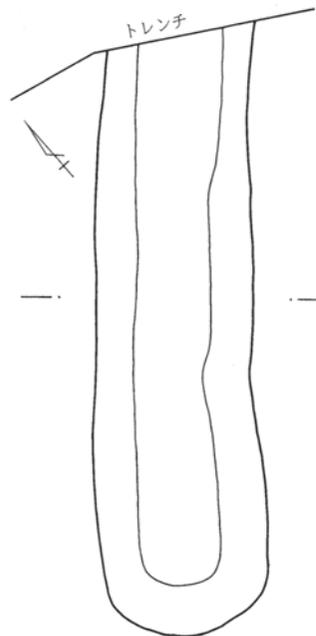
193号土坑



L = 206.20m



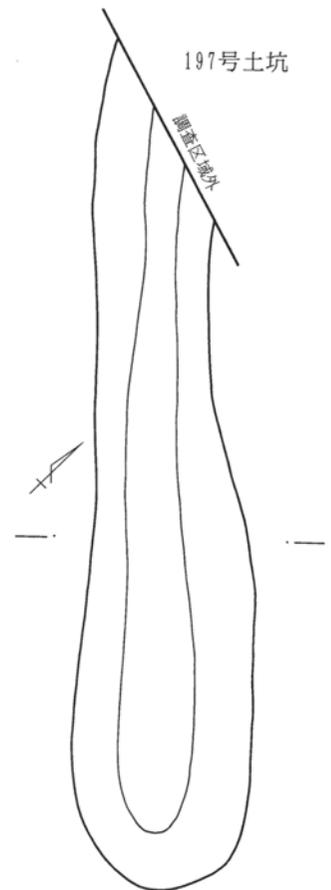
195号土坑



L = 207.10m



197号土坑



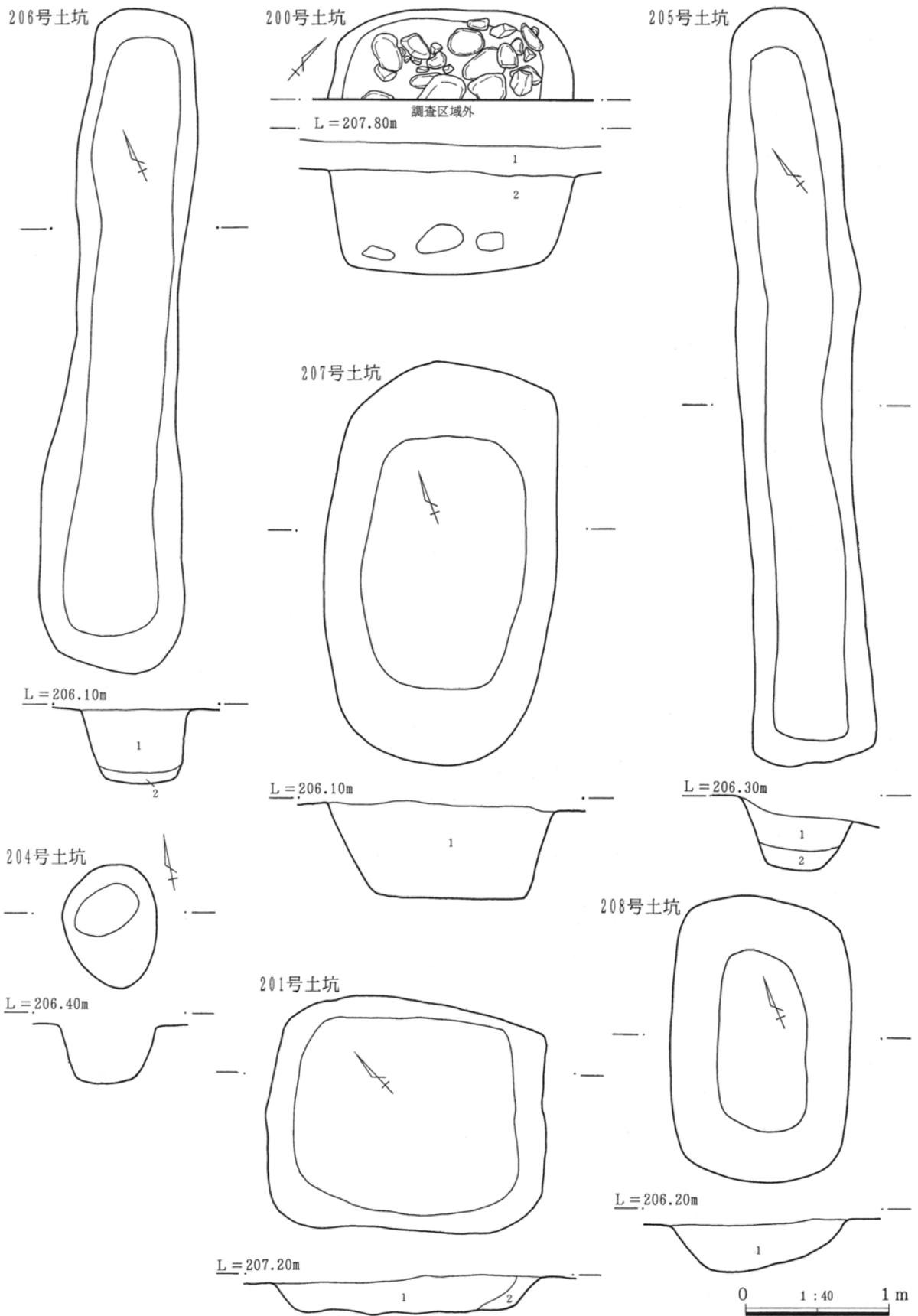
L = 207.30m



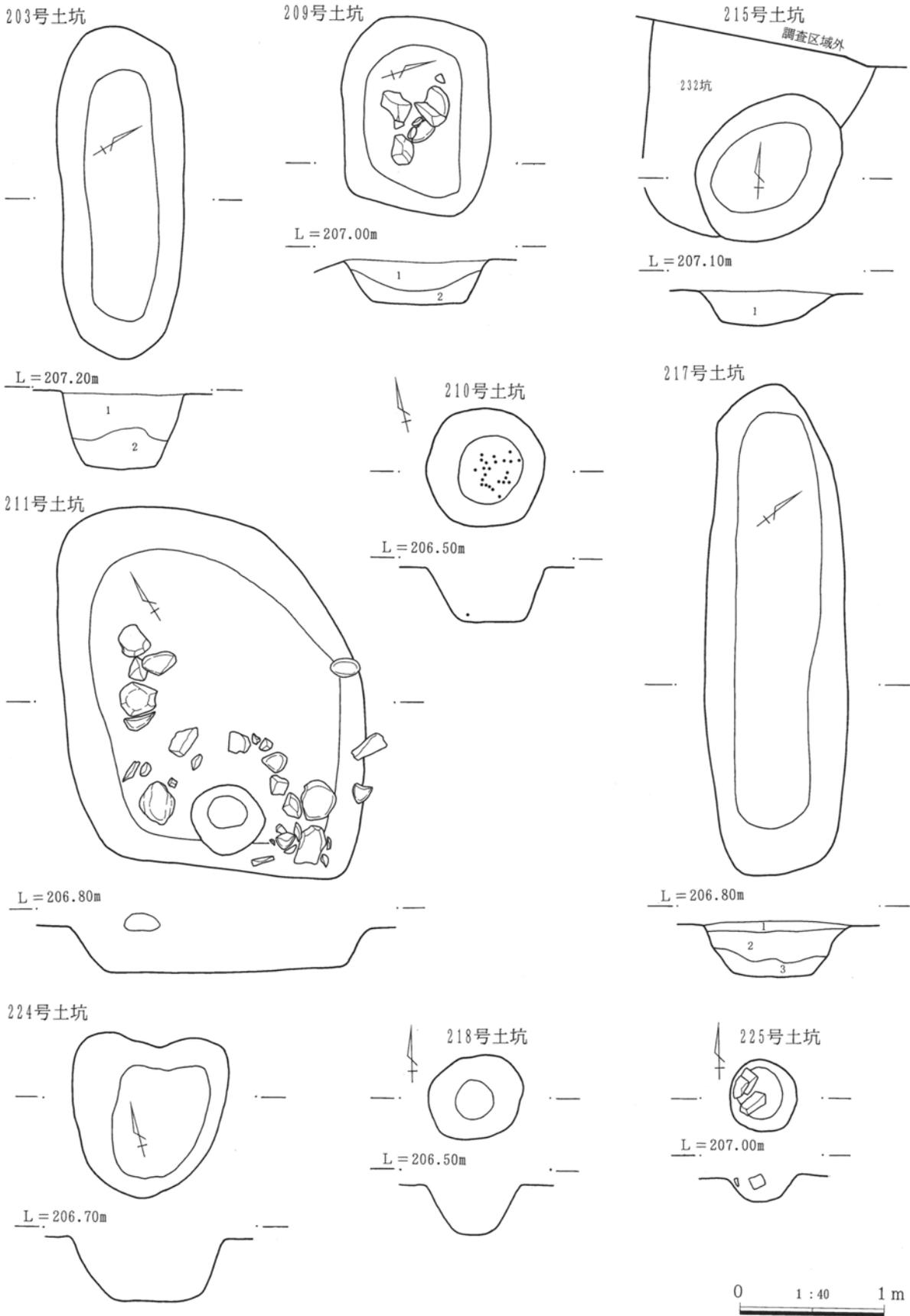
0 1 : 40 1 m

99図 土坑(20)

III 遺構と遺物

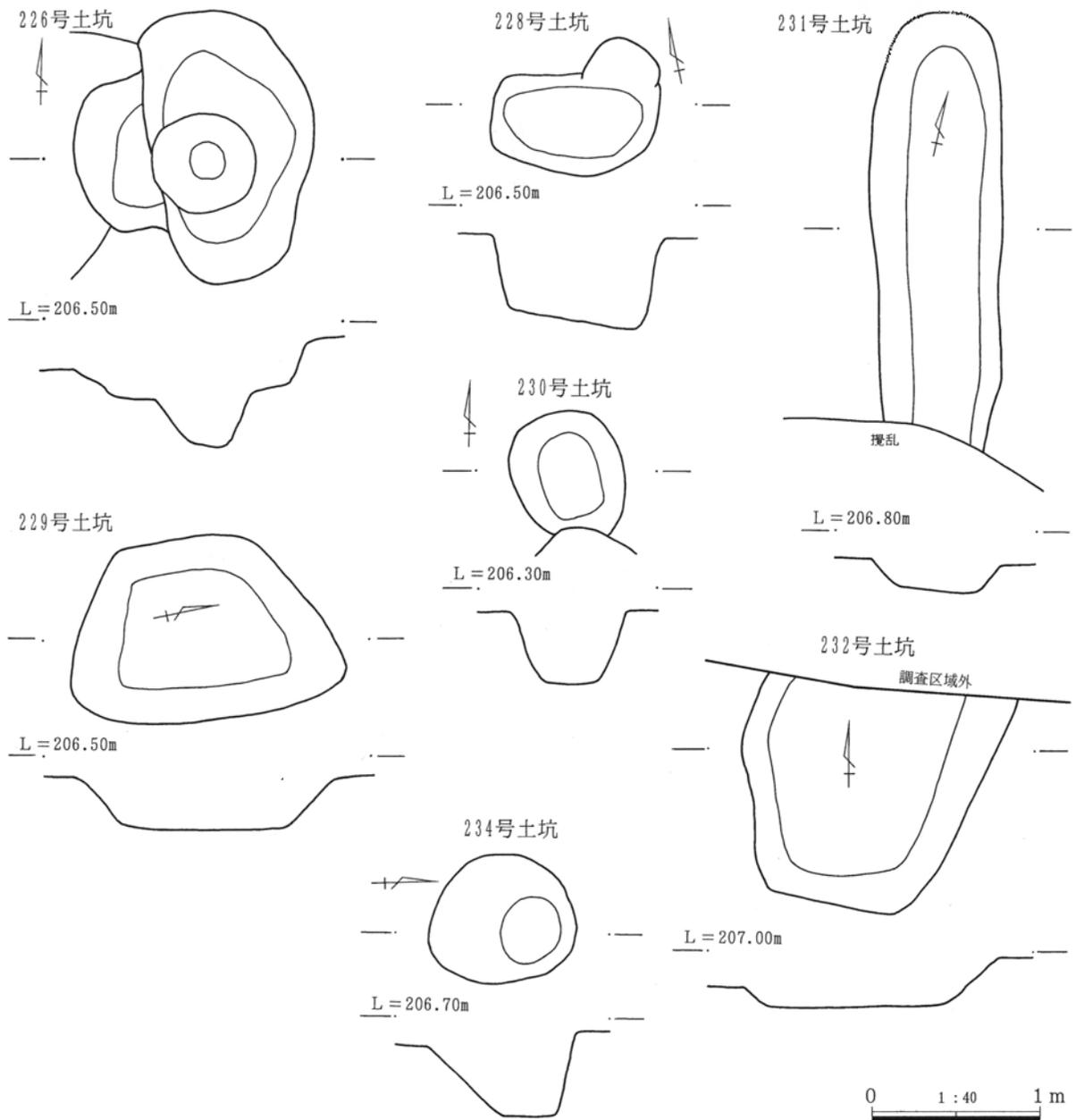


100 図 土坑 (21)



101図 土坑(22)

III 遺構と遺物



102図 土坑(23)

205号・206号土坑：I区中央南西寄りで見出された。183号坑や184号坑の東西を軸方位北東に向け位置する。縦長方形土坑である。深さは約50cm程度で、この種の土坑としてはやや浅い。

207号土坑：I区南側で2号掘立柱建物跡と3号掘立柱建物跡の間で調査された。不整長方形の平面形で、規模は2.8×1.6m、深さ約30cmを測る。南側には軸を交叉した状態で長方形土坑があり、関連性が窺われる。

209号土坑：調査区東側で4号溝と重複した状態で検出された。新旧は不明である。1.3×1.0mの不整長方形を呈し、深さは30cm程で浅い。集石土坑で底面中央に数個の自然石が角礫状態で出土した。東に近接して石組遺構である168号坑が見られ、関連する施設と窺われる。

210号土坑：I区中央北寄りで192号坑北で調査された。径約80cm程度の小型の円形土坑である。深さは40cmと浅い。本土坑からは、古銭45枚まとまって出土した。永樂通寶が多いが、開元通寶や聖徳通寶など多

様性に富む。墓壙ではなく、土坑内の備蓄銭と捉えたい。

211号土坑：I区東側で4号溝に重なり検出した。不整長方形の平面形を呈し、軸方位を北東に向ける。深さは30cm程だが、自然石等礫がまとまって出土している。上層から下層にかけて散漫な出土であるが、168号坑や209号坑と関連するものと捉えた。遺物としては、自然石に混じる片口付石鉢や凹石を図示し得た。その他に軟質陶器鉢口縁部破片がある。また、片口付石鉢は183号坑出土の破片と接合関係を見ている。

232号土坑：調査区西側で北を調査区域外に延ばす状態で検出された。8号住居跡を切る重複関係である。浅く立ち上がりも弱い。出土遺物として、須恵器坏と土師器甕を図示した。おそらく、本土坑のものではなく、8号住に帰属し得る遺物であろう。

(土壙墓)

人骨を出土した土壙のみを土壙墓として位置付けた。ただし改葬や埋葬方法によっては人骨が出土しない場合も想定しなければならないだろう。おそらく、前に報告した土坑内部でも、墓壙は存在するものと思われ、本来ならば出土遺物、土坑形状などを吟味し、判断を下さなければならないだろう。調査時の所見などが重要である。また、土壙墓の時期であるが、古銭のみの判断では詳細な時期を確定できない。おそらく中世末～近世初頭段階の所産と考えられるが、検討の余地は多い。

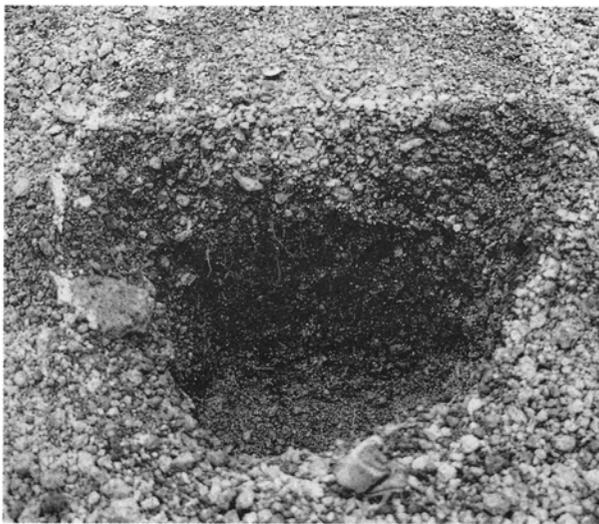
6号土坑：II区西側で検出した。小型の楕円形土壙である。軸方位を北東に向ける。周辺には土壙墓はなく、単独の出土となった。土壙北東部より底面からかなり浮いた状態で頭骨と歯が出土した。頭骨の遺存状態は悪く、全容を把握できなかった。あるいは頭骨のみの出土とすれば、占地位置も含めて極めて特殊な例と捉えられよう。土層註1.暗褐色土 FP 含む 2.褐色土 大型のFP 含む

182号土坑：I区西側で調査した。169号坑が北西に近接する。軸長1.8×1.4m程の不整楕円形土壙である。60cmと深く、人骨は底面より出土している。土壙軸方位、人骨軸方位とも北東を向く。頭骨等全体に遺存状態は悪いが、その他の部位として、背骨・上腕骨・大腿骨等が観察され、横臥屈葬に似た形態を取る。出土遺物は古銭(皇栄通寶等)3点を見た。

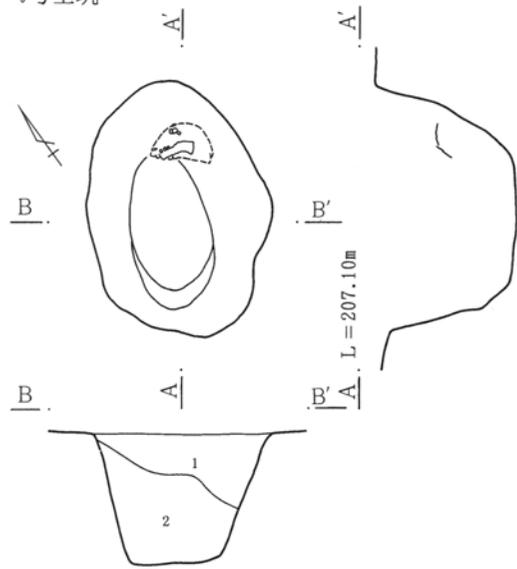
227号土坑：I区東側で単独で検出した。軸長1.6×1.3m程の不整楕円形を平面形とし、深さ約40cmを測る。底面はやや凹凸を持つものの平坦面を意識して構築される。人骨は底面よりやや浮いた状態で出土した。北東を向く土壙主軸方位に比して人骨はやや北に傾く軸方位である。人骨の遺存状態は良好であり、横臥屈葬で顔を西に向ける様相も把握できた。図示されていないが肋骨・肩胛骨なども遺存していた。遺物として、上半部より、古銭6点(至和元寶等)が出土している。

233号土坑：I区西端で5号住と8号住の間で調査した。周辺の遺構と同様に本土壙も遺存状態は悪く、平面形確認時に既に人骨が出土していた。土壙北半は調査区域外のため、長軸規模は不明だが、短軸規模は64cm程度の小型の不整楕円形を呈する土壙である。人骨は底面より浮いた状態で検出された。極めて遺存状態が悪く、頭骨の輪郭、上腕骨や大腿骨の一部を確認するに留まった。出土遺物は古銭(元祐通寶等)が下半部を中心に出土した。5点を図示した。

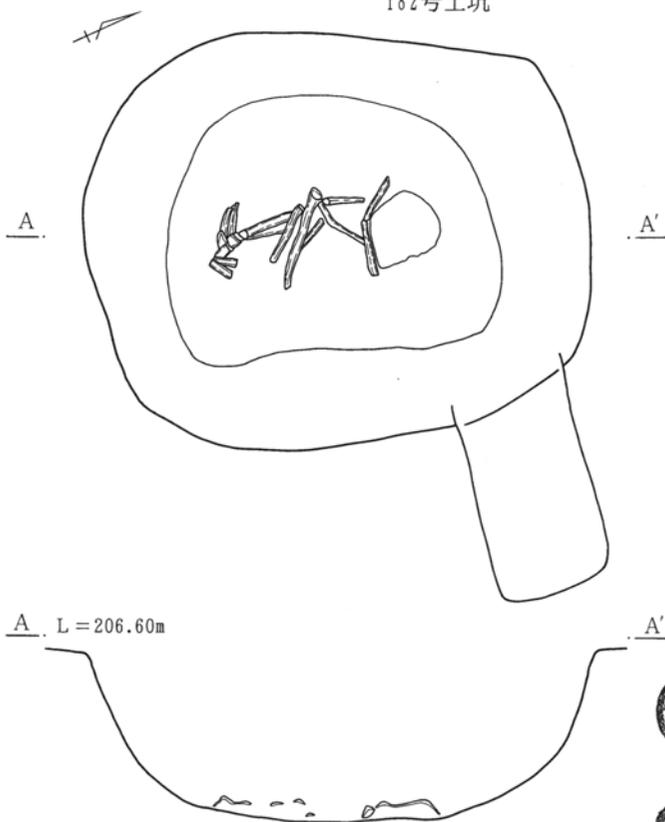
235号土坑：I区中央やや西寄りで検出した。171号土坑が東に近接するように周辺は土坑群が群在し、そのため本土壙の平面形も上位部分が判然としない。規模は1.1×0.9mで不整楕円形土壙と思われる。深さは遺存状態の良い箇所50cmを超えており、土壙下位の残存は保証されていた。底面はほぼ平坦といえよう。人骨は、底面より10cmほど浮いた状態で検出された。土壙主軸方位と人骨方位はほぼ一致する。人骨の遺存状態は良好で全体像が把握でき、横臥屈葬で顔を東に向ける様相が判断できた。出土遺物は見られなかった。



6号土坑

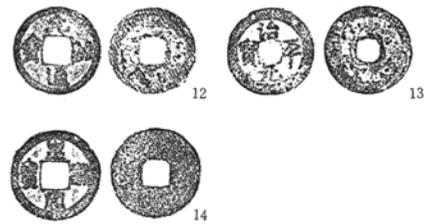


182号土坑



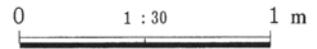
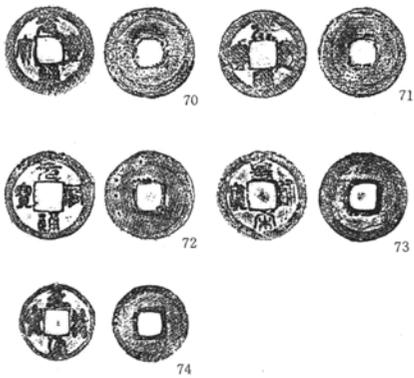
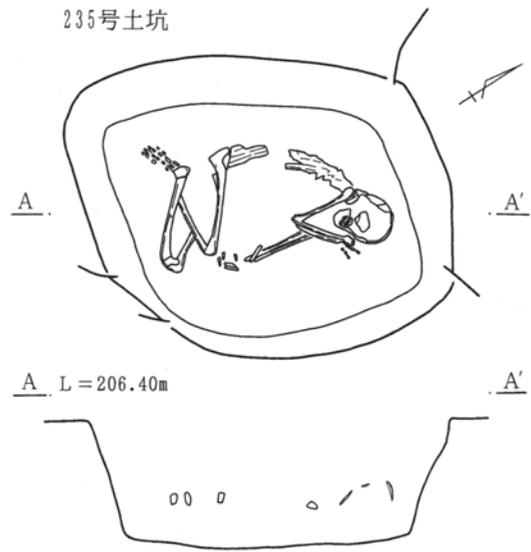
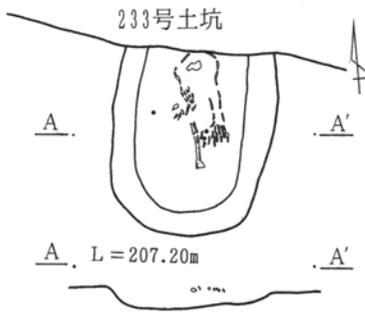
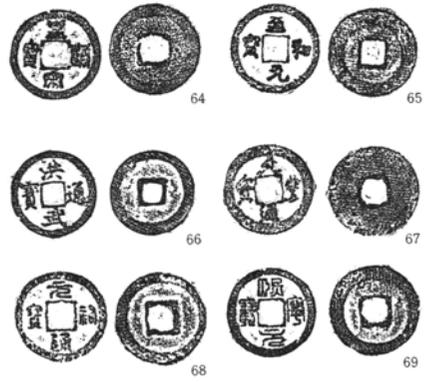
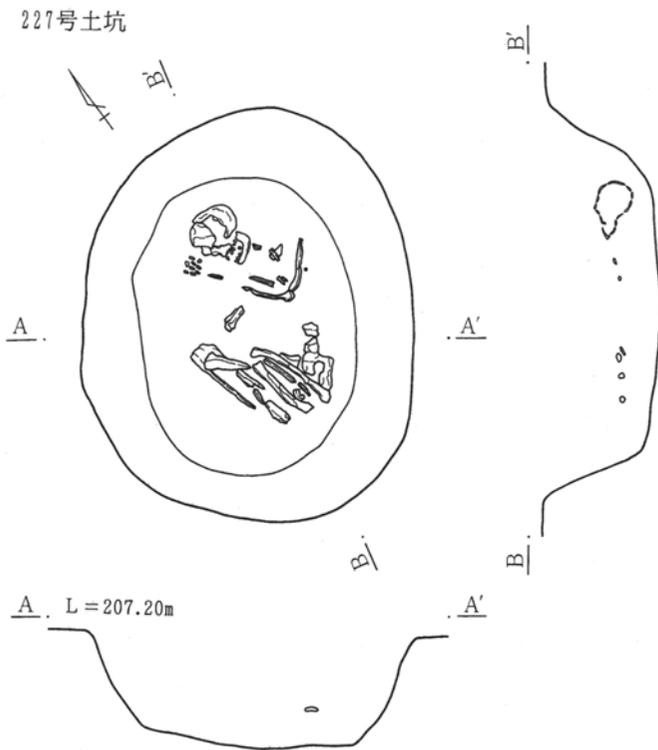
0 1 : 30 1 m

0 1 : 30 1 m



103図 土坑(墓壙)(1)

5 Hr - FP 上で検出された遺構と遺物



104図 土坑(墓壙)(2)

III 遺構と遺物

(集石遺構)

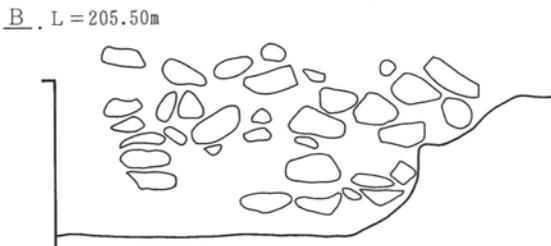
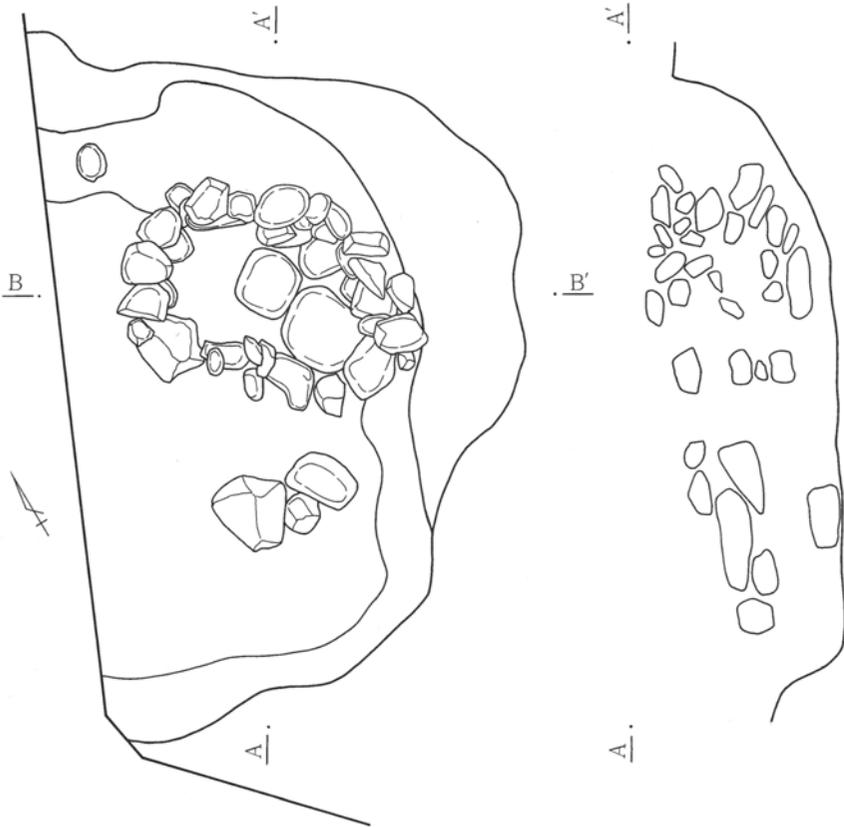
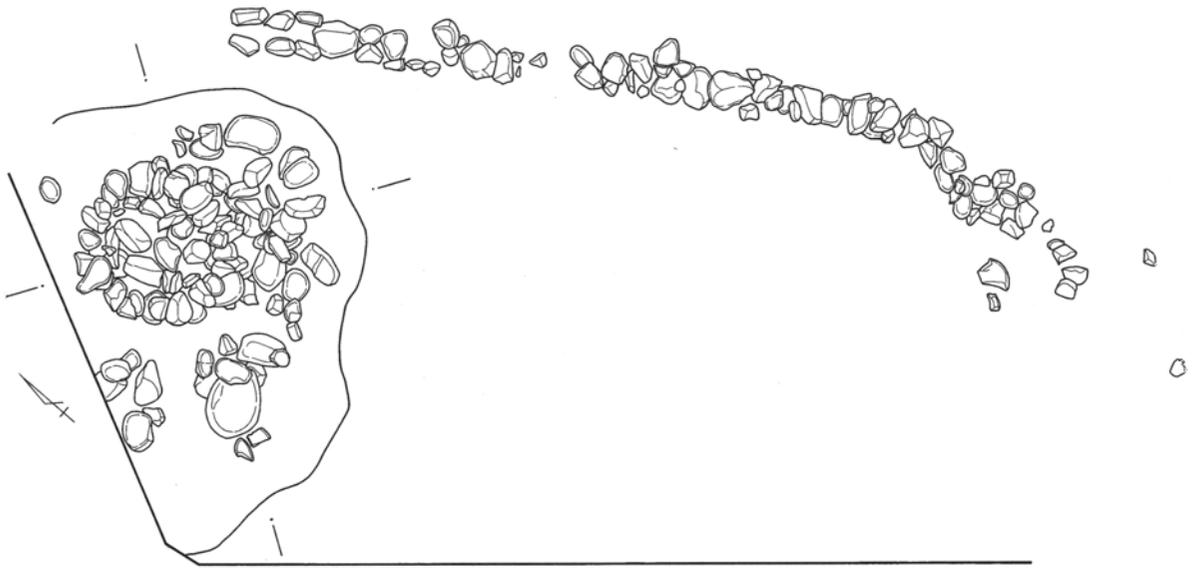
ここで報告する集石遺構は下部に土坑施設を持ち、自然石や石臼が集積する遺構である。本来ならば、土坑番号を付して集石土坑として報告すべき遺構であるが、調査時に付した遺構番号を優先し、1号集石遺構として報告する。

検出されたのはII区西端である。II区西端は段丘崖に平行する調査区で、近・現代に大きく攪乱を受けた箇所である。FP・FA層は逸失しており、表土下はローム層が露出した状態であった。故に、本集石遺構は、遺構上部が破壊された状態での検出と見ている。また、その他の重複・近接する遺構は見られず、集石遺構のみが単独で検出された。

集石遺構は土坑内集石と列石からなる。列石は中～大型の自然石を直線状に、等高線に沿って南北6m近く並べられ、最南端で列が乱れる様相である。石の組み方も土坑際は複列の石が見られるが、殆どが乱雑な組み方で構成されていた。

土坑内集石は多量の自然石や石臼で構成されている。軸長3.6m程度の不整形土坑を下部遺構とするが、西壁は調査区域外に延びるため東側のみの調査となった。断面形は、東側壁に緩やかな段を有し、土坑底面は平坦面を築き上げている。斜面地形における平坦面の構築と見られる。土坑内の集石は、大まかに2群に分別される。北東側と南西側に集石が別れる。南西側は大型の偏平な自然石を幾つか置く傾向を見せ、北西側の一群は組石施設を主とする。特に北西側の組石は軸を北に向け中央に偏平な自然石を配する。その上位を多量の自然石が覆う形態となっている。おそらく、北側組石施設は何等かの埋納施設であり、南側の偏平な石はそれに付帯する施設と考えられる。上位の多量の自然石は、土層の観察から近・現代の攪乱ではなく、施設廃棄後に行われたものと捉えられる。人骨や古銭の出土もないため、墓壙としては位置付けられないが、類した施設と位置付けられよう。北東にある列石は、簡素な石垣・土留め施設の下部と考えたい。出土遺物は軟質陶器鉢底部破片の他、凹石や石臼の出土が目立った。時期は不確定であるが、近世段階の所産と考えたい。





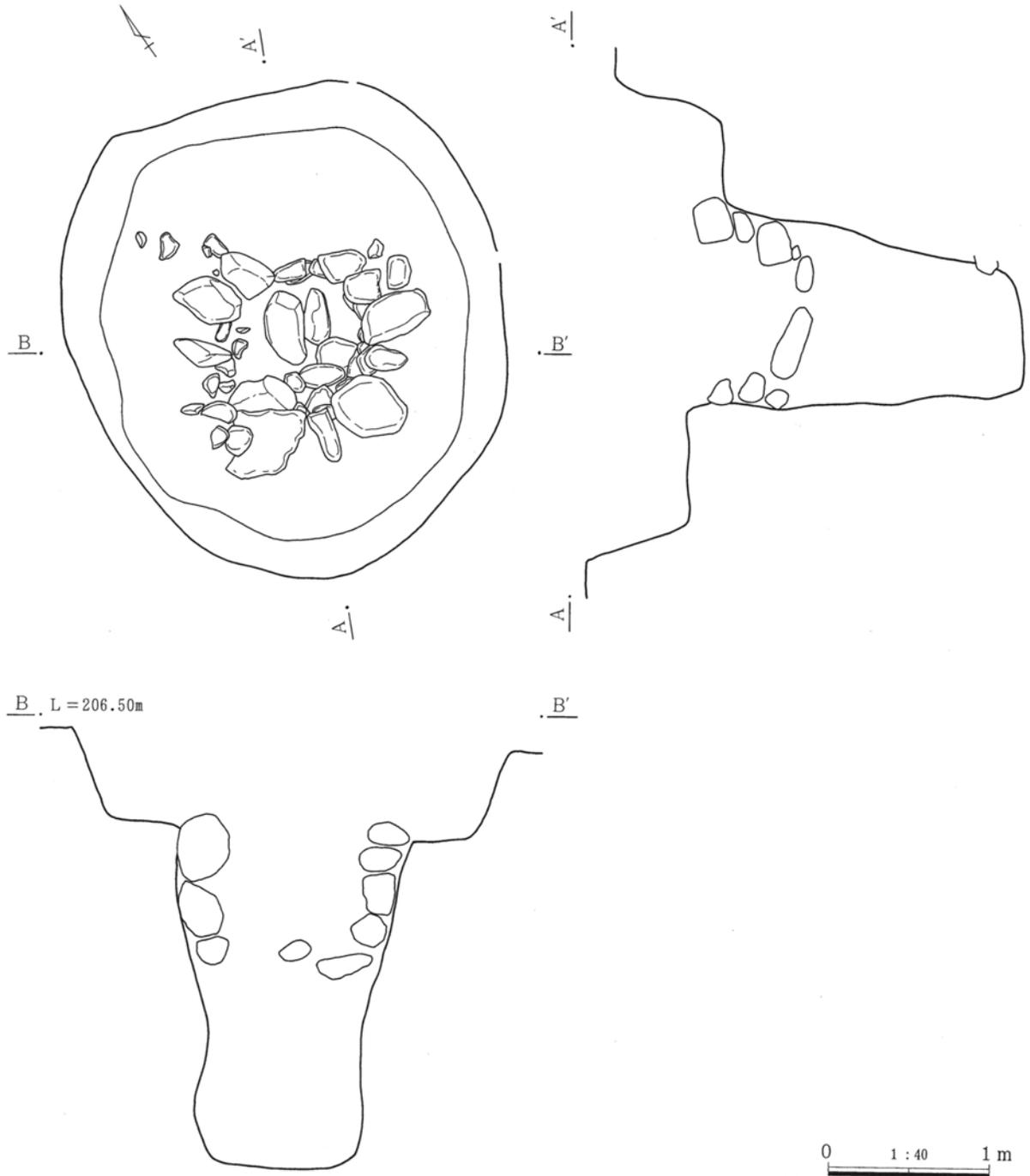
105図 1号集石遺構

III 遺構と遺物

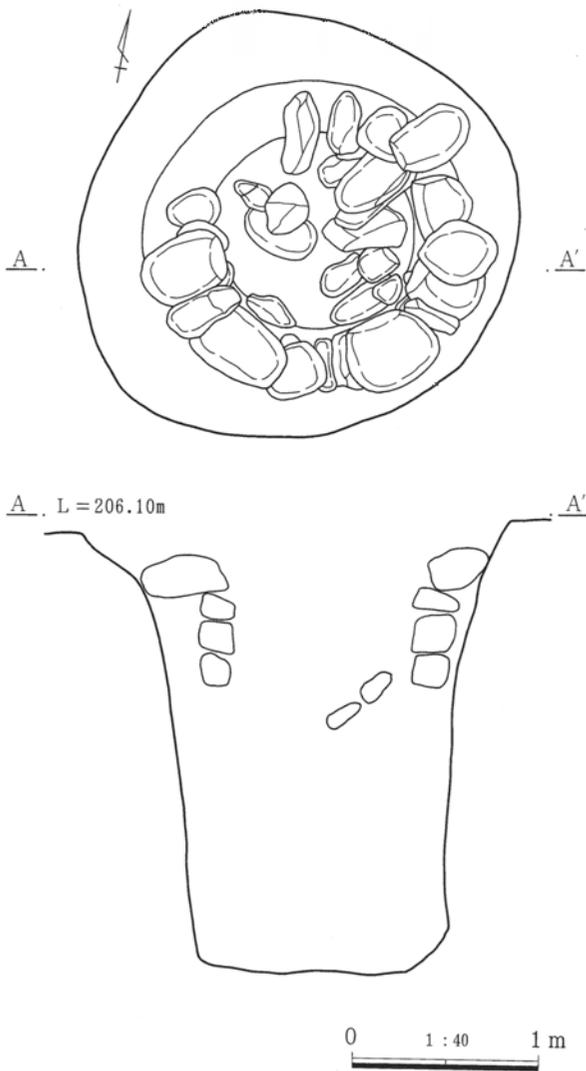
(井戸)

井戸遺構はI区・II区各々1基ずつ確認した。この他に現代も供されていた井戸をI区西側で確認したが、これは調査していない。2基の井戸とも、FP層を掘り抜き下層にまで達していたため、調査にあたっては、安全対策上井戸下位部分の調査はFA下面の調査時に検出作業を行った。

1号井戸跡：II区東側で検出した。周辺には中・近世土坑群が密集する。当初は大型土坑と捉え、土坑番号を付した調査を行ったが、後に石組が検出され井戸と判明し、1号井戸跡と改称した経緯がある。大型円形の平



106 図 1号井戸跡



107図 2号井戸跡

遺物は、埋土中より石製骨蔵器や播鉢底部破片が、石組内より石臼(茶臼)が出土している。時期は中世か。

(溝跡)

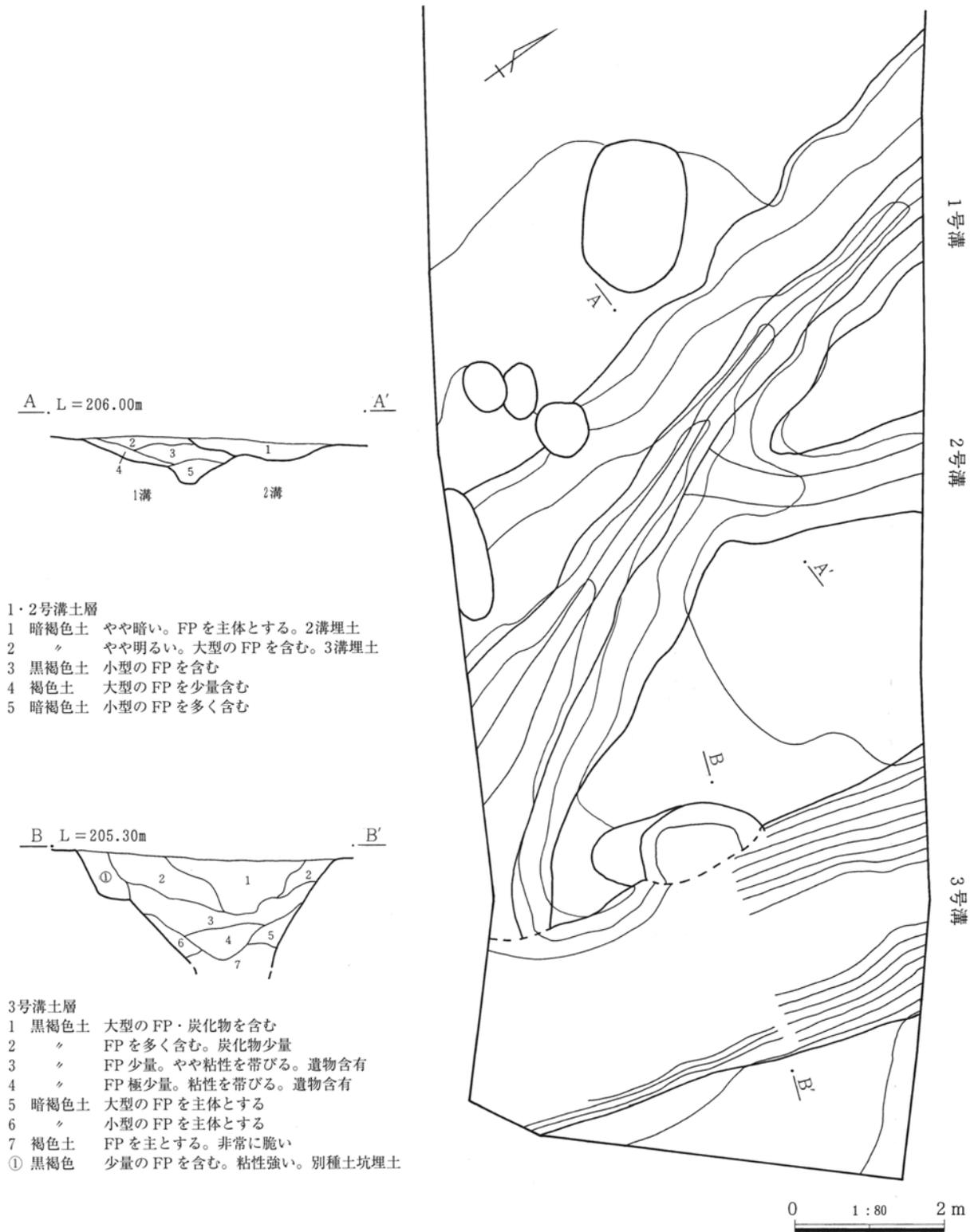
FP 上面の調査では、6条の溝を検出した。I 区東側で見る 4～6号溝、II 区東側谷部分の 1～3号溝である。多くの溝の場合、底面を FP 層中にとどめるため、恒常的な水利上の用途は考え難い。水を流す性格を充てるならば、大雨などの水量の多い出水時に機能するものと思われる。

1～3号溝跡：取えて水利上の機能を充てる溝である。II 区東側谷部分で調査した。傾斜地に営まれた排水用の溝と考える。1号溝はほぼ南北の走行を見せる。南に下る走行であり、北側は幅約 2.0m ほどだが、傾斜に従い広くなり南側では 4m 程に広がる。断面形は底面がさらに深くなる浅い薬研状を示す。2号溝は 1号溝と重複する。新旧関係は 2号溝が新しい観察を得たが 1号溝南側で一体化するものと思われる。幅 1.2m 程で北東から南西への走行をしめし、1号溝中位に交わる。下端は 1号溝の薬研状まで達していたが、全体的に浅く 30cm 程度の深さを示している。この 1・2号溝と南で交わる 3号溝が、本遺跡で最も深く大型の溝である。残念ながら

面形を呈し、径約 3.0m、深さ 2.6m を測る。断面形としては FP 中位層で段を持ち、幅約 50cm 程の平坦面を築く。石組はこの平坦面から構築されており、周縁を巡るように配されていた。石組は深さ約 1m 程の FP 層下位で留まり、井戸下位は素掘りの壁となることから、石組は脆弱な FP を壁とする際の補強材として供されたものとして位置付けられよう。石組内の径は約 80cm 程であり、石組より 2m 程で底面に達し、調査時においては湧水はなかった。また、上位の有段開口部であるが、井戸掘削に際して 1m 以上の FP 層を掘り抜くため、当時、掘削時の安全効率を図るためと捉えられよう。出土遺物は見られず、時期判定に苦慮するが、周辺土坑との重複関係等から、おそらく中世段階と考えている。

2号井戸跡：I 区南側で調査された。南に 172号坑・173号坑が近接する。I 区では標高の最も低い地点である。平面形は径 2.2m 程の不整形円形を呈し、深さは確認面より 2.3m を測る。断面形は上位が緩やかに開く形態で、底径が 1.2m 前後とやや広く、直立気味の壁を呈する。1号井戸同様に石組を施す。北西部分の石組が崩れ井戸中位に転石が見られ、全周していたものと捉えられた。石組内径は 1.0m とやや広い。石組は確認面より深さ 80cm 程まで組まれており、大型自然石を 4～5段を重ねることによって、FP による壁を補強していた。FP 下層下位からは素掘りの形態となり平坦な底面に達する。

III 遺構と遺物



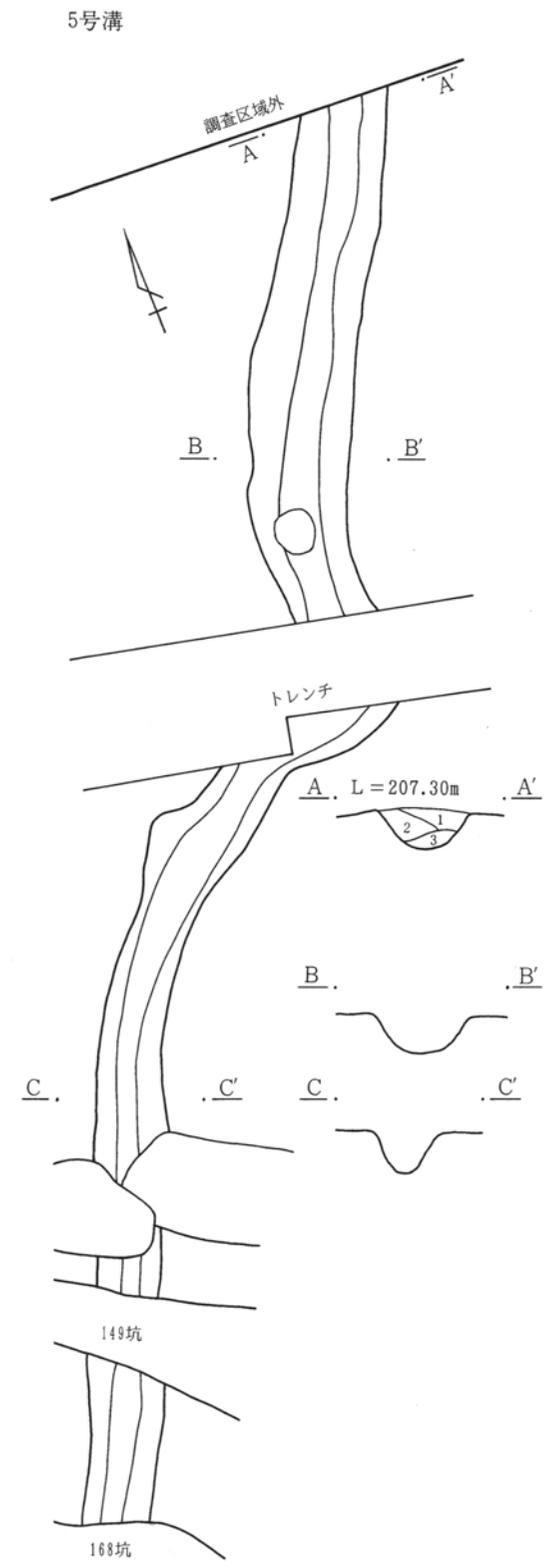
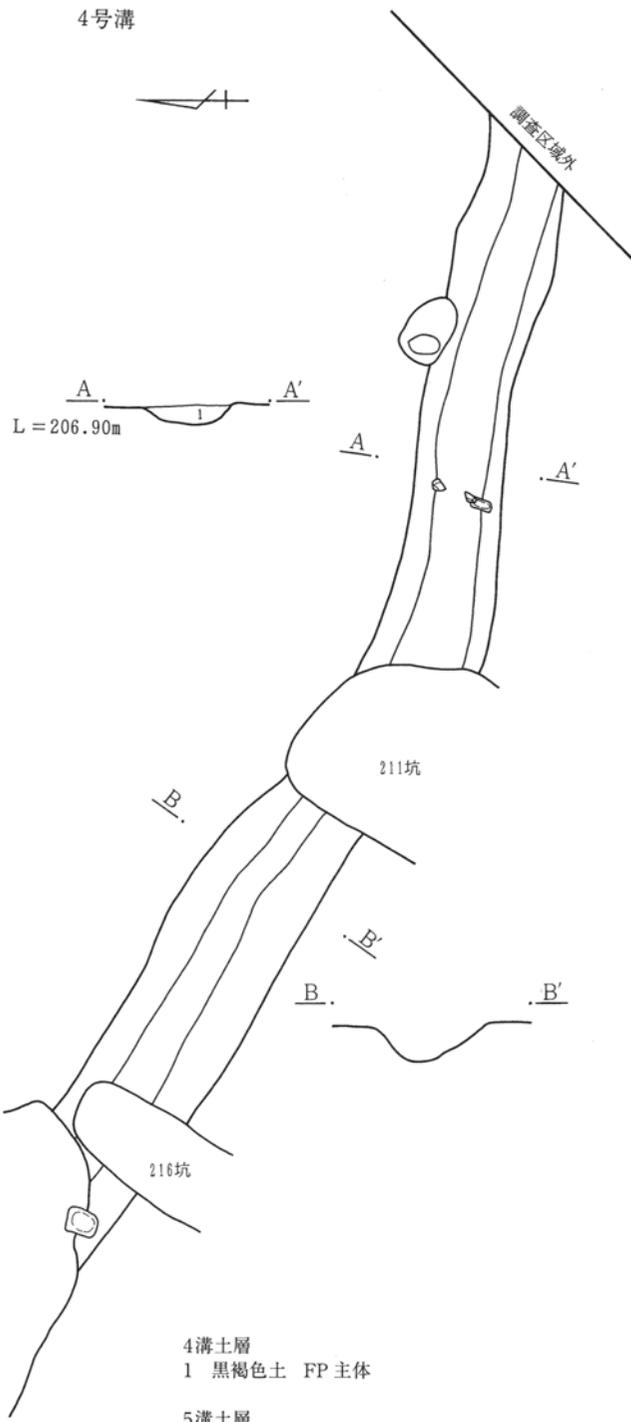
1・2号溝土層

- 1 暗褐色土 やや暗い。FPを主体とする。2溝埋土
- 2 〃 やや明るい。大型のFPを含む。3溝埋土
- 3 黒褐色土 小型のFPを含む
- 4 褐色土 大型のFPを少量含む
- 5 暗褐色土 小型のFPを多く含む

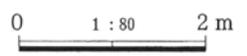
3号溝土層

- 1 黒褐色土 大型のFP・炭化物を含む
- 2 〃 FPを多く含む。炭化物少量
- 3 〃 FP少量。やや粘性を帯びる。遺物含有
- 4 〃 FP極少量。粘性を帯びる。遺物含有
- 5 暗褐色土 大型のFPを主体とする
- 6 〃 小型のFPを主体とする
- 7 褐色土 FPを主とする。非常に脆い
- ① 黒褐色 少量のFPを含む。粘性強い。別種土坑埋土

108 図 1～3号構跡

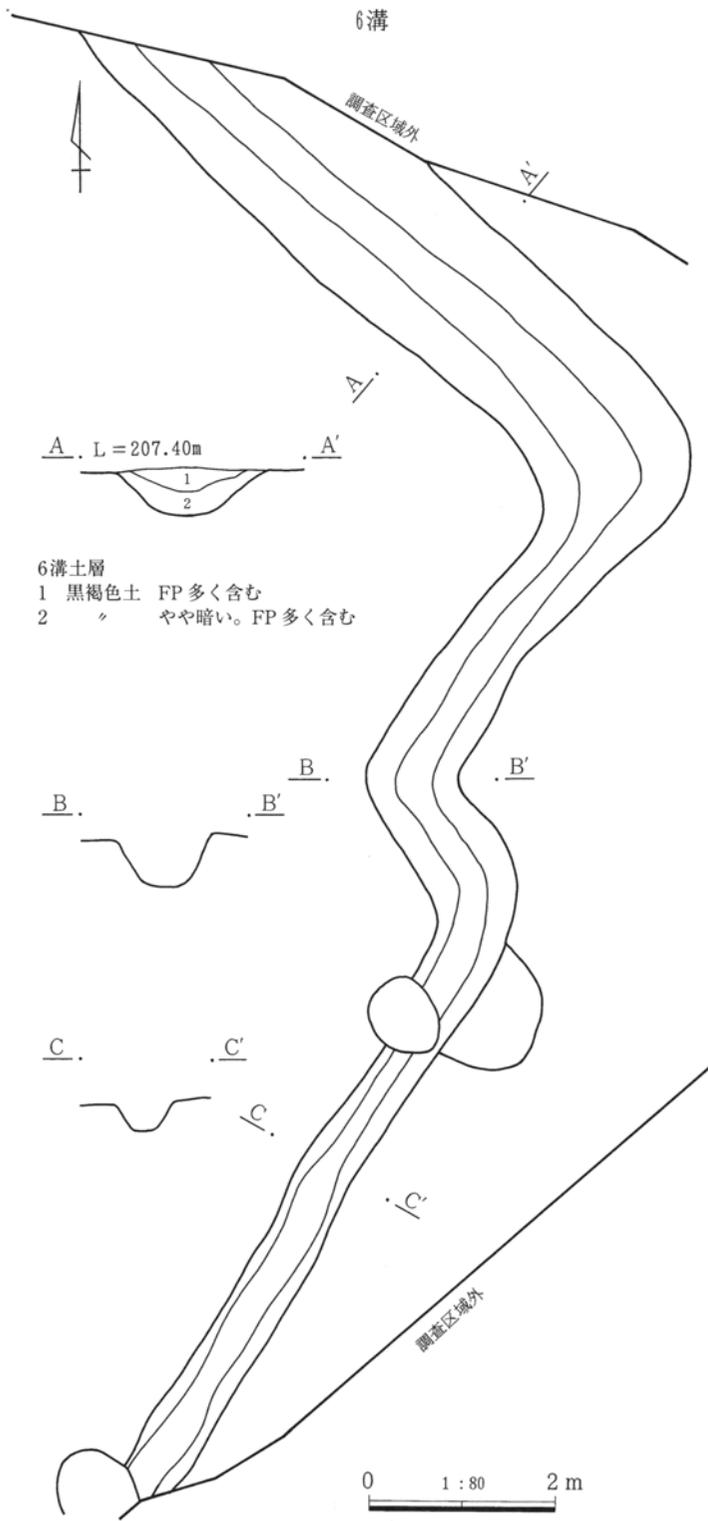


- 4号溝土層
 1 黒褐色土 FP主体
- 5号溝土層
 1 黒褐色土 暗褐色土塊・FP多含む
 2 暗褐色土 暗褐色土塊多く含む
 3 〃 黒褐色土塊少量含む



109図 4・5号溝跡

III 遺構と遺物



110図 6号溝跡

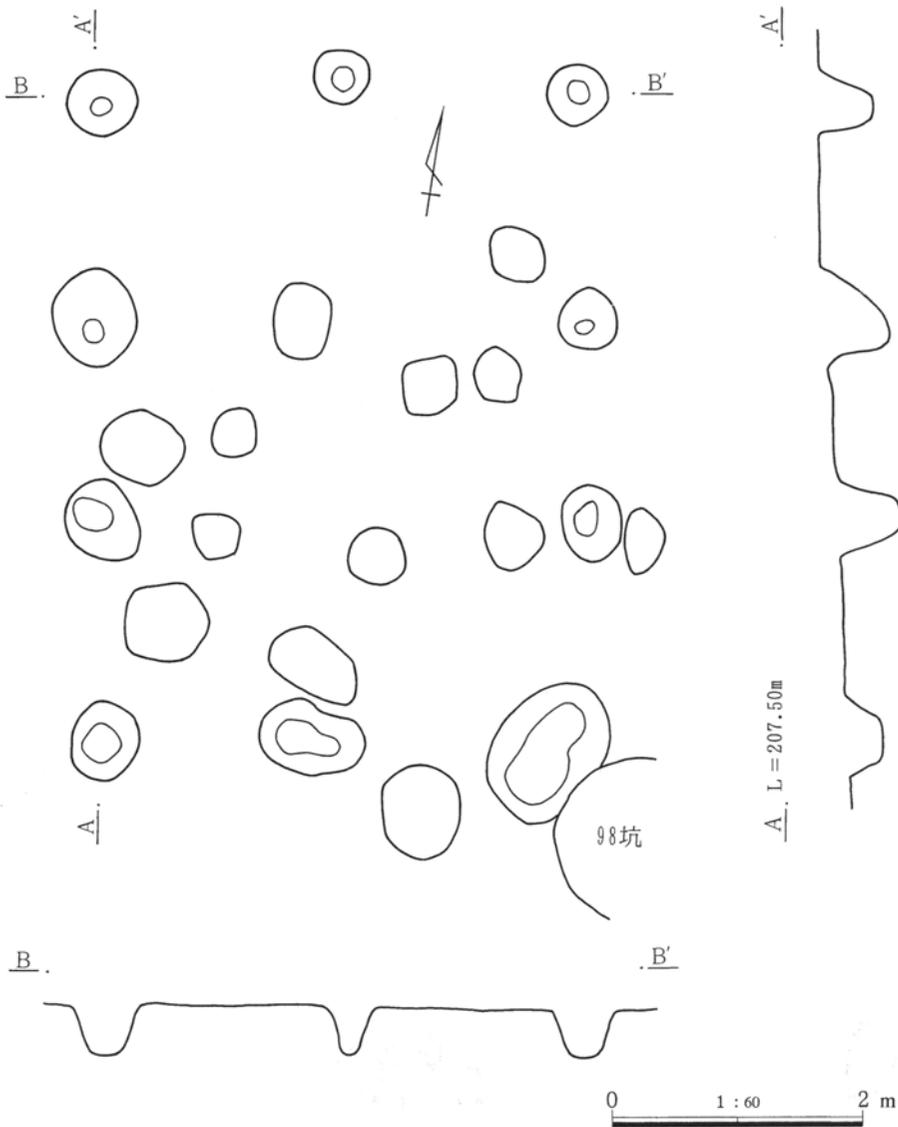
ら1・2号溝との新旧は不明である。幅約3.0mで南北の走行を見せる。深さは1.2mを超え、FP下面にまで及んでいた。出土遺物としては、凹石、土師質土器坏、砥石などが埋土中より出土した。出土遺物から時期は中世と捉えられる。

4～6号溝跡：I区東側で方形の区画を形成するような配置で調査された。4号溝と5号溝が168号坑で交わる。4号溝と6号溝、5号溝と6号溝は調査区域外へ延びるため、確定的ではないが、ほぼ直交状態で見られるものと判断できる。4号溝はI区東端から168号坑へ走行する。方位は北西を向く。209号坑・211号坑・216号坑と重複するが、いずれも新旧関係は不明である。幅は約0.8～1.2m前後で211号坑重複部で緩やかに彎曲する。深さは20～40cm程で東から西へ下る。5号溝は北東に軸を向け、北東から南西に下り168号坑と接する。重複遺構は149号坑や小土坑が重なる。また、トレンチに破壊される箇所で見られる溝が彎曲する形態を取るがこれはあるいは小土坑などとの重複かも知れない。幅は60～110cmと一定せず、深さは20～40cmと南側が深くなる。6号溝はI区北東部で屈曲を見る形態で調査された。北辺は調査区域外に延びるが、北西～南東に走行を持ち、南東部でほぼ直角に屈曲する。東辺は北東に軸を向け5号溝と平行する走行である。中で小規模な屈曲を2箇所見るが、この屈曲の要因は判然とせず不明である。幅は北辺が広く約150cmに対し、東辺南側は60cm程度である。この差の意味するところも不明である。深さは40～50cm程度で徐々に南へ傾く。出土遺物は石臼を1点見ている。

(掘立柱建物跡)

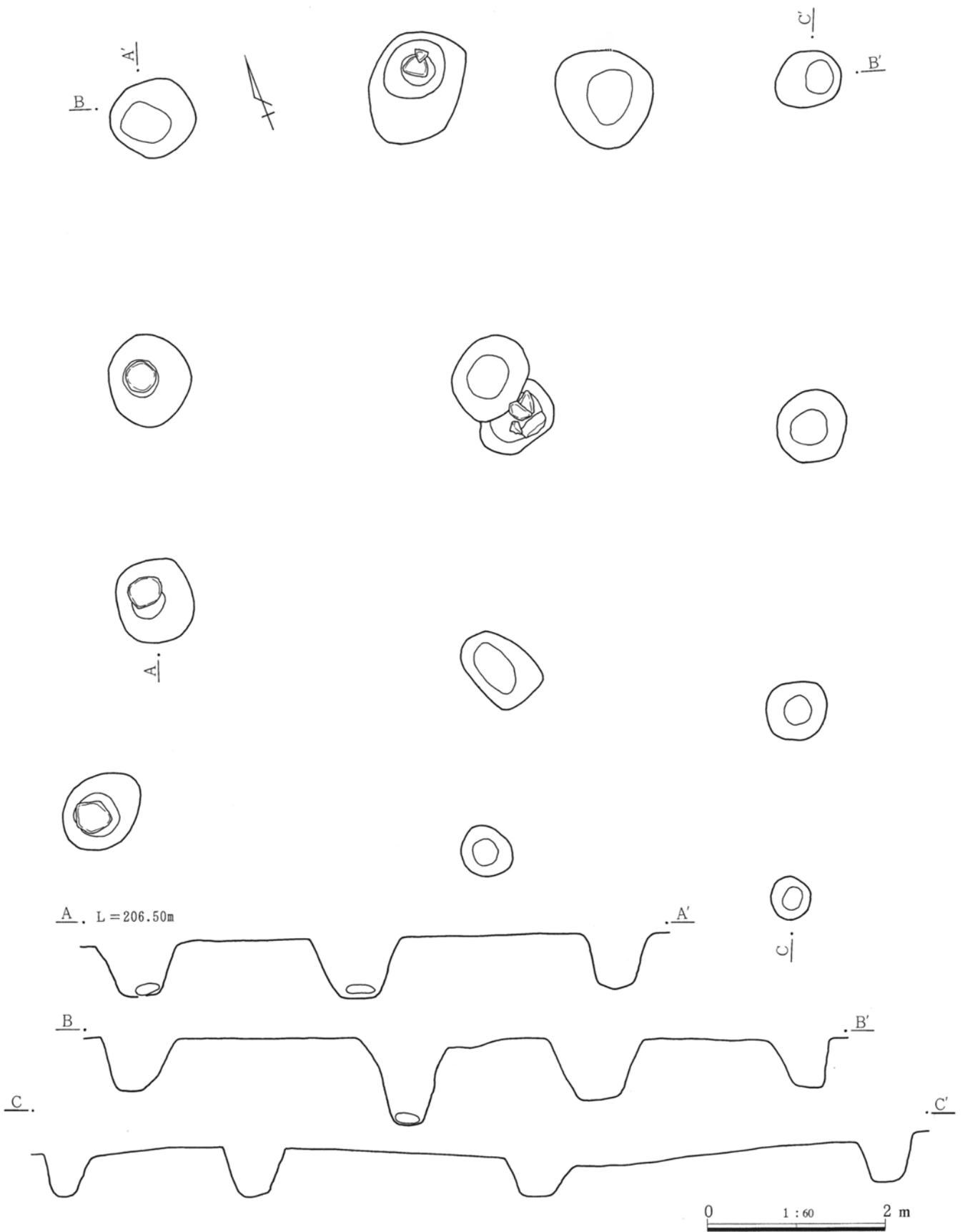
3棟の掘立柱建物跡を調査した。本遺跡は周辺の遺跡比して、中世～近世の遺構密度が高く、多くのピットを検出した。この中で特にピットの規模が柱穴に相当する箇所を集中的に精査し、掘立柱建物跡の検出を試みたが、重複する土坑等の存在のため、その全てを把握できてはいない。特に1号・2号掘立柱建物跡周辺は数棟の建物跡の存在が想定され、本報告書で扱う3棟以外にもその存在は否定できない。

1号掘立柱建物跡：II区中央東寄りで検出された。周辺はピット・土坑が群在し、37号・102号坑・98号坑が近接する。また、98号坑は本建物跡の南東隅柱穴と重複する。10基の柱穴からなる2間×3間の建物跡で、長軸方向で約5.3m、短軸で約3.9m程の規模である。西辺の柱穴列を基準とすれば、北辺中位のピットにややズレが見られるが、ほぼ方形に柱穴が配されるといえよう。軸方位は僅かに西に振れるがほぼ北を向く。柱穴規模は径80cmを超えるものもあるが、概ね50cm前後の小型のものを主体とする。深さも一定ではなく、確認面から20～40cmと比較的浅い。あるいは簡素な作りの上屋を想定できよう。時期は出土遺物が無いため特定できないが、主軸方位などは平安時代の竪穴住居跡と近似値を示す。9世紀代の可能性を指摘したい。

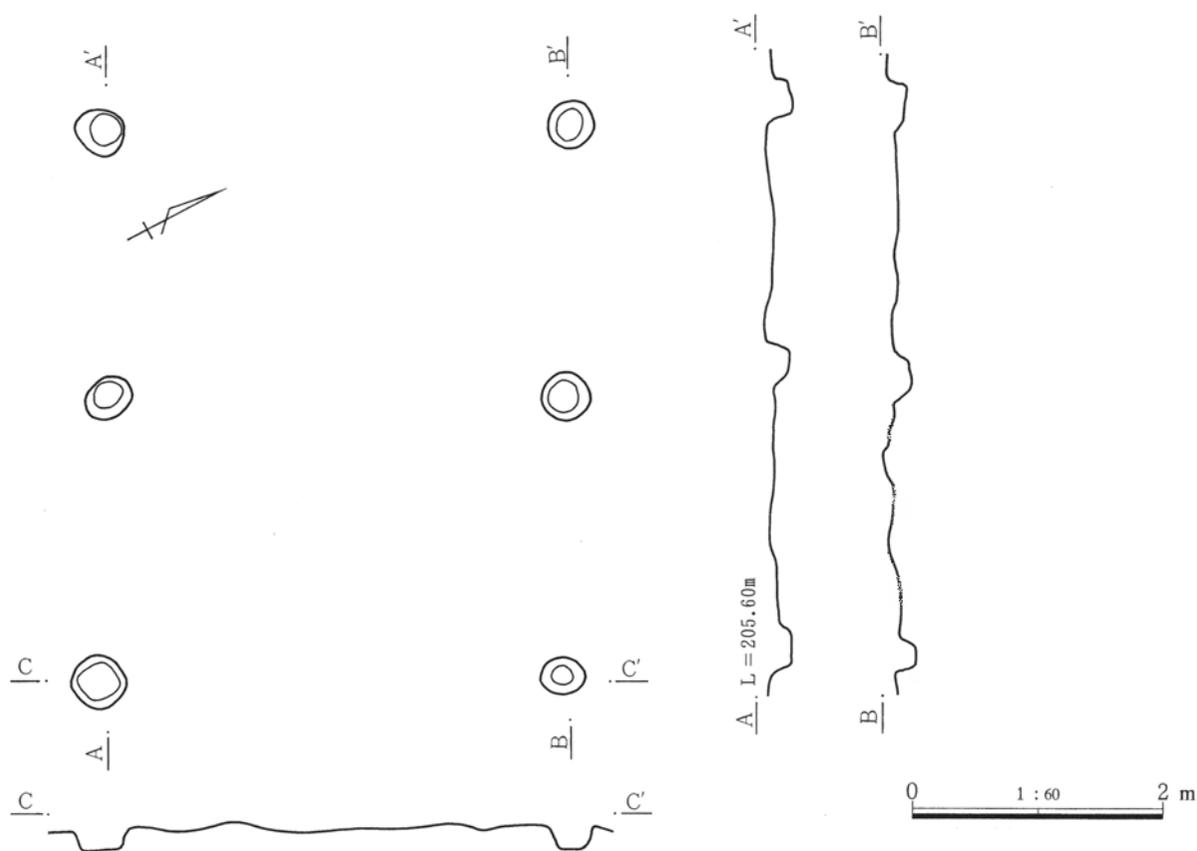


111図 1号掘立柱建物跡

III 遺構と遺物



112 図 2号掘立柱建物跡

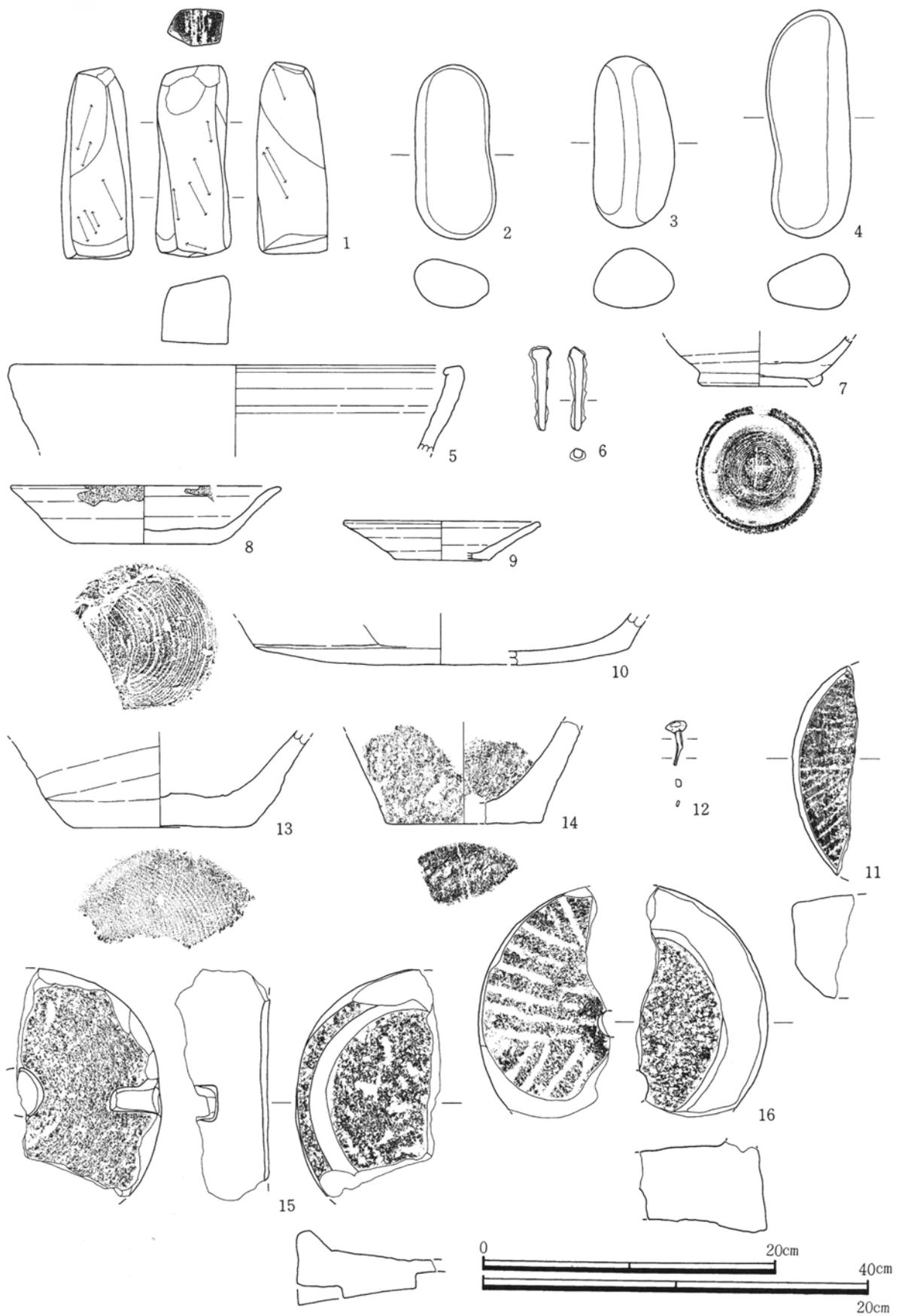


113図 3号掘立柱建物跡

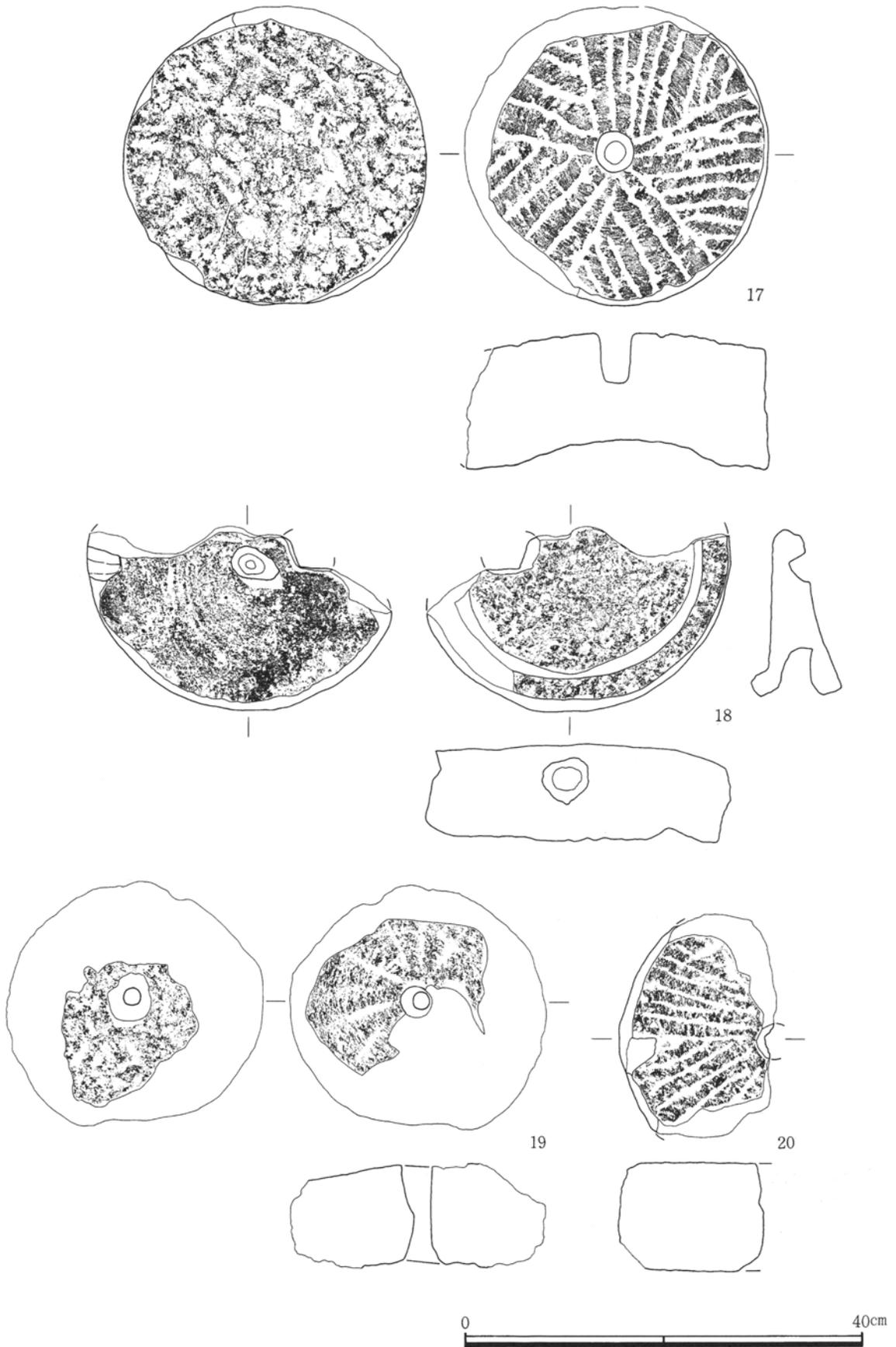
2号掘立柱建物跡：I区中央で検出された。表土段階で調査区内で最も平坦地形が保証されていた箇所である。周辺にはピット・土坑が群在し、この他にも建物跡が存在するものと思われるが、大形土坑等との重複で確定には至らなかった。本建物跡は基本的に2間×3間の軸長約8.0～9.0×7.5mを測る大型の建物跡である。西辺と東辺の長さに差があり、また柱穴配置も統一性が稀薄である。総柱の配置を示しながら、整然とした方形を基調とした建物ではないようである。しかしながら各ピットの深さも50cmを超えるものが多く、また、底面に礎石を置くピットが4基あることから、建物跡の存在は確定的と判断した。礎石を有する総柱の大型建物跡であり、堅牢な作りの施設が位置付けられよう。時期は不確定だが、周辺の遺構群と方位軸に若干差があるが、中世～近世に限られ、本建物跡も当該時期に比定されるものである。

3号掘立柱建物跡：II区南側で調査された。FP上で検出漏れとなり、FP下調査で確認された遺構である。ピット埋土にFPを含む黒色土が充填していたため、FP上の遺構と判断できた。1間×2間(軸長4.3×3.7)の小型の建物跡である。軸方位は北西を向き、周辺土坑群等と近似性を持つ。ピットの径は30cm程で小型であるがFP面での計測値は不明であり、50cm以上の径を持つものと想定される。さらに深さは、FP下における確認面で20cm程度と浅いが、FP上面からの掘り込みを勘案すると1m以上の深さを持つことになる。極めてしっかりとした作りの建物跡といえよう。時期は不明だが2号建物跡と同様に周辺遺構群との関連から中世～近世と考えておきたい。

III 遺構と遺物

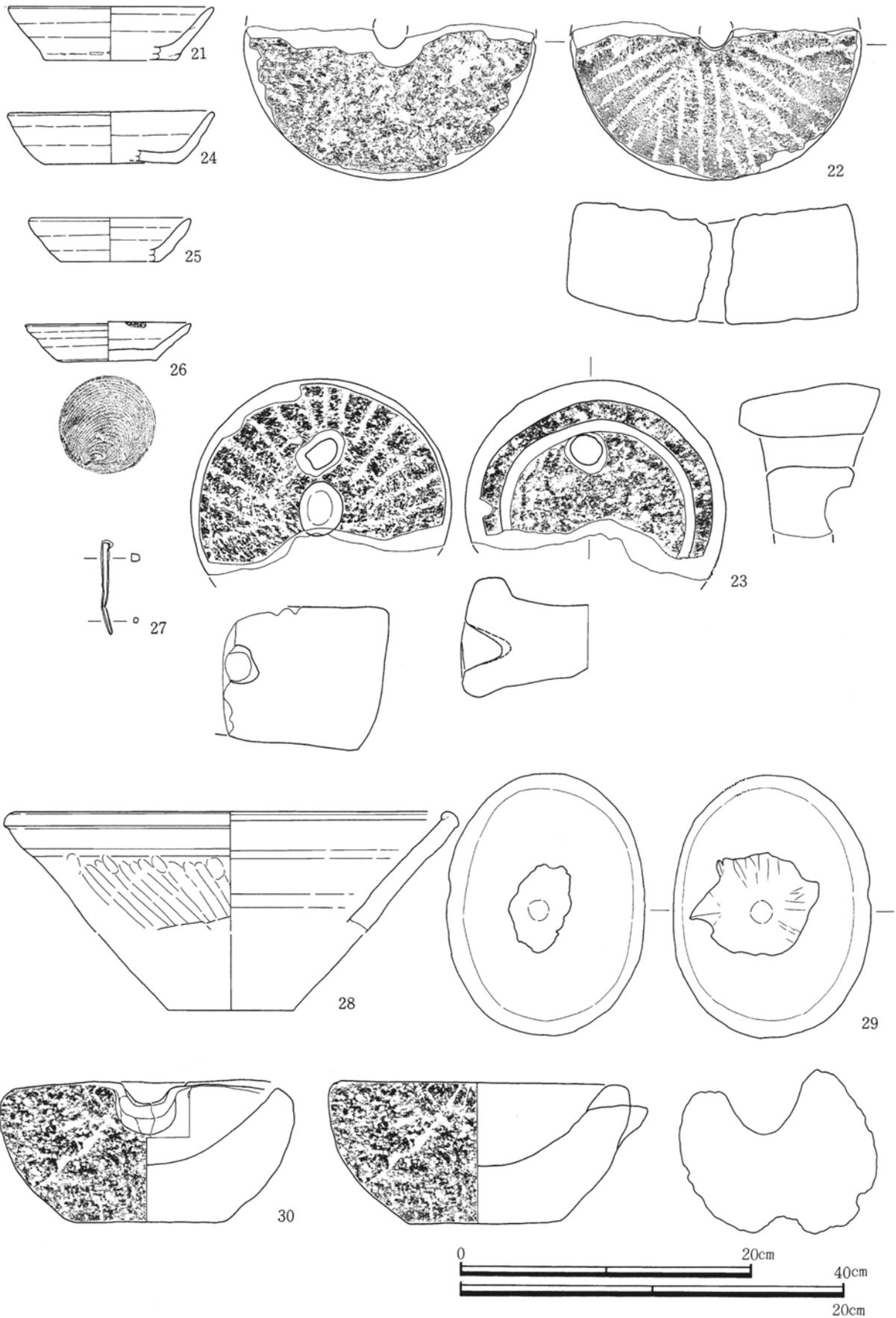


114 図 FP 上土坑・溝等出土遺物(1) 8. トーン部は油煙範囲

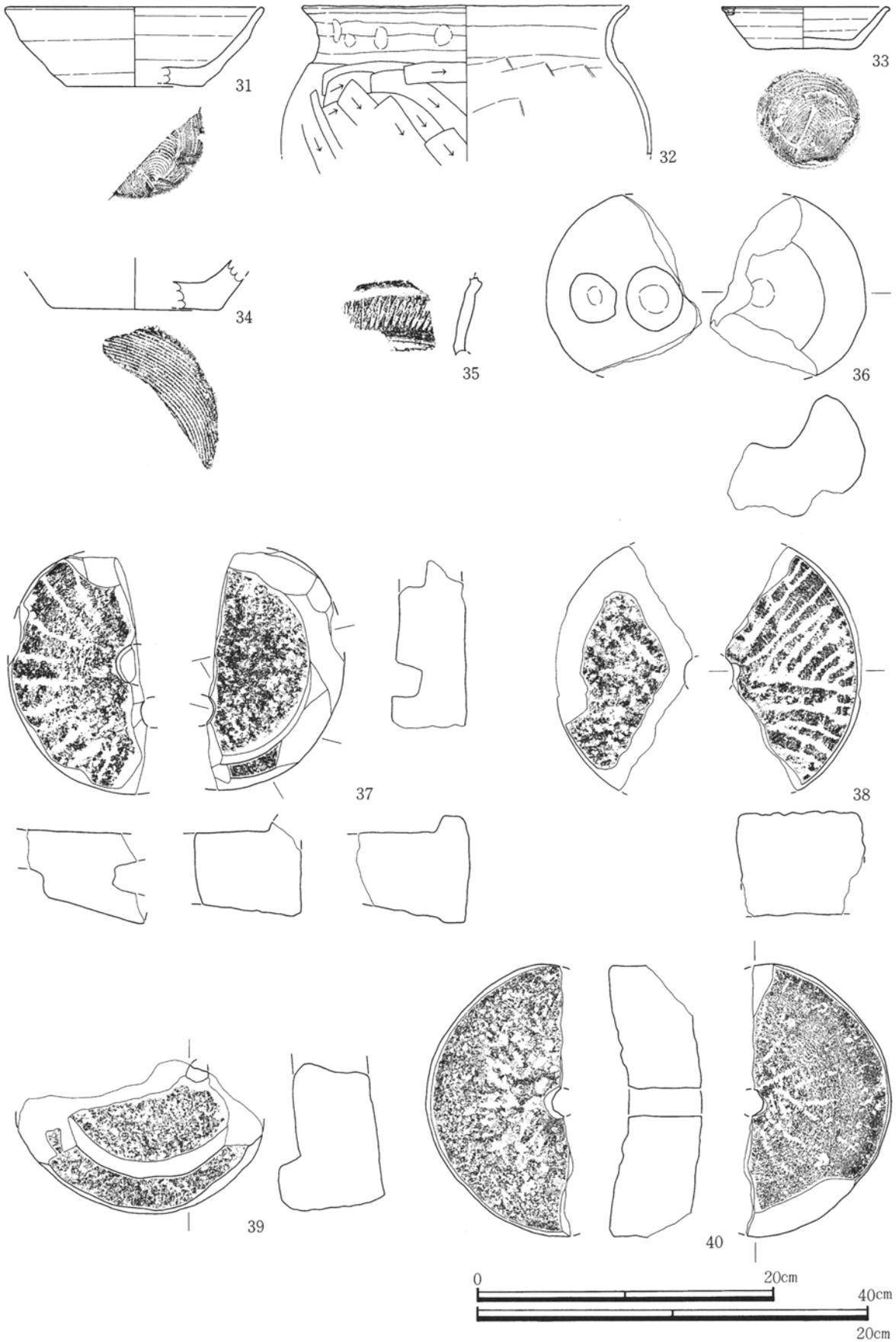


115図 FP上土坑・溝等出土遺物(2)

III 遺構と遺物

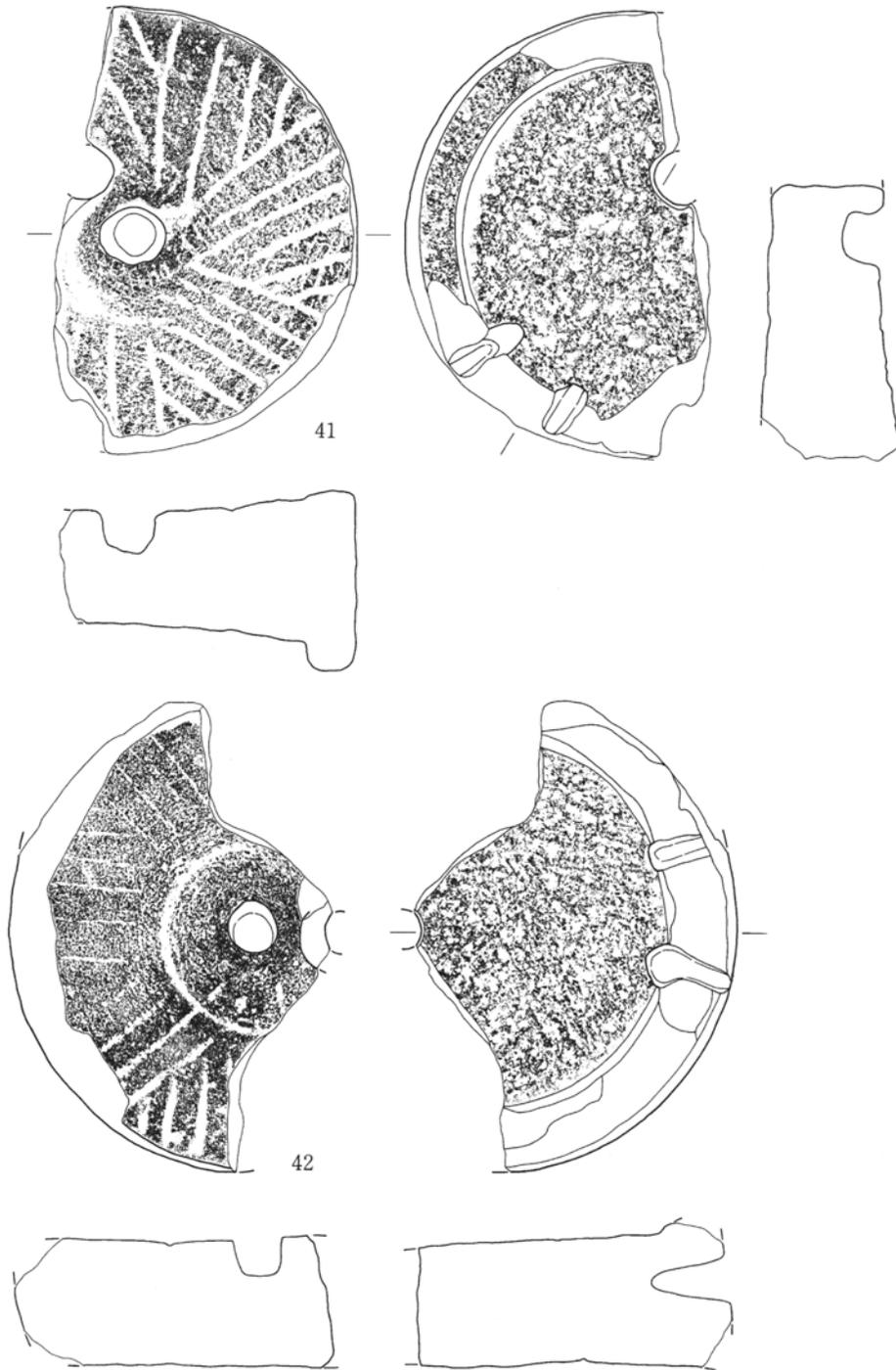


116 図 FP 上土坑・溝等出土遺物 (3) 26. トーン部は油煙範囲



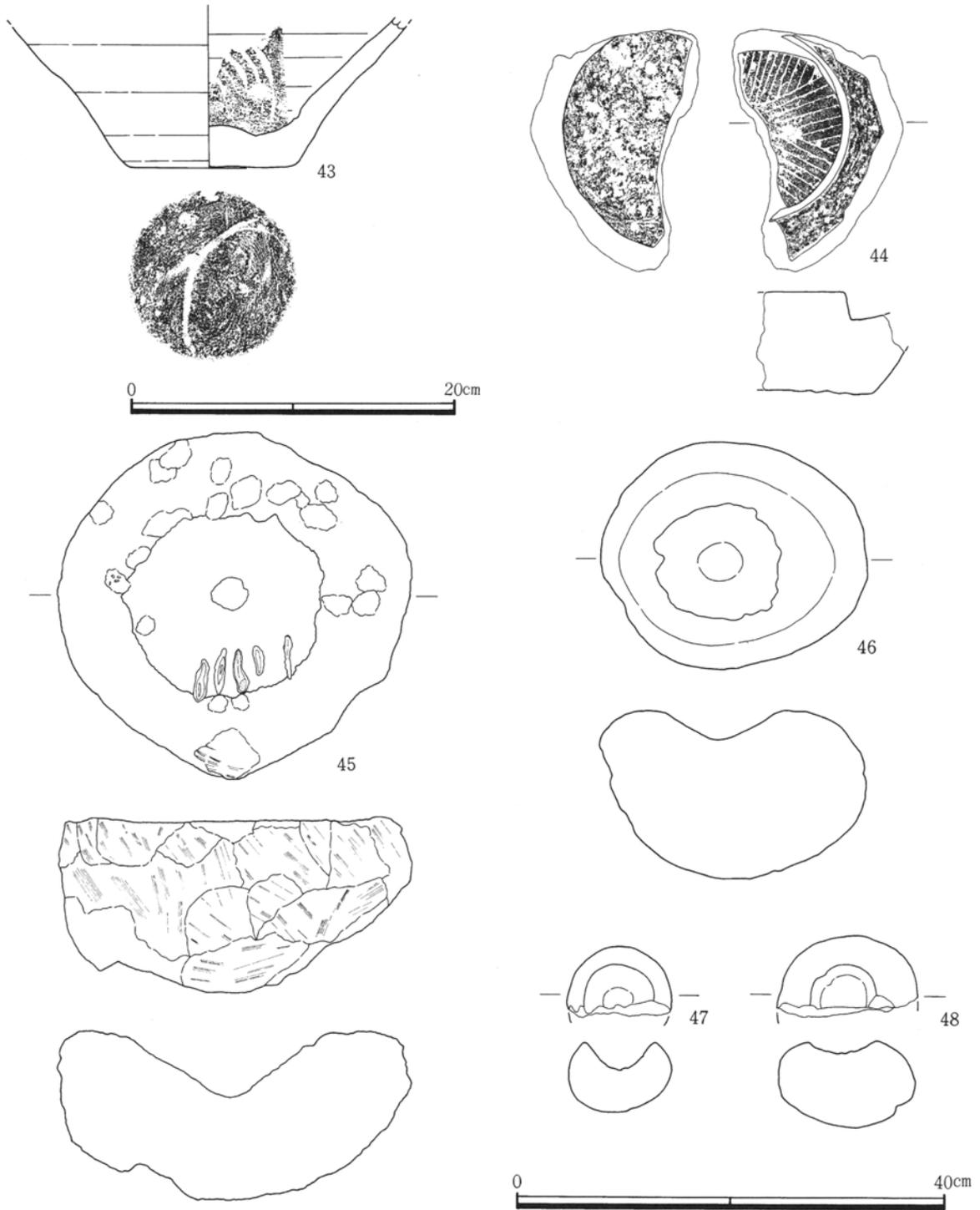
117図 FP上土坑・溝等出土遺物(4) 33. トーン部は油煙範囲

III 遺構と遺物



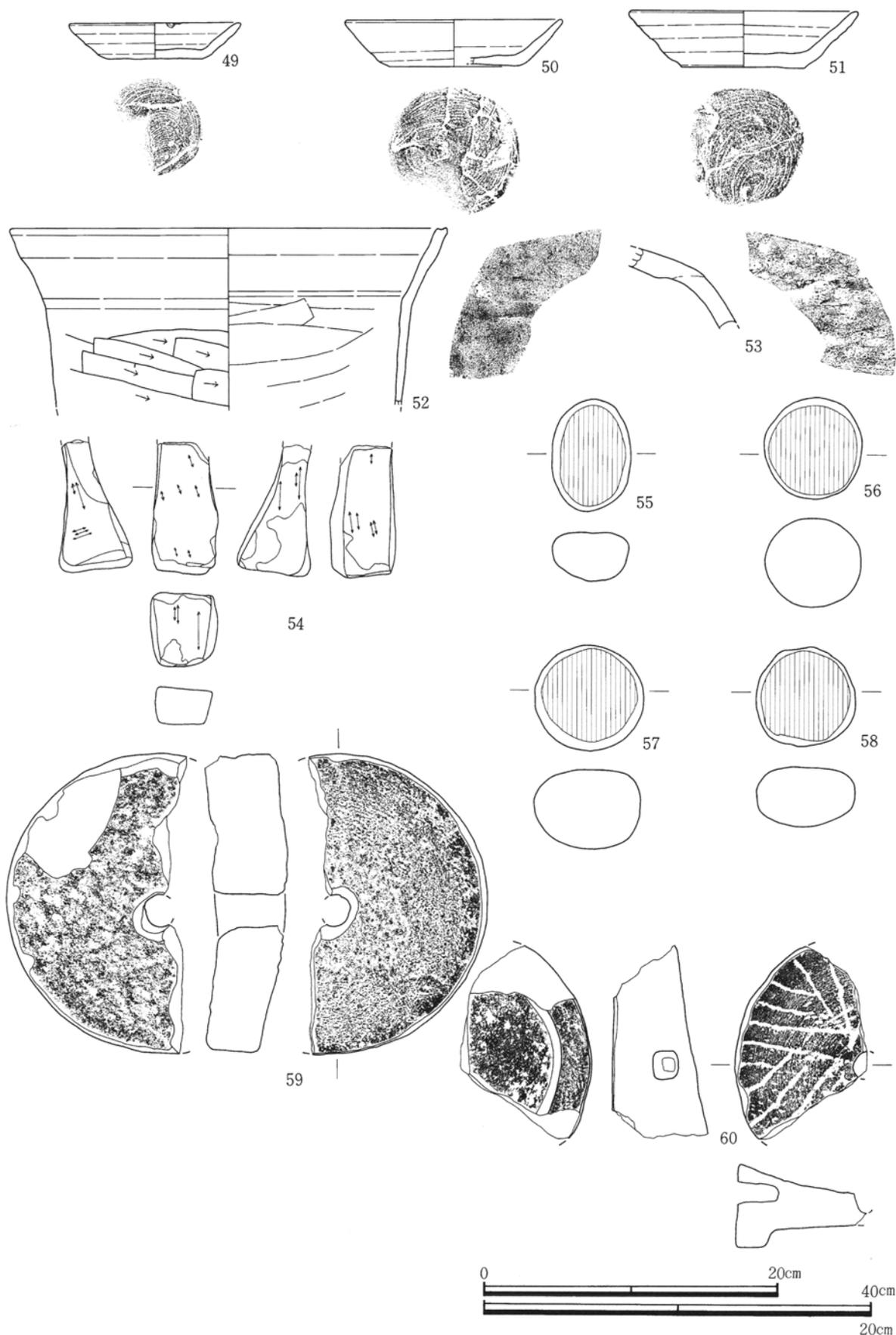
0 40cm

118 図 FP 上土坑・溝等出土遺物 (5)



119図 FP 上土坑・溝等出土遺物(6)

III 遺構と遺物

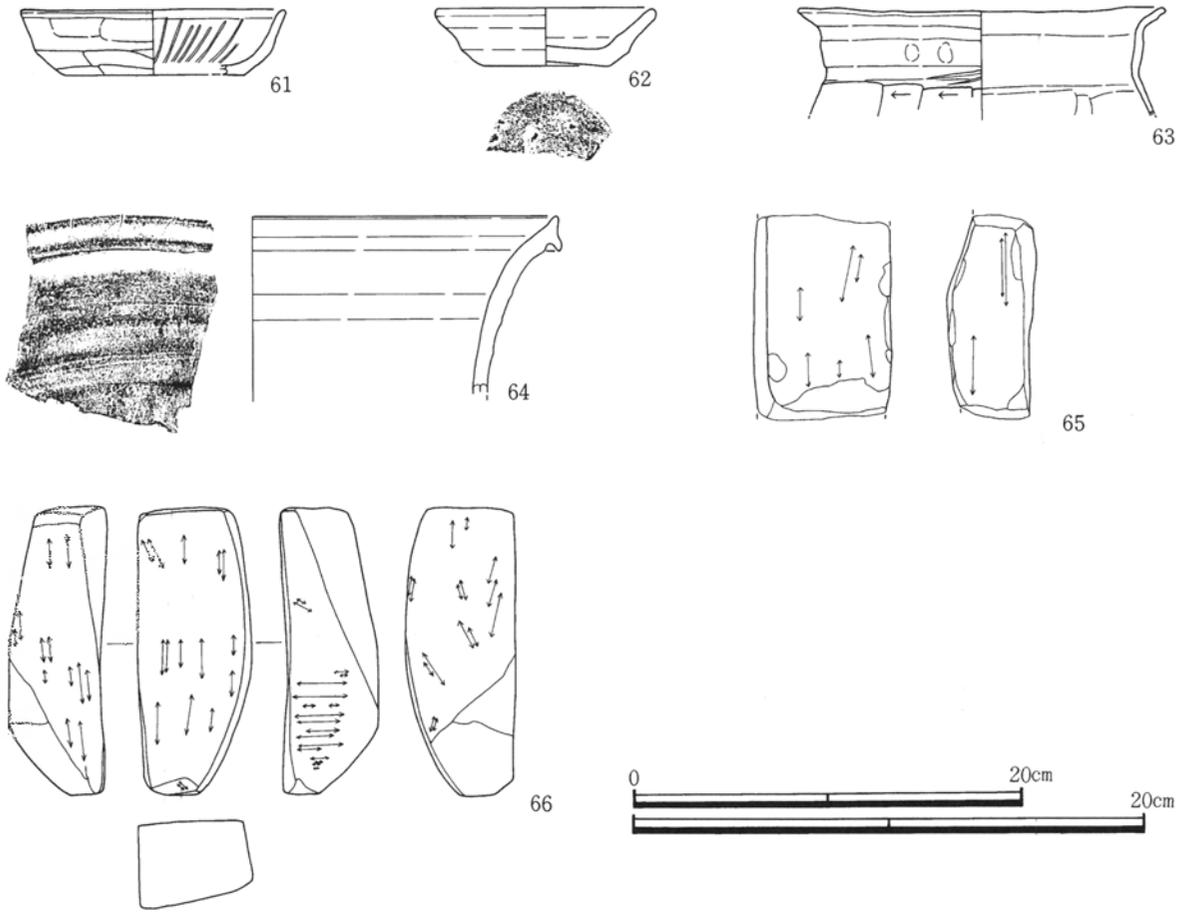


120図 FP 上土坑等出土遺物 (7)

55~58. トーン部は磨り面範囲

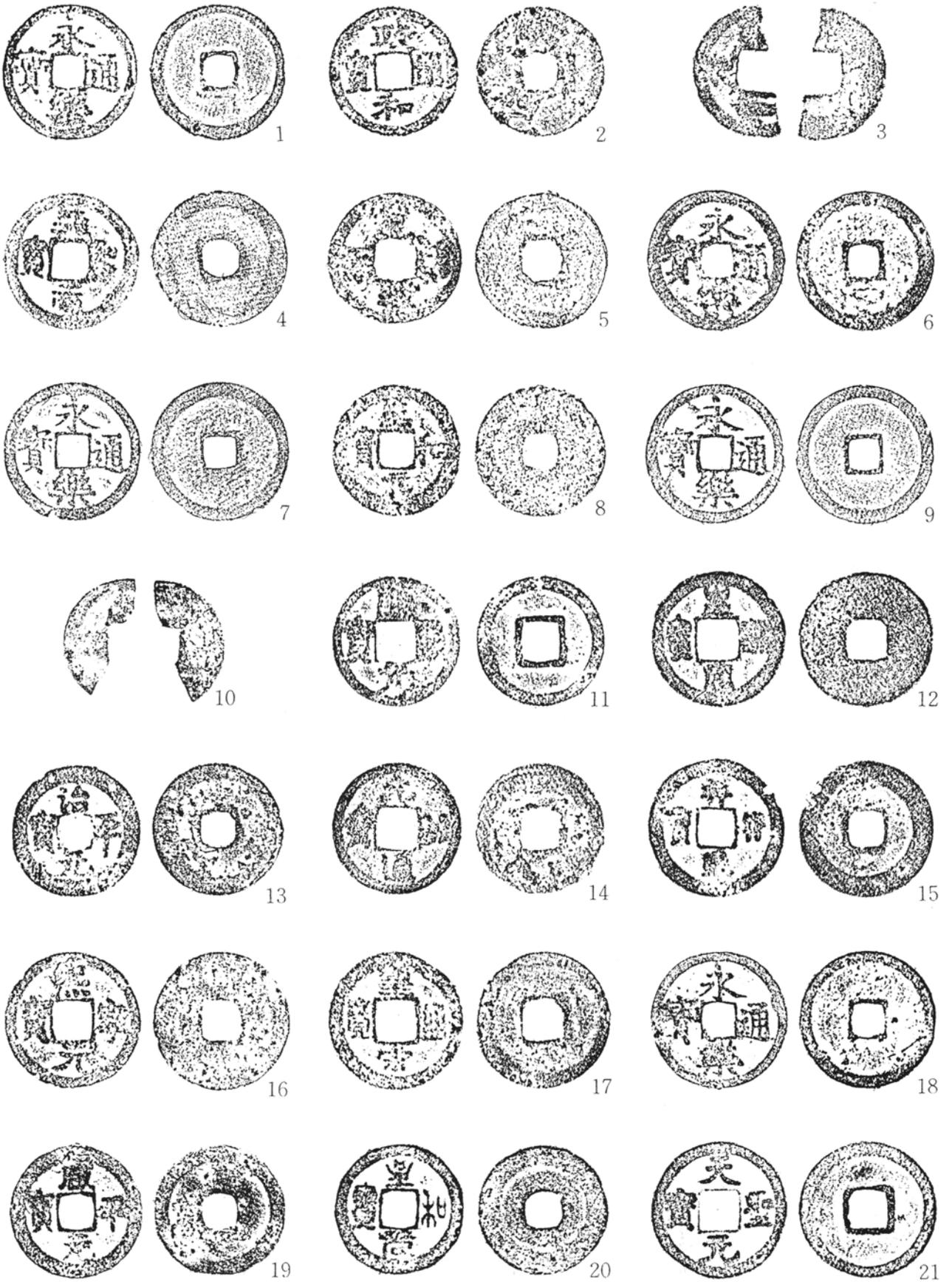
49. トーン部油煙範囲

5 Hr - FP 上で検出された遺構と遺物

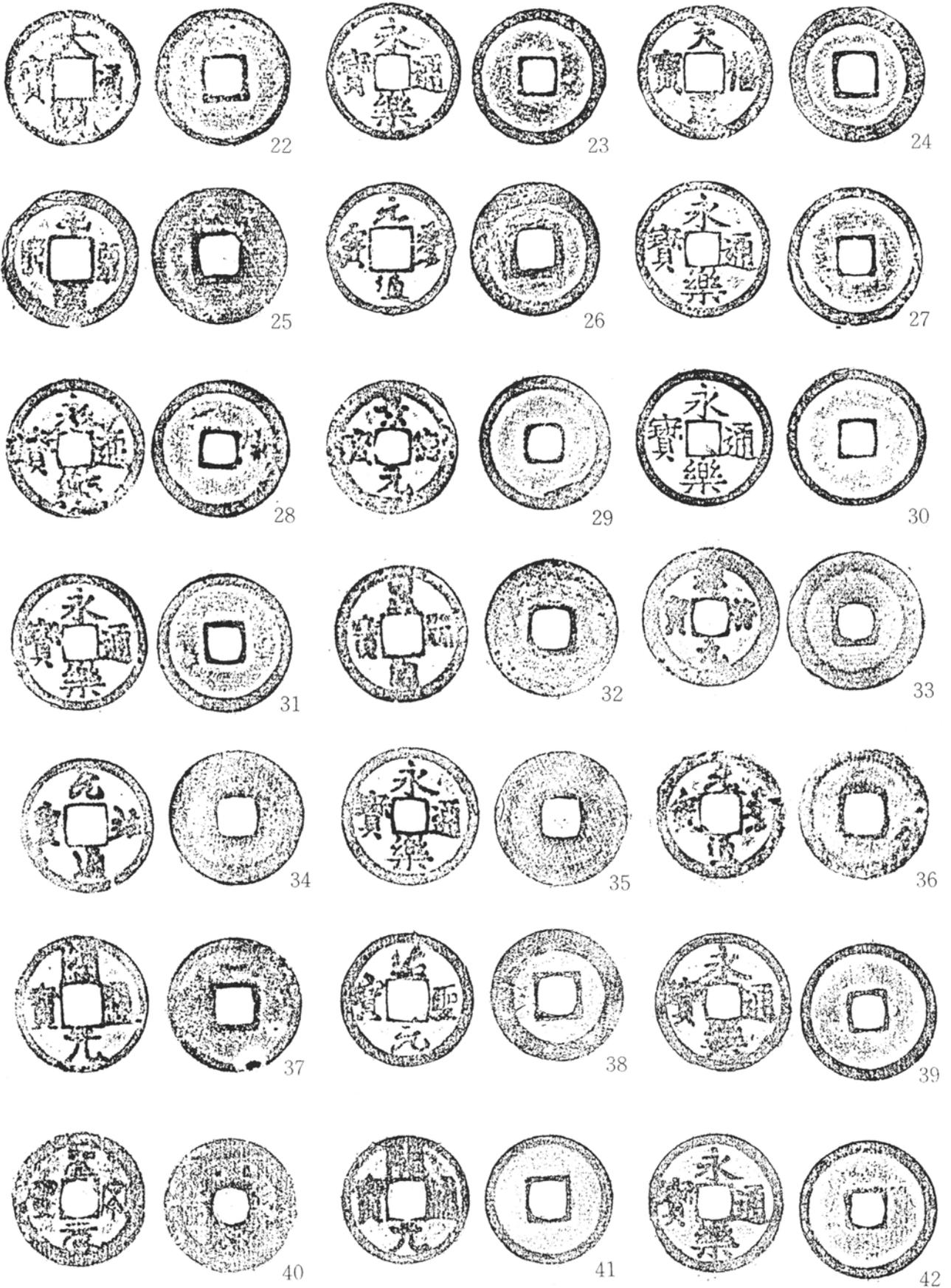


121図 FP 上土坑等出土遺物 (8)

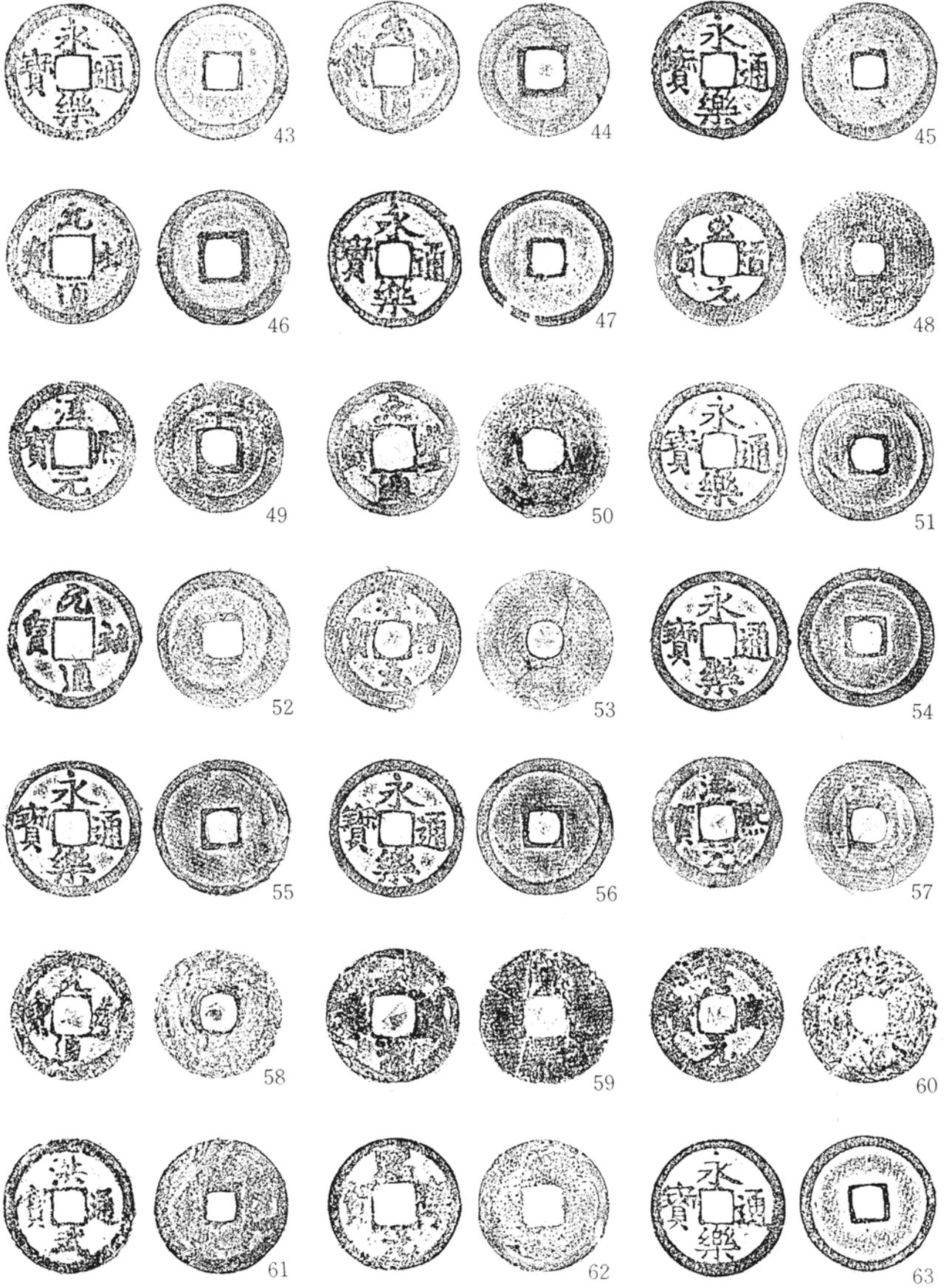
III 遺構と遺物



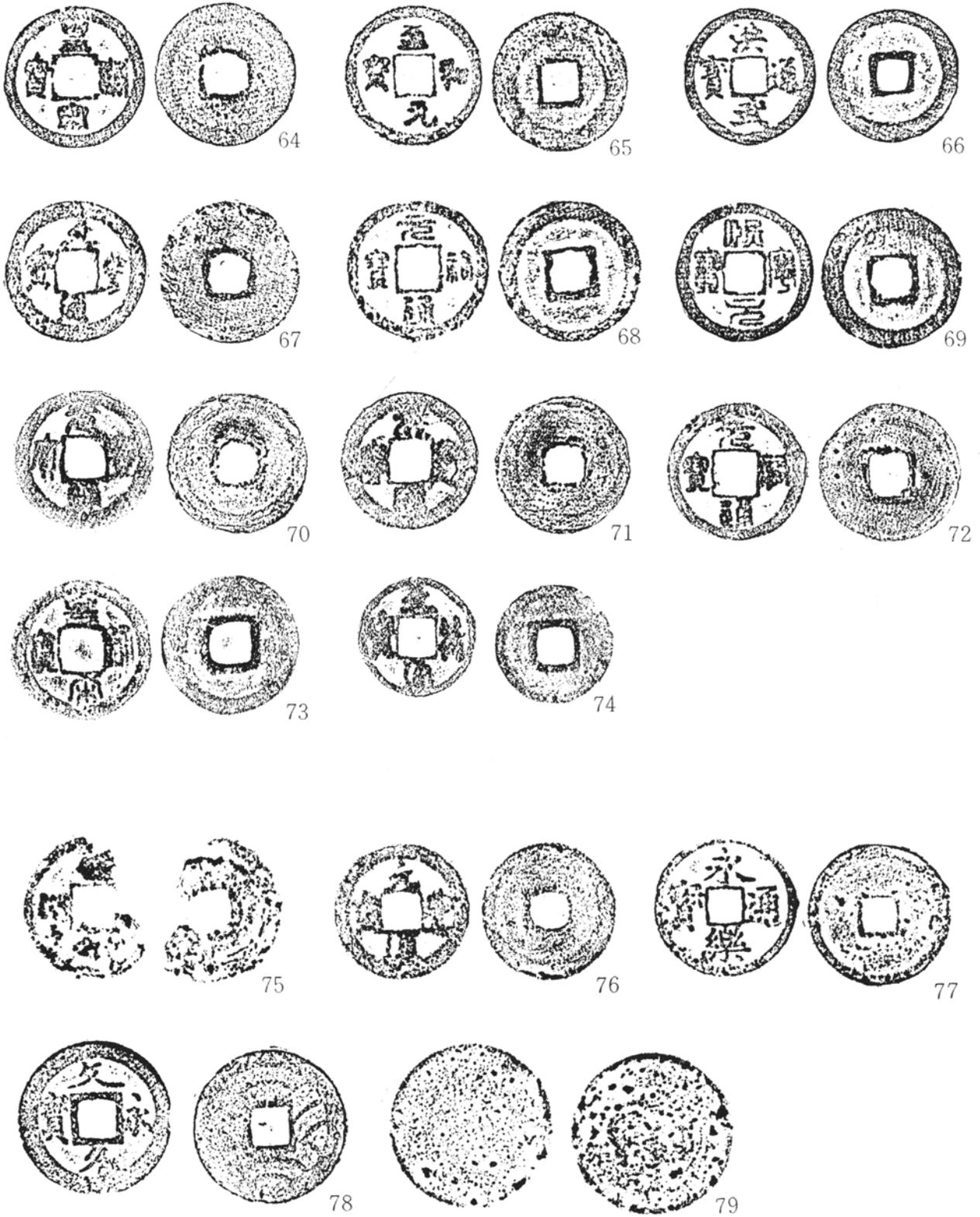
122図 FP 上土坑等出土古銭(1)



123図 FP 上土坑等出土古銭(2)



124図 FP 上土坑等出土古銭(3)



125図 FP 上土坑等出土古銭(4)

III 遺構と遺物

6. 遺構計測表及び遺物観察表

第2表 Hr - FA下水田跡計測表
I区 FA下水田

番号	縦軸 (m)	横軸 (m)	面積 (㎡)	備考
A1001	—	—	—	
A1002	3.62	3.40	—	水口無
A1003	2.14	—	—	
A1004	—	3.66	—	
A1005	1.75	3.35	—	
A1006	—	—	—	
A1007	5.26	3.59	—	水口無
A1008	—	2.37	—	
A1009	2.42	—	—	
A1010	1.6	—	—	
A1011	—	1.79	—	
A1012	2.88	3.47	9.04	
A1013	3.08	3.80	11.88	
A1014	—	—	—	
A1015	2.99	2.78	7.54	
A1016	—	—	—	
A1017	—	—	—	
A1018	1.45	1.74	2.47	
A1119	1.92	2.02	3.78	
A1020	1.43	2.14	2.97	
A1021	1.64	2.24	3.90	
A1022	2.16	2.34	4.90	
A1023	2.47	3.07	7.62	
A1024	2.68	3.54	—	
A1025	—	4.87	—	
A1026	1.46	4.24	6.40	
A1027	1.81	4.59	8.38	
A1028	2.88	4.76	13.54	
A1029	2.75	3.70	9.28	
A1030	3.07	3.75	11.04	
A1031	6.82	—	—	大区画
A1032	2.13	—	—	
A1033	—	—	—	
A1034	—	3.86	—	
A1035	4.73	1.72	7.28	
A1036	3.09	1.96	5.81	不整形
A1037	3.71	2.42	8.42	〃
A1038	2.23	4.42	9.36	〃
A1039	5.42	5.39	28.62	大区画
A1040	1.11	5.20	—	横長方形
A1041	2.16	5.54	—	〃
A1042	—	—	—	
A1043	—	3.86	—	
A1044	3.13	3.57	10.88	
A1045	3.13	3.20	9.57	
A1046	3.31	3.72	11.66	
A1047	2.38	2.75	6.16	
A1048	2.71	2.46	5.89	
A1049	5.36	2.68	13.74	縦長方形
A1050	5.08	1.82	7.67	〃
A1051	—	—	—	
A1052	—	—	—	
A1053	2.57	2.92	7.24	
A1054	3.04	3.69	11.27	
A1055	2.79	3.89	10.85	
A1056	3.41	3.77	12.12	
A1057	3.03	3.97	10.85	
A1058	4.90	3.84	17.22	

番号	縦軸 (m)	横軸 (m)	面積 (㎡)	備考
A1059	1.71	4.65	7.69	不整形
A1060	1.81	5.32	10.66	〃
A1061	—	—	—	大区画か
A1062	—	—	—	
A1063	2.15	2.69	5.44	
A1064	3.40	2.38	7.66	
A1065	2.15	2.43	5.24	
A1066	2.84	3.33	8.92	
A1067	2.58	3.66	8.85	
A1068	4.08	4.40	17.65	
A1069	1.31	5.12	7.73	横長方形
A1070	2.33	4.14	8.81	〃
A1071	1.65	3.87	—	〃
A1072	3.33	2.60	—	
A1073	—	—	—	
A1074	—	—	—	
A1075	3.01	3.64	10.32	
A1076	2.63	3.88	9.77	
A1077	2.57	3.90	9.87	
A1078	2.49	3.10	6.92	
A1079	6.06	2.40	—	不整形
A1080	1.70	2.37	3.39	〃
A1081	4.22	3.57	14.84	
A1082	3.20	2.70	8.52	
A1083	—	2.91	—	
A1084	2.74	3.62	—	
A1085	1.94	3.28	6.11	
A1086	3.22	3.16	10.08	
A1087	2.47	3.27	7.82	
A1088	4.02	3.11	10.38	不整形
A1089	—	—	—	
A1090	1.26	3.19	—	横長方形
A1091	1.64	3.03	4.37	〃
A1092	2.48	3.58	8.70	
A1093	1.21	3.30	4.10	不整形
A1094	2.88	4.02	11.14	〃
A1095	3.44	3.49	10.83	〃
A1096	2.54	3.84	8.22	〃
A1097	2.98	2.84	8.00	
A1098	3.2	3.14	9.86	
A1099	—	3.34	—	
A1100	—	—	—	
A1101	1.82	2.55	4.38	
A1102	4.12	1.79	6.94	不整形
A1103	3.64	0.8	2.50	〃
A1104	3.26	0.84	2.93	〃
A1105	2.25	2.29	4.76	
A1106	2.94	2.98	8.19	
A1107	4.07	2.81	10.5	
A1108	—	2.58	—	
A1109	—	—	—	
A1110	3.58	4.97	—	
A1111	3.12	4.76	14.11	不整形
A1112	3.20	4.92	14.67	〃
A1113	3.20	4.67	12.82	〃
A1114	4.08	3.14	12.29	〃
A1115	2.91	1.90	5.50	〃
A1116	—	—	—	
A1117	2.86	0.88	2.21	縦長方形
A1118	2.24	0.72	1.41	〃
A1119	2.88	1.02	2.93	不整形

6 遺構計測表及び遺物観察表

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
A1120	—	1.29	—	
A1121	—	1.13	—	
A1122	2.61	1.83	4.10	不整形
A1123	1.97	2.15	3.93	〃
A1124	1.78	1.35	2.56	
A1125	2.04	2.42	4.69	
A1126	1.94	1.95	3.58	
A1127	2.19	2.06	4.29	
A1128	—	3.19	—	
A1129	—	3.24	—	
A1130	3.46	3.68	11.31	不整形
A1131	2.24	3.24	7.24	
A1132	3.72	3.10	10.42	
A1133	3.61	1.91	6.19	縦長方形
A1134	—	1.68	—	〃
A1135	—	1.63	—	不整形
A1136	3.23	1.10	2.70	〃
A1137	3.63	1.25	4.08	〃
A1138	2.98	2.64	7.10	〃
A1139	—	—	—	
A1140	—	2.92	—	横長方形
A1141	1.70	3.31	5.11	〃
A1142	1.64	3.91	6.50	〃
A1143	4.52	1.90	8.86	縦長方形
A1144	—	1.57	—	
A1145	—	—	—	
A1146	1.60	3.41	—	横長方形
A1147	2.50	3.67	8.03	不整形
A1148	4.05	1.78	6.66	縦長方形
A1149	—	2.16	—	
A1150	2.41	2.12	4.82	不整形
A1151	—	2.15	—	
A1152	—	1.17	—	
A1153	2.84	2.50	6.07	不整形
A1154	—	2.72	—	〃
A1155	—	—	—	
A1156	—	1.87	—	
A1157	—	2.30	—	
A1158	—	—	—	

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
A2020	2.91	2.18	6.43	水口無
A2021	2.90	4.13	12.50	〃
A2022	2.88	2.40	6.83	〃
A2023	1.20	3.59	4.35	〃
A2024	3.06	3.29	—	〃
A2025	—	—	—	水口有
A2026	1.93	2.77	5.29	水口無
A2027	1.83	4.00	7.48	〃
A2028	3.02	1.44	4.14	縦長方形
A2029	1.28	4.22	4.93	横長方形
A2030	1.66	4.35	7.39	〃
A2031	2.04	2.67	5.21	水口無
A2032	—	—	—	
A2033	1.87	1.97	3.78	水口無
A2034	—	2.48	—	
A2035	1.92	5.00	9.98	横長方形
A2036	1.67	1.23	1.89	極小区画
A2037	—	—	—	
A2038	1.48	3.75	5.88	水口無
A2039	—	3.52	—	
A2040	2.29	2.84	6.18	水口無
A2041	3.80	2.82	10.78	不整形・水口有
A2042	2.48	—	—	
A2043	2.66	—	—	不整形
A2044	3.20	—	—	
A2045	1.84	2.79	4.891	水口無
A2046	1.74	—	—	
A2047	3.57	—	—	
A2048	4.42	4.74	—	大区画
A2049	—	—	—	
A2050	—	—	—	
A2051	—	1.78	—	縦長方形
A2052	—	—	—	
A2053	—	1.68	—	縦長方形
A2054	—	—	—	水口無
A2055	—	1.68	—	
A2056	2.20	2.77	—	

II区 F A下水田

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
A2001	—	—	—	
A2002	2.05	3.54	—	水口無
A2003	2.44	3.67	8.61	〃
A2004	1.63	—	—	〃
A2005	2.73	3.88	9.62	〃
A2006	2.32	3.41	—	〃
A2007	1.99	4.10	7.71	〃
A2008	1.81	2.77	4.80	〃
A2009	—	—	—	〃
A2010	3.30	4.54	12.50	不整形
A2011	2.67	2.74	6.97	水口無
A2012	2.09	3.19	—	〃
A2013	—	—	—	〃
A2014	1.67	2.51	3.86	不整形
A2015	2.12	2.94	5.80	水口無
A2016	2.02	4.44	—	〃
A2017	0.85	1.95	1.45	極小区画
A2018	1.63	4.11	6.73	水口無
A2019	—	—	—	〃

III 遺構と遺物

第3表 H r - F P 下水田跡計測表
I 区 F P 下水田

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
P 1001	—	1.56	—	耕起中
P 1002	—	1.71	—	〃
P 1003	—	1.5	—	〃
P 1004	2.00	1.71	3.41	〃
P 1005	1.89	1.83	3.39	〃
P 1006	—	1.66	—	〃
P 1007	—	1.86	—	〃
P 1008	—	—	—	〃
P 1009	—	1.88	—	〃
P 1010	2.48	1.46	3.62	〃
P 1011	2.51	2.00	4.99	〃
P 1012	2.46	2.20	—	〃
P 1013	—	2.13	—	〃
P 1014	—	—	—	〃
P 1015	—	—	—	〃
P 1016	3.07	2.66	—	〃
P 1017	3.03	2.08	6.28	〃
P 1018	2.84	2.68	7.61	〃
P 1019	—	1.26	—	長方形
P 1020	—	0.78	—	〃
P 1021	—	1.26	—	耕起中
P 1022	2.26	—	—	〃
P 1023	2.32	2.10	4.77	〃
P 1024	2.43	2.60	6.33	〃
P 1025	—	—	—	〃
P 1026	2.70	2.10	5.68	〃
P 1027	2.78	2.60	7.37	〃
P 1028	—	—	—	〃
P 1029	3.08	2.50	7.73	〃
P 1030	2.78	—	—	〃
P 1031	0	—	—	〃
P 1032	1.48	1.47	2.09	〃
P 1033	1.50	0.78	1.13	〃
P 1034	1.56	1.45	2.17	〃
P 1035	1.74	1.23	—	〃
P 1036	—	1.49	—	〃
P 1037	1.58	1.65	2.59	〃
P 1038	1.45	1.00	1.44	〃
P 1039	1.38	1.24	1.77	〃
P 1040	1.48	1.28	1.88	〃
P 1041	1.47	1.67	2.30	〃
P 1042	1.52	1.44	2.18	〃
P 1043	—	1.36	—	〃
P 1044	—	1.63	—	〃
P 1045	1.98	1.80	3.48	〃
P 1046	2.00	1.30	2.64	〃
P 1047	2.08	1.16	2.43	〃
P 1048	2.28	1.42	3.23	〃
P 1049	2.23	1.66	3.75	〃
P 1050	2.09	1.47	3.15	〃
P 1051	2.14	1.32	2.77	〃
P 1052	2.26	1.65	3.63	〃
P 1053	2.54	1.68	4.15	〃
P 1054	—	9.20	—	長方形
P 1055	—	1.10	—	〃
P 1056	—	—	—	耕起中
P 1057	2.10	1.78	3.68	〃
P 1058	1.66	1.65	2.82	〃
P 1059	1.50	1.01	1.56	〃

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
P 1060	1.34	1.42	1.89	耕起中
P 1061	1.12	1.59	1.71	〃
P 1062	1.20	1.66	1.97	〃
P 1063	1.17	1.20	1.42	〃
P 1064	1.08	1.60	1.79	〃
P 1065	1.90	1.37	2.56	〃
P 1066	2.02	1.18	2.34	〃
P 1067	1.90	1.10	2.07	〃
P 1068	1.97	2.32	4.51	〃
P 1069	—	1.46	—	〃
P 1070	—	—	—	〃
P 1071	2.22	2.02	4.50	〃
P 1072	1.45	2.08	2.89	〃
P 1073	1.55	0.94	1.45	〃
P 1074	1.65	1.56	2.47	〃
P 1075	1.67	1.62	2.69	〃
P 1076	1.56	1.67	2.56	〃
P 1077	1.28	1.16	1.47	〃
P 1078	1.12	1.46	1.75	〃
P 1079	2.04	2.27	4.37	〃
P 1080	1.96	1.17	2.16	〃
P 1081	1.78	1.24	2.33	〃
P 1082	1.78	1.82	3.28	〃
P 1083	2.06	1.57	3.16	〃
P 1084	2.26	1.21	2.75	〃
P 1085	2.35	1.34	2.96	〃
P 1086	2.85	1.35	3.87	〃
P 1087	2.74	1.40	3.75	〃
P 1088	2.46	1.40	3.52	〃
P 1089	2.28	2.12	4.79	〃
P 1090	2.05	1.32	2.62	〃
P 1091	2.06	1.75	3.55	〃
P 1092	—	1.41	—	〃
P 1093	—	—	—	〃
P 1094	2.35	2.20	5.18	不整形
P 1095A	1.72	1.44	—	耕起初期
P 1095B	1.75	1.57	2.78	〃
P 1096A	1.42	—	—	〃
P 1096B	1.60	1.70	2.69	〃
P 1097	1.90	—	—	〃
P 1098	—	—	—	耕起中
P 1099	2.28	1.10	2.55	〃
P 1100	2.08	1.30	2.68	〃
P 1101	2.24	1.22	2.80	〃
P 1102	2.18	1.90	—	〃
P 1103	2.02	1.40	—	〃
P 1104	2.08	1.12	2.47	〃
P 1105	2.02	1.45	2.93	〃
P 1106	2.10	1.45	—	〃
P 1107	2.30	1.50	—	〃
P 1108	2.16	1.72	3.76	〃
P 1109	2.42	1.60	3.82	〃
P 1110	2.48	1.30	3.21	〃
P 1111	2.54	1.66	4.12	〃
P 1112	2.70	1.58	4.23	〃
P 1113	2.40	1.80	4.38	〃
P 1114	2.36	1.66	—	〃
P 1115	—	1.18	—	〃
P 1116	—	—	—	〃
P 1117	2.00	1.22	2.44	〃
P 1118	2.11	1.46	—	〃

6 遺構計測表及び遺物観察表

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
P 1119	2.17	1.26	—	耕起中
P 1120	1.88	1.90	3.49	〃
P 1121	1.85	1.07	1.99	〃
P 1122	1.95	1.50	—	〃
P 1123	2.00	1.85	—	〃
P 1124	2.01	1.44	2.96	〃
P 1125	2.10	1.68	3.53	〃
P 1126	2.12	1.96	4.04	〃
P 1127	2.00	1.48	2.86	〃
P 1128	1.86	1.20	2.30	〃
P 1129	1.96	1.57	3.05	〃
P 1130	1.98	1.85	3.56	〃
P 1131	2.10	1.58	3.40	〃
P 1132	2.24	1.50	3.54	〃
P 1133	2.45	1.00	2.35	縦長方形
P 1134	2.90	1.23	3.52	〃
P 1135	—	1.30	—	耕起中
P 1136	—	—	—	〃
P 1137	1.64	1.36	2.12	〃
P 1138	1.82	1.51	—	〃
P 1139	1.91	1.32	—	〃
P 1140	2.22	1.62	3.62	〃
P 1141	2.40	0.92	2.14	縦長方形
P 1142	2.15	1.57	3.40	耕起中
P 1143	2.15	1.79	3.84	〃
P 1144	1.93	1.44	2.88	〃
P 1145	2.38	1.88	4.34	〃
P 1146	2.37	1.85	4.38	〃
P 1147	2.55	1.30	3.24	縦長方形
P 1148	2.76	1.28	3.50	〃
P 1149	2.70	1.38	3.85	〃
P 1150	2.52	2.10	5.13	耕起中
P 1151	2.48	1.50	3.66	縦長方形
P 1152	2.20	1.25	2.74	〃
P 1153	1.96	1.02	1.98	〃
P 1154	1.82	1.43	2.56	耕起中
P 1155	3.45	1.68	5.80	縦長方形
P 1156	3.45	1.90	6.59	〃
P 1157	—	1.95	—	〃
P 1158	—	1.68	—	耕起中
P 1159	—	0.85	—	〃
P 1160	—	0.70	—	〃
P 1161	1.60	1.56	2.39	〃
P 1162	1.41	1.60	2.13	〃
P 1163	1.42	1.30	1.71	〃
P 1164	1.32	1.63	2.15	〃
P 1165	1.45	1.04	1.49	〃
P 1166	1.48	1.56	2.35	〃
P 1167	1.75	1.60	2.86	〃
P 1168	1.90	1.65	3.12	〃
P 1169	1.76	2.08	3.63	〃
P 1170	1.88	1.72	3.26	〃
P 1171	2.08	1.18	2.38	縦長方形
P 1172	2.26	1.21	2.79	〃
P 1173	2.41	1.38	3.26	〃
P 1174	2.65	2.16	5.70	耕起中
P 1175	2.80	1.30	3.52	縦長方形
P 1176	3.02	1.10	3.46	〃
P 1177	2.92	1.10	3.13	〃
P 1178	2.75	1.48	4.08	〃
P 1179	2.86	1.80	5.14	〃

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
P 1180	1.03	—	—	耕起中
P 1181	1.08	1.77	1.94	〃
P 1182	1.26	1.32	1.70	〃
P 1183	—	1.42	—	〃
P 1184	—	1.22	—	〃
P 1185	1.17	1.66	—	〃
P 1186	1.35	1.62	2.10	〃
P 1187	1.49	1.86	2.63	〃
P 1188	1.60	2.01	3.11	〃
P 1189	1.57	1.88	3.10	〃
P 1190	1.62	1.22	1.99	〃
P 1191	1.72	1.3	2.23	〃
P 1192	3.09	2.12	6.68	不整形
P 1193	2.95	1.02	3.16	縦長方形
P 1194	2.92	2.50	7.37	耕起中
P 1195	3.02	1.01	3.13	縦長方形
P 1196	3.07	1.54	4.68	〃
P 1197	2.75	1.72	4.76	〃
P 1198	—	—	—	耕起中
P 1199	2.42	1.90	—	〃
P 1200	2.40	1.35	3.23	〃
P 1201	2.17	1.37	—	縦長方形
P 1202	—	1.47	—	耕起中
P 1203	1.98	1.53	—	〃
P 1204	2.42	1.56	3.66	〃
P 1205	1.95	2.02	4.03	〃
P 1206	1.94	1.84	3.62	〃
P 1207	1.78	1.81	3.30	〃
P 1208	1.68	1.43	2.4	〃
P 1209	1.64	1.89	3.09	〃
P 1210	—	—	—	〃
P 1211	2.06	1.45	—	〃
P 1212	1.90	1.32	2.51	〃
P 1213	2.04	1.43	2.86	〃
P 1214	2.24	1.42	3.18	〃
P 1215	2.02	1.49	3.01	〃
P 1216	2.23	1.98	4.38	〃
P 1217	2.23	1.74	3.85	〃
P 1218	2.12	1.50	3.15	〃
P 1219	2.22	1.64	3.70	〃
P 1220	2.18	2.03	4.42	〃
P 1221	2.82	1.47	4.28	〃
P 1222	—	1.12	—	〃
P 1223	—	1.76	—	〃
P 1224	1.98	1.48	3.02	〃
P 1225	2.14	1.30	2.72	〃
P 1226	1.84	2.12	—	〃
P 1227	—	1.76	—	〃
P 1228	1.90	1.38	2.72	〃
P 1229	1.92	1.98	3.95	〃
P 1230	2.32	1.95	4.58	〃
P 1231	2.40	1.72	4.14	〃
P 1232	—	1.40	—	〃
P 1233	—	1.84	—	〃
P 1234	—	1.54	—	〃
P 1235	2.91	1.62	—	縦長方形
P 1236	3.06	1.88	5.73	〃
P 1237	3.05	1.85	5.69	〃
P 1238	—	—	—	耕起中
P 1239	—	1.76	—	〃
P 1240	—	1.80	—	短冊状

III 遺構と遺物

番号	縦軸 (m)	横軸 (m)	面積 (㎡)	備考
P 1241	—	1.45	—	短冊状
P 1242	—	2.10	—	〃
P 1243	—	1.20	—	〃
P 1244	—	1.55	—	〃
P 1245	—	1.30～2.20	—	〃
P 1246	—	1.78	—	〃
P 1247	—	1.90	—	〃
P 1248	—	1.25～2.25	—	〃
P 1249	—	1.50	—	〃
P 1250	—	1.60	—	〃
P 1251	—	1.00	—	〃
P 1252	—	1.90	—	〃

II 区 F P 下水田

番号	縦軸 (m)	横軸 (m)	面積 (㎡)	備考
P 2001	—	—	—	代掻き後
P 2002	—	1.02	—	〃
P 2003	1.50	1.00	1.70	〃
P 2004	1.38	1.60	2.06	〃
P 2005	1.88	1.56	2.69	〃
P 2006	—	1.30	—	〃
P 2007	—	1.18	—	〃
P 2008	—	1.14	—	〃
P 2009	—	1.90	—	耕起中
P 2010	—	1.60	—	〃
P 2011	—	1.58	—	〃
P 2012	—	2.31	—	〃
P 2013	1.80	—	—	〃
P 2014	2.14	1.08	2.43	代掻き後
P 2015	1.92	1.26	2.36	〃
P 2016	1.96	1.40	2.29	〃
P 2017	1.50	1.28	1.98	〃
P 2018	1.48	1.10	1.71	〃
P 2019	1.32	1.38	—	〃
P 2020	—	2.20	—	〃
P 2021	3.20	1.19	4.42	不整形
P 2022	3.28	1.60	5.00	縦長方形
P 2023	3.78	1.06	4.06	〃
P 2024	4.01	2.29	8.80	〃
P 2025	3.96	1.04	—	〃
P 2026	1.34	1.36	1.86	代掻き後
P 2027	1.54	1.14	1.81	〃
P 2028	1.60	1.42	2.31	〃
P 2029	1.70	1.30	2.18	〃
P 2030	1.58	1.14	1.79	〃
P 2031	1.60	1.24	2.02	〃
P 2032	1.30	1.50	2.14	〃
P 2033	2.82	4.70	12.38	不整形
P 2034	2.00	3.40	7.07	横長方形
P 2035	2.00	—	—	耕起中
P 2036	2.26	1.64	3.65	代掻き後
P 2037	2.18	1.42	3.24	〃
P 2038	1.32	1.50	1.93	〃
P 2039	1.21	1.20	1.50	〃
P 2040	1.30	1.16	1.48	〃
P 2041	1.30	1.44	1.77	〃
P 2042	1.92	1.36	2.64	〃
P 2043	1.43	2.12	3.23	〃
P 2044	1.45	1.52	2.21	〃
P 2045	1.54	1.30	2.00	〃
P 2046	1.23	1.39	1.73	〃

番号	縦軸 (m)	横軸 (m)	面積 (㎡)	備考
P 2047	1.21	1.14	1.32	代掻き後
P 2048	1.59	1.29	2.33	〃
P 2049	1.29	1.45	1.96	〃
P 2050	1.54	1.99	3.38	耕起中
P 2051	1.33	1.41	1.90	〃
P 2052	1.12	1.44	1.65	〃
P 2053	1.67	2.38	3.89	〃
P 2054	1.72	—	—	〃
P 2055	2.26	2.23	4.96	代掻き後
P 2056	1.54	1.48	2.22	〃
P 2057	0.98	1.24	1.26	〃
P 2058	1.86	1.29	2.38	〃
P 2059	1.06	1.18	1.21	〃
P 2060	0.92	1.32	1.29	〃
P 2061	1.53	1.42	2.18	〃
P 2062	1.58	1.94	3.13	耕起中
P 2063	1.72	1.08	1.80	〃
P 2064	1.32	1.50	2.09	〃
P 2065	2.12	2.34	5.06	〃
P 2066	1.70	1.95	—	〃
P 2067	1.22	1.08	1.25	代掻き後
P 2068	1.30	1.55	1.87	〃
P 2069	1.01	1.31	1.24	〃
P 2070	1.40	1.42	1.90	〃
P 2071	1.47	1.33	1.86	〃
P 2072	1.36	1.32	—	〃
P 2073	2.03	1.50	—	〃
P 2074	1.54	1.64	2.53	耕起中
P 2075	1.60	0.97	1.60	〃
P 2076	1.74	1.48	2.41	〃
P 2077	1.35	1.04	1.48	代掻き後
P 2078	1.34	1.23	1.65	〃
P 2079	1.50	1.34	1.98	〃
P 2080	1.37	1.15	1.55	〃
P 2081	1.37	1.44	2.14	〃
P 2082	1.39	1.22	1.66	〃
P 2083	1.54	—	—	〃
P 2084	1.92	—	—	〃
P 2085	1.83	1.39	2.82	耕起中
P 2086	1.77	1.18	1.94	〃
P 2087	1.52	1.10	1.70	〃
P 2088	2.14	2.21	5.06	〃
P 2089	2.60	1.88	7.18	〃
P 2090	—	—	—	〃
P 2091	1.40	1.26	1.68	代掻き後
P 2092	2.93	1.31	3.82	〃
P 2093	1.97	1.24	2.54	〃
P 2094	1.45	1.31	1.82	〃
P 2095	1.64	1.40	2.35	〃
P 2096	1.74	1.34	2.28	〃
P 2097	1.52	1.18	1.83	〃
P 2098	1.20	1.12	1.30	〃
P 2099	2.14	1.24	2.75	〃
P 2100	1.66	1.22	2.00	〃
P 2101	1.36	—	—	〃
P 2102	1.18	—	—	〃
P 2103	2.06	1.34	—	〃
P 2104	1.60	1.54	—	〃
P 2105	1.90	1.24	2.32	耕起中
P 2106	2.04	0.90	1.73	縦長方形
P 2107	2.11	1.07	2.22	〃

6 遺構計測表及び遺物観察表

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
P 2108	1.58	2.06	3.12	耕起中
P 2109	1.90	1.60	2.96	〃
P 2110	2.58	2.59	—	〃
P 2111	1.47	1.50	2.21	代掻き後
P 2112	1.51	1.61	2.05	〃
P 2113	1.68	1.54	2.51	〃
P 2114	1.53	1.36	2.14	〃
P 2115	1.89	1.33	2.56	〃
P 2116	1.35	1.44	1.86	〃
P 2117	1.32	1.22	1.70	〃
P 2118	2.04	0.77	1.66	縦長方形
P 2119	1.56	2.28	3.39	耕起中
P 2120	2.13	1.86	3.86	〃
P 2121	2.05	1.38	2.95	〃
P 2122	2.74	2.51	6.71	〃
P 2123	2.95	1.71	—	〃
P 2124	1.40	1.74	2.52	代掻き後
P 2125	1.39	1.36	2.07	〃
P 2126	1.51	1.70	2.54	〃
P 2127	1.74	1.34	2.31	〃
P 2128	1.40	1.36	1.94	〃
P 2129	1.48	1.28	1.87	〃
P 2130	1.71	1.18	2.16	〃
P 2131	1.69	1.62	2.67	〃
P 2132	2.18	0.78	1.78	縦長方形
P 2133	2.33	1.56	3.66	耕起中
P 2134	2.47	1.62	4.05	〃
P 2135	1.44	1.56	2.05	〃
P 2136	2.04	2.22	4.46	〃
P 2137	2.10	1.50	3.10	〃
P 2138	—	—	—	大区画?
P 2139	1.64	1.66	2.83	代掻き後
P 2140	1.82	1.35	2.54	〃
P 2141	1.70	0.78	1.42	〃
P 2142	1.44	0.95	1.41	〃
P 2143	1.26	1.30	1.66	〃
P 2144	1.40	1.50	2.11	〃
P 2145	1.62	1.30	—	〃
P 2146	1.34	—	—	〃
P 2147	1.60	1.36	—	〃
P 2148	1.12	2.22	2.43	耕起中
P 2149	1.22	1.46	1.66	〃
P 2150	1.30	1.68	2.27	代掻き後
P 2151	1.29	1.38	1.82	〃
P 2152	0.98	1.22	1.20	〃
P 2153	1.50	1.02	1.62	〃
P 2154	1.49	1.26	1.87	〃
P 2155	0.93	1.30	1.23	〃
P 2156	1.12	1.28	1.44	〃
P 2157	1.72	1.49	2.46	〃
P 2158	1.84	1.14	2.13	〃
P 2159	1.54	1.90	2.88	耕起中
P 2160	3.03	1.33	4.19	縦長方形
P 2161	2.28	1.36	3.05	〃
P 2162	1.62	2.00	3.01	耕起中
P 2163	1.96	1.74	3.47	〃
P 2164	2.44	2.08	5.04	〃
P 2165	—	—	—	〃
P 2166	1.80	1.60	2.59	代掻き後
P 2167	2.04	1.32	2.77	〃
P 2168	2.60	1.44	3.43	〃

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
P 2169	1.18	1.02	1.20	代掻き後
P 2170	1.56	1.32	2.08	〃
P 2171	1.36	1.28	1.59	〃
P 2172	1.28	1.30	1.73	〃
P 2173	2.32	1.44	3.29	〃
P 2174	2.62	1.28	3.45	〃
P 2175	1.76	1.48	2.50	〃
P 2176	1.46	1.30	1.86	〃
P 2177	2.12	1.32	2.74	縦長方形
P 2178	1.88	1.12	2.26	〃
P 2179	2.22	1.10	2.56	〃
P 2180	1.52	1.70	2.52	耕起中
P 2181	1.64	1.62	2.74	〃
P 2182	1.62	1.92	3.01	〃
P 2183	1.40	1.40	1.96	〃
P 2184	1.16	1.74	1.86	〃
P 2185	1.30	1.68	2.10	〃
P 2186	2.08	2.36	4.96	〃
P 2187	—	1.64	—	縦長方形
P 2188	—	—	—	耕起中
P 2189	1.46	1.50	2.19	代掻き後
P 2190	1.50	1.34	1.83	〃
P 2191	1.40	1.54	2.10	〃
P 2192	1.40	1.38	1.82	〃
P 2193	1.14	1.50	1.64	〃
P 2194	1.46	1.40	2.02	〃
P 2195	1.32	1.24	1.59	〃
P 2196	1.46	1.24	1.76	〃
P 2197	1.94	1.48	1.64	〃
P 2198	2.38	0.96	2.46	縦長方形
P 2199	1.98	1.10	2.14	〃
P 2200	1.90	1.20	2.23	〃
P 2201	1.28	1.26	1.78	耕起中
P 2202	1.54	1.62	2.58	〃
P 2203	1.48	1.62	2.61	〃
P 2204	1.76	2.28	3.78	〃
P 2205	2.36	1.74	3.94	〃
P 2206	1.92	1.48	—	〃
P 2207	—	1.52	—	〃
P 2208	—	—	—	〃
P 2209	2.08	1.48	3.14	代掻き後
P 2210	1.02	1.52	1.48	〃
P 2211	1.10	1.51	—	〃
P 2212	—	1.44	—	〃
P 2213	—	1.73	—	〃
P 2214	—	1.52	—	〃
P 2215	—	—	—	〃
P 2216	1.31	1.39	—	〃
P 2217	1.70	1.30	2.27	〃
P 2218	1.82	1.22	2.25	〃
P 2219	1.64	1.06	1.65	〃
P 2220	1.40	1.29	1.82	〃
P 2221	1.68	0.99	1.82	縦長方形
P 2222	1.98	1.12	2.05	〃
P 2223	1.94	0.92	2.03	〃
P 2224	2.06	1.39	2.98	耕起中
P 2225	2.04	1.51	2.94	〃
P 2226	1.78	1.71	3.06	〃
P 2227	1.80	2.05	3.62	〃
P 2228	1.80	1.50	2.68	〃
P 2229	2.10	1.47	3.33	〃

III 遺構と遺物

番号	縦軸 (m)	横軸 (m)	面積 (㎡)	備考
P 2230	2.22	1.66	3.76	縦長方形
P 2231	2.52	1.78	—	耕起中
P 2232	—	—	—	
P 2233	—	—	—	代掻き後
P 2234	—	1.26	—	〃
P 2235	1.57	1.32	2.18	〃
P 2236	1.42	0.92	1.44	〃
P 2237	1.63	1.10	1.86	〃
P 2238	—	1.48	—	〃
P 2239	1.33	1.09	1.45	〃
P 2240	1.43	1.13	1.62	〃
P 2241	1.73	2.29	4.02	横長方形
P 2242	1.79	2.73	4.62	斜位水口
P 2243	1.70	1.56	2.63	耕起中
P 2244	1.74	1.63	2.89	〃
P 2245	2.02	1.64	3.41	〃
P 2246	1.46	1.38	1.96	〃
P 2247	1.78	1.45	2.58	〃
P 2248	—	1.19	—	代掻き後
P 2249	1.09	1.59	1.66	〃
P 2250	2.44	2.19	5.27	耕起中
P 2251	2.18	2.22	4.74	〃
P 2252	1.73	1.50	2.95	〃
P 2253	1.80	1.66	2.96	〃
P 2254	2.03	1.62	3.29	〃
P 2255	1.70	1.23	2.12	斜位水口
P 2256	1.68	1.24	2.15	耕起中
P 2257	2.54	1.60	4.09	縦長方形
P 2258	2.30	1.86	4.38	耕起中
P 2259	1.92	1.78	3.37	〃
P 2260	—	—	—	〃
P 2261	—	1.57	—	代掻き後
P 2262	1.56	1.83	—	耕起中
P 2263	1.50	2.01	3.14	
P 2264	1.78	1.61	2.80	
P 2265	1.86	1.36	2.56	
P 2266	2.72	1.78	4.42	不整形
P 2267	2.40	0.88	2.21	縦長方形
P 2268	2.66	0.86	2.36	〃
P 2269	2.50	1.52	4.09	〃
P 2270	2.10	1.82	3.92	耕起中
P 2271	2.00	1.50	3.17	〃
P 2272	2.00	1.90	3.87	〃
P 2273	—	1.48	—	〃
P 2274	—	—	—	〃
P 2275	—	—	—	〃
P 2276	2.12	1.97	—	〃
P 2277	2.00	1.58	3.18	〃
P 2278	2.20	1.16	2.42	縦長方形
P 2279	1.42	1.08	1.78	耕起中
P 2280	2.04	2.34	4.76	斜位水口
P 2281	2.30	1.36	3.03	縦長方形
P 2282	2.44	1.86	4.57	〃
P 2283	2.40	1.54	3.80	〃
P 2284	2.72	1.76	4.73	〃
P 2285	2.62	1.50	3.86	〃
P 2286	2.60	1.54	—	〃
P 2287	—	—	—	〃
P 2288	—	—	—	耕起中
P 2289	1.62	—	—	〃
P 2290	2.62	2.28	5.97	縦畦水口

番号	縦軸 (m)	横軸 (m)	面積 (㎡)	備考
P 2291	2.36	1.85	4.51	不整形
P 2292	3.02	1.42	4.21	縦長方形
P 2293	2.92	1.90	5.64	〃
P 2294	2.72	1.55	4.26	〃
P 2295	2.50	1.75	4.18	〃
P 2296	2.46	1.52	3.86	〃
P 2297	2.42	1.67	4.03	〃
P 2298	2.30	2.00	4.73	耕起中
P 2299	—	1.80	—	〃
P 2300	—	—	—	〃
P 2301	—	—	—	〃
P 2302	2.08	2.06	4.28	〃
P 2303	2.00	1.46	3.01	〃
P 2304	2.66	1.32	3.79	縦長方形
P 2305	2.50	1.86	4.55	〃
P 2306	2.67	1.50	3.92	〃
P 2307	2.74	1.58	4.23	〃
P 2308	2.72	1.76	4.65	〃
P 2309	2.60	1.77	4.51	〃
P 2310	2.61	1.74	4.37	〃
P 2311	2.50	1.75	4.23	〃
P 2312	2.51	2.03	—	耕起中
P 2313	—	—	—	〃
P 2314	2.22	—	—	〃
P 2315	2.52	1.62	4.08	縦長方形
P 2316	2.58	1.27	3.28	〃
P 2317	1.38	—	—	耕起中
P 2318	1.43	1.30	1.89	〃
P 2319	1.37	1.04	1.40	〃
P 2320	2.90	1.28	3.88	縦長方形
P 2321	2.88	1.56	4.39	〃
P 2322	3.08	1.59	4.73	〃
P 2323	2.93	1.64	4.76	〃
P 2324	2.87	1.70	4.88	〃
P 2325	2.63	1.78	4.59	〃
P 2326	2.46	1.94	4.83	〃
P 2327	2.54	1.82	4.72	〃
P 2328	2.31	1.82	—	〃
P 2329	—	—	—	耕起中
P 2330	—	—	—	〃
P 2331	1.78	1.84	3.28	〃
P 2332	2.00	1.18	2.38	〃
P 2333	1.87	1.03	1.88	耕起後半
P 2334	1.66	1.24	2.06	〃
P 2335	1.72	1.47	—	〃
P 2336	—	1.72	—	〃
P 2337	—	1.60	—	〃
P 2338	—	1.46	—	耕起中
P 2339	—	1.90	—	〃
P 2340	—	1.91	—	〃
P 2341	—	1.96	—	〃
P 2342	—	—	—	〃
P 2343	1.54	—	—	〃
P 2344	1.48	1.40	2.19	〃
P 2345	1.55	1.34	2.08	〃
P 2346	2.05	1.20	2.50	耕起後半
P 2347	2.30	1.13	2.61	〃
P 2348	2.28	—	—	〃
P 2349	1.58	—	—	〃
P 2350	1.60	1.38	2.21	耕起中
P 2351	1.96	1.25	2.48	〃

6 遺構計測表及び遺物観察表

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
P 2352	2.42	1.56	3.71	耕起後半
P 2353	1.53	1.20	1.94	耕起中
P 2354	1.54	—	—	〃
P 2355	—	—	—	耕起後半
P 2356	2.06	1.54	3.26	耕起中
P 2357	1.88	1.43	2.70	〃
P 2358	2.00	1.42	2.91	〃
P 2359	2.16	—	—	〃
P 2360	—	2.14	—	〃
P 2361	2.07	1.56	3.31	〃
P 2362	1.68	1.45	2.33	〃
P 2363	1.80	1.07	—	〃

番号	縦軸(m)	横軸(m)	面積(m ²)	備考
P 2364	—	—	—	耕起中
P 2365	—	1.70	—	短冊状か
P 2366	1.78	1.45	2.55	耕起中
P 2367	1.74	1.22	2.13	〃
P 2368	1.80	1.54	—	〃
P 2369	—	2.20	—	短冊状か
P 2370	1.30	1.36	1.77	耕起中
P 2371	1.50	1.62	2.36	〃
P 2372	—	—	—	〃
P 2373	—	1.83	—	短冊状か
P 2374	4.00	1.65	—	〃
P 2375	5.43	3.60~	—	不整形

第4表 F P 上面住居跡計測表

住居跡名 位置	平面形	規模(cm) 縦軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
1号住居跡 P Y・A-5・6	不整長方形	508×374×54	N 86° E	N 76° E	貯蔵穴・柱穴・壁周溝	坏2 甕8 磨石	
2号住居跡 P X・Y-2・3	不整正方形	412×354×28	N 95° E	N 82° E	貯蔵穴・柱穴	碗2・坏3・灰釉坏・皿・羽釜	45坑・47坑
3号住居跡 Q C・D-12	(不整方形)	330×307×32	N 89° E	N 94° E	貯蔵穴・壁周溝	—	57坑・64坑等
4号住居跡 Q C・D-13	(不整方形)	305×—×94	N 74° E	—	貯蔵穴?・柱穴?	坏2・台付甕・甕	57坑
5号住居跡 Q A・B-14・15	不整正方形	469×414×—	N 92° E	N 93° E	貯蔵穴?・柱穴・床下土坑	坏2・碗・灰釉碗2・皿・甕4・薦網石	
6号住居跡 P K・L-12・13	不整長方形	426×340×43	N 99° E	—	柱穴	灰釉碗・大甕・甕・磨石	搅乱坑
7号住居跡 P V・W-13・14	不整正方形	565×495×—	N 92° E	N 72° E	柱穴・壁周溝	碗2・坏4・大甕・壺・甕5・小甕・砥石	179坑・231坑・搅乱坑
8号住居跡 P X・Y-14・15	不整長方形	390×225×53	N 89° E	—	貯蔵穴?・柱穴	坏2・碗・甕2・台石	232坑

土坑計測表

土坑名	位置	平面形	規模(cm) 縦軸×短軸×深さ
1号土坑	Q L-15	不整楕円形	415×250×162
土層註	1. 暗褐色土 2. 黒褐色土 3. 褐色土		
2号土坑	P W-1・2	円形	130×115×61
土層註	1. 褐色土 2. 暗褐色土		
3号土坑	P W・X-3	楕円形	135×95×47
土層註	1. 暗褐色土 2. 暗褐色土		
4号土坑	Q N-14	楕円形	121×75×44
5号土坑	Q A・B-6・7	長方形	460×115×86
土層註	1. 暗褐色土 2. 褐色土 3. 暗褐色土 4. 暗褐色土		
7号土坑	Q K・J-15・16	楕円形	215×112×63
10号土坑	Q I-16	楕円形	123×83×22
土層註	1. 黒褐色土		
11号土坑	P V・W-1・2	不整円形	135×121×80
土層註	1. 黒褐色土 2. 黒褐色土 3. 黒褐色土		
12号土坑	P V・W-2	円形	128×126×87
土層註	1. 黒褐色土 2. 黒褐色土 3. 黒褐色土		
14号土坑	Q I・J-16・17	長方形	410×94×37
土層註	1. 褐色土 2. 黒褐色土		
15号土坑	Q L-11	楕円形	185×94×55

土坑名	位置	平面形	規模(cm) 縦軸×短軸×深さ
16号土坑	Q J・K-12・13	楕円形	100×97×37
土層註	1. 暗褐色土 2. 暗褐色土		
17号土坑	Q J・K-12	不整長方形	214×65×23
19号土坑	Q B・C-5・6	長方形	313×104×75
土層註	1. 褐色土 2. 暗褐色土		
20号土坑	Q I-1	不整円形	125×112×28
21号土坑	Q H・I-15・16	長方形	210×76×41
23号土坑	Q H-15	楕円形	82×68×35
土層註	1. 黒褐色		
24号土坑	Q H・I-15	楕円形	120×98×13
25号土坑	Q I-14	円形	80×72×30
26号土坑	Q I-14	長方形	212×83×50
27号土坑	Q H-14	楕円形	82×68×59
28号土坑	Q N-13	長方形	108×60×42
29号土坑	P X-2	不整長方形	240×163×115
33号土坑	Q D・E-13	不整長方形	305×115×60
土層註	1. 黒褐色 2. 黒褐色 3. 暗褐色 4. 黒褐色 5. 褐色 6. 黒褐色 7. 褐色		

III 遺構と遺物

土坑名	位置	平面形	規模(cm) 縦軸×短軸×深さ
34号土坑	PV-1	円形	105×93×62
土層註	1. 暗褐色土 2. 黒褐色土 3. 黒褐色土		
35号土坑	QH・I-14・15	長方形	410×127×61
37号土坑	QA・B-6・7	長方形	465×100×46
39号土坑	QH-14	楕円形	195×70×27
40号土坑	QH-14・15	楕円形	111×98×36
41号土坑	PW-2・3	不整長方形	186×86×68
土層註	1. 暗褐色土 2. 黄褐色土 3. 暗褐色土		
42号土坑	QH-15	楕円形	124×71×35
45号土坑	PX・Y-2	楕円形	200×84×63
土層註	1. 黒褐色土 2. 黒褐色土		
46号土坑	QG・H-13	不整長方形	283×162×89
47号土坑	PY・QA-3	楕円形	218×205×48
土層註	1. 黒褐色 2. 黒褐色		
49号土坑	QH-12・13	楕円形	105×58×42
土層註	1. 黒褐色土 2. 暗褐色土		
54号土坑	QE・F-13	長方形	479×114×77
土層註	1. 褐色土 2. 黒褐色土 3. 黒褐色土		
55号土坑	QD・E-12・13	長方形	210×95×70
56号土坑	QK-11・12	不整長方形	383×58×22
57号土坑	QC-12・13	不整長方形	325×89×63
土層註	1. 暗褐色土 2. 暗褐色土 3. 暗褐色土 4. 黒褐色土		
58号土坑	QC・D-11・12	長方形	376×116×88
62号土坑	QA-11・12	不整長方形	165×72×53
土層註	1. 黒褐色土 2. 褐色土 3. 黒褐色土 4. 黒褐色土		
63号土坑	PY・QA-11	長方形	182×80×68
土層註	1. 褐色土 2. 暗褐色土		
64号土坑	QC・D-12・13	長方形	486×74×67
65号土坑	QA-11	不整形	76×57×55
土層註	1. 黒褐色土		
66号土坑	PY・QA-10・11	不整長方形	548×72×55
67号土坑	QB-11	楕円形	110×90×14
69号土坑	QE・F-11	長方形	203×76×26
70号土坑	PW-2・3	不整長方形	216×92×62
71号土坑	QF・G-10	楕円形	141×126×84
土層註	1. 暗褐色土 2. 褐色土 3. 褐色土 4. 黒褐色土		
72号土坑	QG-10	楕円形	130×98×45
土層註	1. 黒褐色土 2. 暗褐色土 3. 黒褐色土		
73号土坑	QG-10	楕円形	204×180×45
74号土坑	QG-9	楕円形	90×82×29
75号土坑	QH-9	不整長方形	210×12×43
76号土坑	QG・H-9	長方形	271×150×52
土層註	1. 黒褐色土 2. 暗褐色土 3. 褐色土		
77号土坑	QH・I-8	楕円形	123×108×34
土層註	1. 褐色土 2. 暗褐色土 3. 黒褐色土		
78号土坑	QI-8	楕円形	135×101×37
79号土坑	QI・J-8	不整長方形	218×118×67
土層註	1. 暗褐色土 2. 褐色土 3. 黒褐色土		
80号土坑	QF-10	楕円形	93×74×27
81号土坑	QF-10・11	楕円形	79×56×31
土層註	1. 黒褐色土		
82号土坑	QE・F-10・11	長方形	191×156×47
土層註	1. 黒褐色土 2. 暗褐色土 3. 黒褐色土 4. 黒褐色土		
84号土坑	QE・F-9・10	楕円形	126×101×72
土層註	1. 暗褐色土		
85号土坑	QD・E-10	楕円形	159×115×53

土坑名	位置	平面形	規模(cm) 縦軸×短軸×深さ
86号土坑	QD-10	楕円形	121×82×40
土層註	1. 黒褐色土		
87号土坑	QB・C-6・7	長方形	245×209×074
88号土坑	QB-6	長方形	334×119×79
土層註	1. 褐色土 2. 暗褐色土		
89号土坑	QD-8	不整形	115×84×26
土層註	1. 暗褐色土		
91号土坑	PY-9・10	楕円形	102×52×45
92号土坑	QC・D-8・9	不整長方形	220×191×71
土層註	1. 黒褐色土 2. 暗褐色土 3. 黒褐色土 4. 暗褐色土		
95号土坑	PY-9	楕円形	192×75×97
土層註	1. 暗褐色土 2. 褐色土 3. 黒褐色土 4. 褐色土 5. 黒褐色土		
96号土坑	PX-10・11	不整長方形	126×75×64
土層註	1. 暗褐色土		
97号土坑	PX-10	楕円形	141×71×49
土層註	1. 暗褐色土 2. 暗褐色土		
98号土坑	PY・QA-7・8	不整円形	134×122×21
土層註	1. 黒褐色土		
99号土坑	PY-7・8	楕円形	177×115×82
土層註	1. 褐色土 2. 暗褐色土 3. 黒褐色土		
100号土坑	PY-3	楕円形	159×63×20
101号土坑	PY-8	楕円形	83×54×29
土層註	1. 暗褐色土		
102号土坑	QA-7	楕円形	100×88×67
土層註	1. 暗褐色土 2. 黒褐色土		
103号土坑	QM-14	円形	24×24×13
104号土坑	QM-13	楕円形	45×36×12
105号土坑	QM-13	楕円形	65×34×19
106号土坑	QM-13	楕円形	105×64×21
107号土坑	QM-13	楕円形	51×44×19
108号土坑	QM-13	楕円形	54×33×11
109号土坑	QM-13	楕円形	117×33×15
110号土坑	QL-12	円形	55×54×17
111号土坑	QL-12	円形	55×48×17
112号土坑	QM-13	円形	40×35×17
113号土坑	QL・M-12・13	不整形	163×99×21
114号土坑	QL・M-12・13	不整長方形	82×34×20
115号土坑	QL-12	楕円形	40×21×23
116号土坑	QK-12	楕円形	56×33×24
117号土坑	QL-12	楕円形	50×32×19
118号土坑	QL-12	楕円形	72×53×26
119号土坑	QK-11	楕円形	49×44×11
120号土坑	QK-11	円形	30×30×20
121号土坑	QK-10・11	不整長方形	181×48×16
122号土坑	QK-10	円形	37×35×12
123号土坑	QJ・K-10	楕円形	100×54×21
124号土坑	QJ-10	円形	29×24×13
125号土坑	QJ・K-9	長方形	75×65×18
126号土坑	QJ-8	楕円形	280×37×12
127号土坑	QJ-9	円形	19×17×30
128号土坑	QI-8・9	楕円形	100×50×37
129号土坑	QI-8	楕円形	40×33×22
134号土坑	QI-8	楕円形	23×19×20
130号土坑	QI-8	不整長方形	212×87×35
131号土坑	QI-8	円形	32×30×23

6 遺構計測表及び遺物観察表

土坑名	位置	平面形	規模(cm) 縦軸×短軸×深さ
132号土坑	Q I - 8	円形	35 × 32 × 12
133号土坑	Q J - 8	長方形	75 × 42 × 22
135号土坑	Q J - 15	楕円形	67 × 46 × 15
136号土坑	Q H - 14	円形	39 × 35 × 17
137号土坑	Q H - 13	不整円形	35 × 31 × 16
138号土坑	Q F - 10・11	楕円形	171 × 73 × 44
139号土坑	Q E・F - 9・10	不整長方形	212 × 99 × 35
140号土坑	Q F - 10	不整円形	69 × 60 × 35
141号土坑	Q D - 12	不整円形	74 × 70 × 12
142号土坑	Q D - 11・12	楕円形	71 × 40 × 12
143号土坑	Q A - 6	楕円形	95 × 73 × 62
144号土坑	P Q - 13	不整円形	148 × 128 × 36
土層註	1. 黒褐色土		
145号土坑	P Q - 13	不整円形	146 × 115 × 15
土層註	1. 黒褐色土		
146号土坑	P M・N - 9	不整円形	133 × 88 × 44
土層註	1. 暗褐色土		
147号土坑	P M - 10	円形	127 × 126 × 27
土層註	1. 暗褐色土		
148号土坑	P M - 11	楕円形	102 × 89 × 31
土層註	1. 暗褐色土		
149号土坑	P K - 10・11	不整長方形	394 × 78 × 31
土層註	1. 暗褐色土		
150号土坑	P I - 10・11	不整長方形	360 × 80 × 54
土層註	1. 黒褐色土		
151号土坑	P J - 11・12	不整長方形	290 × 190 × 29
土層註	1. 黒褐色土		
153号土坑	P N - 9	楕円形	140 × 118 × 39
土層註	1. 暗褐色土		
154号土坑	P I - 11・12	円形	104 × 99 × 44
土層註	1. 黒褐色土		
156号土坑	P H - 11	長方形	297 × 104 × 34
土層註	1. 褐色土 2. 黒褐色土		
157号土坑	P I - 11・12	長方形	229 × 101 × 64
土層註	1. 暗褐色土 2. 黒褐色土		
158号土坑	P N・O - 12	不整形	501 × 162 × 52
159号土坑	P L・M - 8・9	不整長方形	332 × 272 × 46
土層註	1. 暗褐色土 2. 褐色土 3. 赤褐色土		
160号土坑	P J ~ L - 13・14	不整長方形	792 × 107 × 66
土層註	1. 黄褐色土 2. 暗褐色土 3. 黒褐色土		
161号土坑	P J ~ L - 13・14	不整長方形	604 × 79 × 28
162号土坑	P O - 12	不整円形	100 × 79 × 65
土層註	1. 暗褐色土 2. 暗褐色土		
163号土坑	P Q・R - 13	長方形	262 × 172 × 86
土層註	1. 暗褐色土 2. 褐色土 3. 黒褐色土		
164号土坑	P P・Q - 11・12	不整長方形	325 × 96 × 71
土層註	1. 黒褐色土 2. 黒褐色土		
165号土坑	P P - 11・12	不整長方形	352 × 163 × 85
土層註	1. 暗褐色土 2. 褐色土 3. 暗褐色土		
166号土坑	P Q - 14	不整形	167 × 65 × 76
土層註	1. 暗褐色土 2. 褐色土 3. 黒褐色土 4. 黒褐色土		
167号土坑	P M - 13	円形	76 × 73 × 45
168号土坑	P K・L - 10	不整形	341 × 331 × 80
169号土坑	P U - 12・13	不整長方形	385 × 300 × 95
170号土坑	P R・S - 13・14	長方形	363 × 116 × 34
土層註	1. 黒褐色土		

土坑名	位置	平面形	規模(cm) 縦軸×短軸×深さ
171号土坑	P P・Q - 10・11	不整長方形	349 × 192 × 83
土層註	1. 暗褐色土 2. 暗褐色土 3. 暗褐色土		
172号土坑	P N・O - 7・8	不整長方形	560 × 110 × 40
土層註	1. 黒褐色土		
173号土坑	P O・P - 7・8	不整長方形	265 × 144 × 30
土層註	1. 暗褐色土		
174号土坑	P O・P - 13・14	不整長方形	621 × 140 × 90
175号土坑	P Q - 11・12	不整形	210 × 121 × 55
土層註	1. 黒褐色土 2. 黒褐色土		
176号土坑	P Q - 11・12	不整形	210 × 65 × 53
177号土坑	P L・M - 13・14	不整形	413 × 334 × 81
土層註	1. 黒褐色土 2. 褐色土 3. 暗褐色土 4. 黒褐色土		
178号土坑	P M・N - 11	不整長方形	348 × 89 × 33
土層註	1. 黒褐色土		
179号土坑	P V・W - 13・14	正方形	338 × 337 × 65
土層註	1. 褐色土		
180号土坑	P R・S - 12	不整長方形	342 × 64 × 21
土層註	1. 黒褐色土 2. 黒褐色土		
181号土坑	P R - 12・13	楕円形	93 × 67 × 22
土層註	1. 黒褐色土		
183号土坑	P S - 13	不整円形	193 × 173 × 33
184号土坑	P R・S - 10・11	不整形	426 × 356 × 37
185号土坑	P P・Q - 13	不整長方形	213 × 128 × 47
土層註	1. 黒褐色土		
188号土坑	P P・Q - 13	不整長方形	246 × 140 × 56
189号土坑	P Y・Q A - 14・15	楕円形	276 × 215 × 60
192号土坑	P O・P - 11・12	長方形	758 × 82 × 61
土層註	1. 褐色土 2. 黒褐色		
193号土坑	P R・S - 9・10	長方形	318 × 148 × 68
土層註	1. 暗褐色土 2. 暗褐色土 3. 暗褐色土		
195号土坑	P X - 14	不整長方形	86 × 32 × 31
197号土坑	P E・F - 12・13	不整長方形	420 × 85 × 28
土層註	1. 黒褐色土		
198号土坑	P I - 12	楕円形	185 × 92 × 48
土層註	1. 暗褐色土 2. 黒褐色土		
199号土坑	P U - 12・11	不整形	248 × 103 × 39
200号土坑	P F - 10・11	不整形	172 × 64 × 96
土層註	1. 表土 2. 暗褐色土		
201号土坑	P H・G - 11・12	長方形	195 × 163 × 27
土層註	1. 黒褐色土 2. 黒褐色土		
203号土坑	P H・G - 10	楕円形	233 × 85 × 55
土層註	1. 黒褐色土 2. 黒褐色土		
204号土坑	P Q - 12	楕円形	88 × 67 × 43
205号土坑	P S - 9・10	不整長方形	525 × 78 × 53
土層註	1. 黒褐色土 2. 黒褐色土		
206号土坑	P R - 8 ~ 10	不整長方形	463 × 77 × 53
土層註	1. 褐色土 2. 暗褐色土		
207号土坑	P P・Q - 9	長方形	278 × 163 × 63
土層註	1. 暗褐色土		
208号土坑	P L・M - 7	長方形	198 × 126 × 35
土層註	1. 暗褐色土		
209号土坑	P I・J - 9	長方形	137 × 104 × 32
土層註	1. 黒褐色土 2. 黒褐色土		
土坑名	位置	平面形	規模(cm) 縦軸×短軸×深さ
210号土坑	P O - 12	円形	82 × 83 × 38

III 遺構と遺物

土坑名	位置	平面形	規模 (cm) 縦軸×短軸×深さ
211号土坑	P J - 8・9	不整長方形	247×210×34
212号土坑	P J・K - 8・9	不整長方形	341×98×38
土層註	1. 黒褐色土 2. 褐色土 3. 黒褐色土		
215号土坑	P X - 14・15	楕円形	113×90×24
土層註	1. 黒色土		
218号土坑	P M - 10・11	楕円形	68×58×36
224号土坑	P T - 12	不整円形	110×107×45
225号土坑	P V・W - 12	円形	50×48×18
226号土坑	P M - 10	不整円形	161×140×67
228号土坑	P P - 10・11	楕円形	100×62×56
229号土坑	P N - 11・12	楕円形	154×110×33
230号土坑	P P Q - 11	楕円形	72×67×44
231号土坑	P W - 13・14	不整長方形	251×78×17
232号土坑	P X - 14・15	不整長方形	145×132×30
234号土坑	P O - 12	楕円形	88×75×50

墓坑

土坑名	位置	平面形	規模 縦軸×短軸×深さ
6号土坑	Q L - 14	不整楕円形	102×73×56
182号土坑	P T - 11	不整楕円形	176×144×64
227号土坑	P H - 9・10	不整楕円形	163×130×44
233号土坑	P Y - 15	不整楕円形	- ×64×11
235号土坑	P Q - 11	不整楕円形	110×92×51

集石遺構・井戸・掘立柱建物跡

遺構名	位置	平面形	規模 縦軸×短軸×深さ
集石遺構	Q Q R - 7~9	不整形	360×-×86
1号井戸	P W X - 2・3	不整円形	304×264×258
2号井戸	P N - 8	不整円形	236×226×240
1号掘立	Q A B - 7~9	長方形	504×380×-
2号掘立	P N~P - 9~11	不整長方形	932×754×-
3号掘立	P P Q - 7~9	長方形	440×365×-

出土遺物観察表

第6表 古墳時代前期 土手状遺構出土遺物観察表

図器番号	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
10図1 土師器杯 P L 37	口:13.8 高:5.5 底:-	ほぼ完形 黒色土中	①細 白色粒 ②良好 ③鈍い橙色 ④土師器	口縁部短く外傾し、体部丸みを帯びる。底部は丸底。口縁部内面は僅かに内湾し鋭く屈曲する。外面口縁部横撫で、体部上位は篋削り後撫で下位は篋削り。内面体部は密接な斜位磨きによる暗文
10図2 土師器杯 P L 37	口:13.0 高:- 底:-	約1/3残存 黒色土中	①細 白色粒 ②良好 ③鈍い橙色 ④土師器	口縁部緩やかに内湾し一体化し体部も丸みを帯びる。1に比しやや浅身外面口縁部~体部上位は撫で、下位は篋削り。内面は斜位磨きを密接に施す
10図3 土師器碗 P L 37	口:(15.8) 高:9.6 底:-	約1/2残存 黒色土中	①細 白色粒 ②良好 ③鈍い橙色 ④土師器	口縁部短く外傾し、体部は深く丸みを帯びる、底部は丸底。口縁部内面は鋭く屈曲する。外面口縁部~体部上位は撫で、下位は篋削り。内面は丁寧な撫でにより平滑
10図4 土師器壺 P L 37	口:- 高:- 最大径:16.0	体部下位1/2 残存 黒色土中	①細 白色粒 ②良好 ③鈍い橙色 ④土師器	底部丸底。体部下位で屈曲気味に内湾する。外面体部上位~中位丁寧な撫で。下位は篋削り。内面は丁寧な撫で

第7表 F P上(平安~近世)出土遺物観察表

1号住居跡出土遺物観察表

図器番号	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
68図1 須恵器杯 P L 26	口:11.6 高:3.2 底:6.9	完形 床直	①粗砂礫・石英・白色粒 ②良 還元 ③灰~灰白色 ④	やや厚手の器厚。ほぼ直線的に立ち上がる。底部若干上げ底気味で、外面彎曲による僅かな突出。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整
68図2 須恵器杯 P L 26	口:12.4 高:3.2 底:7.0	口~底部2/3 残存 埋土	①細砂粒 ②良 還元 ③黒褐色 ④	1に比しやや薄手。口縁部僅かに外反し体部中位に丸みを持たせる。底部は若干上げ底気味。内面見込み部は強く立ち上がる。右回転轆轤整形底部回転糸切り後無調整
68図3 土師器甕 P L 26	口:20.6 高:- 底:-	口~体部1/3 残存 甕内	①細砂粒 黒色粒 ②良 酸化 ③鈍褐色 ④	口頸部直立する「コ」字甕。口唇部内面受け口状。体部上半に膨らみを持たせる。口縁部横位撫で強く、外面体部上半横位篋削り下半縦位篋削り。体部内面横位篋撫で
68図4 土師器甕 P L 26	口:20.0 高:- 底:-	口~体部1/4 残存 甕内	①細砂粒 黒色粒・石英 ②良 酸化 ③橙色 ④	口縁部外反気味に立ち上がる。口縁部横位撫で、体部外面横位・斜位篋削り。体部内面横位篋撫で
68図5 土師器甕 P L 26	口:(19.0) 高:- 底:-	口~体部1/4 残存 甕内	①細砂粒 黒色粒・石英 ②良 酸化 ③鈍褐色 ④	口頸部直立気味の「コ」字甕。口唇部玉縁状をなす。体部上半に膨らみか。口縁部横位横撫で強く、外面体部上半横位篋削り、中位斜位~縦位篋削り。体部内面篋撫で
68図6 土師器甕 P L 26	口:(20.6) 高:- 底:-	口~体部1/2 残存 甕内	①細砂粒 白色粒・雲母 ②良 酸化 ③鈍褐色 ④	口縁部直立気味の「コ」字甕。口唇部内面緩やかに内湾。口縁部強い横位撫で、外面体部横位篋削り、内面は横位篋撫で
68図7 土師器甕 P L 26	口:- 高:- 底:(4.4)	体~底部1/4 甕内	①細砂粒 黒色粒・石英 ②良 酸化 ③鈍赤褐色 ④	底部は不整円で突出気味。緩やかな立ち上がりを示す。器厚は底面まで薄く保つ。体部外面縦位篋削りを基調に斜位削りを加える。内面は中位に横位篋撫でを施し下位は斜位撫で後平滑に仕上げる

6 遺構計測表及び遺物観察表

図 器 番号 種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
68図8 土師器甕 P L 26	口：－ 高：－ 底：(4.0)	底部破片 埋土	①細砂粒 石英 ②良 酸化 ③鈍黄褐色 ④	不安定で不整円の底部。底径小さくやや開き気味の立ち上がり。器厚は薄手。外面は縦位・斜位篋削り底面も削り調整。内面は篋撫で後平滑な撫で
68図9 須恵器甕 P L 26	口：－ 高：－ 底：－	体部破片 床直上	①粗砂粒 石英 ②良 還元 ③灰色 ④	体部上半～肩部破片か。外面平行叩き目、内面横位撫で後に縦位撫でが加わる
68図10 須恵器甕 P L 26	口：－ 高：－ 底：－	体部破片 床直上	①粗砂粒 石英・白色粒 ②良 還元 ③灰色 ④	体部上半～肩部破片。9と同一個体か。外面平行叩き目、工具幅4～5cmか。内面無文当て目後撫でを加える
68図11 薦網石 P L 26	長：15.4 幅：6.6 厚：3.6 重：604g 石 材：ひん岩 出土位置：床直			図下端に僅かな打痕跡

2号住居跡出土遺物観察表

図 器 番号 種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
71図1 須恵器杯 P L 26	口：－ 高：－ 底：5.6	体下～底部 残存 埋土	①粗砂粒 白色粒 ②良 還元 ③黄褐色 ④	腰部に丸みを持たせ立ち上がる。底部は僅かに上げ底。右回転轆轤整形底部回転糸切り後無調整
71図2 須恵器杯 P L 26	口：－ 高：－ 底：5.5	体下～底部 残存 埋土	①細砂粒 白色粒 ②良 還元 ③灰色 ④	直線的に立ち上がる。底部は僅かに上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整
71図3 須恵器碗 P L 26	口：19.0 高：8.8 底：8.4	口縁部1/4 欠損 床直	①粗砂粒 石英・白色粒 ②良 還元 ③灰白色 ④	大振りの碗。口唇部僅かに外反し体部に緩やかな丸みを帯びる均整の取れた器形。高台は比較的短く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付
71図4 須恵器碗 P L 26	口：(15.2) 高：5.0 底：(7.8)	口～底部1/4 残存 埋土	①粗砂粒 白色粒・黒色粒 ②良 還元 ③灰黄色 ④	体部中位に僅かな丸みを持たせ強く開く器形。口唇部は尖る。高台は短く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。器壁内外面とも剥落著しい
71図5 須恵器碗 P L 26	口：(14.0) 高：－ 底：－	口縁部破片 竈内	①粗砂粒 白色粒 ②良 還元 ③灰黄色 ④	体部下半に僅かな丸みを持たせる。口縁部は緩やかに外反し内面僅かに肥厚する。右回転轆轤整形
71図6 灰釉陶器碗 P L 26	口：(20.0) 高：－ 底：－	口縁部破片 埋土	①緻密 白色粒・ ②良 還元 ③灰白色 ④	口唇部強く外反し玉縁状をなす。体部は緩やかな丸みを帯びる。右回転轆轤整形。体部下半回転削り。施釉は内外面に及び漬け掛け
71図7 灰釉陶器碗 P L 26	口：(14.8) 高：－ 底：－	口縁部小破片 竈内	①緻密 白色粒・黒色粒 ②良 還元 ③灰色 ④光ヶ丘	口唇部強く外反し玉縁状をなす。体部は僅かな丸みを帯びる。右回転轆轤整形。施釉は内外面に及ぶ
71図8 灰釉陶器皿 P L 26	口：(14.5) 高：－ 底：－	口縁部2/3 欠損 埋土	①緻密 白色粒・黒色粒 ②良 還元 ③灰白色 ④光ヶ丘	器厚薄手で丁寧な作り。口唇部は強く外反し玉縁状をなす。体部中位に丸みを持たせ高台は短く直立する。高台形状は三日月状。右回転轆轤整形。底部回転削り後高台貼付。施釉は漬け掛け
71図9 須恵器羽釜 P L 26	口：(19.4) 高：－ 底：－	口縁部破片 壁際床直	①粗砂粒 石英 ②やや軟 ③鈍黄褐色 ④月夜野型	角頭状の口唇部。口縁～体部上半内傾気味に一体化し、口縁下に鏝を付す。口縁部は横位撫で、鏝以下は縦位篋削り。内面縦位篋撫で。篋削り目を斜位に見るが撫で加わる。整形時の粘土補修有
71図10 古銭 P L 27		至和元寶か 径：2.42 重：3.65 出土位置：竈上		

4号住居跡出土遺物観察表

図 器 番号 種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
73図1 須恵器杯 P L 27	口：－ 高：－ 底：7.0	底部破片 埋土	①細砂粒 ②良 還元 ③灰色 ④	やや開き気味に立ち上がる。底部は僅かに上げ底を呈す。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。底面に墨書
73図2 須恵器碗 P L 27	口：－ 高：－ 底：7.4	底部のみ残存 埋土	①粗砂粒 白色粒 ②良 還元 ③灰オリープ色 ④	器厚薄手でしっかりした作り。開き気味に立ち上がり、高台は短く開く右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時の周縁撫で強い
73図3 土師器台付甕 P L 27	口：12.1 高：－ 底：－	脚部欠損 東壁際床直	①細砂粒 白色粒・黒色粒 ②良 酸化 ③鈍黄橙色 ④	口頸部直立する「コ」字甕。体部上位に最大径を持ち、底部に脚(5)を付す。口縁部強い横位撫で、外面体部上半は横位篋削り、下半縦位篋削り脚部との接点には縦位撫で。内面横位篋撫で
73図4 土師器甕 P L 27	口：(20.0) 高：－ 底：－	口縁部破片 埋土	①細砂粒 石英 ②良 酸化 ③鈍赤褐色 ④	口頸部直立する「コ」字甕。口唇部内面に丸みを持たせる。肩部の張りは緩やか。口縁部横位撫で、体部外面は横位・斜位篋削り、内面は横位篋撫で